

報 部

1931

1

部 一 キ ス 大 北

報 部

號 念 記 年 拾 貳 立 創



1 9 3 1

部 一 キ ス 會 武 文 學 大 國 帝 道 海 北

寫眞版

- 菅平に於ける山田四郎君の飛型……………
樺太シャントエに於ける伊黒正次君の飛型……………
今秋竣工せる大倉山大シャントエ……………
オリンピック選手山田克巳君……………
天狗嶽頂上・天狗嶽中腹より屏風嶽の尾根を望む……………
ニセコアンヌプリの遠望・ニセコアンヌプリの中腹……………
ヘルベチアヒユツテ・パラダイスヒユツテ……………
山の家・朝里嶽ヒユツテ……………
長門ヒユツテ・無意根小屋……………
空沼小屋・中山ヒユツテ……………
十八軒レースに於ける中村新一郎君と奥井由雄君……………

地 圖

札幌附近のスキーコース圖……………

目次

感謝の辭	大野精七	二
スキー競技の役員の仕事	木原均	五
此の機会に一つの提案	廣田戸七郎	八
飛型審判としての隨想	伴素彦	三
スキージャンピング練習法に對する一私見	村本金彌	六
札幌を訪れた二天スキー人の言葉	宮下利三	三
デイスタンスレーサーとしての經驗より	中村新一郎	六
定山溪天狗嶽よりパラダイスへ	宇都宮嵩	四
冬の北見屏風	鈴木重雄	五
スキーの憶出	向井一郎	六
スキー苦しみ記	三戸勳	六
追憶	村本金彌	七
森林美	宇都宮嵩	七

無意根小屋……………	鈴木重雄	八三
小樽札幌間スキー滑走記……………	中村新一郎	七〇
山班のスキー術（殊に今年のものに）……………	宇都宮嵩壺	七〇
ニセコ附近の温泉と山……………	小池茂充	七九
ヒユツテ廻り……………	今井勇三郎	一〇六
ヒユツテを利用する札幌附近のスキーコースに就いて……………	安藤政三 伊藤信康	一〇四 一〇四
長門ヒユツテに就いて……………	三浦義明	一〇三
スキー随想……………	楠見正雄	一〇四
手稻バラダイスヒユツテ附近に作らるべき練習用シャンツェに就いて……………	關四郎	一〇四
ワックスに就て……………	宮村六郎	一〇五
デイスタンスレースの夏季豫備練習に就いて……………	西武	一〇六
飯山遠征記……………	奥井由雄	一〇七
一九二九年以前のカンチエンジュンガの歴史……………	楠見正雄譯	一〇四
ノールウエーに於けるスキー練習……………	オカツ譯	一〇九

年報

競技會記錄.....

三〇

山の部.....

三〇

雜報.....

三三

編輯後記.....

三七

スキ一部報

創刊號

北海道帝國大學文武會スキ一部

感謝の辭

大野 精 七

私は此處にスキー部第二十週年を迎へ其の部報を創刊するに當りまして、感謝の念禁するを得ないのであります。

大正十五年我がスキー部が創立第十五週年の記念式を擧ぐるに際し、小にしては我がスキー部、大にしては我が日本のスキー界は、獨學を重ねて漸く今日の日本のスキーに達したのである。更に日本のスキー界を世界的に雄飛せしむる爲めには、最早や獨學では困難であつて、宜しく本邦スキー家の海外派遣、或は歐洲名選手の招聘を必要とする、尙ほ本邦に於けるスキー設備の要用なる事を述べたのであつた。爾來五星霜の短日月を以て其の希望の大半が、少くとも私共の周圍に於て急速に實現された事は、私共凡庸の計り得無かつた事であつて、之れ取りも直さず私共の敬慕し奉れるスポーツの宮、秩父宮殿下の御恩徳の至す處と感激さるゝのであります。

昭和三年二月 秩父宮殿下には特に嚴冬の期を選びて、北海道の冬の状況を御視察遊ばされ、雪國民に取つてスキーがスポーツとしてのみならず、又實際的交通機關としても最も重要な事を御示し下されて以來、本道に於けるスキーの民衆化は實にすばらしいものであります。

殿下が北海道を去らるゝに臨み、私共スキー仲間仰せられたる御言葉は誠に有難き極みであつて、此處に拜書致したいと思ひます。

此度は諸君の貴い學問の時間を犠牲にして、僕のスキーの爲に御面倒を見て下さつた事は感謝に堪えぬ次第です。私は永い間憧れて居た冬の北海道に来て、益々此の自然に對する愛着と親しみを深めました。特殊な環境にある諸君が、學問の餘暇を此の男性的スポーツに心身を鍛練される事は必要な事であり、且つ當然な事でもあります。

短い間ではありましたが、スキーを通じて諸君が、凡ゆる機會に凡ゆる形式で示して下された厚意は忘れる事の出ない事であります。

北海道に恵まれた諸君が、將來國家の爲に大いに御盡力あらんことを祈つて居るものであります。此度はどうも有難う御座いました。

此の御言葉を拜讀するものにして、誰れか感激せられざるものがあります。

昭和四年一月には御弟の宮 高松宮殿下に於かせられても、劇務の餘暇をさいて御來道致させられ、親しくスキーの御登山を遊ばされ、雪國在住青少年の元氣を鼓舞せられたのであります。

秩父宮殿下が御來道遊ばされての秋、空沼岳（一二五二米）万計沼のほとり（九二〇米）の原生林中に、殿下御自身の小屋を御建設にならせられ、申すも有難き次第であるが、今日一般の使用をお許しになられて居らるゝのであります。數年前まで空沼、漁、狭薄、札幌岳等のスキー登山は殆ど不可能と言ふて宜しい位であつたのであります。今日此の御小屋の拜用によりて、之等の仙境を容易にスキーで跋涉し得る様になりました。試みに昭和五年二月十一日より本年の紀元節に至る滿一ケ年間の光榮ある拜用者の延人員數をあげますれば、實に二千八十六名の多數にのぼつたのであります。

殿下の御小屋は定山溪温泉を中心として圍繞せる諸山岳に計畫せるスキー小屋連鎖の東端に在ります。恐れ多くも殿下御自身の御小屋建設に刺戟されて爾來續出しました小屋名を、連鎖上の順をおふてのべますれば、空沼小屋の直ぐ下にある方計小屋（バラツク、札幌林野支局）、次に二股小屋（バラツク、豊平川上流、林野支局所屬）、中山峠ヒユツテ（北海道山岳

會)、無意根小屋(北大大野所屬)、長門小屋(バラック、北大スキー部)、朝里岳ヒユツテ(小樽スキー俱樂部)、ヘルウキチアヒユツテ(瑞西人ヒンデル、グブラー兩氏所屬、管理者北大山崎教授)、奥手稲山の家(札幌鐵道局)、手稲パラダイスヒユツテ(北大スキー部)等でありまして、今後も亦増加する事と思ひます。

昭和三年二月瑞西サン・モリーリツツに於ける國際スキー競技大會に、本邦スキー選手を出場せしめ得たる喜び後間も無く、大倉男爵は同年十二月特にスキー先進國諾威より名選手を招聘せられ、三月月の長い間、本邦各地のスキー場に於てスキーの講演會に、或は實地指導に御盡力下さいました。而して日本のスキー界は急劇に躍進的進歩をなし、一新紀元を作るに至つたのであります。

尙ほ大倉男爵は御希望に添ひ奉る可く、ヘルセツト中尉の實地調査と其の設計によりて、札幌神社外苑に大小の立派なるシャンツエを御建設下さいました。大シャンツエの工費は實に五万圓餘、其の壯大なること眞に偉觀を呈して居ります。正に本邦スキージヤムピングの殿堂であると思ひます。日本のスキー界は大倉男爵に對して深甚なる謝意を表し、且つ今後の御援助を希ふものであります。

札幌では昭和五年二月より毎年、兩殿下の御來道を記念す可く御來道記念スキー大會を開催して居ります。明昭和七年度の第三回記念大會は男爵の御寄附になれる札幌大シャンツエを中心として開かるゝ事でありませう。本會も今は全道的の競技會に過ぎませぬが、やがては日本のものとなり、更に進んでは諾威オスロ郊外に於けるホルメンコーレン大會の如く世界的競技會にならせたいたいものと、私共は祈つて居るのであります。

北海道に住める幸福なるスキー家よ、たとひ我が地に理想的なる粉雪あるも、たとひタンネの美觀を呈する山岳多くとも、殿下のスキーに對する御恩徳なくしては、今日のスキー隆盛を見る能はざる事を忘れてはならぬ。

私共は我が雪國に於ける完全なるスキーの民衆化と、本邦より世界的スキーの優者を續出せしめむ事を期待し、以て御厚恩の萬分の一に報え度く祈り居る次第であります。

スキー競技の役員の任務

木 原 均

スキー競技の進歩には、競技を主催する役員が重大な關係を有して居る。

すべての競技は夫々の規則を厳守して行はるべきものであり、各選手が同一の條件のもとに置かれて競技するのである。而して甲地の條件（例へば競技場の大小、カーブの工合等）は乙地の條件と自然的のものでない限り略等しくあらねばならない。

それでこそ初めて記録と云ふものが甲地と乙地とで比較出来るのである。然るにスキーではこの條件が各地で一樣には行かない。特に天候とか、寒暖による雪の状態に大なる變化があつて各地同一の状態にある事はない。時として同一競技にでも條件は變る。故にスキー競技（特に競走）では役員の責務は甚大である。

第一にコースの選擇である。それはスキー競技を司る役員の最も重大視すべき點であらう。之によつて難關、難路に處する術を走者に教へ、不知不識の中に走者に大なる技術的の進歩を與ふるか、又は將來への研究心を養成する事が出来る。その意味に於て一地方のコース選定者は同地方に永年住んで、毎年その職務を受つた方がよいであらう。さうすれば夏の間でもコースの検査が出来る。

コースの選擇に當つて注意すべきは、走者の熟達に度に応ずる難易である。難過ぎると疲労を餘りに大とならしめ、又危険をまねく恐れがある。然し技術の養成には困難な走路を要する。特に滑降に際しては之を要求すべきであらう。急速度の

廻轉（左右平等に）を要求し、又は斜面の急なる處より、ゆるやかなる所への移り行き、又はその反對等を連続的に行はしめて走者を試めす等の類である。

難かしいと云つても危険なる輕業的の走路は禁物である。一步あやまれば河中に落ちるとか、岩石につきあたる等の如きは最も禁すべきである。

次に走路の標識を充分ならしめる事は肝要である。この事は分りきつた事乍ら遺憾の事が多い。又監視員がコースを知らずして、走者に道を迷はしめる事のあるのは、一には標識の悪い爲めである。

コースと共に食物や水を與へる地點の選擇も輕視すべきではない。快適の滑降の途中に誰が立寄つて水をとる事があらうか。之は當然平地特に登り道の前又は下りの初めにあらねばならない。

更にその全コースへの分配も多少考へねばならない。走者が飢を感じてから食をとる事が多いけれど、之は走者の失敗であるが、食事を採る場所も彼等の爲便利となるやう心掛けてよからう。五〇キロとして考へれば、二〇キロの所に液體を與へ、三〇、四〇の地點で水の外、食物を與へるやうにすればよいであらう。この地點で若し休み度い走者があれば、腰掛を與へ、毛布でもかけてやる位の親切がほしいものである。

次にジャンプの飛型係について一言し度い。飛型員が與へる一點又は得點は、四〇米突臺のジャンプであると三米突の距離に相當する。即ち一點位は考へやうでグラ／＼すると考へられる審判員の點數が、ジャンパーには三米突の飛躍となつて現はれるのである。ましてや二人の審判員の點數を見ると、二點時として三點の開きがあるとなつては、ジャンパーには甚だ氣の毒である。

之を防ぐにはどうしても審判員が常々、機會ある毎に點數をつける事の練習を怠らぬ事である。さうすれば甲乙に對する點は二審判員の與ふる點は夫々異つても、甲乙の順位や點數の開きに大なる差はなくなるであらう。

審判員は正確に採點する外、點數をジャンプの終了後即座に記入出来るやう練習すべきであらう。之はジャンプ競技の進

行に大なる影響がある。

採點については全日本スキー聯盟の規約があり、國際スキー聯盟の規則の附録として詳しい事があるので省くが、私見として若干の言葉を加へたい。

それは飛型二〇點を與ふべき標準である。ある審判員が國際的の名ジャンパーのジャンプを見て、之に假に十九點與へたとする。それと同一の眼で二三流のジャンパーの大會の第一位のジャンパーに少しも感心せず、當日の一番ジャンプを十六點としたとしたらどうであらうか。かうすると不倒ジャンパーの數が多ければ、飛型點が少なくとも十點（十點と云ふ事はまれで十二點位が最小か）多くて十六點となるのでその差が甚だ少ない。こんな事は餘りあり得ないとも云へるが、審判員の心の中にはかう云ふ疑問が時として起ると思ふ。かゝる場合には私個人としては矢張り差をつけるのが審判員の任務故、點數は比較的やさしくつけてジャンパーの甲乙をつけた方がよくはないかと思ふ。

然し日本一流のジャンパーがたしか、ヘルセット中尉によつて最高點十六點（？）を與へられた事からすると、この如きシンシヤクは不用かも知れない。寧ろ世界的の眼で見てよいのかも知れない。然し世界的の眼を有せぬ審判員に之を望む事は不可能故、矢張り日本のレベルが全く諸國と同等になる迄は多少私の考へも考慮すべきかと思ふ。

ジャンプについてはこの外、飛躍の測定係について一言したい。この測定は時として審判員の一點位に當る誤りをする事がありうる。競技の日と否とを問はず、常にジャンパーの落ちた點を指摘しうるやう練習すべきである。

この外、シャンツエの手入、着陸面の修理その他は競技の進行をよくし、大會を成功せしむるに最も必要な事であるので各役員の任務は大である。タムスが昨年のおスロの大會で飛距の測定をやり、ハウクがスタートの旗を振つて居た。あの大會での役員の充實の程が知られて愉快ではないか。

以上まとまりなく私の氣づいた事を並べたが、競技規則には多くの事がかいてあるので、それを見乍らこの小文を參考として下さらば幸甚である。

此の機會に一つの提案

廣田戸七郎

我がスキー部も愈々此處に二十年の齡を迎へることになつた。二十年の歴史の過半を知る私には一入感慨無量なるものがある。

私は今回の二十年記念の機會に、先輩の人達も同感であらうし、部員諸君には勿論大賛成であらうと思ふ一つの提案を爲し、北大スキー部の諸先輩及び部員諸君の賢察を待ちたいと思ふ次第であります。

私の提案の一つといふのは、北大スキー部の後援團體組織であります。此の後援團體はスキー部出身の先輩を經とし、在校生諸君を緯として組織し、或年限を期して繼續的に先づ財源を作る爲にお互に寄金といふよりも據金し合つて、スキー部の今後の諸事業を助け、先輩と後輩との連絡を一層密接にしやうといふのであります。

以前から私達の先輩を始め私達の時代、そして其後から今日まで殆んど皆の部員の頭にあつた問題は、スキー部のクラブハウス建設、スキー部員合宿練習所設立等の問題ではなからうかと思はれます。

従来までもスキー部の後援の意味で大學内には若老會の設立を見、又スキー部卒業生一部の人達によつて三、五會なるものが作られ、又最近には競技方面の卒業生を中心として北大スキー部O・B俱樂部が組織せられ、夫々スキー部の後援の途を講じて來てゐるのでありますから、今更後援團體組織も一寸異様な感じではありませんが、私の意嚮を一つ参考までに述べさ

せて頂きたいと思ひます。

私が第一にかゝる後援團體を必要であると感じましたことは、自分の學生時代からではありませんが、學校を出てから年と共に北大スキー部の將來の發展の爲には是非一種の財源機關である後援團體組織が、種々の事情から必要であることを痛感して來たのであります。

殊に最近五年間のスキー部の事業は甚だ從來とは一變して來てゐるのであります。例へば競技スキーの發達の爲に、選手の養成或は技術の研究、數多い大會出場の爲の遣繰りに、部員殊に幹事諸君は精神的、物質的に非常な犠牲を拂はなくてはならないし、又冬の山岳行の大部分の行程がスキーを必要として居り、而も吾々はスキーを單なる冬季登山の一道具として使用するに止らず、眞にスキーの興へる快味を之によつて知り、本當にスキーの持つ價値を見出さうとして居るのであつて、此の吾々の精神の内から冬季登山の研究は、單にスキー部の傳統的意味に執着してのみならず、之を棄てる譯に行かないのであります。従つてスキー部は冬季登山の研究にも多分の努力を拂はなければならぬのであり、遠方への進出も計畫されねばならず、之が奨勵にも留意せねばならぬのであります。

而して對內的に立返つて考へるならば、先づスキー部の豫算と文武會との問題を擧げねばなりません。

其昔文武會が九、八七三・五圓の豫算の内からスキー部に六七〇圓の豫算の割當てをして居た時代と、現在一七、八四〇圓の豫算の内から七五〇圓の配當に移り代つて來たことを比較對照すれば、現在は會員の頭數から云へば昔の何倍かになつて居るのであるが、二、三年此方の文武會内部の狀勢は非常に複雑な問題を孕んで來てゐるのであつて、第一に會員の頭數だけ文武會費が納入されてゐないのであります。従つて文武會の豫算は決して會員の實數と一致して發表されるものでなく、相當の未收入を見越して豫算は上程され、各部への配當は減額配當を受けねばならない事情にあるのであります。

而も現在のスキー部は少くも私共がスキー部に直接關係して居た頃から見れば、倍位の豫算の割り當てを受けて居るけれ

ど、部の事業は到底其豫算の範圍内では常に畸形的な仕事しか出來得ない實狀にあるのであります。而もスキーは年一年と隆盛に進むのみで、未だ何年後に發達の頂點に達するとも考へられない狀態であり、其内のスキーの發達否一般化は自づとスキー部の抱擁力に大なる影響を與へつゝあるのであつて、殊に我がスキー部は、他の何れの地方の學校は勿論、研究機關に比しても特殊の地位にあり、又學内の何れの部に比しても特別の狀態に置かれてあるのであります。

私はスキー部の有する傳統的榮譽は僅小たりとも棄てたくないし、尙其誇りに一層美はしい部史の一頁を加へて行きたいと思ふ一人であります。恐らく此氣持は部を愛さるる諸先輩諸君も、現在否後來の部員諸君も同じであらうと考へます。

翻つてスキー部出身の諸先輩が從來までにスキー部の爲に物質的、精神的に後援されたことは多大でありまして、殊に度々のスキー部の臨時事業には、其度に幾何かの財的援助を殆んど大抵の先輩の方はして下さつてゐます。恐らく一人の方が何回かの間に二十圓以上は寄附して居らるゝのであります。そしてそれ等の先輩の寄附は或は有形のものとして残つてゐるものもありますし、無形のものとなつて費されて居るものも少くありません。而も特別の財團組織がない爲に、スキー部で何事か爲さんとする時は常にどうしても、先輩に向つて寄附依頼狀を發送せねばならない現狀にあるのであります。而も北大スキー部が殆んど半永久的に其存在を失はない限り、將來膨脹し通すであらうスキー部の事業を考へて見ますと、或る事業の遂行の度に臨時々々に先輩の寄附を願ふことも、時代と共に變つて行く學生諸君は新なる氣持で寄附を願ふのですから、寄附依頼といふことに特別の感じを持たないと思ひますが、出す方の側は常に範圍が限定せられて居るのであります。或先輩が言はれましたが『又寄附か』と云ふ氣持を何とか旨い方法で無くしたいものなどは、恐らく單に或一人の先輩の聲だけではないと思ひます。

而も寄附回數の重なる度に集る金は決して始めの事業の時程は集るものではなく、減るのが定石であります。夫れに集金を苦勞を考へると決して並大抵ではないのであります。

私はスキー部の將來の部員諸君の苦心、殊に貧弱な豫算のやり繰りの苦心に第一に同情を持ちたいのであります。同時に先輩お互の負擔を軽減したいと思つて居ります。

私にはお互が樂な氣持で、比較的容易な方法で而も合理的な方法で、最も有効な實を擧げ得る方法を考へたいと思ふのであります。それでスキー部の將來一層發展出來得る方法を考へたいと思ふのであります。

で、私の案としてのスキー部後援團體組織の爲めの基金作成方法を具體的に次に申し上げます。主として先輩の方のみについで集金法を述べます。

私の案は先輩各一人當りの負擔を二十圓と見て、此二十圓は最初の年に十圓、翌年五圓、三年目に五圓の割に義務的に寄附を願つて募集し、第四年目からは殆んど半永久に不要とするのであります。新に卒業して行く人達は卒業年度に十圓、其後二年間に十圓完納して貰ふ方法をとるのであります。そして此募集開始は昭和七年より開始し昭和十一年乃至昭和十六年に完了とし、其れから先は單に新しい卒業生諸君の寄金を此基本金に繰込む方法としたらどうかと思ふのであります。

此方法で計算すると、私案では昭和十一年には約四千圓の金が蒐ることになるのであります。

昭和 7 年	{ 新卒業生10人×10圓 → 1600圓 >	100圓	1700圓	第一年目に集る金額
昭和 8 年	{ 新卒業生10人×10圓 → 170人×5圓 → 850圓 >	100圓	950圓	第二年目に集る金額
昭和 9 年	{ 新卒業生10人×10圓 → 180人×5圓 → 900圓 >	100圓	1000圓	第三年目に集る金額
昭和 10 年	{ (190人-170人)×5圓 → 100圓 >	100圓	200圓	第四年目に集る金額
昭和 11 年	{ 新卒業生10人×10圓 → 20人×5圓 → 100圓 >	100圓	200圓	第五年目に集る金額

合計四千五拾圓です。

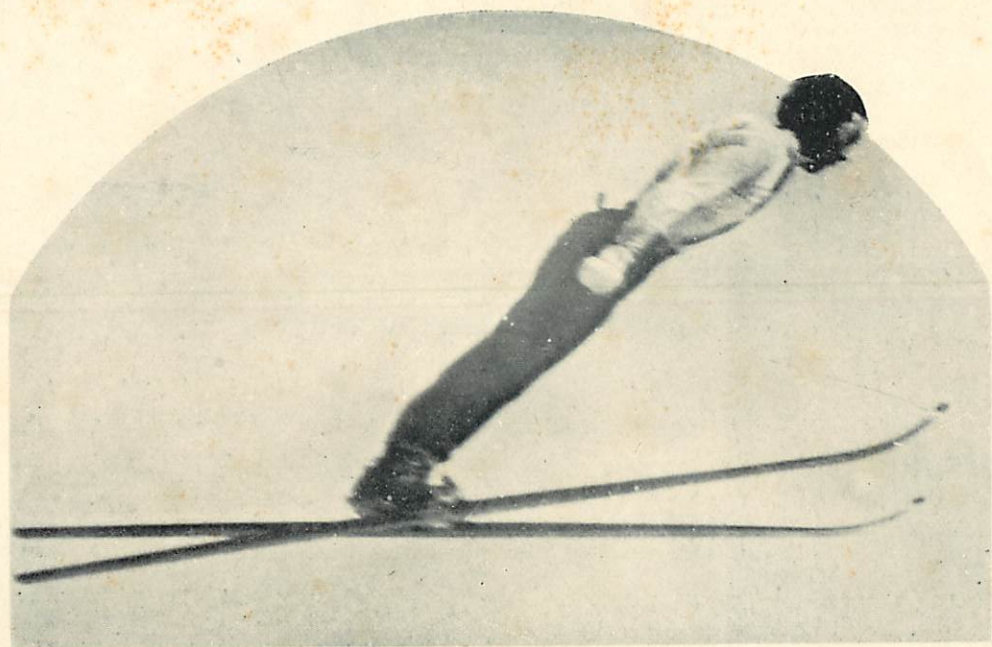
昭和七年の百六十人の先輩はモノグラムを持つて居る人達の數を凡そ見たのであります。第四年目には昭和七年の寄附者百七十人が差引きとなり、結局此年からは古い卒業生の方が二十人となり、之に新卒業生諸君の分が加つて行く譯であります。私は計算を判り易くする爲に毎年の卒業生を十人と限定して見たのでありますから、恐らく之以上の數にはなると思つて居ります。

そして此の寄金は全部スキー部長が責任を以て一定の豫定事業の完成するまで保管の任に當つて頂き、年度に變る幹事諸君は此事業に對し部長の補佐を爲し、莫金を必ず實現して頂く様に努力して欲しいのであります。そして先輩諸君も三年間スキー部の將來の爲と思つて寄附して頂くのであります。

斯様にして私は先輩からの寄附行爲を一人卒業してから向ふ三年間を限度にして、將來三年の義務的行爲を完了して頂いた先輩には、全く寄附を仰がなくても良い様にしたらどうかと思ひます。

二十年の歴史と云へば相當に古いのであります。男の子でも中學を卒業し上級學校に入つて居り、女子ならばもう嫁ぐ年頃であり、相當の分別はつきかけてゐる年代であり、親達は一層子の將來の爲に考へてやらねばならない時期であります。私は私達スキー部出身の者ばかりでなく、部員諸君も亦部の將來の爲に一考すべき時期に到來し、そして此處に採るべき機會に臨んで居るんぢやないかと思ふのであります。

私は此處では別に後援團體の細目の組織或は規約等のことは書きませんが、兎に角こんな風に金を蒐めて、それを財源にしてスキー部の後援方法を講じたらどうであらうかと云ふことを單に述べて、金が出來てから、スキー部のどうゆう事業にどうするといふ様なことは、何れ具體的に私の提案が多くの方の賛成を得て實行の期に進んでから、又追つて考へたいと思つて居ります。



菅平に於ける山田四郎君の飛型

飛型審判としての隨想

件 素 彦

一九二九年の三月、ヘルセット以下二人の諾威人が札幌をたつてスキ一の理想郷へ歸つて行つたとき、僕達の悲しみは日本中の誰よりも大きかつたに違ひない。もう自分達のジャムプを正當に理解、批判してくれる人々が日本から居なくなるんだ。凡てを打ちこんで飛んでゐるのに、これを見て本當に解つてくれる人が居ないのだ。誰が考へたつて寂しい事に違ひないんだ。

停車場の歸りに、薄野の龜屋で村本、秋野と三人で大いに嘆いたのを覚えてゐる。

その僕が二年たつた今では、スタイル・ジャツヂに選ばれたりしてゐるのである。そして僕に審判なんかされて飛んでゐる選手達を、さぞ飛び甲斐のない事だらうと思つて氣の毒に思つてゐるのである。目を皿の様にして見てゐるんだが、どうしても見落しがある。自分でも實に困つたものだと思つてゐるがどうも仕方がない。

外國の審判は皆老人だ。要するにあの年になるまで、スキ一のジャムプを見なければ本當ぢないんだと思つてゐる。僕なんか平素ホコリの東京に住んでゐて、眼が馴れないので本當に困る。こうジャムプに接する機會が少くちあ、審判なんかいい加減に御免を被らうと思つてゐる。北海道あたりでいつもジャンプを見つけてゐる人達が審判しなくちあ嘘だと思ふ。

僕は審判をしたあと、時々俺は一體どんな標準で點數をつけてゐるのかと反省してみる事がある。審判をしてゐるときは（複合競技のときは別だ）『此は何點だ』と自分できめてしまふ。そうすると矢張僕は審判するときに、或る理想のフォーム

を頭に浮べてゐる譯である。そしてそのフォームに比べて點をつけてゐる譯である。ヘルセットもどうやらこう云ふ風に點をつけてゐた様に思はれる。

然し之は全日本とか、インターカレッツなんかの場合にだけ言へる事であつて、地方の田舎大會へなんか行つたらそうはいかない。何故なら、そこでは皆 High Jump が低いから、不倒ジャムプで十點以下はやれないにも係はらず、普通に點をつける。どうしても十點以下のジャムプが出来てくるからだ。それに又スタイル・ジャツヂを作つてある上からも、色々なフォームに對して點數の差をつけてやらなければならない。だからそう云ふ時は一番いいジャムプが、あたり前なら十二點位でも、特に水準を下げて十五點位に直さねばならないのである。此邊は難しい問題だ。

復合競技の場合は採點は又頗る難しい。何故ならば、ジャムプに比べてデイス・タンス・レースの方がいい點數をとり易いからである。競走には二〇點と云ふフルマークがあるが、ジャムプには實際にはあり得ない事は解り切つてゐる。だから諾威あたりの様にジャムプのレベルがあがつてしまへばいいが、日本では普通に點數をつけると、競走に強い人がうんと徳をしてしまふ。だから甘く點數をつけなければならぬ。

復合丈を甘くつけると、現在の日本の様に復合と純ジャムプとが續いて行はれると、點數を比較されるのでまことに困つてしまふ。之は矢張復合のときも普通に點數をつけて、一番點の多い人を二〇點に直して按分比例していくのが一番よくはないかと思ふ。

處でどんなフォームにいい點數をつけるかと云ふ問題だが、こいつは一寸言葉では言へない。しかし無理に簡單に言へば、大膽に遠くへ飛ぶと云ふ意志のよくあらはれた安定なジャムプがいいんだと思ふ（此の合理的なんて言葉は使はなくてもいい、遠くへ安定に飛べたジャムプには合理的であるのに違ひないんだから）。

ジャムプではうんと前へかゝつていい等と云ふ事は、大膽に遠くへ飛ぶと云ふ意志があらはれてゐると云ふ事になるのだ。然しこう云ふのは、どう云ふジャムプがいいかと云ふのに大體を答へる言葉なのだ。

サツツ・フライト、ランディングに、どうすればいいかなどと云ふ事は此處で云ふ必要はない。何故なら、スタイルの點數をつける場合に、サツツが悪いから何點引く、フライトでスキーが開いたから何點引くと云ふ點のつけ方は決して僕はしないから。ジャムプ全體に對してつける丈だから。だからサツツ、フライト、ランディング、どれに一番重きをおくかとか、大膽に遠くへと云ふ意志のあらはれと、安定とどれが重いかなど、きかれるとまことに困る。要するに之等のコムビネーションに對して點數をつけるのだから。

だからスタイル・ジャツツなんでものは、審判の主觀が大きな問題になるのだ。だから美しさも大に問題になる。しかし之は靜的な美は排斥され動的な美が賞められるんだ。冷靜に客觀的に見て主觀できめるんだ。それだから審判は少くとも三人以上居なければいけない。

去年のインター・カレツヂは僕と麻生君と二人でやつたが、あれはいけない。あのときは僕はほんとに困つてしまつた。もし僕の點數で山田君が一位になり、麻生君の點數で神代君が一位になれば、僕の立場上まことに苦しい事だから、と云つて僕は決して採點に手心を加へはしなかつたが、結局神代君が一位になりホツとした。インターカレツヂなんかはどうしても三人で審判しなければいけないと思つた。

僕は此處までタド／＼しく論旨不徹底に筆をはこんで來た。自分乍らまことになつてゐないと思ふ。しかし頭がまだ出來てゐないんだから仕方がない。もつと年をとつたら何とかなるだらう。今僕は自分の審判としての教養を高めるために、スタイル・ジャツツに就いての多くの意見を聞きたくて仕方がないんだ。誰か意見をきかしてくれる人はないか。

終りに僕は北大のジャムパーに一寸言つておきたい。それは、君達は皆うまいんだと云ふ事だ。だからもつと自信をもてと云ふ事だ。そして君達が傳統に誇る北大のジャムパーだと云ふ自信でとんで貰ひたいと云ふ事だ。そうする事は先輩皆の望みなのだ。

それからもう一つ、君達のジャムプには *Kühnheit* はあるが *Schönheit* がない。之を氣をつけて欲しい。

スキージャンピング練習法に對する一私見

村 本 金 彌

ストラウマンの理論を熟知され、且つ北歐一流選手の神技を目前に見られてより既に數歳、従つて之等理論と實際を基調として出來上つた現在の進歩したスキージャンピングに對し、今更解り切つた而も野豬の如き言を弄する事は餘りに自己を知らざるの感がありますが、過去暗中摸索の時代に得ました貧弱な經驗を申上げ、隔意無き御批判を乞ふ次第であります。

ジャンプ（爾後スキージャンプを略す）の練習に取りかゝるに當り先づ第一に望みたい事は、スキージャンプの根本たる直滑降と制動とを完全に自分のものにして戴き度いのです。之れはつまらない事の様ですが實に肝要でありまして、スキージャンプを充分にこなし得ない人は如何にジャンプの練習を熱心におやりになつても、其の進歩上達には異常なハンデを認めなければなりません。尙又充分スキーをこなし得た人でも、本練習にとりかかる前に或る期間 *the period* を充分やられて、一般スキー術の練磨に務められん事を切望致します。

此の事は選手生活をやつて居られる人々にとつては、シーズンの短い間に數多くの競技會の開かるゝ現在に於いて、本練習をする期間を無駄に費やす様に考へられるかも知れませんが、決してその様な無駄は無いと信じます。

蛇足ではありますが、私が學生時代競技會に出場して成績の良好なシーズンは、必ず雪の降り初め丁度青山温泉の合宿期間、ジャンプをやらすに盛んに山へ登つた時であります。山の雪は吾人に眞のスキー術を教へて呉れます。亦急峻な斜面は

はないかと考へます。單に準備運動のみでなく、本練習最中によく陥入るデイルンマの時期に於いて、思ひ切つた登高はこの域を脱する最善の手段だらうと考へます。

(一) 練習用ジャンツエの撰定と其の練習法に就いて

勿論練習用ジャンツエの撰定に關しては、練習の進度と大なる關係を持ちますので一律に決められませんから、今練習時期を左の如く分類し、之れに適した撰定法を申し上げます。

A 練習前期

B 練習後期

右の分類は練習開始より競技出場迄の期間を、準備と完成の目的に従つて區分したものです。

A 練習前期

之の期に於けるジャンツエの撰定は準備期の事でありますから、臺の高サ四〇糎、着陸斜面二五—二六度、飛距離一四—一五米位出し得る程度のもを造ります。そしてアプローチは精々三〇米位で結構です。之れ以上は要求しない方が却つて良い位です。

最初臺の向きは下向きにして始め、練習日を重ねるに従ひ少しづゝ水平から上向きのものにして、之れで調子を會得してから亦下向きに致します。理由は下向きの臺では臺の上を滑つて居る時の速度が減殺されないから、正しい踏切りを成す時機を捕へる事が水平臺や上向臺に比較して難かしくあります。ジャンプに於いて踏切の時機を正確に捕へると云ふ事は、合理的な前傾姿勢、大なる飛距離、安定なる着陸を欲する上に、換言すれば完全なジャンプを遂行する上に重大な意義を持つものであります。然しながら下向きの臺は踏切前の姿勢が正しく保たれて居れば、前傾姿勢を採る事から考へますと水平臺上向臺に比し容易であります。下向きの臺で充分踏切のチャンスを捕へる事を覺えたら漸次上向きにして行きます。之は下

向臺と反對に上向きの程度が強くなればなる程、臺の上を滑る時に前方に投出されるのを防止する爲めに身體を幾分後傾しなければなりません。此の後傾の姿勢から再び所望の前傾を得るが爲めには身體を強く前方に投出さなければなりません。この努力に依つて踏切の場合の前傾の調子を會得する様に務めます。更に此の場合には足に感ずるショックがありますから、踏切を認識する上にも大いに効果ある事と思ひます。本期間の練習回数は相當多く行つても差支へないと思ひます。要するに此の期間は力強い正しい踏切りと、前傾姿勢を採る調子を會得するのが主眼とする所です。

B 練習後期

本期間は前期に於いて修得した事項を整備完成する時期で、平均二五米、最大三〇米を出し得れば結構至極とします。臺の高さ一・五米、着陸斜面の傾斜は三〇度、着陸斜面に前提フールバウを設ける事です。臺の向きは水平以下の下向臺とします。

この臺でもつて自分のジャンプを部分的でなく完全なものに迄整備する如く努力します。部分的技術を練習するならば此の期に着陸法を研究すべきです。但し此の時期に於いて忘れてはならない事は、一日の練習回数を多くしない事、そして練習がダイレンマに陥つたなら思ひ切つた休養をなすか、然らずんば前期に使用した小さいジャンツエで樂に飛ぶ事です。只前期後期通しての練習法として守らなければならぬ事は、必ず單獨ではなしに二三人の仲間をこしらへて練習をする事です。他の競技と異なつて其の個々の練習に審査を必要とするからです。一人でやる位なら寧ろ *Châtelain* をやつた方が遙かに有効です。そして亦御互ひに忠告し合ふにしても、他人の欠點を完全にこきおろさない事が肝要です。「飛ぶ者」は非常に神経を尖らせております。この不注意な忠告は必ず相手をしてダイレンマに陥入らせます。

(二) スキージャンピングの部分的技術に就いて

a 出發法に就いて

順序として出發から致します。出發時に於いてジャンパーは精神を如何に保つべきやは御承知の如く、「明鏡止水」とでも

申しますか朗かであればなりません、私共がスキ어의驚異のフィルムによつて感嘆措く能はなかつたダグフィン・カル、センの言に、『自分は出發をする場合に先づ自分が理想とする美はしいジャンプを頭に畫いて出る』と云つておりますが、味ふ可き言ではないかと思ひます。只出發に際し些細な事で氣が附かない事があります。其れは自己の利足をジャンツエの端に直角に方向を定め、次いで反對側の足を引きつけて出發する事です。之は踏切り迄に正しい姿勢を保持して行く上に最も重大な事で、此の注意が足らない爲めに一回のジャンプを悪い結果に導く事が度々あります。

b アプローチの滑走法に就いて

この滑走法は正しい力強い踏切りを行ふ爲に、身體を安定に保持して行く點から考へまして大切な事で、人によつては第一段の動作として直立姿勢で滑走し、第二段の動作として屈身姿勢を探る如く言つておりますが、私は寧ろ出發と同時に屈身姿勢 (Hockstellung) に移る可きだと思ひます。何故なればアプローチに於ける些細な不安定もやがては大なる不安定を醸す基です。それで重心の低い左右前後に安定な蹠身姿勢を以つて滑走し、第二段の動作としては重心を漸次水平的に足趾に迄移行し、來る可き踏切に對する準備をする方が得策だと考へます。此の第二段の動作、即ち踏切に對する準備動作が調子良く行はれるか否かは踏切を完全に遂行する上に大なる影響を及ぼすものですから、少なくともジャンツエの端より手前五米附近では何時でも踏切を成し得る態勢に在る事が必要です。但し注意しなければならぬ事は、重心を漸次的に前に移行する事にのみ氣を取られて膝が緩み勝になる事です。膝が緩むと力強く踏切る場合に兩足不平均に力が加はり危険です。それで堅くなつてはいけません。が最後迄締めておく可きです。

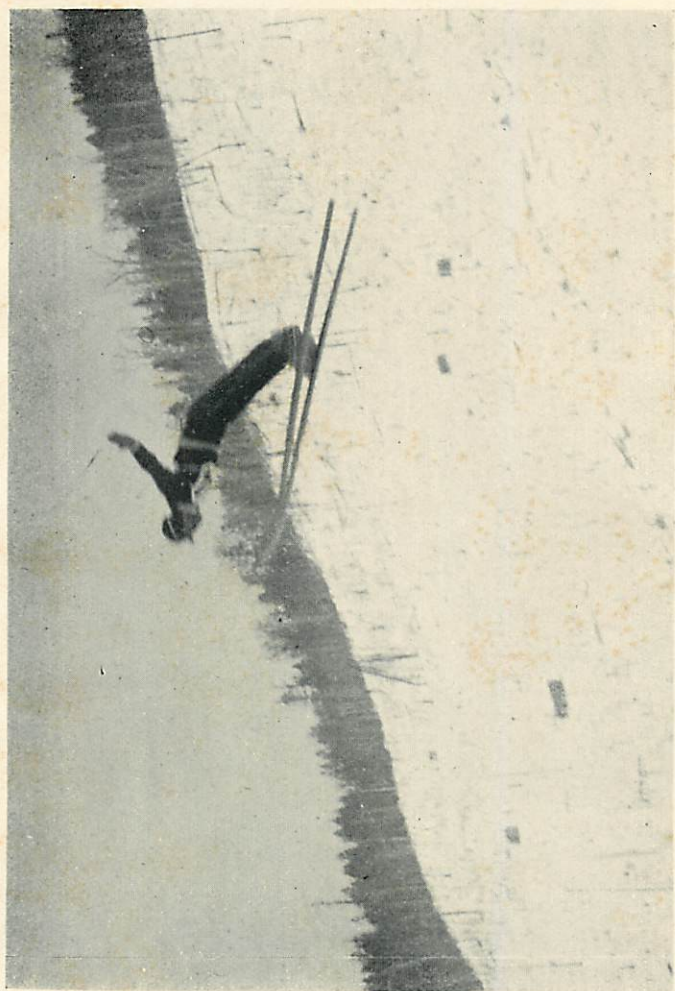
c 踏切りに就いて

踏切りを正確に行ひ且つ適切なチャンスを捕へると云ふ事は、全ジャンプを合理的に完成する上に最も重要な點である事は論を待ちません。亦少くもジャンプに身を捧げた者にとつて、踏切り程自己の手に入れ難いものはないと思ひます。従つて外觀的手段方法は各人略々同様に見えますが、其の細部に至つては各人各個に工夫と特長を持つて居る事と思ひます。合

理的なジャンプに必要な壯麗なる前傾を保つた安定空中姿勢、安定なる着陸を得る爲めにはストラウマンが力説する航空力學的の理論を大いに傾聴しなければなりません、然らば其の本旨とする合理的な前傾姿勢、大なる飛距離、安定なる着陸は如何にして得らるかと思ふ問題になります。之に對して私は踏切りのチャンスを確認する事と、力強い踏切りに伴つて身體を前上方に伸展する事に依つて其の大部の目的は達せられ、殘餘は空中に於ける技術と相待つて始めて完成の目的を達成し得るものと信じます。アプローチに於いて相當の速力を以つて滑走して來るのでありますから、前述の正しい方向に對して彈性のある力強い積極的な踏切りをなさなかつたら、合理的な前傾體勢は得られず、従つて安全にして大なる飛距離を望むジャンプは遂行し得ないと云つても敢へて過言ではなからうと思ひます。此の點から考へますと、從來踏切り方法の一として唱へられてゐる『靴の踵上に體重を置いて膝を後方に引いて兩脚を伸す場合に前傾姿勢となり、此の場合爪先が上方に反る形になる』と云ふ方法は、自分の經驗の淺い關係もありませうが尙一考を要する點ではなからうと思ひます。

d 空中飛行の技術に就いて

如何に合理的な踏切りを行つても、ジャンプの華とも云ふ可き空中飛行が不安定で不味かつたら、其の價値は大いに減殺さるゝと共に結局は失敗に歸するものですから、空中に於ける兩腕の運動、スキ一の安定なる操作、身體の均整は如何に大切であるかは今更論する迄もありません。只現在迄私が遺憾に思つておる事は、外國一流選手に比し日本の一流が空中飛行路の下向期に於ける技術、體勢並にスキ一の操作が劣つてゐると思ひます。折角合理的な踏切をして空中に飛出して、航空路の下向時迄は充分立派な體勢で來ながら、下向時から着陸する瞬間迄に良い體勢を失ひ、結局は *Redoubt* になり安定な着陸の要素を失ひ、且つ伸びる可き飛距離もストンと落としてしまふ様な感があります。實際に自分自身飛んで見て、三〇米位迄ならば大なる影響も受けませんが、三〇米を越へ四〇米を越へると此の下向時の技術の良否がレコードの上に、又安定な着陸を欲する上に大なる意義をもつて來るものと思ひます。これが爲めには下向時に於いては兩腕の大なる廻轉運動と相待つて兩肢並にスキーを後方に引き伸し、今迄より更に一層前傾をする如くし、着陸に對する意識を新に深からしむる事が



樺太シヤンツェに於ける伊黒正次君の飛型

此の欠點を補ふ一助と成し得ると考へます。

。 着陸に就いて

着陸に際してのショックを兩足平等に受く可きか、或ひは前肢のみに多く受く可きかは各人に依つて説がありますが、私としては當然前足に多くショックを受ける説に傾きます。それで着陸の際に兩手を前方に出し、兩腕で胸を抱き締める様にすると同時に兩膝も緊密に締める動作は、前後左右の平衡を保つ上に大なる助けとなるものです。御承知のスネルスルードの着陸に際しては特にこの動作が目立つた様です。

以上各部分的の動作に就いて申上げましたが、次に蛇足であります。がジャンプ用スキーに就いて申上げます。現在日本で出来るスキーは改良の餘地が無い程立派な製品を出す様になりました。結構な事ですが、同じ型で重量と云ひ滑りと云ひ強靱性と云ひヒツコリーに優る材が出来ないのが残念です。一シーズン使用して見ましたが、樫の材はヒツコリーに勝るとも劣らない良い成績を示して呉れました。只今迄は多くの人が長さを要求して重量に對しては比較的無關心だつたと思ひます。私は八尺の大物を使用するよりも、七尺五寸位で重量を相當持せた方が有効でなからうかと考へます。

長々と自分勝手の理窟を書き立てましたが、皆自分が得ました浅いながらも経験より出た私見であります。勿論偏狹然も頑迷の域を脱し得ませんが、此の慶賀すべき我部の爲めに、僅かなりともお役に立つ事が出来ましたら私一生の感激とする所であります。

終りに、今日の隆昌に迄到らしめた歴代諸先輩の御努力と、部の爲めには粉身の御盡力を賜りまして、我々にとりましては生の親とも思はるゝ大野先生の御熱誠を深く感謝致しますと同時に、將來吾が部員の御健康と熱ある御奮闘を祈つて止まない次第です。

札幌を訪れた二大スキー人の言葉

宮 下 利 三

一九二九年の一月と云へば、凡そ吾々スキー競技にたづさはつてゐた者の總てが非常な喜びと驚きに浸つた時であつた。最もオリムピックへ出場した日本の選手諸君にとつては、その喜びと驚きとの内容に多少の相違はあつたに相違ない。何しろ吾々が未だ嘗て此の目で見る事の出来なかつたノルウェーのスキー選手の滑り方、走り方、飛び方が居乍らにして見られると云ふ吉報であつたから、當時吾々の心の躍るのは禁じ得なかつたのも無理ではないのである。

札幌驛頭にヘルセット中尉、コルテルード、スネルスルードを迎えたその日の中に、再び吾々は彼等を三角山の麓に見出す事が出来たのであるが、當日は餘りその技術に接する機會が無かつた。——その日はひどい嵐だつたから。

私が標題に掲げた二大スキー人の言葉の中の一つを聞いたのは實はその次の日であつた。

麻生氏の通譯で吾々は三角山のサツポロシヤンツエの下で、先づノルウェー選手の得意とするギャツプの多い斜面に於ける直滑降の要領から順次にコーチが始まつた。何の事は無い、小さいシヤンツエの連續の様に出来てゐる斜面であるから、ベンドの固いスキーをはいてゐる人は、一つは越しても、二つ目、三つ目にはひどく投げ出される。又要領は却々飲み込まないからヒツクリ返る人は大分多かつた。その間をスネルスルード、コルテルードの二人は丁度一人二役の劇でも見る様に、全く同一の技術と姿勢を見せて、不慣な吾々の眼を驚かした。

それが終ると、今度は滑走の要領を教へ出した。中尉は必ず或る特定の雪、スキー並斜面のコンディションを説明しては、

斯る場合には "Ein dieser Weise" に滑るんだと云つて、凡そ四種類位の滑り方を見せて呉れた。そのスムーズな、無理の無い滑り方を見て、當時ラングラウフに精進してゐた吾々は、全く垂涎置く能はざる状態であつたのである。

私は丁度ラングラウフの技術が今日の様に或る程度の研究と、實踐とから一定の目安が付く様になる「夜明前」にスキー競技を始めた關係上、ノールウエイ人の來る迄は色々な疑問を持つてゐた。殊に私はラングラウフでは如何なる走り方が最も基礎的なものであるかと云ふ事に就いて、少からず論争や勉強もして見たのであつた。けれども私共の仲間からは餘り満足な結果も導き得ずに、疑問を疑問として残しておいた。

その事を簡単に云へば、ラングラウフの基礎的な走り方を三段滑走と呼び度いと云ふ事に歸着するのであつて（此の事に就ては目下明大で活躍してゐる栗谷川君と偶然に同意見であつた）然らば何故そんな固苦しい事を無理に唱へ度いかと云へば、それ迄吾々は「三段滑走」と云ふ名の下に四歩、五歩位歩いてからストックを用ひるもの迄を含めなければならぬ程、その概念が判然してゐなかつたのである。そして何時の間にか三段滑走とは、凡そラングラウフの基礎的な滑走法である、と云ふ風に頭の中に疊み込まれてゐた。少くとも私等はそふ云ふ様に三段滑走と云ふ字を用ひ、且理解してゐた。

そんな理由で私は特に興味を以て『何が基礎的な滑走法であるか』と云ふ疑問を解決して呉れそふな、ノールウエイ選手の來朝を待つてゐたのである。

愈よその日が來て、その技術を吾々は見た。けれどもヘルセット中尉は、之れは "Esbjorn" だとか、あれが "Drei Schritte" だとか云ふ代りに、『斯ふ云ふ場合には "Ein dieser Weise"』と云ふ丈である。今吾々は其處に、吾々が前から論争してゐた色々な型を、實に氣持良くやつてゐる三人のノールウエイ人を見てゐる。けれども吾々が望んでゐる、最も基礎的なフォームに就いては全く一言も聞き得ない。その中にコーチも一先づ終つて、ヘルセット中尉の一行は引き上げ始めた。

此の時堪り兼ねて質問を持つて行つた者が二人居た。一人は今度オリムピアマンシヤフトとして米國へ行く山田勝巳君で、一人は私であつた。

何しろ言葉が滅茶苦茶だから、此處で餘り大きい事を云ふと、飛んだお笑ひの種となるに相違ない。けれども當時は眞劍になつて聞きに行つたんで、その限りでは恥も外聞も云つて居られない大切な質問を試みた理由であつた。

山田君は杖を用ひる時の後足を雪から離す要領と理由とを聞かれた様であつた。

私は二つの質問を用意した。一つはあの様な走り方の名稱、他は何が基礎的な走り方であるかと云ふ事である。處で私には第一の質問に對する次の様な答を得る事に依つて、第二の質問の必要が無くなつてしまつたのである。

『吾々は別に之等の走法に對して名稱を持つてゐない。名稱は Sympathetic の好きな獨乙人の作つたものである。あれは技術 *technik* ではなくて方法 *methode* である。一定の條件の下では、そふするより外に方法が無いのだ。例へば階段を昇るのにかゞとを以てしたり、道路を歩くのに爪先きを以てしたりしないだらふ。夫れと同様で、技術であれば一々名前も必要だらうが、方法である以上別に名前も要らないではないか。』

前にも云つた様に、言葉の判らない私が直接聞いた言葉であるから餘り自信もないが、當時私は前記の如き解答を得て、今迄吾々の想像した以上に、ラングラウフと云ふものは或る意味では困難であり、又或る意味では容易なものである事を知つたのである。

吾々が當時技術として覺え込まふとしてゐる處を、ノールウエイ人は既に方法に迄理解力を高めてゐると云ふ事は、全く驚きの到りである。——その點ではラングラウフは前途遼遠だ！ と同時に、吾々は方法を知る事さへ出来れば何も無理をする必要はない。ラングラウフは極めて愉快な、練習一つで何ふにでもなるものであらう。——かゝる考へ方からは、同じラングラウフは又容易なものとして解せざるを得ない。

「スポーツの本體」が末廣嚴太郎博士の云はれる如く、『スポーツは主として體力を手段とする勝負事である』（中央公論昭和六年十月號參照）と云ふ概念の説明から理解されるものとすれば、吾々のスキーも細い技術にのみ拘泥してゐる段階を切り抜けて、始めてスポーツとして一人前の顔出しが出来るのではないかと考へられる。

そして事實、私は斯かる時代になりつゝある現在のラングラウフの發達振りを見て、過去に聞いたヘルセット中尉の言葉が、新しく吾々の頭の中に蘇つて来るのを覚えるのである。

一九三〇年の春は、吾々に嘗て Wunder des schneeschesus と Moderne Ski Sport とを通して、その技術を教へて呉れた唯一の先生である。シュナイダーを迎えた時である。

吾々は現在ではノールウェイ人のスキーを見、且聞いてゐる關係上、今更競技の方面で南歐の人を煩はす必要もないであらう。けれども前述のヘルセット中尉來朝以前に於ては、全くシュナイダーの一言一言が吾々の興味の的であり、研究の對照であつたと云つて過言であらうか。

夫が一九三〇年の春に彼を迎へた吾々の氣持は、競技者としてとはなしに、所謂一般スキー術を習ふ者としての夫に變つてゐた。そして彼の來朝の目的も後者に在つた事勿論である。

私は冬の終りに與へられたノビノビしたスキー登山のシーズンを中心から享樂しよふと願つてゐる者の一人である。十二月、一月、二月の眞冬をスキー競技に送る私如き者に取りては、暖い太陽と充分な厚みの雪を持つ三月、四月の山歩きは素晴らしく呑氣な、且愉快なものである。山と云つても餘り大した山へは行かないが、兎も角 *Falze* (私共の用語で言へば「駄ばき」)をはいて歩く以上、やはり競技のスキーの時とは違つた技術を必要とするし、又一般スキー術が良く出来ない山へ行つても面白味が少ない。それで出来る丈け此の方面の技術を練習しよふとは勉めてゐたものの、競技の方の様に差し迫つて何ふ斯ふと云ふ様な破目に陥つた事もないので、此の方面は全くネグレクトして我流を通してゐた。

そして私とその學生生活の幕を閉ぢ様とする丁度その日にシュナイダーが札幌を訪れて呉れたのである(三月三十一日だと記憶する)。

此の時吾々は彼に對して非常に大きい恩恵を過去に於て蒙つてゐたにも拘はらず色々な事情で、何等感謝の意を傳へる機会を掴み得なかつた事を遺憾に思つた。

然しそれは夫として、私は圓山の實演と、公會堂の講演とに接する事が出来て、今迄此の方面に投げやりであつた私の興味は果然此の方面に釘付けられてしまつた。私も此の時迄臆氣に「アールベルグ派」の事を聞き、その本質が何ふの此ふ云々と言ふ様な事を耳にはしてゐたが、兎も角シユナイダーの此の方面の技術に關してはハッキリは知らなかつたのである。處が彼の話に依ると、Pflug Fahren から Steu christiana に及ぶ一系の滑り方が、兎にも角にも彼の教へるスキー術の凡てであつて、それが馬鹿に簡單に次の様な Motto の中にたゞき込まれて居るのである。

1. Sturz frei in Sicher

2. Elegant in Schön

3. Temp in Tempo

一寸見ると、此の三つの言葉は偶然並べられたものゝ様であるが、良く考へて見ると決してそふではない。1は2の、又2は3の基礎要件として此處では示されてゐる。従つて此の123はスキー術教程の順序と一致し、熟練不熟練のパロメーターと一致する。

スキーを操る者が美しい姿勢で滑るためには、夫れが不安定な危つかしいものであつてはならぬだらうし、又その美さを強調するためには、出来る丈そのテムボを早めるのが効果的であらう。そしてその最も効果的なスキー操作はステム・クリステヤニアを知つて始めて可能だとシユナイダーは云ふ。

私は此のステム・クリステヤニアに就いても強調したいが、その細い技術的な方面では私自身未だ良く出来ないし、シー・カメラード宮本が詳しいから彼に譲つて、専ら此の一系列全體に就いて考へて見たい。そしてそのためにはシユナイダーの三つのモットウは、全くそのコツを語り得て妙である事を強調すれば足る様に思はれる。

勿論此のモットウ自身の中には何等技術的名稱は見當らない。けれども此のモットウ自身は凡ゆる技術（一系列の）を包括し、個々の技術の外に、夫と並んで夫等の技術を統一し指導して行く一つの精神のある事を示してゐる。従つて此の精神

を掴み得た人はその技術を知り得た人と同じく、此の「派」の人と見る事が出来るであらう。而して個々の技術を知つても此の精神を掴み得ない人は、本當の意味で此の「派」の人と云ふ事が出来ないのではなからうか。

私は夫故、一般スキー術を自分のものにしてしようと願はれる人々に、シュナイダーの此のモットウの意味を良く理解して頂き度く思ふのである。

始めからSTEM・クリスチャニヤの練習に取りかゝつたり、又一寸その眞似らしい事が出来たからと云ふて、直ちに *Arlberg meister* と自惚れたりする事はほめた事ではないと信ずる。逆に餘り上手ではなくとも轉ばない様に、確實に滑れたら、その人は亦早いテムボを以てブン／＼ぶつ飛ばす事の出来る人と同様に、此の派の教義に適つた者と云ふ事が出来る理由である。

人には好き嫌ひと云ふものがあつて、同じスキーを遊ぶ仲間にもシュナイダーを極端に嫌ふ人もある様である。斯ふした人々に迄私は無理な難題を吹掛け様とも思はない。けれども今後益々その大衆性を獲得するであらうと考へられる一般スキー術の分野では、シュナイダーの教義に就く事が一番近道であり、且當分は夫れが必要なのではないかと考へる。斯く考へるが故にこそ私は又、彼の技術を極めんとする人々の心掛けなければならぬモットウに觸れて見たくなつた理由である。

x

x

上述した二大スキー人の言葉は、各々その分野にたづさはる人々の將來に對して暗示に富んだ面白い言葉だと思ふ。同時に此の言葉はその解釋の如何、又解釋する人の如何に依つては、更に面白い言葉となるに違ひない。

此の二つの言葉は何れも私の學生時代に耳にしたものであつて、それを聞いた當時には大變感激し、仲間同志で大分語り合つた言葉である。動もすれば忘れ去らうとする今日の私に取つて、此の又と無い機會を利用して、此の事を記述する事は誠に喜ばしい次第である。

デイスタンスレーサーとしての經驗より

中村新一郎

スキーデイスタンスレースを志される方に、淺薄なる經驗より得たる二三の思付を述べて見よう。

吾國スキー界の進歩は今更云ふまでもない。僅かこの二三年間に驚異的進歩發達を示し、又優秀なる選手及び技術の所有者と云はれるものもその數を増し、スキー競技とその記録も益々昂上され來つた。

又去るシーズンには相續いでスキー競技の王國ノールウエーの一流選手連、又山岳スキーの王者シュナイグー氏等續々と來朝、その妙技溫蓄を披瀝され、又吾國よりも冬期オリンピックその他に選手の遠征するあり、今や吾國のスキー競技も漸く世界一流の諸スキー國に伍して行かんとする如き状態にまで到つたのである。従つて吾が國スキー競技の各選手も逐年競技に對する研究態度、或は眞摯の度合も往時のそれとは著しく變り來つた。又合理的練習法と云ふ様なものも廣く一般化し、絶えずその効果を上げんとして努力されるに到つた。

來るべき競技會を目標として、それによき成績を得んとするものは常に他の人より以上の努力を続ける事が必要であるとは今更言を俟たぬ。節制に於て、又體力の養成に於て然りである。夫等に對する方法、或は注意と云ふ様な如きは古くより多くの先人により廣く語られ、又記載せられ、今更冗文を連ねて反復記説するまでもないとは思ひつゝも、唯デイスタンスレーサーとしての僅かの經驗より、自己の失敗、或は過去に鑑みてその原因經過を調査し、更によき効果を得んがため茲に敢てその一部を記さんとするのである。

節制は練習と大なる關係あり、従つて體力涵養にも密接なる關係を有する。如何に適當の練習をなすとも節制を欠く時は、それはあだかも穴のある器に水を入れるが如く、入れる後から水は流出してしまふと同様である。身體を器の如きものとするなら、切角取入れた練習の結果も適當の節制を欠く事に依り、花となり實となる事なくして、却て場合に依つては身體を損するが如き事に到るのである。即ち適度のよき練習と節制と相俟て始めてその練習の効果は現れて、體力も涵養され、技術も練磨され、それによつて更により以上の練習と云ふものがなし得られる様になるのである。

レーサーとして最も重要な事は先づ體力である。即ちレーサーとして必要な體力とは、一定の距離を滑走し盡すに充分なる身體各部の「耐久力」にして、勿論身體の各器關全部が強健にして耐久力に富む事は望む所であるが、特にスキーレーサーとして重要な事は身體内部諸器關、又は外部の諸筋肉特に腕脚の筋肉をして耐久力に富ましむる事が必要である。

器關の強弱はその人の生來の如何にもよるものであらうが、練習に依つて相當の運動にまで耐え得られる様に馴化せられるものである。勿論短期間にてはその目的は達し得られるものではないが、繼續的の練習に依り次第にその目的に達せられて行くものである。呼吸器關の強弱も亦器關に於けると同様なものはあるが、特にスキー競技の如く冬期嚴寒の時に烈しき運動を行ふものなる故、充分の注意保護をなさざれば往々損傷を來たし易きものである。特に冬期溫暖なる屋内より急激に寒き戸外に出入する時は、常にその前後に含嗽等をなすは繁雜なる事であるが効果あるものである。如何なる場合でも、身體に損傷を來たしたる時とか、又は身體の工合悪しき時は可及的練習を見合せ快復に努むる方がよい。尤もそのために大なる影響を來たさざる程度のものなる時はその限りでもないが。

スキーのレースの如く長距離を數時間に亘つて過激な運動を繼續して行く競技にあつては、その運動に要するエネルギーを供給すべき源は勿論身體諸器關であらうが、特に胃腸等の消化器關は直接大なる關係を有し、従つて其等を平常より健全ならしめて置く可きは言を俟たざる所であらふ。大長距離等の如く出發してより歸着するまでに三、四時間乃至は六、七時間をも要すべきものに於ては、勿論競走中に飲食物を攝取する事は必要であるが、又或る程度までは一定の飲食物に依つて相

當の時間の運動に耐え得られる様に馴らして置く事も亦必要である。暴飲或は暴食の如きは最も慎む可き事である。常にその人のなす運動量或は體格に従つて飲食は控へ目にする様に心得て置く可き事であらふ。

競技者の身體のコンディションをして常に健全たらしむるには、節度正しき練習と相俟つての節制である。朝は早起き、夜は夜更しを避ける事、適當の睡眠を取り入れること、睡眠不足は直接間接に身體の諸器關を弱らしめ、或は損傷疾病を起さしめ易きものであるから。先づ日々相當の運動をなす者には少くとも八時間以上の睡眠をとる事は必要である。又睡眠を充分にするためには日常生活に可成り喧噪なる場所を避ける方がよい。又合宿練習等に當つても統一ある練習をなすと共に、各自靜肅と云ふ事に心掛けて、互に刺激、興奮より遠去かり、睡眠を充分になす事が必要である。

競技をなす者にはかく肉體的に種々の練習をなすと共に、又精神の修練をなすと云ふ事は重要な事である。如何なる競技に於てもその成績はその人の體力、技術に依る以外に、又精神的作用に依つても甚だしく影響を受けるものである。長時間に亘つて過激な苦しき運動を繼續して行く競技にあつては、よくその困苦に耐へ忍んで目的に向つて到達さすべき不屈不撓の精神、又はその時々についた突發事も沈着に處理して行く豪毅果斷な精神は、平常より競技精神の修練と共に留意して行く可き事である。

スキーレースの練習は四季を通じて行はれるものではあるが、大略積雪時期に於ける正式のスキーレースの練習と、積雪期以外に於けるレースに必要な能力、耐久力等の維持及更にそれ等を増進せしむるために行はれる豫備(補助)練習とに二分せられる。

競技會が終つて、來る可きシーズンの競技會に對してなされる練習は、競技會の終了と共に開始(練習は繼續的なものであるが)せらる可き事である。普通北海道等に於ては三、四月の二ヶ月は充分に之の練習をなすべき期間である。十二月初旬より積雪あるものとしても、競技會が一月中旬に開催せられる場合は、眞に充分に行ひ得られる練習の期間と云ふものはこの中僅かに四週内外位のものであらふ。到底この短期間に競技に必要な體力、耐久力、或は技術その他全の状態で充分

に習得する事は甚だ困難な事である。故に少くとも次のシーズンの競技會を目的とする選手は、そのシーズンの競技會の終了と共に、来る可き競技會に對する練習を開始しなければならぬ。眞に選手の實力を涵養するに充分なる練習と云ふものは、何としても積雪上に於て實際スキーを着用して行ふ練習より以外によりよきものは有り得ない。即ちこの春季三、四月に於ける練習は選手の實力養成に最も重要な期間にして、此の時期に充分體力又は一般技術等を習得し、之を適當な豫備(補助)練習に依つて来る可きシーズンまで保持して行く事が必要となつて来るのである。

此の春季の練習期間は競技の終了と共に、身心の緊張に多大の餘裕を生じ、天候、氣温も次第に温和になり、落付た氣分を以て充分の練習をなし得る様になる。又雪質なども冬期と異り各種の場合に遭遇し得るものなれば、此の時期に選手は過去の練習及競技の結果、經驗を省みてその改むべき所は充分研究改良を加へ、延ばすべき所は充分に助長せしむ可きである。此の競技終了後の時期に行はれる練習は競技前に於けるものとは異り、各種の事情に依り全力をその練習にのみ終始集中すると云ふわけには行かぬ、従つてその量も輕減せられる様になる。又此の春季に行はれる練習法の一つとして見逃すべからざるは、實際コースに就て行ふ練習と共にスキーに依る山岳の登攀、滑降である。即ちこのスキー登山を以て練習となす時は、その登山に伴ふ精神的、肉體的各種の慰安並に興味を得ると共に、競技に必要な體力、耐久力或は各種の技術を修得し得るのである。此の練習を主目的とするスキー登山に於ては、登高を本意とする登山とは多少異り、これを行ふ事に依つて實力涵養に役立つ所のものであれば充分である。故に此の目的のために行ひ易きは所謂小登山である。又練習期間中數日を登山或は山々を廻り歩く事に費すは、又レーサーにとつて一つの試練ともなり、又他に於ては會得し難き體験を得るものである。然し練習を目的とするには各種の關係から、前記小登山なるものゝ方が行ひ易きものであり、又數多く之を實行する事を奨めるものである。

春期に於ける練習量は冬期のものに比し輕減せられて来る、むしろ各種の事情に依りその輕減を餘儀なくせられて居るが、先づ一週平均三、四日内外を以て練習日とする方がよい。然してその内一二回は所謂小登山を敢行されん事を奨むるので

ある。又この期間の練習も冬期と同様、事情の許す限りは選手一同相合して練習（合宿練習）を行ふ事は必要である。

かくして數週に亙る春季の練習は溶雪と共に徐々にその量を減少し、急激に練習生活の様式を一變せしむるが如き事は之を避けて、全くスキーを使用して練習する事の不可能に到ると共に、茲に習得せられたる實力を各種の豫備運動に依つて來る可きシーズンまで保持し、或は更により以上のものとして行く様になるのである。

豫備練習は如何なる種類の運動でもよい、此の運動に依つて先シーズンに收得したる體力或は耐久力を來るべきシーズンまで保持し行くか、或は更により以上のものたらしむるものであれば充分である。只此の練習をなして行くに當り一方にのみ偏せざる様に注意すべく、全身に亙り内臟諸器關或は各筋肉を絶えず適當に働かせて行く可きである。又時には全身に激しき運動を與へよく耐え得せしめる事は亦必要なる事である。練習はかくして次第にその度を強め、過激ならざる程度にその量を増加して行く方がよい。

而して豫備練習に於て大長距離又は長距離レースに對する練習として特に區別する必要はなきも、平常より大長距離の選手は特に長時間に亙り一定のスピードを以て滑走し得べき繼續力又は耐久力の養成に心掛け、長距離レース（十一—二十籽）を目的とする者は比較的短時間に全速力を以て全距離を滑走し得る様に努めるがよい。

練習は夏冬を問はず常に自己の身體のコンディションを省みて、徒らにその量のみを大にする事は禁すべき事である。常にコンディションを見てその練習の質並に量を適當に攝る事に注意しなければならぬ。

練習は又單獨で行ふよりは相當多人數が一致して行ふ方が更に効果ある事は勿論である。特に多人數の選手が出場する團體的競技に在ては、一人二人の傑出せる選手を有するより、全體として揃ふて優秀なる選手を有するものは、確に然らざらもより全てに有利であり且確實である様に、各種チームの對抗競技等に於て成績を良好ならしむるには、そのチーム全體の選手の素質を良好ならしむる事が必要である。それには出來得る限り多くの選手が相合して、互にその實力を向上せしむる様に努めなければならぬ。將來延び得べき素質を有する選手も、單獨の練習或はその練習法の如何に依つて、充分に

その實力を具備するに到らざるものが相當にある。平常より心掛けて各選手は一致協力して、統一ある練習を繼續する事を欲するものである。

各種の豫備練習が冬期間の正式練習に、又は競技に如何程關係あるか、又効果あるかは一一具體的には表はし得ざるも、各人の自由の練習經驗により、よくそれは知る所である。

次に豫備練習に就て最近の練習日記の一部を表記せん。

1929年	
7 月	13日 空沼岳登山
2日 クロスカントリー約10分	15日 パラダイスヒュツテニ登ル
3日 同上(約20分)	17日 クロスカントリー約5km
25日 同上(約3km)	18日 同上 約5km
26日 同上(4km)	20日 クロスカントリー
8 月	22日 手稲山登山
1日 ヨリ9日マテ夏期労働ニ従事	23日 札幌岳登山、(札幌發前7時30分—頂上后1時)
16日 空沼小屋ニ行キ、泊ス	29日 發寒川上流右股瀧ニ到ル
18日 空沼岳登山	10月
9 月	23日 クロスカントリー(15分)
7日 藻岩山登山	24日 同上(45分)
8日 札幌岳登山(前7時30分札幌發—札幌岳後1時35分—瀧ノ澤驛后5時20分)	25日 同上(13分)
9日 パラダイスヒュツテニ登ル	11月
12日 空沼小屋行キ	4日 クロスカントリー(15)
	5日 同上(15分)
	6日 同上(13分)
	7日 クロスカントリー(6km)
	8日 同上(3km)
	9日 同上(4km)
	10日 朝クロスカントリー約9分 午後同上(圓山—盤溪峠—小別澤—圓山55分)
	11日 朝クロスカントリー約9分 午後同上(4km)
	12日 朝クロスカントリー(約10分) 午後同上(圓山—盤溪峠—小別澤—圓山49分)
	13日 同上(圓山—盤溪峠—小別澤—圓山56分)
	14日 クロスカントリー(15分)
	15日 朝クロスカントリー(約11分) 午後同上(4km)
	16日 朝クロスカントリー(約11分) 午後同上(圓山—盤溪峠—大曲—小別澤—圓山1時間11分)

- 17日 クロスカントリー (4km)
 18日 朝クロスカントリー (約9分)
 午後同上 (約3km)
 19日 朝クロスカントリー (9分)
 午後クロスカントリー (4km)
 21日 クロスカントリー (6km)
 以上降雪三日練習ナナス

1930年

5 月

- 22日 札幌岳登山 (前8時40分豊平發一后
 12時45分札幌岳)

6 月

- 3日 クロスカントリー (5km)
 4日 同上 (2km)
 5日 同上 (2km)
 6日 クロスカントリー (圓山—十二軒
 —盤溪—幌見峠—圓山)
 8日 五剣山行き
 9日 クロスカントリー (圓山—盤溪—
 幌見峠—圓山)
 11日 クロスカントリー (同上コースニ
 依ル)
 14日 札幌—定山溪—豊平峽—狹薄澤 (

キャンプ)

- 15日 狹薄澤—豊平峽—定山溪
 16日 クロスカントリー (3km)
 17日 クロスカントリー (6km)
 18日 同上 (3km)
 27日 クロスカントリー (6km)
 29日 同上 (3km)

7 月

- 3日—4日然別湖行き
 11日 クロスカントリー (圓山—十二軒
 —盤溪—幌見峠—圓山)
 15日 クロスカントリー (6km)
 16日 同上 (圓山—十二軒—盤溪—幌
 見峠—圓山、一週所要時間43分)
 27日 空沼小屋—真簾沼行き

8 月

- 1日—10日十勝岳—大雪山
 20日 然別湖行き
 31日 剣山登山

9 月

- 8日—9日、暮別岳山
 14日 クロスカントリー (圓山—十二軒
 —盤溪—幌見峠—圓山)
 15日 クロスカントリー (同上コースニ

依ル)

- 16日 クロスカントリー (3km)
 21日 クロスカントリー (圓山—小別澤
 —大曲—中ノ澤—大曲—盤溪—幌
 見峠—圓山)
 24日 クロスカントリー (圓山—幌見峠
 —盤溪—十二軒—圓山)
 25日 クロスカントリー (6km)
 26日 クロスカントリー (圓山—小別澤
 —大曲—盤溪—幌見峠—圓山)
 27日 クロスカントリー (圓山—琴似—
 輕川—千尺高地—パラダイスヒユ
 ヅテ)
 29日 クロスカントリー (8km)

10月

- 1日—クロスカントリー (12km 1時30分)
 7日 クロスカントリー (圓山—十二軒
 —盤溪—幌見—圓山、44分20秒)
 9日 クロスカントリー (6km)
 10日 圓山登山 (走ツテ)
 11日 同上
 12日 藻岩登山 (走ツテ)
 27日 クロスカントリー (4km)
 28日 同上 (5km)

30日	同上 (5km)	左門峠節ヶ嶺	9日	クロスカントリー (圓山—十二軒—盤溪—梶見峠—圓山)	チ使用ス	
11月						
2日	クロスカントリー (4km)		10日	輕キ練習	14日	輕キ練習
3日	同上 (4km)		11日	同上	15日	クロスカントリー (5km)
4日	クロスカントリー (10km) 雪ヶ降		12日	同上	16日	以後ハスキーヲ使用シテ練習ナク
8日	輕キ練習		13日	朝、クロスカントリー (5km)		
				夕刻ニ到リ降雪アリ初メテスキー		

競技に最も必要なるは正式練習である。即ち實際にスキーを着けて行ふ所の練習である。レーサーにとつてこの練習が最も主要にして、如何に豫備練習を充分になし、節制をなし、體力の涵養に努むれど、この正式の練習の如何に依つてそのスキーレーサーとしての實力は左右されてしまふのである。

正式練習は目的により大略その競技會前に行はれるものと、又競技會終了後來るべきシーズンのために行はれるものとに二分せられる。この中競技會終了後來るべきシーズンのために行はれる、所謂春季の練習に就ては大略を前記したれば、次に競技會前に行はれる冬の練習に就て記して見よう。

我が國の如く一月中旬早々より競技會を行ふ所に於ては、この練習を行ふ可き期間は極めて短少にして、降雪の遅延、降雪後突然に來る暖氣に依る溶雪等の場合は、全く練習をなすべき期間が皆無と云ふてよい位である。かく比較的短期間に於てこの重要な練習を充分なさなければならぬと云ふ事は、各選手にとつて實に並大抵の事ではない。

勿論此の練習は相當の豫備練習を経たる後なれば、身體は相當の運動に對して耐え得られる様にはなつて居れども、實際スキーを着けて行ふ練習に於ては、使用せられる身體諸部分、諸筋肉等は全ての點に於て豫備練習の時とは異り、従つて積雪後當分は充分身體諸部分として正式練習に充分耐え得られる様に馴らさしめ、而る後徐々にその度を強めて行かなければならぬ。

通常北海道等に於ては降雪後一—三週間に於てその雪量も次第に増加し、登攀、滑降のコースも略自由にとり得るに到るのである。この二、三週間の間に僅かな積雪を利用してなされる練習は、重に芝生又は道路面等の平坦地又は緩斜地に於て行ひ得られるものである。又この練習は次の競技會まで繼續される實際のコースに就てなされる練習と共に、選手にとつては頗る緊要なるものである。天候、氣温その他の状態は著しく豫備練習に於けるとは異なる故に、競技會までには尙多少の餘裕があるとは云へ、十分に緊張して目的の競技會に到るまでよく練習を続けなければならぬ。

この正式練習開始後一週間内外で身體は略々この練習に耐へ得られる様になる。此の間に於ける練習は前記の平坦地又は緩斜地にして、一日平均二十—三十分間位とし、身體が之に耐へ得られるに到つてからは三十分内外の練習を、一日可及的
二回に亘つて行ふがよい。かくして一週間内外を經過して身體のコンディション順調なる時は、練習時間も少しづつ増加し
三十一—五十分位とし、一日二回(午前一回、午後一回)宛行ふがよい。

練習は平坦地或は緩斜地に於て行はれるものなれば、主に三段、二段或は躍進、滑走等に就いてゝあるが、特に平坦地であると云ふて特殊の滑走法にのみ偏る事は避くべき事である。その日その日の雪質又は塗蠟法等に依つて、それに最も適する如き滑走法を行ふがよい。吾が國の如く南北土地の異なるにつれ雪質、地形の著しく異なる所に於ては、特に偏つた滑走法をのみ習得すると云ふ事は往々不利なる結果を來すものである。

スキー滑走に於ては地形、雪質或は塗蠟の如何にも依るが、滑走スピードの大半は脚力に依つて得る場合の方が多い。日常脚力に依つてのみ歩行をして居る吾々にとつては、スキー滑走も又その滑走スピードの大半を脚力に依つて得なければならぬ。勿論滑走スピードは腕力(ストツクの力)に依り増加せられる事の大なるは言を待たぬ所である。然しストツクに依り滑走スピードが増加せられる事大なりとは云へ、十數軒或は數十軒の長距離に亘つて、常に出發當時の如き腕力を要求する事は出来ぬ(勿論脚力に於てもそうではあるが)。故に平常よりストツクに依つてスピードを増加するに必要な腕及肩の力を養成する様に努むるは必要なる事であるが、スキー滑走法に在つてはむしろ脚力に依つて滑走し、ストツクによる力

はそれを補助し、そのスピードを増加せしむる様に練習を行ふ方が必要である。

普通は特殊なる地形又は雪質でない限りは、脚筋肉が充分滑走に必要な耐久力を有する時は、多少腕及肩の疲勞したる場合でも尙充分滑走を繼續する事が出来る。然し脚筋肉が多少滑走繼續力を消失したる場合は、容易に腕及肩の力のみによつて従前のスピードを繼續して行く事は不可能となるのである。

具體的に言へば、全距離をある時間にて滑走するに要するスピードの略々七割内外を脚力により、他の三割内外は腕及肩の力により得る様にするのである。従て脚力に依り生ずるスピードが同じ場合には、ストックの力により生ずるスピードの大なる者、即ち肩及腕の力の大なるもの（勿論ストックを使用する者の技術の如何にも關係するが）の方がより大なる滑走スピードを生ずる事になる。故に脚力を基本としてスピードを得る滑走法を練習すると共に、肩及腕の力によりスピードを増加せしむる事を練習しなければならぬ。

かくして練習は競技會に到るまで繼續されるが、この練習も亦單獨よりは數人或は選手一同が相合して、その日その日に對する塗蠟法、滑走法等につき互に研究し、矯正し、各自の實力を助長し合ふ様になさるべきである。然し多數選手が相合して練習を開始する時は、所謂競争心の發露せる結果が知らず知らずの内に競走の如くなるが、唯此の競走のみに依つて練習を終へる事は考へものである。勿論各選手は競技會の競走なるものを目的として、自己又はチーム相互の實力を昂むべく練習をなして居るのであるから、この競争精神を涵養する事は絶対必要な事ではあるが、練習中常に此の闘争心の涵養にのみ終始する事は避くべき事である。

かくして一致協力して練習を續ける事二三週にして、可成の距離の滑走に耐え得るだけの力を具有するに到るのである。此の間練習は繼續されるものではあるが、練習と共に又適度の休養と云ふ事は必要欠くべからざる事である。休養と云つても全然練習の休止を意味するものではない、コンディションを省みて、練習の結果過勞に陥らざる様に、その日その日に行ひたる練習に依る身體の疲勞を全く癒して、次の練習に支障なき様に身心に休養を與へるものにして、それには練習の量を

適當に加減し、後日の練習に影響を及ぼさざる程度のものたらしめればよい。即ち猛烈なる練習の後には輕き散策か、又は疲勞快復に影響を及ぼさざる程度の滑走に止める如きである。勿論冬期二―三週中には天候不良その他充分に練習を行ひ得ざる日があるものなれば、選手はその時々に応じて適宜の練習をなし、又一方身心に休養を興へて過勞に陥らざる様に注意して行く事が必要である。

此の二―三週に亘る練習が十二月當初より行ひ得られたとしても、尙一月中旬に行はれる競技會迄には約三週間の練習期間を持つ事が出来る。この期間は積雪も先づ相當豊富となり、登降コースに於ける練習も可能となる。此の三週間足らずの練習に全力を擧げて競技に對する全てのものを完備せしむる様に努めるのである。

この競技前の約三週間内外は選手にとつて最も重要な時期にして、技術、耐久力等の完備と共に、競技に最も重要な身體のコンディション、その他の必要條件を最高のものたらしめなければならぬ。此の間練習と共に絶えずその日その日の天候に依る氣温の變化、雪質の變化に注意し、それに伴ふワツクスの研究、又競走要領の會得に努めなければならぬ。又選手一同は益々協力一致し、各自の目的とするレースの練習に全力を盡さなければならぬ。又時々相當距離を全力を以て滑走し、各自の實力と云ふものも略々知つて置かなければならぬ。それに依つて又競技會に對する作戰も考慮されるのである。(殊に團體の對抗競技に在つて必要な事である) かくして競技會數日前に到らば、各選手はその練習量を輕減し、身心には充分の休養を興へ、又雪質、ワツクス、スキーの様式(競走に使用せられるコースに應じて)に就ても充分の考慮を拂ひ、競技會當日の來るを待てばよい。特にワツクスは最近塗布后使用までに數日を要するものもあれば、スキーの準備又はワツクスの撰擇については充分の考慮を拂はなければならぬ。

かくて目的の競技會當日には(一兩日前より睡眠は必ず充分にとる事)各自の有する實力に充分の自信を持つて、出場せるレースに全力を盡すべきである。出場前の飲食物の攝取は十分にすること、又その當日の雪質に最適の塗蠟をした事に自信を持つ事、即ち自己の塗蠟に對して不安を抱くが如きは禁すべきである(勿論塗蠟には多數一致して全力を盡す事)。而

し如何なる場合でも気温の上昇せる場合の準備として、自ら必ず豫備のワックスを携帯する事を忘れてはならぬ。

一旦スタートを切りし上は、只全速力を以つてゴールに向つて滑走を続ける事、その間分秒の餘裕も存しないのである。何れのレースに於ても、中途若し後走者に迫らしたるが如き場合に、戦闘意識を弛緩せしめ、調子を亂すが如き事は絶対禁すべき事で、おもむろにその挽回に努力すべきである。

競技は選手にとり實に尊き體驗となるべきものである。例へ不幸にして失敗するとも、自己のその原因を省みて更に來るべき競技のため、一層筋力の養成に努めなければならぬのである。

最後に再び練習日記より、この一、二シーズンに行つた正式練習に就ての一部を書き連ねて見よう。

1929年

(2月2日3日高田ニ於テ全日本スキー選手
権大會後ノモノカラ記ス)

2 月

- 7日 圓山—薬岩山—十二軒澤—奥三角—圓山
8日 圓山—瀧ノ澤—十二軒澤ノ尾根傳ヒノ滑走
9日 パラダイスイスヒュツテニ登ル(手稻登山吹雪ノタメ中途ヨリ下ル)
10日 手稻山下降レース出場タイム(19分45秒)途中ニテ左膝關節ヲ坐ス
11日 16日休養
17日 校内大會、スキーニテ三角山ニ行

ツ歩行困難

- 18日—19日休養
20日 平地滑走(16分)
21日 平地滑走(圓山—翠似間)
22日 神社附近ノ散歩
23日 圓山南麓方面ニ散歩
24日 平地滑走(二段滑走20分)
25日 平地滑走(4km)
26日 平地滑走(二段滑走40分)
27日 平地滑走(二段滑走40分)ステツ
プマーンノ練習
28日 圓山附近ノ散歩

3 月

- 1日 圓山—神社山—小別澤
2日 圓山—神社山—小別澤(膝關節痛)

△)

- 3日 圓山附近散歩
4日 二段滑走(40分)
5日 平地滑走(圓山翠似間)
6日—7日ハ休養
8日 圓山登山
9日 圓山—小別澤—三角山—圓山
10日 小別澤ニ到ル北海タイムス社ノ競技會見物
11日 平地滑走(50分)
12日 平地滑走(三段滑走40分)
13日—14日ハ休養
15日 圓山—小別澤
16日 同上
17日 砥石山登山(出發午前9時—登頂)

11時—歸宅午後5時半)

- 18日 空沼小屋行き
19日 同下山雨降り天候悪シ
21日 春季合宿開始、パラダイスヒュツ
テニ登ル
22日 ヒュツテノ掃除、附近ノ散歩
23日 迷澤山登山
24日 雨、シヤンツエ建設、午後附近テ
一般スキー
25日 午前中コースヲ作ツテランニング
ラフ練習
26日 シュブルンク練習
27日 午前シュブルンク練習、午後下山

4 月

- 6日 空沼小屋行(豊平驛午後1時—小
屋着午後9時15分)
7日 空沼岳、空沼峠登山(出發午前10
時45分—空沼着午後12時05分、小
屋着午後4時15分)
8日 札幌岳ヲ經テ薄別温泉ニ到ル(出
發午前9時20分—札幌岳頂上午後
12時35分—温泉着午後4時半)
9日 中山峠ヲ經テ中山ヒュツテニ到ル
(出發午前8時10分、中山峠着午後1

時半—ヒュツテ着午後2時10分)

- 10日 喜茂別岳、竝川岳ニ登リ白水澤ヲ
經テ定山溪ニ下ル(出發午前9時
30分—喜茂別岳午後1時25分—並
川岳午後2時04分—定山溪午後6時45
分)
14日 パラダイスヒュツテニ登ル、夕刻
下ル
15日 パラダイスヒュツテニ登ル、
19日 シュブルンクノ練習ニ一日ヲ費ス
17日 下山
18日 輕川ヨリパラダイスヒミツテヲ經
テヘルマチアヒュツテニ到ル
19日 朝里岳、余市岳登山(出發午前9時
—淺里岳午前11時45分—余市岳午
後1時25分—ヒュツテ歸着午後3時
45分)
20日 奥手稻山パラダイスヒュツテヲ經
テ輕川ニ下ル
28日 空沼小屋行(豊平驛午前8時—小
屋着午後4時半)
29日 空沼岳漁岳ニ登山(出發午前11時
—空沼峠午後12時25分—漁岳午後
1時55分—小屋着午後4時08分)

30日 長沼、簾舞峠ヲ經テ簾舞ニ下ル

5 月

- 12日 三段山、烏帽子岳ニ登山(出發午
前6時20分—三段山午後12時30分
—烏帽子岳午後1時50分—歸宅午
後7時)

11 月

- 23日 クロスカントリー(4km)
24日 朝、平地滑走
午後、三角山ニ行ク
25日 午後平地滑走(4km)
26日 朝、平地滑走(2km9分20秒)
午後、同上(4km17分45秒)
27日 午後平地滑走(4km20分05秒)降雨
28日 午後平地滑走(4km)17分45秒)コ
ンテイション良好
29日 朝 平地滑走(25km2時間41分05
秒) 午後(4km17分40秒)
30日 朝 平地滑走(2km11分05秒)降雨

12 月

- 1日—3日ハ休養
4日 午後平地滑走(4km)
5日—8日ハ休養
9日 午後平地滑走(4km) コンテイシ

- ヨン不良背ガ痛△
- 10日 午後平地滑走 (4km)
- 11日 午後平地滑走 (4km) 背ノ痛ミヨ
クナル
- 12日—13日降雨ニヨリ溶雪休養
- 15日 小別澤マテランニング
- 16日 休養
- 21日 圓山グラウンドニテ輕キ練習
- 22日 青山温泉ノ舍宿ニ参加
- 23日 一般スキー平地滑走練習
- 24日 午前シュプルング練習
午後ランクラウフ練習
- 25日 午前シュプルング練習
午後ランクラウフ練習
- 26日 午前シュブング練習
午後ハ藻岩登山
- 27日 岩雄岳登山 (出發午前9時10分—
ニモコ温泉午前10時45分—岩雄岳
午後12時20分—歸宿午後2時)
- 28日 午前シュプルング練習
午後ランクラウフ練習
- 29日 合宿終了歸札
- 30日 圓山—三角山
午後平地滑走 (4km)

1930年

1 月

- 2日 午前平地滑走
午後、幌見峠—十二軒澤—三角山
- 3日 平地滑走 (4km8分25秒) 滑降中轉
倒腰ヲ痛△、歩行不自由
- 4日 休養
- 5日 同
- 6日 シュプルング見物
- 7日 午前平地滑走
午後合宿 (圓山)(ランクラウフ10
km)
腰ノ痛ミ甚ダシク滑走困難ナリ
- 8日 午前 圓山—神社山—盤溪峠—小
別澤—大曲—盤溪小學校—幌見峠
—圓山合宿 身體ノコンテイシヨ
ン頗ル悪ルク悲觀スル
午後 平地滑走
- 9日 ランクラウフ約24km (2時23分50
秒)
軀體ノコンテイシヨン稍々良好
- 10日 ランクラウ 約20km コンテイシヨ
ン次第ニ良好

- 11日 同上 (約12km)
- 12日 シュプルング見物、午後ランクラ
ウフ練習
- 13日 40kmコース調査ニ行ク
- 14日 藻岩山圓山南方コース調査ニ行ク
- 15日 休養
- 16日 ランクラウフ練習 8km
- 17日 約4kmノ練習
- 18日 インターカレーヲ40kmレース出場
(食物ノ不充分ナルタメ失敗)
- 19日 32kmリレー 出場
(ドウ考ヘテモ敗ケル試合テハナ
カツタ残念ガ致シ方ナヒ、唯榮
譽アル歴史ヲ作りシ先輩諸兄ノ努
力ニ對シ申シ分ケナシ、在學1年
必ズ復仇スル事ヲ望ムノミ 省畧)
- 20日 合宿—十二軒澤—幌見峠—圓山—
合宿、ランクラウフ練習
- 21日 午前ランクラウフ練習 (約20km2
時間30分)
午後 同上 (14km1時間30分)
- 22日 午前ランクラウフ練習 (約10km)
午後 同上 (8km)
- 23日 午前ランクラウフ練習 (約8km)

- 午後コース調査
- 24日 午後軽キ練習
- 25日 全道大會
50kmレースニ出場 (4時間26分18秒)
- 26日 32kmリレー出場
- 27日 大鰐ニ出發ス 同28日夕刻大鰐着
- 29日 コース調査
- 30日 コース調査ヲ兼ネテ輕キ練習
- 31日 同上

2 月

- 1日 全日本スキー大會
50km出場 (3時間49分40秒)
(之テ目的トシテ居タ今シーズンノ競技會モ先ヅ終ツタ事ニナル、更ニ來ルベキシーズンノタメ練習ニ取掛ルコトニシヨウ)
- 3日 洞爺湖畔ノスキー場調査
- 4日 同上
- 5日 圓山登山
- 6日 バラダイスヒュツテニ行ク大曲ヲテ輕川ニ下ル
- 9日 札幌中等學校スキー大會見物
- 10日 ランクラウフ練習 (10km)

- 11日 宮様アースキー大會
18kmレース出場 (1時間32分1秒)
(風邪ノタメ成績思ハシカラズ)
- 15日 圓山登山
- 16日 宮様アースキー第二日目
風邪ノタメ出場セズ應援ニ行ク
- 20日 圓山附近散歩
- 22日 レースコース調査ニ行ク
- 23日 學内大會
- 24日 圓山附近散歩
- 25日 同上
- 26日 ランクラウフ練習(圓山—三角山)

3 月

- 1日 午後平地滑走
- 2日 平地滑走 (圓山—琴似)
- 6日 ランクラウフ練習 (10km)
- 9日 手稻山登山(但木村氏搜索ノタメ)
- 10日 手稻山登山 (同上) 吹雪トナル
- 11日 手稻山登山 (同上)
以下四月下旬マテ内地旅行ノタメ練習中止ノ止ムナキニ到ル

4 月

- 20日 ヘルベチヤヒュツテ行キ (輕川バラダイスヒュツテヲ經テ) 南風烈

シ

- 21日 風邪ノタメ夕方マテ静養、夕方スキーニテ散歩ニ出ル
- 22日 白井岳中途マテ到ル
- 23日 奥手稻山バラダイスヒュツテヲ經テ輕川ニ下ル 以上

1 1 月

- 13日 約2cmノ降雪アリ、平地滑走ヲ行フ
- 16日 約12cmノ降雪、平地滑走(約3km)
- 17日 平地滑走 (約5km)
- 18日 午前平地滑走 (約3km)
午後三角山ニ行ク
- 19日 午後平地滑走 (約4km)
- 20日 午前平地滑走 (km)
- 21日 地上ニ於ケル練習
- 22日 同上
- 23日—26日 休養
- 28日 午後平地滑走
- 29日 午後平地滑走 (約3.5km)
- 30日 平地滑走 (約10分間)

1 2 月

- 1日 降雪約30cm、三角山ニ行ク
- 2日 午前緩斜コース約3km
午後同上約4km

3日 朝 緩斜地ニ於ケル滑走法研究
午後 平地滑走(4km)

4日 朝 緩斜コース約4km
午後 同上約5km

5日 朝 緩斜コース約6km
午後 同上約8km

6日 朝 緩斜コース約4km
午後 圓山—圓山南麓—幌見峠—
盤溪峠— α シヤンツエ—圓山 コン
テイション次第ニ良好ニナル登リ
三段滑走ノ尙研究ノ餘地アリ、登
高ニハ可及的歩數ヲ多クスル方ガ
有効ト思ハレタ

7日 朝 圓山—幌見峠—k—大曲—小
澤別—圓山
午後 シュブルンク見物ニ行ク

8日 朝 緩斜コース8km
午後 同上(緩傾斜ノ登リ調子頗
ル良シ)

9日 午後 緩斜コース 約5k (Knupper
ト云フWachsヲ使用結果良好)

10日 午前 緩斜コース5km
午後 緩斜コース8km (凍雪ニシ
テKrister頗ル有効本シーズン始メ
テノ快心ノスピードヲ得

11日 朝 緩斜コース8km
12日 朝 平地滑走(約2km睡眠不足ニ
ヨリ午後ハ休養)

13日 砂川ニスキーコースニ行ク

14日 同上コースヲ終エ歸札

15日—21日 風邪ニ付休養

22日 青山温泉ノ合宿ニ参加

23日 午前—一般スキー練習
午後ラングラウフ練習(疲勞甚ダ
シ)

24日 午前—一般スキー
午後 輕キ練習

25日 風邪ニ付休養

26日 藻岩山中腹マテ登ル

27日 ニスモコノ中腹マテ登ル

28日 午後練習ニ出ルコンテイション頗
ル悪ルシ

29日 合宿解散歸札

30日 午前練習ニ出ル(緩斜コース3km)

31日 午前 緩斜コース4約kmコンテイ
ション次第ニヨクナル

1931年

1 月

2日 インターカレーニ参加ノタメ札幌
ヲ出發途中洞爺ニテスキー講習ノ
タメ下車

3日 同上スキー講習指導

4日 同上 夜選手一同ト函館ニテ會シ
飯山ニ向フ

5日 晩飯山着

6日 午後コース調査ニ出ルモ積雪極少

7日 午後コース調査ヲ兼ネテ練習ニ出
ル

8日—10日 風邪ノタメ休養

11日 滑降レースニ参加(約4km10分13
秒)

12日 40km コース實地踏査ニ出ル、歸
リテ發熱休養

13日 休養

14日 午前中休養
午後カラコース調査(雪質、氣温
ニ大ナル變化ナキ限り競技會當日
使用ノWachsハ畧々定ツタ、又身
體ノ氣分モ緊張セル故カ大部ヨク
ナル)

15日 一日コース調査(特ニ降りコース
ニ馴レル)

- 16日 午前中シユプルンカ見物、午後カラ又降りコースチー巡スル
- 17日 インターカレーチ第一日目
40kmレース出場(3時間51分16秒)
十二月下旬ヨリ又最近ニ至ツテノ身體ノコンテイションハ極メテ悪ルク残念ナカラ20km以後ハ滑走能力ヲ完ク消失シテカロウジテゴールニ辿リ得ルニ過ナカツタ
- 18日 同第二日目
選手一同ノ努力モ甲斐ナク再ビ敗殘ノ憂目ヲ見タルハ大方ノ思ハザル病氣ソノ他ノ障害ニヨル悪コンテイションニ依ルトハ云ヘ唯々遺憾ノ極ミ
夜札幌ニ向フ
- 21日 朝札幌着
- 22日—23日 風邪ニテ休養
- 24日 北海道豫選、應援ニ出ル
- 25日 32kmリレー出場、練習不足ニ依ル影響頗ル大ナリ
- 26日 午後ランクラフ練習約10km
- 27日 午前 同上約6km
午後 同上約6km
- 28日 午前ランクラフ練習約12km
午後 樺太ニ向フ

- 30日 朝豊原着
午後 シヤンツエ見物ニ出ル
- 31日 午後コース調査ニ行ク(雪量極少又質モ悪ルク氣温著シク低カラザルモWachsノ効果殆ド無キカ如ク感ゼラレタ)
- ## 2 月
- 1日 コース調査ヲ兼ネテ練習ニ出ル(約10km)
- 2日 一日コース調査ヲ兼ネテ練習(約18km)
- 3日 一日コース調査(旭峠、旭ヶ岡方面ニ行ク)
- 4日 シユプルンカ見物
- 5日—6日 休養
- 7日 全日本スキー大會50km出場
思ヘバ風邪ソノ他ニヨル休養ノミ徒ラニ多ク練習日數ノ少キ事ト惡コンテイション及ワツクスノ失敗等ノタメ滑走能力ハ殆ド失ハレテ居タノダツタ、只徒ラニ辛キ經驗チーツ加ヘタニ過ギナカツタ
- 8日 32kmリレーニ出場
同晩直チニ大泊ニ向フ
- 9日 大泊ニテシユプルンカ見物

- 11日 朝札幌着午後カラ小別澤方面ニ散歩
- 12日 三角山附近ニコース調査ニ行ク
- 13日 山ノ家行キ(輕川發午前12時—パラダイスヒュツテ午後1時30分—山ノ家着(午4時45分))
- 14日 迷澤山方面ニ行ク、パラダイスヒュツテニテ晝食、大曲ヲ經テ輕川ニ到ル
- 15日 學内大會(於三角山)
- 16日—18日 風邪休養
- 19日 輕キ練習
- 20日 約12kmノランクラウフ練習
- 21日 宮様テ—見物
- 22日 風邪休養
- 23日 同上
- 24日 同上
- 25日—26日 風邪休養
- 27日—一般スキー練習
- 28日 同上
- ## 3 月
- 1日 宮様テ—40km出場(練習不足ニテ失敗)
- 2日 一般スキー
- 3日 ランクラウフ練習(約18km)

4日 同上(約15km)
平地滑走(4km16分15秒)

5日 ランクララフ練習(8km)

6日 午前ランクララフ練習(4km)
午後同上12km 雪質甚ダシク悪ル
クナル

7日 午後ランクララフ練習(10km)

8日 ランクララフ練習(12km)

9日 同上(8km)
三角山登山(αシャントエ)ヨリ15分

10日 ランクララフ練習(8km)

11日 三角山登山

12日 ランクララフ練習(8km)

13日 休養

14日 約8kmノ輕キ練習(調子悪ルシ)

15日 三段山登山(圓山發出前10時—三
段山頂着午後12時45分—圓山歸着
午後3時15分)

16日 小椽—札幌間スキー滑走(小椽中
學校裏山發午後2時50分—圓山神社
鳥井前着午後5時52分—3時間02分)
二週間ノ練習ニ依ツテ體ノ調子漸ク
30km以上ノ距離ヲ滑走シ得ル様ニ
ナツタ、午後4時頃マデハ氣温高ク
スキーハ約2寸近クモ埋ツテ相當苦
シカツタ、3時間以内ニテ滑走スル
豫定ナリシモ初メノ約1時間余ト又

途中二、三ヶ所スキーナ脱イタ所等
カアツテ相當時間ノ損失ナシタ、若
シ雪質真好ニシテコンデアイシヨン又
ヨキ時ハ樂ニ2時間40—50分ニテ滑
走シ得ル事ト思フ

17日 三角山ニ行ク(散歩)

18日 パラダイスヒュツテニ行ク、歸リ
ハ宮様テ—ノ40kmニ使用サレタ
ルコースニ依ツテ圓山ニ出ル

19日—25日休養(歸着)

26日 ランクララフ練習約8km

27日 同上約4kmノ輕キ練習

28日 十勝岳ニ登ルベク朝ノ汽車ニテ札
幌ヲ出發、上富良野ニ向フ
午後2時上富良野出發同7時分温
泉着(スキーニテ)

29日 吹雪噴火孔マテ登山、午後ハ三段
方面ニ登ル

30日 今日モ又噴火孔ヨリ上ニ行ク、又
泥流跡ヲ遊ブ、

31日 十勝岳登山(温泉前8時—前十勝
岳前10時—噴火口附近ニテ遊ビ晝
食—十勝岳午後12時50分—温泉歸着
後3時

4 月

1日 午前8時30分温泉發上富良野驛ニ

向フ(前11時着)前11時15分ノ汽
車ニテ札幌ニ向フ

2日 休養

3日 圓山登山

4日 休養

5日 休養

6日—8日休養

9日 パラダイスヒュツテニ登ル、久シ
振リニヒュツテ夜ノ氣分ヲ味フ

10日 午前10時ユートピアニ向ツテ出發
南風猛烈971kmニテ晝食小憩ノ後
引返ス

11日 風邪氣味ニテ一日靜養

12日 快晴手稻登山

13日 迷澤山ニ登山、前11時出發—97/m
正午ユートピアヲ經テ迷澤山ニ向
フ—迷澤山午後2時30分晝食小憩ノ
後3時出發ヒュツテニ向フヒュツ
テ歸着午後3時40分、凍雪ハ心地
ヨキスピードヲ與ヘタ)

14日 シュブルンク練習

15日 シュブルンク練習及見物一週間ノ
ヒュツテンレーベンヲ終ヘテ夕刻
輕川ニ下ル
以下旅行練習休止

5 月

3日 無意根山登山

定山溪天狗嶽よりパラダイスへ

宇都宮 嵩

三學期試験終了後、小池君と二人して定山溪天狗岳に登り、方々迷澤岳を通つてパラダイスに出た時の散文を書かしてもらおう。

三月十二日

今日定山溪から豊羽鑛山跡の發電所に來たのは四時頃だつた。その時分は小雪が降つてゐたが、發電所に着いてから約一時間もすると可なりの大雪となつた。然し明日はなに大丈夫天氣と云つた様な雲行きをして居たので案外安心してゐた。今晩は發電所の事務所に泊してもらつた。その叔母さんの親切な待遇に一日が樂な安眠と云ふものだ。

三月十三日

朝六時出發する積りだつたが、矢張り吹雪いたものだから出發が七時二十分だ。昨日の天氣豫報がやゝ的外れした。

發電所から小田川を少し上つて、天狗の脊から出る澤にたどりつき、澤を左に取つて登つたり、又澤登りをして約一時間半もたどると右の方から來る澤がある。此の澤は天狗の南から流れ出るものであるが、此れをコースとして登る。仲々急で且つ狭い澤だから、ストックで押しあげながら登つた所が數箇所ある。こゝで大分時間を取つたので澤を登り詰めた時は十時だ。之れから天狗の腹の横を左に取つて這ふ。仲々クラスト狀の斜面に苦しめられる。天狗の中間鞍部に着く百米餘下の所からスタイグアイゼンと取り替へる。スキーは向ふ側に出るのだから擔いで行く。小池君はマイゼン穿くのみが初めだと

云つて、神妙な表現と微笑との交又を漂はしてゐる。

鞍部に着いたのが十一時。まだ天氣は判明はつきりとしない。只雲間からの鋭き光線が視野の場面を變化させる。何時でもこんなときは無上の光榮だ！ 無心の場面だと微笑する。

スキーとリツクを捨て、頂上に向ふ。御互にアイゼンテクニツクの練習方々なる可く研究的態度で行く。斜面の角度に應じての足部の踏形、並に岩との積雪關係を黙視しながら進む。二三度失敗して滑り落ちた所もあつた。又馬乗りして渡つた岩もある。ザイルなしの此の様な體験は今から思ふと反つて爲めになつたと思ふ。約三十分間餘で頂上に着く。

頂上は薄ぼんやりの雲だ。豊羽發電所がやつと見へる。定山溪方面は判明しない。今から行かんとする迷澤岳、手稻山方面だけはやゝ明瞭に見える。此の頂上の南東部分で南部はロツククライミングに味ある所だらう。可なりのオーバーハンダの所も、又リツセの所もあつて相當感味を覚えさせるだらう。又何れ機會を見て決行する積りだ。

鞍部にたどり着いたのが十二時。晝食だ、一日中で最も楽しい食事。風は無し、時々日射が投來する。小池君と二人の旅だから話す範圍も狭い割合に反つて味あるしんみりしたことばかり。天氣はもう大分落ち付いた。雪崩れそんな個所も所々に見あたる。今から滑り下らうと思つた所にも一横列のリツセが見あたる。此れは案外危険率が少いと思つてゐるので、之れから先きは面白いスキー術が出来る様に考へられる。

約三十分間ばかり休んで出發。天狗の東傾面を下ることになつたが可なり急斜面だ。急斜面に對する廻轉も可なり速かにやらないととんだ失敗をするが、その覺悟で滑り出した所が、表雪が滑り出したので變動を生じて轉り滑る。甚だ薄い表雪崩れでよかつた。粉雪表崩れの一種だつた。

これから先きは思ひ切つたスウングが出来て面白かつた。小池君は仲々秒味な所を示してゐた。百米餘下つてこんどは天狗岳を左に取つて滑澤の方に出るまで這ふ。雪質は申し分ない上等だ。深さ三寸位の粉雪。

滑澤の發端まで来てこれから滑澤を下つて小樽内川に出る。その間の面白味は格別だつた。思つたより廣い澤に出たので

時間もかゝらない。小樽内川に出たのが一時十分。

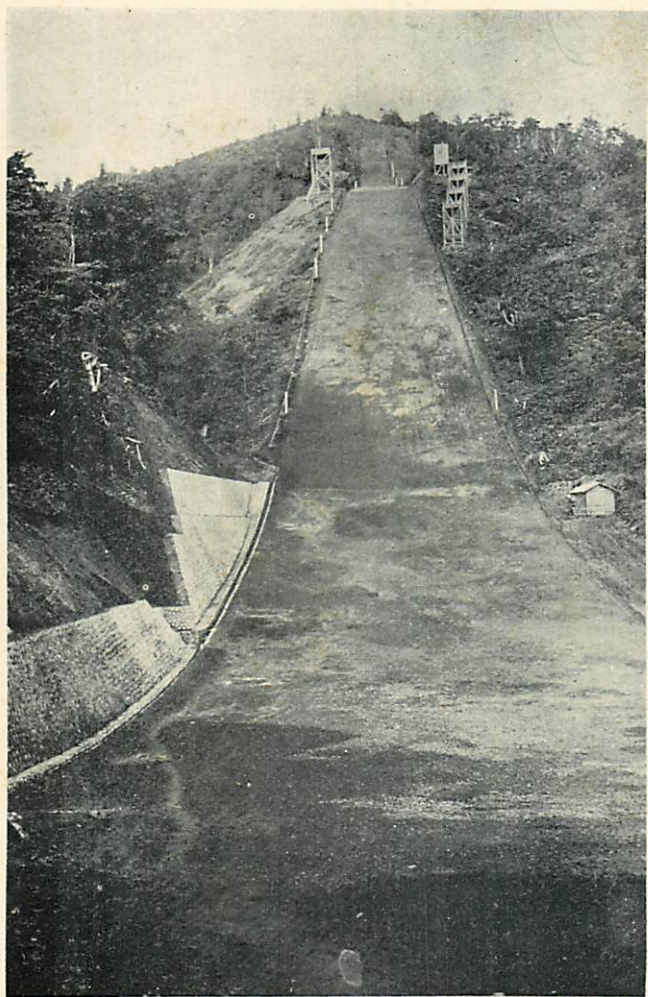
此處で陽氣な天氣を相手に遊ぶこと三十分ばかり。大分テントワックスが取れたので塗り付ける。アザラン代用にテントを使用した。今日は具合よく成功した。此れは塗つてから長時間経たのちが効能があるのだが、此の様に咄差の場合であるとそれも出来ない。

一時半に出發して今度は迷澤を登る。此の澤は樂な澤だ。三十分ばかりして左から來る尾根に取り付く。此の尾根は非常な緩斜面で且つ廣く登高には樂な所だつた。二時間餘の登りも一寸の様な氣がした。迷澤頂上に着いたのが三時十分だ。此處に來た時は風も強くなり寒さが甚しい。札幌から持つて來た餓頭を雪庇の陰で最大の味を以つて食す。十分間ばかりたつてすぐに出發する。此れから此の尾根傳ひにユートピア方面に向ふ。可なり急いだ。雪が良いのだから滑走も早い。夕日に早やタンネの梢が照り輝く。スプールは二本明瞭に残つて行く。兎の姿も時々樹間に見うける。

思ひ切つて歩み續けた効あつて満足しきれない程のスキーが出來た。

九七一米の所に來たのが四時半だ。手稻の岩が判然と面前に聳えてゐる。日本海はかすかに見える。増毛地方の山々がうすぼんやり輝いてゐる。

之れからバラダイス小屋までは又滑り下る一方、どんどん滑る、轉ぶ。小屋に五時に着いた。やつぱりバラダイス小屋はなつかしい。あの小屋の外観と内部とは格段の相異した感に打たれるにしても、やつぱり一休するには万事が樂しみを覺ゆ。世の風評は様々なれど、スキーマンが本當に雪を愛し、山を愛し、又は愛さないにしても、單にグレンデをスキーの利用の爲めにする人にせよ、社會的位置に建立されてゐるこの小屋は何んと云つても有難いものだ。現在社會的に一番利用者が多く、又あれがなかつたらどれだけ短時間の餘暇しか有せないスキー愛好者には打撃を被るか知れない。現在は内部の設備が多少不完全な所があると雖も、本州、九州地方にあれだけの立派な小屋が存在しないのを見るとたのもししい。又今度學校から修業があるそうだから、その際には内外共に備つたものが出来るか知れない。んと云つても小屋としては最も先遣で



今秋竣工せる大倉山大シャントエ

つて、幾多なエピソードも醸してゐるのだから、パラダイス小屋の永續は必要であつて、社會的存在の充分價値あるものだ。何々これ以上云ふ必要もあるまい。

小屋に着いた所、スキー部の競技班が合宿してゐたので都合よく充分慰安が取れた。然し雜然たる室の不整頓には憤慨せずには居られなかつた。只小屋番の爺さんが皆んなよくやつて行かれるのには感心した。

五時四十分に輕川驛に下る。大分暗い。今日麓の方は暖かつたそうで、それが爲め現在では凍結した雪面となつてスキーが馬鹿に滑る。途中でとうとう膝をいためた。之れで今シーズン膝を四度いためることになる。この時は泣きたくなる位いたかつた。その爲め小池君には氣の毒だつたが汽車におくられて、札幌に歸つたのは八時だ。これも輕視の爲めの失敗だ。

充分に此の一日は春山の味が楽しまれた。小池君も満足してゐて、内地旅行に行くが心残りはないと云つてゐたので自分も嬉しかつた。只最後のコースで自分のぶまがどれだけ彼をいためたかが残念でたまらない。

冬の北見屏風

鈴木重雄

部報にはもつと詳しく書く積りでしたが、多忙に取まされ不本意ながら雑誌「山と雪」に発表した儘をのせる事にしました。

二月月の間國家試験とか云ふ名の下に脂を搾られた頭にも、山の姿は消えかゝる處か尙一層と明きりとなつて来る。丁度酒精中毒患者が眞白な壁に一寸した班點を大きな、とてつもない怪物と見える様に、試験と云ふ物が濟んだら山に行くぞと獨言しては、何處に仕様かと直ぐに次の問題に移り、次から次へと山の中の生活、タンネンの中に記されたシューブルの陽に映えて美しく見へる景色等目にちらつく。

餘り人の行かない山に行きたい。此は誰しも山に興味を持つ人の一つの共通な特性でもあらう。山の中の本當に靜かな氣分に浸りたいから。

北見の屏風岳は如何か、未だ恐らく冬には成功して居ない筈だ。學生生活の名残りだ。成功する迄登るぞ。と、なんだかどうしても行きたくなつて、地圖を求めて机の前にはつて始めて試験の方もゆつくりと落ち付いて受けられた。熱に取付かれてどうにもならなくなつた状態によく似て居る。登山も一つの病氣に入れた方が取扱易いかも知れない。

宿泊場の事を早速村役場に紹介した。所が宿屋は勿論なし、造材小屋もない。區長さんからの葉書で、自分の家でよければ喜んで宿めるとの事だ。併し上支湧別村に泊つては屏風岳に遠い。更に地圖に二股と書いてある近所に農家はないかと區長さんに問合せた。直ぐに返事があり、武田傳吉氏宅に泊る様にと云ふ事だ。宿泊場も定つたし、天氣さへ當れば成功疑

ひなしだ。

三月二十四日（火） 小雪

札幌發午前六時五十九分、中越着午後二時四十分。一行ノ宇都宮高、三浦義明、鈴木重雄

北見國と石狩國との國境に立てられてある峠の驛遞と云へば、冬には道もなければ人も通らない様に一寸考へられるが、昔は左様だつたらうが、今は石北線のトンネル工事で澤山人も入つて居るだらうし、馬橿も入つて居る事だらう。春の馬糞で高くなつた道を何時間か過さねばならぬ事を覺悟しては居たが、意外にも札幌にしては丁度二月頃の雪だ。スキーでなければ時間的に不經濟だ。先づ此處で非常に惠まれた様な氣持で朗かな氣分になる。馴れない肩に重いリュックは徹へる。一時間歩いては休み、汗を出しては又休む。肩がほつとするがリュックを上げるのに又一骨折だ、やつと持上げる位の重さだもの。

馬橿道に別れる所に漸く五時に辿り着いた。電燈線と電話線が雪に埋れて頭に届く位だ。鐵道建設のために付けたのだ相だ。山の風致を害する事將に百パーセントではある。一面のクンネンの間に少し切れた眞白な所がきつと夏道でもあらう。ずつと四本の線がつながつて居る。處々にクンネンの少い、少しもブツシュのない、外に何も障礙物のない大ゲレンデが轉つて居る。遙山を思はせる様なゲレンデ、ユートピアを思はせるゲレンデ、色々様々である。歸りには充分に享樂出来る事を樂しみに、一尺餘りの雪を一步から一步と踏みしめながらスピードを出すべく努力はするが、段々とビツチは遅くなる。進むに従つて滑りたいスロープは増す許りだ。幾つかの谷を渡り、急に開けた所に雪にすつかり埋められた眞白な屋根を見付けたのがもう六時少し前だつた。

番人が心から燃して呉れるストープでのびた。雪は相變らず未だ降つて居る。番人に天狗岳の様子を聞いても知らない。答は唯チトカニウツ山には時々スキー登山するが、天狗岳のスキー登山はないと云ふだけだ。宿帳には色々な名前が並べてある。殊に所々に知つた名も見える。なんとなく懐しいものだ。明日の天氣な事を祈りながら床に着いたのが九時だつた。

三月二十五日 (水) 雪後晴

六時に起されたが未だぬむい。而も雪は未だ降つて居る。もう昨日から降通しだから一尺餘もある。荷物は重いし、天狗岳を超えて上支湧別に下るのだ、困難ではないかと氣つかつて見たが、風は幸に少しもない。一時中止説も出たが、兎に角行ける所迄行く事にして七時に出發した。直ぐに尾根に取付いて、廣い殆んど傾斜の分らない位の尾根を、肩に食ひ込んだリュックを小言云ひながら進むが、雪は深いし仲々はかどらない。未だ降つて居る。而し綺麗なタンネンと、所々に白樺を混へた林の中を歩くのどもの満更ではない。雪も切れて來た。小降になつて來た。午後から晴れだと急に元氣になつて來る。併し十五分位のラツセルでもう參る。凡そ一時間半も歩くと定つた様に休憩だ。豫定の時間の倍はかゝる筈だ。

一〇三八に着く頃から時々太陽が顔を見せるが又直ぐに曇つて了ふ。何處迄行つてもだら／＼の登り下りで、所々に瘡がある。全く尾根歩きも雪の深い時はいやな事の一つだ。折角晴れかけて來た空からは又降つて來た。もう今日は一日こんな天氣だらう。吹雪がなければ上々だ。少し傾斜が増して來た。少し登り甲斐が出て來た。一寸手稻の小屋から頂上に登る所のだがブツシユはない、もつと綺麗な壯麗な森林だ。一二六七の直ぐ下で晝食とした。十一時だつた。此の近所の森林は物凄、少しも人の手の入らない自然其儘の純林だもの。宇都宮の喜ぶ事喜ぶ事、此んな所にもつと早く來て居たら俺の論文も少し違つて居たと云ふが、全く變へるとは云はない。森林美學に知識のない僕でさへも唯無性に綺麗だ、美しいと云ふだけは分る。此んな所をたとへ此處に來なくとも見せてやりたい。寫真では此の感じは恐らく出まい。唯わけなく綺麗だ、うつとりする。

雪は段々ひどくなつて來る。風も出て來た。而し木は少し小くなつて來た。白樺も少し増して來た。間もなく頂上だらう。白樺の美しい林の中を幾つかのヂツクザツクを切つて漸く小さな白樺許りの所に出た。風は強く當る。雪は飛ぶ。かなりひどい。前は少しも見えなくなつて來る。眼鏡は氷り付いて來る。近眼の悲哀である。暫くの間の我慢で何時の間にか平らな岡の様な所に着いた。マグネットを南に取つて一寸一六三五の三角塔に着いた。一時二十五分だ。一六〇〇米もあるのに何

の危険もなしにスキー登山が易々と出来る森なるかなである。吹雪にガスで何處も見えない。高低さへも分らない。スキーが滑る方が低いのだらう。再びマグネットを東に取つて降るが少しも前は分らない。唯頼みとするのは磁石一つ。

天狗岳と續く尾根は吹さらされてカチカチだ。全くあぶない。漸くにして天狗岳との鞍部に出る。ガスが晴れて来た。所々に青空さへも見えて来た。天狗の岩がヌツ目の前に出て来た。三人共喜びながら自信のない寫眞を取る。宇都宮はパテを出して手ごたへがあつたと一人ではしやいで居る。雲足の早い事すばらしい。きつとからりと晴れる、もう少し待たう、と約三十分も待つたが仲々からりとは晴れて呉れなかつた。之から一寸のアルバイトで岩の東側に出てスキーをぬぎ、天狗岳の頂上に登つた。二時十五分。スキー登山では吾等が始めてだとか云ふ事だ。

屏風岳の頂上は密雲に包まれて姿を見せないが、下の方の尾根と云ふ尾根は猛烈に瘠て登れ相もない。而も特有な密林は丁度遠くから見るとピロードでも敷きつめた様な暖く軟い感じさへ興へる。暫し地圖とにらめつこだ。二股と地圖にある所から澤を登り尾根に出る事に評議一決。此の調子ならば一六〇〇米以上もスキーで行けるらしい。次第々々に屏風岳の上が見えては来るが頂上は仲々出ない。待ち兼ねて天狗岳から南に走つて居る尾根を降る。充分にスキー術を享樂する。凡そ百五十米も降ると一寸した瘤がある。此所迄は粗林だ。瘤の脇を等高點線に周つて東に出ると廣い尾根に出る。タンネン許りで飾られた晝尙暗い位。粉雪の一尺傾斜は二十五度前後、氣持ちよく滑るがステムクリスチャニヤも二つ三つ位しか續かない。荷物が輕ければとしみ／＼思はされる。然しブツシユはない全く好い處だ。一帯に將來のあるスキー場とならう。

何處の邊を降つて居るかは密林で皆目分らない。所々に大きな倒木がある。猛烈な風が吹くらしい。同じ様な林の中を凡そ一時間も降つたらう、少しゆるやかな所に出た。益々倒木が多くなる。一寸開けた所に出たらもうクラストだ。然し支湧別へのピークがキツ立つて見える。屏風の物凄くやせた尾根も見える。宇都宮は得意のパテーに餘念がない。

間もなくシュプールの跡が見えた。もう農家も近い事が分る。雪が少し重くなつて来る。ブツシユがひどくなる。急に開けた開墾した許りの雪の上に三尺位出た大きな木の切跡が澤山ある。所々に煙が見える。愈々上支湧別部落の上流の方に着

いた。今夜の宿とする武田氏宅に荷物を置いたのが五時だった。随分とひどいアルバイトだった。武田氏宅では喜んで吾等を迎へて呉れて、ストーヴをどん／＼と燃して熱くて困る位だった。吾等の荷物を見て皆驚く、こんな重い物でよく山を降れると。心からの食事を食べて天気を願ひながら床に着いたのが九時だった。

三月二十六日（木） 晴後小雪

目覺むれば一片の雪も見えない。天気には全く恵まれて居ると、手早く仕度をととのへて、記念に宇都宮が農家から見える屏風岳をバテエに納め、次いで農家一家の人々の寫眞を取つて七時に出發した。武田氏の子供二人、尋常小學校今年卒業と六年生が吾々について来る。三〇分許り開墾した許りの畑を通り、次いでタンネン許りの密林に入つた。密林の合間々々から澤の様子を見るのに大分苦心したが、二股に着いたのが八時だった。

一寸休んで二股から南に入つて居る澤を度々渡りながら流に沿ふて約四〇分許り溯る。早く尾根に取着かないと急で取着けぬ恐れがあるので取着いた。猛烈なブツシュ、此にシヤクナゲがある。倒木が非常に澤山で超えるのがひどい。一寸粗開した所に出た時、漸く北西に當つて一寸烏帽子の形した山が見える。一三二五だらう。子供二人を歸した。丁度十時だった。

地圖ではかなり廣い尾根が而も傾斜も緩かであるが實際では大變な遠だ。ひどく瘠せた、地圖に出て居る傾斜とは想像だに出来ない程急で、而も所々に岩があつて、すつと迂廻せねば通れない位である。地圖には東側が西側より緩やかに出て居るが全く反對で、又瘤も地圖とは全く違つて居る。地圖に出てない二〇米以上のものがかなり澤山と云つても三つ許りだがあつた。ブツシュとシヤクナゲ、此に倒木に惱まれ、時間は遠慮なく經過するがサツパリ進まない。岩に出會つては五〇米も降る事を餘儀なくされ、粗開した所から地圖に一四四四と書かれて居る武利岳の方から西に流れて居る尾根を遠くに見るにつけ、嗚呼と思つた事も一度や二度でなかつた。午後二時迄も頑張り頑張つたが一三一〇と書かれて居る所にさへ達せない。歸りにも相當時間もかゝるし、今日は到底頂上に行けないから明日又やり直す事にして引返し、明日は澤を登れるだけ登る事にした。

此の頃から段々と曇つて雪が降り出した。コツヘルを出して紅茶でも飲むべく用意した。突然人聲がしたので三人共に驚いた。武田氏の第二人と小供と三人だつた。此處で焚火し、紅茶のみ、札幌から持參のアップルパイを食つて今日の失敗を自から慰めた。明日のラツセル助けにもと直ぐに西に降つて澤を降る事に決め、降り始めたのが三時だつた。

澤に入ると雪が深くて、降にもラツセル同様で少しも滑らないが、後から行くと猛烈なスピードが出る。少し風も出て来た。明日の天氣が氣になる。然し澤はかなり長くて、明日のラツセルを思ひ、時間の食ふのも我慢して登るに都合よい様に降つた。二股迄に二時間餘も費して六時半に武田氏宅に到着した。

もう暗くなり、今日のアルバイトに疲れ切つて早速ストリーブを圍み、失敗を残念がりながら靴を取つた。武田氏は今か今かと十一時頃から一時半頃迄も屏風の頂上を眺めたとか、全く恥しい思と無念とに明日こそはと誓つても、其處に一抹の暗影がないでもなかつた、今日のブツシュと地圖の當にならないのを知つてからは。然し武田一家の心からのもてなしに吾々の心の疲を如何なに癒した事だらう。五工門風呂にも入れて貰つた。外はひどい風だ。明日は吹雪か心配しながら九時に床に入り込む。風の音で仲々眠れない。

三月二十七日 (金)

曇後晴

心配した風も雪もない唯曇りだ。天氣は如何でもなれと半ば捨鉢氣味に六時十五分に出發した。二股着七時十分、第一合流着八時十五分、第二合流着八時五十五分。前日のラツセルで時間の經濟な事甚しい。此處から昨日の降つた所より一本西の澤に入つて新しくラツセルした。第三合流着九時二十五分。此の邊に地圖に出てないかなり大きな澤が一本入つて居る。更に南に澤を取り、第四の合流點に九時四〇分に着いた。此の澤を登りつめる事に一決して一寸休憩した。

雪はかなり深い粉雪だ。西側は廣い尾根となつて居る。此處も地圖とはかなり違つて居る。地圖では脊尾根となつて居るが全く廣い尾根なので、尾根に登つた方が雪も少ない様だし、時間も經濟的なので尾根に取付き頑張り出した。靑空が見えて来た。風は朝からない。之は晴れるぞと一様に輝しい顔になつて来た。十一時半にはもう殆んど尾根の大部緩くなつて

開けた所に着いて晝食を取る。

昨日の奮闘した痔尾根が東に見える。全くひどい、よくもあれ迄昨日頑張つたと感心する許りだ。其に比べて今日の尾根はブツシユはない、倒木はない、全く恵まれて居る。もう成功した様な氣持で、晝食も殊に好い様だ。十五分も休んで出發。瘤の上は十二時。此處から屏風岳の頂上がよく見える。地圖ではとても登れ相にない程急に出て居る所が割に緩かに眞白く見える。屏風岳の二百米の所から東に出て居る尾根の二つ目の瘤の鞍部から西北に出て居る尾根だ。あれを登らうと一決して、瘤から南に走つて居る尾根を先づ二百米許り澤迄降つた。眞白に見えたスロープを元氣一杯で登り始めた。此邊は雪は一尺位あつたが割にラツセルも樂に出來て、段々とタンネンも少くなり、大きさも減じて、白樺も所々に混ぢつて來た。元氣も加つて來た。

屏風から出て居る尾根へ尾根へと努力を續ける事二時間だつた。武利岳、武華岳が東に、石狩岳、ユニ石狩岳の連山が雪に包まれて南の方に見える。北の方には白く光に映えて上支湧別の農家が所々に散在して居る。二股も見える。支湧別岳のとがつたピークも見える。天狗岳も見える。西には屏風岳が眞白な未だ一度も汚された事のない肌で吾々を待つて居る。流石に此處は寒い。雪も硬くなつて居る。スキーデポットとしてシユタイグアイゼンに換へた。一歩々とアイゼンを頂上へ頂上へと踏んでは行くが、所々に昨日の風で吹溜りが出來て腰迄もぬかる。疲れに疲れてもいゝ氣持だ。

一時間の努力で立派な三角塔の下に立ち得た。四本の丸太で組んだ三角塔で、未だ立てゝから間もないだらう。風が少しあるだけで寒さが餘りひどくない。西には大雪山が雲に包れながらも姿を見せるし、ニセコウシユもよく見える。頂上で休んで食事の出來る位だ。遂に吾々は目的を達した。餘り天氣がいゝので一時間ものびた。

四時頂上出發。スキーデポット着四時半。スキーに換へ、下りは實に愉快々々。雪はよし、スロープはよし、唯悲しいかな足が仲々云ふ事をきかぬ事だ。五時に瘤着。此處からも尾根を享樂しながら降り、第四合流點五時二十五分着。澤に落ち込まぬ様にと用心しながらも馬力をかけたが、遂に二股に未だ遠い第二合流點で日は暮れた。月が時々照すが深い澤だけに暗

い。併しシュプールの跡位は分るが仲々スピードは出ない。武田氏宅に着いたのが七時四〇分だった。

餘り遅いので迎へにゆかねばならぬと云つて居た所だった。直ぐに荷物を作つて一里許り下の區長さんの家へと急いだ。區長さんの家迄の判らない夜道を月に教へられながらたどり着いた。約一時間も重い荷物を疲れた肩に、疲れた足で運ぶのは並大抵でなかつたが、約束した日より一日遅れたので頑張つたわけだ。

温い御飯を御馳走になつたのが九時半過ぎだった。餘り疲れて腹がすぎ過ぎたためか、食へないが腹は未だすいて居る。でも今日の成功に酔つては居たが、豫定の支湧別岳は後日に割愛して明日は峠迄行けばよい事にして床に着く。

三月二十八日（土） 快晴

目覺ればすつかり晴切つて居る。床の中から支湧別岳が直ぐ近くに姿を見せて居る。登りたい、併し體の節々がいたむ。未だ肩がバラバラに離れてつかない様な氣がする。昨日の疲勞と今日の行程の樂な事のために漸く床を出たのが八時。山中としては出来るだけの御馳走をして呉れたらしい。

九時に區長一家の見送りを受けて出發した。食料も無くなりかけて輕くなつた筈のリユックも相當に肩にこたへる。昨日登つた屏風岳が南にその王座を占めて居る。北西にはチトカニウシが眞白な頂上を尾根から面を出し、西には天狗岳も頂きの岩を見せて居る。丁度峠はあの邊だと話合ひながら、ほんの僅か許りの降り道をのんびりと歩くが、矢張り段々と周りが移り變るから進んでは居るのだ。其程單調な廣い原野だ。

小一時間許りも原野を通つて、天狗澤を出るべく地圖に支湧別原野と記してある所の澤を登り始めた。丁度妙齡の娘さんを連れた婆さんが通つたので、天狗澤は此の道を行けば行けますねと駄目を押すと、さあ大變、聞きもしない事を話すは話すは、全く降參だ。仲々中心點に入らずに、最後にさうです、と唯一言さうですと聞きたかつたのだが。

一寸二十分許りの登りではあつたが、餘り好天氣なので汗はでる、すつかりのびて了つた。もう歩くよりも休んだ時間の方が多様だ。クラストになつて居る道を十分も降つて天狗澤に出た。地圖に小學校の記が出て居るから、相當な家かと思

つたが仲々見付からない。暫く行くと教授場だ。恐らく先生も小使も兼任だらう。

小學校を過ぎて暫く行くと猛烈に廣い平原だ。もう十一時だ。晝食にしよう。もう食ふ事と休む事が唯一の楽しみ。コツヘルを出し、のんびりと食事を取る。宇都宮が裸になる程の暑さだもの。此處からは支湧別岳は殊によく見える。見る度毎に残念だ。尖つたピーク、登れなかつたから尙よく見えるのかも知れぬ。三浦に是非登る様にと二人して勵した。漫談しながら一時間半も休んで出發。

石北峠から白瀧に通つて居る近路に出たのが二時頃。處々に鐵道の建設の小屋がある。近路を進む事一時間許り、餘り天氣がよいからチトカニウシの登れる所迄行く事にした。併し段々と體の疲労は増して來るが、口では誰もいやとは云はない。地圖に七二・六米とある。北の澤の入口に三時に着く。此處から鐵道のレールの上に屋根をかけた上を通つて澤に入った。時々雷でも鳴る様な音がする。峠のトンネルから岩石を運ぶ電車の音だらう。可なり廣い澤ではあるが、兩側は急で所々に雪崩れの跡がある。

二時間位登るが澤は仲々つきない。もう五時だ。到底チトカニウシは駄目だから尾根に出る事にして、尾根に登つた所がもう一寸で澤もつきる所だつた。此處から丁度チトカニウシは高さにして四〇〇米許りしかなかつた。もう一時間半も時間があつたら登れたのに、初めから登る積りだつたら山一つの落し物はなかつたが致し方ない。

尾根にはシュプールがついて居る。南西へと尾根をたどるが、日中にとけた雪が凍つてクラストだ。滑る／＼、スピードは出る。スウイングは出來ない。荷物は重い。後に引張られる。恐しい事ひどい。シュプールの側に北建山岳スキー部一行と書かれてある。旭川の建設事務所の人達だらう。今日は驛遞は賑だと一寸氣を悪くしながら降る。

又雪もちら／＼降つて來た。暗くもなつて來た。約三十分も降つて、電話線を横切つて峠の驛遞に着いた。案外静かだ。誰も居ない。昨日泊つて今日歸つたとの事。今日も又一晩静かなさびしい山の一夜の夢を結べる事を喜んだ。明日はもう札幌だと話しひながら、ストーブを囲みながら最後迄宇都宮が背負つた千秋庵のつぶれた饅頭に満腹した。雪は猛烈に降つて

居る。風はない。明朝迄五六寸で止めば愉快に遊べると話しながら床に着く。九時半だ。

三月二十九日（日） 吹雪

七時起床。心配して居た雪は豫定よりも一尺も多い。更に吹雪だ。全く面食つた。下手したら十時十分の汽車に間に合はぬかも知れない。七時四分に出發したが下りもラツセル同様、遊びながら降る積りの所も急ぎながら降るが滑らない。時間はどんく〜経つ。一時間も費して鐵道工事で馬櫓の通る所に出たが、當にして居た馬櫓の通つた跡もない。唯スキーで通つた跡許り。それでもラツセルよりはましだ。

併し間もなく此にも追付いたが、彼等は鐵道の連中で、道路沿ひでなく鐵道線路の視察らしい。餘儀なく三人ラツセルで猛烈に頑張つたが雪は深くて捗らない。遂に中越近くなつて時間が來た。仕方なくゆつくりと歩む。中越に着いた時は十時三十分。二十分遅くれた許りに次の汽車は午後二時十五分だ。五時間もある。待合に入り込んだ。

待合では土地の人に、幾ら體育のためとは云へ随分物好きな事だと笑はれた。成程左様にも考へられ様。久方ぶりで北海タイムスを見た。卒業生の名が見える。俺も愈々卒業したか。もう一生こんな愉快にのんきに遊べる事もないかと思ふと此許りが悲しい。三浦は未だ此からだ、うんと山に行くがよいと二人に云はれてはにかんだ。（四月十六日）

スキーの憶出

向井一郎

スキーの憶出？ 何方がつけられた表題か知らぬが、大學新聞を見て驚いた次第だ。めつたに驚いたなんて云ふ様な生やさしい男ぢやないんだが。締切の切迫した今日、そんな呑氣も云ふて居られぬから、何か二三漫談式に綴つて見よう。ペンを取つて憶出を辿つて見る。丁度あの眞白に覆はれた野山の様で、種々の憶出に被はれて終つた私には全く見當がつかぬ。従つて前後したり、ごつちやになつたりする處もあるだらうが御寛恕に預り度い。

貧民窟

貧民窟から現在の我々のスキーが生れて來たのだ。と云ふたら變に思はれるだらうが、實際だから仕方がない。

大通か北一條の東三四丁目邊であつたらうと思ふ。裏屋ではあつたが一戸立の相當な處に我々スキー部の先輩が合宿して居つたのだ。男處帯で前の大家から食事が運ばれて居つた。こんな處から貧民窟の異名が奉られたのだらう。併しスキーに對する總ての研究は皆此處の炬燵で醸されたのである。

大屋の娘さんに「サカサラツキヤウ」なる、名稱を捧げたいいたづらつ子も居られた。

貧民窟で思出したが、一日私と私の叔父の處へ電話で『今日すき焼で一緒に夕食をしないか』『有難ふ！ 出かけますよ』私と叔父と二人揃ふて行つた處、丁度これからと云ふ所。薄皮から肉が鍋に入れられる。牛肉の香が鼻を衝く。愈々準備が

整ひ食事開始。待ちに待つて居つた私は大いにバクついた。叔父も其通り。だが何時も食氣の盛んな貧民窟連中なのに此日は馬鹿に遠慮勝ちだつた。其内に大家の「サカサラツキヨウ」君の運んで呉れた飯で終局。

『ドウ！ うまかつたかい』『うまかつた！ 御馳走様』四方山の話が濟んで、お暇の時K氏とO氏見送られ、途中で『一郎さん競争しないか』負けぬ氣の私の事故『よし、やりませう』懸命走にる。と後から來られたO氏『矢張違ふよ、速いね。K！ あのせいだね』とK氏と顔を合せて笑つて居る。

翌日叔父から『昨日貧民窟で喰べた肉は畜産で、實驗に用ゐた犬の肉だつたつて』惡戯はこれのみでは無い。隣の爺さんに此肉を喰はして終つて、犬の肉とばれてひどい目に怒鳴れたとか。

圓山南斜面

雪を積んで作つた坂でのスキーに倦きた私共は、何時とは無しに圓山南斜面（現在の）へ出掛ける様になつた。此頃レルヒ氏、三瓶氏の御教導等あつたが、スキーの體を爲しては居らなかつた。外に藝の無い私達は燕返しなる技を練つたもので、仲々巧なものであつた。所が當時の大学生連中はこれを「サツポロ〜」と云ふて、馬鹿にして居つた。

丁度こうした時代に木原、岡見の兩先輩が圓山近くに居を移し、クリスタチャニヤがどうの、テレマークがどうのと云ふ様に研究に餘念なく、斯くして所謂當時の大學スキー術なるものが形式を具備して來たのだ。

南斜面で見逃してならぬ一人の先輩があつた。岩崎先輩である。私が札幌で兩杖を一番先に見たのは恐らく此人に於てであつたらうと思ふ。黙々として種々の滑降をされて居られたが、特に長いスキーでテレマクスラロームを、悠々と描いて居られた姿、淋し氣な感じで今でも目に残つて居る。

木原、岡見兩先輩は常に影の形に添ふと云ふ様に、二人で一緒に行動し、好んで兩杖の一本を片手に持つのみで居られた。

遠藤先生と梅干

輕川光風館に起居して居られた遠藤先生の御伴して、輕川の山廻りをせむものと、貧民窟連中朝早に出掛たものだ。當時未だ中學時代の小生も一行に加はつた。

流石の先生も此不意の攻撃に面喰はれたらしかつたが、オ好きなこととて『よし！ 行かふ！』手輕に準備して出て來られたが、握飯が出來て來ない。

先生番頭に向つて、大聲で『握飯はナツパで包め！ オーイ！ 梅干は入れるな！』西洋嫌ひの先生が、こんな日本人向きのものにも嫌ひがあるのかと思ひ込んで居る私達の方に向はれて、例の磊落な調子で『俺は梅干が大嫌ひでな』

輕川大曲り

此日一行愈々光風館裏から山廻り行進を初める。實に好い天氣だ。種々なる與太話等に打興じて進む程に、不圖先生足を止められて『おい！ 此處をグレートサークルとはどうだらう』西洋嫌ひの先生にしてグレートサークルとは感じた連中の誰かが『大曲りはどうでせう』由來輕川一巡コースが大曲りと呼ばるゝ様になつた。尤も當時の大曲りは光風館裏から始まつたもので、現在のコースは小曲りと稱せられた處のものである。

パラダイスの名も確か此日であつたと思ふ。大曲りコースを取る時は必ず此處が晝食場で、雪は好いし、風當りのしない處だ。先生『何時來ても此處は好いね、パラダイスだ。水があると尙ほ好いのだが！』に發したものである。

當時としては、大曲り等へ出掛けるのは大した事であつたのに、今日では文字通りに、猫も杓子もスキーを足にする程のものなら出かけると云ふ盛況である。病理學教室の猛者連中の如きは一日一巡では氣が濟まぬとて、御叮嚀に二巡して來ると云ふ有様。今昔の感に不堪とは此事である。

遠藤先生とホツケ姿勢

遠藤先生は滑降に際して、轉倒された事が無いと云ふので有名であつた。

先生は滑降に際しては決して當時の所謂直滑降姿勢を取らるゝ事なく『あちらでは皆こうして迂つて居る』と云はれて、常にホツケ姿勢で滑降せられ、短い急坂は兩杖を一緒にして股間に持し、馬乗姿勢で滑降せられたのを知つて居る。ひどいブツシュで而も急坂を、先生が馬乗式で巧に滑降せられたのを見て、早速應用して足を掬はれ、ブツシュの中で辛き目を見せられた記憶がある。

今日から見ればホツケ姿勢は最も理想的と云はれてゐるから何とも無いが、當時直立式直滑降を金科玉條として居つた我々には、誠に異なるもので眞似る處では無かつた。

此頃既にノールウエに於いてはスキーの滑降に際しては、ホツケ姿勢が行はれて居つたもので、本姿勢を斯界に持出したフアंक、シュナイダー兩氏のブンデルデスIIシュネーシユースの七八頁にも明にしてある。

飛んだ恥かきであるが、大正十四年であつたらうと思ふが、初めてスキーの驚異の活動寫眞を見た時、フアंक氏、シュナイダー氏の妙技にすっかり魅せられたものだ。然しあの馬槌式ホツケ姿勢を見て随分ひどい滑降法だ等と冷笑して居つたものだ。其後ブンデルデスIIシュネーシユースを讀んで成程とは思ふたが、實行して見る氣が無かつた。其内海軍に取られ、海上生活二ケ年を終つて歸へつて來た年の冬、早速スキーを取出し、一日スキーに出かけた處、時代は全く變り、フアंक・シュナイダー式所謂アルベルグ式万能で、面喰つた次第である。

スキーと附屬品

札幌にスキーと云ふものが知られる様になつたのは、私の小學校尋常六年の時、三瓶氏の斡旋で中野氏(ツバメスキー

で有名なる)がスキーの製作販賣をせられ、ホリノ商會これに次ぎ製作販賣に努力し、一方レルヒ氏の教導殊に三瓶氏の熱心なる宣傳指導に依るものである。

當時のスキーは専らアルパイン式で、材は樺を上とし、次を櫻として居つた様に記憶して居る。ビンディングは發條無し
の安物と發條の完備せる上物であつたが、此發條も今日のアルパイン式とは異り、蝶番の所に發條を裝備したもので、破損し易くて惱まされた。杖は六七尺の徑一寸もある様な竹竿に石突を附したもので、大學生の刺戟で比較的早く兩杖を手にした私には、此のアルパイン式の單杖が馬鹿々々しい感がしてたまらなかつた。此頃でも大學には單技黨が大多數で、あの長い奴を水平に構へて直滑降し、鉸の中に突進する猛練習を見せつけられて居つた。

『初心者に兩杖を持たしむべからず』の論者は遂最近まで居つた次第だ。

云ひ忘れたが、此頃のスキーには一般には未だ溝なんて云ふものは見られなかつた。こんなスキーで、誰から始めたか知らないが、南斜面でジャムビングを行ふて居つた。

一般に服装は至極簡單で、靴なんか問題ぢあなかつた。ルツクザツクなんか見られなかつた。

今日の七尺二三寸のスキーにノルウエビンディング、スキー帽にキリツとしたスキー服、防水裝用スキー靴、兩杖を手にし、ルツクを背ふたシイクな姿なんて夢想もしなかつた。

靴と云ふ字で思出したが、スキー靴と云ふと矢鱈大きな靴を作らせもし、作りもしてゐるが、厚い靴下に薄い靴下を穿いて丁度ピツチりする位の靴が最も良好であると信ずる。

スキー蠟！ 今日では『レースの勝敗は蠟に定まる』と迄極言せられ、スキー蠟の進歩發達は實に目醒しいものである。

パラフィン万能時代から黃蠟と白蠟の四分六分混合時代、ホンの最近レースの發達に伴ひ蠟の研究急激に興り、自分も一所懸命に勉めたものだが、これぞと思ふものが仲々出来ぬ。或毛唐が『日本には蜜蠟の好いのが出るから、屹度好いスキー蠟があるだらう』と。大方の蠟研究者は舶來盲信者で、決して、北海の地に好的なスキー蠟生産的研究者で無いのを悲しむ。



オリンピック選手 山田克巳君

アザラシ！ スキー蠟で思出したのだが、此頃アザラシは誰も彼もと云ふ調子で、而も濫用の傾向がある位だ。私はあの得も云はれぬ重味と云ふ奴が不快だ。その上寒中着脱の不便。昔は高價で私共の使用には不適であるとして居つたが、或一部の連中は持つて居つた。ユーラ先生等持つては居られたが、遂ぞ用ゐられなかつた。私は試に半分に切つた奴をスキーの前部に着けた場合、中部に着けた場合、後部に着けた場合に付き研究して見た結果、半分ものでも前部に着けた場合が最も能率好く、殆んど全體に附けた場合に準ずる成績を掲げ得た。着脱も極めて便だ。重味も随分減じた。併しうまく効いたシユタイグワツクンには及ばざること遠しである。これにつけてもワツクスの研究が望ましいものだ。

スキーナンセンス二つ

學生生活の終とあつて、毎日曜如何に吹雪かふが奥手稲の享樂に夢中であつた時の事、一日あまり天氣は良好で無かつたが、何時もの通り一行奥手稲へ出掛た。案外の享樂に一同ホク／＼、頂上の直ぐ下で晝食が始まる。スキーを脱いで立てゝ食事をして居る者、スキーを穿いたまゝ、食事をしてゐる者、圓陣を作り大いに氣焔を吐いて居つたが、寒氣が強い所から急いで食事を終り、一同用意整へ、一齊に滑降する。とS君ルツクを負ふや否や兩杖を手にシアワテテ一行を追はんとしたが、どつこい、腿まで埋つた足を二三歩して初めてスキーの無いのに氣がついてダー。日常馴れたS君の珍談とて持てる事／＼。

これは又最近の珍談であるが、同僚のT君手稲へ出かけ、晝食で夢中になり、いざ行進となつて、大事の／＼スキーが無いと云ふので大騒ぎ、附近を見廻すが影も形も無い仕末、一同の當惑見るも悼まじきものであつた。何ぞ計らんT君七尺豊のスキーの足に穿てるを忘れしものであつたと知つて一同ダー。愛嬌者のT君とてスキーの話毎に持出される。

小樽から札幌へ

中等學校の札幌驛傳競争の當日の事、櫻井芳次郎先輩『おい！今日驛傳連中と一緒に小樽から札幌まで走つて見ないか』
『面白い！やつて見ませう』『驛傳のコースだから間違ひ無いかから大丈夫だ』

愈々小樽の出發點を出て一路札幌へ。言葉では一路だが、櫻井氏の後を行くと二路にも三路にもなる。

錢函までの山コースを終り平地コースになるや、星置の所でコースを間違へ、遂に左右も前も灌漑溝に遮ぎられ、バツクするの餘儀なき仕末になつた。勇敢なる櫻井先輩も言はずに、スキーを脱し、ザブ／＼灌漑溝を渡つて終ふ。私は濡れるのが嫌さにバツクして後を追ふが仲々追附かぬ。腹は減る。仕方無しに用意の餅を嚙り／＼走る。

追附かぬ。驛傳選手にどん／＼追抜かれる。あせる程に咽喉が渴いてたまらぬ。輕川の中繼所で牛乳の接待、これ幸とガブ／＼飲む。走る。走る事數十間ならざるに胃の工合が悪くて、嘔吐しさうでたまらぬ。負け嫌ひの本性を現はし頑張る。櫻井先輩の姿も見える。應援連中が盛に力附けられるのに引かれて、段々気分も快方に向ひ、零似で『待つて居つたぞ』と聲かけられた櫻井先輩と相前後して所定のゴールへ入つた。

小樽を出て札幌までの全時間五時間餘りと記憶して居るが、後年岡村君の作られたレコードに對して冷汗の流るゝを覺える次第である。

痛快なる櫻井先輩、今は臺灣で大いに活躍せられて居らるゝが誠に懐かしい氣持だ。あの當時の意氣ありや否？ 私ですか？ まだ／＼元氣で、意地つ張は昔と少しも變つて居りませんよ。今一度レコードの作り直しをしますかな。呵々。

コーラ先生の思出

スキーを一番先に札幌否日本に持つて來たと云ふて御自慢の先生乍ら、御自分がスキーを始められたのは遙かに後年である。併し御講釋は大したもので教へられた事が多かつた。私はスツカリコーラ先生の御供役見たいになつて終つた。お坊つちやん氣の先生に隨分と困つた事もあつた。

熱心な研究的スキー愛好者で、暇さへあればスキーに出掛られたものだ。殊に御一家御描ひで御歸國なされ、御自分一人丈札幌に來られて、可成長い間一人で生活して居られた頃は、殆んど毎日スキーに行かれた。

或一日大曲りへ出かけ、登行の途中で石狩の原野を距て、彼方に光る増毛の連山を眺められ、あの山々と海の對照が瑞西の景色を思ひ出さしめるとて、嘆聲を洩らされて佇立稍々久しふされた事があつた。『ゲッテイ(足の不自由な長男)が來れたら』淋し氣であつた。

海軍から歸つた年の冬の初め、確か時事新報にコーラ氏轉倒の圖なる寫眞が出て居つたが、あれは亡き岡村君が私が海軍に行く前に、パラダイスヒュツテに掲げるんだが、コーラさんの寫眞が欲しいと云ふので差上たもので、決して轉倒なんて生やさしいのでは無い。

天氣の好い日であつた。雪の性質がよいので、先生の御宅から琴似のスロップに向つて平地滑走を續けた。平地の中程まで出たと思ふや、アツと云ふ間もあらばこそ、雪の中に先生の身體が消えて終つた。雪で覆はれて居つた灌漑溝に落ちられたのだ。身動きもならず、狭い灌漑溝の中で藻搔いて居られるのを、其時行を共にせられた山根先生(臺灣へ行かれた)と協力して漸く引上げたが、其時先生一流の身振りを記念に撮つたもので、仲々思出深いものである。

大正十三年度の合宿であつたらう、是が非でも青山へ行くと云ふ。多少身體を悪くして居らるゝ時とて奥さんが止められる。どうしてもきかぬので、奥さんは向井が行くならと云ふ事になる。丁度解剖の試験間近の時だ、私も氣が進まぬし、又事情も知つて居る處から行けぬと御斷りした。處が二三日すると奥さんから、一人でも行くと云ふので、心配だから是非つて行つて欲しいと云はれるので、仕方なしに御供する事に定める。

非常な喜びで青山へ行かれたが、身體の工合が悪かつたのだらう、一日の滞在で歸へる事になる。歸途志賀先生等と御一緒に頗る御元氣で居られた。歸へられてからも、確か平光先生の論文の校正であつたらうと思ふが、目が見えなくなつたとかで、大きな天眼鏡で一心に仕事して居られた。それつきり多忙で御目に掛らぬ内に、コーラ先生肺炎で大病の報に接した

が、其後二日目に永眠せられた。死の枕邊に御秘藏の盲人用の時計がこち／＼動いて居るのがたまらない哀愁を唆つた。最後の青山行きにやられたのは事實である。併し御本人は大満足で居られたに違ひ無い。北十四條西二丁目のコーラ先生のお宅の焼跡を見て、云ひしれぬ淋しさが胸を衝く。殊に餘り御丈夫で無い御夫人が三人の遺子と共に、ロカルノの邊りに佗しく暮して居られると聞いてはたまらなくなる。

中野四郎氏

愁傷な氣分で思出したが、ツバメスキーで有名な中野四郎氏の閉店の厄である。何が原因かも知らぬが、今日スキーある裏に於ける大功勞者で、我がスキー部の連中も随分御世話になつたものである。人間は妙なもので、落目になると振向きもしない。自分も御世話になつた一人として、何とか出来ないまでも恩義に感じて居る一人だ。

風聞に依れば、ツバメスキーは決して捨てぬとか。御店が出る様であつたら精々出来る限り盡して上げたい。

シヤンツエ

『東洋一の大シヤンツエが出来上つた』と云ふ新聞の報道を前にして、嘗て木原監督の下に大矢、緒方、廣田、三田村等の諸兄と、毎日シヤベルを肩にして練習に出掛た頃がたまらなく懐かしい。今日の大シヤンツエの前に立つて當時を追想する時、筆紙に盡せぬある感情が胸に塞がるのを禁じ得ぬ。

x x x x

スキーの憶出！ こんなことに耽つて居ると、亡き岡村兄の温顔、神経質な山口兄、はては『エンネツカ』の本田兄、取り取りの思出にありし頃の日が思はずも目を潤ましめる。こんな淋しい思出まで書く氣になれぬ。

種の盡きぬが漫談の身上、此位で許して頂かふ。

スキー苦しみ記

三 戸 勳

思ひ起す一昔前。見たこともないスキーに憧れて札幌に來た僕は、例の馬糞風の吹く前から雪を待つてゐたものだ。やつとシーズンが來て、試験も無事アベコンで済まし、さて合宿の青山行だ。その時の全合宿の親方は確か中野誠一先生であつた（尤も當時はイガ栗頭の學生はんであだが、今じや何うして押しも押されぬ教授殿でありますぞ）ガタ汽車も無中に昆布驛に下車。エライ人達は皆スキーに召して偉らさうに鼻うごめかせて合宿へ、我々アカン連中はゾロ／＼と雪曇りの空の下、ヒヨロ／＼曲つた雪道を辿つたのである。

その時の我々の班長さんのはかの有名な放屁居士緒方直光氏と松川五郎氏だつた。我々アカン連中の内には現に關西方面で牛耳つてゐる名ジャムパー緒方温光氏（俗にオン公又はウン公といふ）もゐる。

たど／＼しい足取りで漸く合宿所近くまで來た時、横ツちよの斜面上に立つてた一人物が、雪煙り捲き上げてまつしぐらに滑り下りて來た。あつといふ間に尙一層の雪煙りを捲き上げて、クルリと廻つてピタリと止つた。あゝ神か鬼かその妙技よと許り、我々は凍てつく寒さも打ち忘れ口あんぐりと、そのデモに感嘆これを久しふしたわけだ。後で彼氏は板倉さんであつたことが判つた。

明くれば合宿第一日。初練習といへば人聞きもいゝが、初イデメラレの日である。各自思ひ／＼の服装でスキーかついで

宿を立ち出で、そこでスキーを足に喰つつけた。一同行儀よく一列に並ぶ。そこへスー／＼とスキー滑べらかして親方が來られる。そしてスキーの穿き方の檢閲が始まる。

『おい君ツ、ビンディングの遊び皮が内側へ行つとるやないかツ。遊び皮は外側へやるもんだ。それでもスキーをやる氣かツ。あかんぞ、しつかりせんかい』と、これこの通りである。

我々アカン連中は聊かテレもし、消氣もし、しほらしくいはれた通りにビンディングを結び直す。それから『目標、前方に輝く白銀のスロープ、進めツ』と許りに、竿竹みたいな一本の青竹をヨチ／＼ついてゾロリ／＼と進む。進むわけが思ふやうにゆかぬ。やつかいな後滑りといふ奴にしよつ中脅かされる。この行列の側を班長さんは輪のついた軽るさうな兩杖ついで、ゴチャ／＼と教へたり、いちめたり、なだめたり、我々の行動を監督する。

『その杖便利ですなあ』なんていふものなら、

『あかん／＼、お前等みたいに下手な連中は未だ兩杖なんて勿體ない』とおつしやる。さうかいなあと我々下手な連中は黙々として行進を續ける。フューネラル・マーチの伴奏でも欲しいやうな哀れな恰好で。

目的のスロープに着いて、頂上まで登る間に登行法を習ふ。エツディングやタタキ付けが出來ない上に例の後滑りだ。ゴロリ／＼と登り乍ら轉ぶ。雪の中に手を突つ込む、頭が下になつて新雪中でもがく。とにかく頂上に揃ふと、先づ型通りに直滑降のコーチだ。脚をピンと伸ばして突つ立つた一昔前の理想的フォームを習ふのだ。だが斜面上から下を見下ろすと何んだか變な氣がしてならぬ。何もせずボンヤリ立つてゐると班長さんに怒鳴られる。だから我々は無我無中滑つたものだ。一間、二間、やつとスキーの長さ位ぬ滑つて大きなオカマをあける。轉んでグズ／＼してゐると、班長さんが上から滑つて來て眼の前でクリスチャニアか何んかをやる。そして阿呆みたいな表情をしてゐる面に粉雪をブツかける。その内にスロープはスケート・リンクみたいにパン／＼になり、その上オカマだらけになる。

晝食もシバれた大きな握り飯を吹雪の中でガツ／＼喰べる。これが一週間位續くんだから堪らない。朝から晩まで直滑降

又直滑降である。

三日目、四日目頃から漸く半制動、全制動、ステム・ボーゲンといった風にコーチを受ける。

第一期の合宿も終はりかけた頃、オン公が『一寸来い』といふから行つてみると(勿論滑つて)、『實はかふくするどグ
ルリと樂に廻はるぞ』と教へて呉れた。そんな眞似をすると、班長さんを始めエライ人々からガン／＼叱られる。『教へも
せぬことを勝手にする奴があるかい』といふのである。それで二人は人目を忍んでソツトやつてみた。直徑十メートルもあ
らうといふテレマークまがひの大廻轉だつた。しかも遂に見附けられて、怒鳴り散らされて The End である。

ある日の午後、廣田、緒方兩ジャムパーがジャムプをやるといふ。何しろジャムプなんて見るのはこれが生れて初めてだ。
しやがんで滑り來たり、急に仁王立ちになり、プロペラーの如く腕を振り廻はし、パインと音たててゴロ／＼と轉ぶ。片唾
を呑んで見てゐた我々は、班長さんが轉ぶんだから喜んだものだ。又一方、班長さんが轉ぶ位だから、我々鈍才は十年も經
たぬとあんな眞似は出來ぬと考へた。今から考へると、二十度位のスロープに申しわけのシャンツェを作り、やつと十米
許り飛んだんじやないかと思ふが、こんなのが見違へる許りに進歩した現今のジャムピングの礎をなしたものであり、思へ
ば涙ぐましい先人の努力であつたのだ。

スロープで醜態を演ずると事の如何を問はず、班長であらうと初年兵であらうと一律に懲罰に附せられる。大概それは合
宿歸着後ヨーカーになる。

苦しい練習を了へて、木ツツキの木をつつく音を聞き乍ら、夕映えの緩スロープをスー／＼滑り乍ら宿へ引揚げる時の氣
持ち、そして合宿における入湯と團欒は、スロープにおける苦しさをスツカリ清算してくれる。だから懲りもせず又翌日ノ
コ／＼と出掛けるのである。

~~~~~  
苦しかつた最初のスキー合宿も一昔前のことになつてしまつた。だが冬の合宿、春の合宿、その他幾度となく繰り返へされたそれ／＼の合宿は、凡て僕の一生忘れ得ぬ愉快な思ひ出の一つとなつてしまつた。

當時は當時のスキー界の尖端を歩み、斯界をリードしてゐたわが北大スキー部のリーダー格、平らたくいへば選手級の人々も、未だ／＼研究、修業期にあつたもので（勿論現今といへども益々研究、修業しつつあり、すべきだが）その點この頃の初心者には、技術優秀のリーダーがあり、コーチの方法も研究されてゐやうし、恵まれた境遇にあるものといへる。恐らく當時我々が一週間かゝつたことを一日位でやつてのけてゐるであらう。

僕はこれら北大のスキー部の人達が益々スキー道に勵み、斯界のため、又北大スキー部のために、先人の築き上げた礎を益々鞏固に、益々榮えあるものにされんことをお願いするものである。

## 追憶

村 本 金 彌

夏の日でしたか、朗かな連中二三と打連れて、馬場牧場のあたりからジルバー・スロープの方へとさまよつた事がありました。色々と冬のシーズンの話しに花が咲きましたが、其の内に目に止まつたのは、自分にとつては忘るゝ事の出来ないジルバー・シャンツエの姿です。私共が豫科へ入學と同時に出来た日本最初の、然も東洋一の大シャンツエであつた往年の偉觀は今を見る影も無し、吾々が唯一の誇りとしてゐた櫓は取り壊され、着陸斜面は雑草で取り散らかされ、然も有枝鐵線の牧柵が張り廻わされて、其の圍ひの中には眞夏の太陽の直射を受けて、物憂げな牛が長い涎をたらしながら吾々の方へ目を向けております。

もう一〇年前になるでせう、琴似の吉田家の一室で畑黨（當時競技をやるものはかく呼ばれておりました）の合宿をしたのは。其の時は目下日本スキージャンピングの權威者である廣田氏も、日本一流の緒方直光、南波、稻積の諸先輩も、北海道の錬取りの如き物凄い格好で大胡座をかきながら、最新輸入のノルウエーの年報AARBOOKを一心に見て『俺はこんなスタイルで飛びたい』とか、『アプローチの姿勢を見てけれ』とか、遂には立ち上つて、他人が見たら一寸眞人間に見られない位の動作をやり出したものです。

日本一のジルバー・シャンツエも、現在の氣體動力學的理論を没却しておつたものですから、フライトは高く、シャンツエを離れると丁鹿千仞の谷底へ落ち込む感があり、腹の中が皆其儘もつて行かれる様な氣がしました。従つて着陸の際のシ

ヨックも實に物凄く限りで、立つ方が少なく、轉ぶ方が多かつたのです。

一度轉げたならば、日本一の八〇米の着陸斜面を飛距離僅かに一七一・一八米で轉んで落ちるのですからたまりません。何時止るものかと風車の如く廻されながら考へさせられたものです。それでも日本に於ける創業時代の人々丈に、廣田さんにしる緒方さんにしる、其の他の諸先輩皆眞剣で熱があつたものです。

稻積さんでしたか、あまり轉んで痛いといつて、ズボンの尻に「ふとん」をつけて來た事を思ひ出します。

現在行つてるアプローチの滑走姿勢も、このシャンツエの出來る少し前に、諸先輩の研究により改革せられたものです。今考へますと随分我武者羅な事もありましたが、其の時のジルバー・シャンツエの存在は實に偉大で、そして亦我々部の者にとつては唯一の誇りでありました。

吉田様の伯母さんが丁度家の前から眞直ぐに飛ぶところが見え、然もあまりに物凄く轉ぶものでしたから、私が親だつたら子供には決してジャンプはさせないと云つておられました。其の御令息、當時の「琴似のネツコ」がこの隆昌の北大スキー部を背負つて立つジャンパーになられた事は、運命の悪戯とは云へ皮肉に感ぜられます。

當時若輩の私は、なんとかしてこの偉い人々の仲間に加へてもらつて練習したいもんだと念じ、亦何んとかしてジルバー・シャンツエを飛び得る様になり度いと念じて居りました。然し一流と一緒にはあまりに氣がひけて、機の來るのを待つておりましたが、飛躍の念禁する能はず、意を決し仲間の神澤と二人で、秘かに飛んで見様ではないかと相談がなり、或日の午後三時頃だと思ひます、一流選手の濟んだ機を見て、ジルバー・スロープから二人のこゝ出かけました。午後三時とは云へ暮れ易き冬の日の事とて周圍は薄暗く、二人は緊張した調子で黙々とシャンツエ迄行きましたが、周圍の状況と吾々が練習してゐたシャンツエに比しあまりに物凄く大きいので、二人とも云ひ會はした様に飛ぼうとはしません。只崖の如き一條の着陸斜面を見上げては顔を見合せるばかりでした。結局はジャンケンをして負けた者が先に飛ぶと云ふ事になり、幸か不幸か第一番は私になり、彼はニコ／＼しながら安心した様に下に居ります。屠所に引かるゝ羊の如くスキーを肩に登

つて行きましたが、登つて行く中に氣が落ち付き、恐ろしいと云ふ氣持の内にも『一つやつてやらう』云ふ野心がちよいと頭をもたげて來ます。

スタートに立ちましたが先づ深呼吸を四五回、そんなに叫ばなくともよい『用意はヨイカ』を大聲に何回となく繰返し、やつと支への杖を離しました。夢中です。フワリと出たと思ふと足の裏に着いたと云ふ感じがしましたので、ハットする中にもう崖の様な着陸斜面を矢の如く滑つております。『立つた』と云ふ喜びで一ぱいですが、約三〇米も滑つたと思つたら新雪にのめつて、風車の如く下まで舞ひ落ちました。ほんとうに風車も同然です。どうなる事かと思ひましたが、止ると同時に嬉しさの餘り眞白になつた顔の雪も拂はず、いきなり双手を舉げて万歳を叫んでしまつたのです。神澤も感慨無量だつたに違ひありません。喜んで呉れましたが、餘りに轉がり方が物凄いのと周圍が暗くなつた關係上、彼は遂に飛ばずに終りました。

さあ此れ以來、大シャンツエで立つた事が嬉しくてたまりません。其の後何回となく足を捻挫しては繃帯で堅く締めて飛んだり、頭を打ちつけては顔に紫の斑點を造つたりして今日に至りました。

其の後櫓を大きく組換へたり、着陸斜面を改修する度毎に、當時の『燻サン』事廣田さんを御大に、日曜は握り飯を腰に測量機をのぞいたり、棒持ちになつたりして、少なくとも東洋一の固定シャンツエに造り上げたのです。

そして此のシャンツエに於いて幾多の競技會が開催され、幾多一流選手を造り出し、遂には廣田、伴をオリンピックに迄送り出したのです。時代は進み合法的なシャンツエが次々と出來て、ジルバー・シャンツエの一側を取り圍んでしまひ、それと同時に新しきシャンツエへの尊き犠牲として櫓は取拂はれ、遂には今目前に見る如き牧場と化するに至つたのです。

段々とジルバー・シャンツエの名も忘れかけられて居る時代になつて來ましたが、この偉大な名残りを見るにつけても、創設當時の部の先輩の眞剣な御努力に對し、絶大の感激と尊敬の念が沸然と起るのを禁じ得ません。

# 森林美！

宇都宮 嵩

顧みるに、文化未だ進歩せず自給自足の時代、經濟的智識の未發達に於ける時代は、自然物に對する審美觀念は甚だ幼稚なものであつた。當時は勿論自然美、森林美なるの意識、用語もなく、只森林荒廢時代を型作るに過ぎなかつた。之れに反し時代の進歩は人間の慾望を増張させ、社會の組織化と共に經濟的發達を來し、他面各自慰安に對する慾望が追求されるやうになつた。此處の森林美！ 溪谷美！ と云ふ感情も、此の進化と共に自然的に發生し來る美的印象であり、山岳美の用品であり初めた、彼のロマネスク當初時代に於ける森林美に對する觀念でさへ、第一に彼の獨乙十字軍の歌の内容を見ても了解出来る。即ち「美は野原にあり、美は森にある」と云ふ歌がある。又伊太利の *Leoharnd da Vinci* や *ホルラル美術學校* の *Krypodal* の傑作中には、森林の取扱を自然的根據としてゐる。斯様に森林美なるものが人間生活の精神慰安を形作つた一社會を理解出来る。

別に日本人が自然風景美を發見し保護を講ずる様になつたのは相當古いものである。上古大和三山の風致を尊重し禁伐をなしたるは、世界に於ける風景保護の先驅と見ても差しつかへない。江戸時代に至りては日本三景には近江八景などが選出され、それが自然風景地として廣く探勝せられるのも、そこを形作る森の美、又は森の背景などに非常に左右されてゐるのである。

此處は單に森林美の理解史と云ふ可き端書に過ぎないのであつて、今自分が書かんとするのはそんな過去のことではなく、

只現在の森林美、溪谷美が如何に利用され、又將來さる可きかを亂筆するに過ぎない。が、その前に少し心理的に此の森林美を解剖してみる。

感覺、視覺、智覺に反映する森林の動作竝に意表は、總て形式と構造と色と依り成立してゐるものなるが故に、例へば暗く且つ寒い感じのする森林から、日光直射の草原地に出た時は急に前後の變化に就き感覺に關係した形式美を感じる。又森を形作る樹種の外觀的表狀、又その内容物の意表竝に相互の特殊關係、即ち樹冠の形、特異性の枝葉、又は色調は視覺に及ぼす構造美に外ならない。或は爽風のシヨツクが葉枝に反響する時、海岸の黒松地帯に潮風があたる時等は別に異なつた聽覺の世界を作る。自分は決して哲學者の云ふ、自然氣分は決して純精美的氣分層の志向的核に向はないで智覺ノエマを圍繞するとか、又自然氣分の體驗は常にたゞ美的享受の段階に固執し、感情移入の段階を超へて氣分的全體の層、即ち情趣地帯の體驗に迄到達しないとかの理論採掘は止して、只一般に心に抱く美的感情の表面化のみを述べる積りだ。

こんな理由で森林が存する總てのものは人に對して常に慰安力を示してゐる。此の慰安力とは一概に云ふ構造美とか、色調美とか、聽覺美を抱有してゐるものを示すとしやう。

x x x

一方山岳地帯の殆んどは森林にて覆はれてゐる。北は樺太、南は臺灣まで、而して其處には各特有な樹種と林相を呈し、特異性の表現美を有してゐる。針葉樹林の幾何學的美、潤葉樹林の複雑性、針潤混淆の繪畫的美なんかが到る所に見出される。かゝるが故に本來より自然美、ことに森林美に對する理解があるかと云ふとそうでもない。只詩人達の特異な者にしか理解されないでゐる。現今もそうである。現今は所謂旅行者の或る者、例へばスポーツの一種とも云つてよい登山家のある者、或は遊覽氣分の特種な人には此の美から慰安を受けてゐる。前記の様に登山家が總て森林美に慰安を求めてゐるかと云ふと、そうでないことは後記説明せん。

此の様に古より森林美の存在が如何なる地方に有るにかゝはらず、多くの人が何故に度外視してゐるかと云ふに、之れは

森に中毒してゐる、森林が餘りに普通化して一種の安性視界としてのみ考へられる、又一般の生活が森林と云ふものに接近する機会がなく、林が如何に精神作用を向上させるか知らない、此の二點が現在普通社會へ森林美の本調を味はせることが出来ないのである。それなら森に接近させたら或は森の美を吸収することが出来るかと云ふにそれは出来ない。一體現在の社會生活からそんな餘裕を與へることが出来ないのである。然し之れに關しては色々の方法手段が在存することは勿論であつて、地方郷土感の普及或は自治團體の餘暇を利用しての遠足なんかは、或は森と接近させる機會を作るかも知れない。現に獨乙地方の *Heimat schutz* なる標語の基で團體を作つてゐる所では、森林の利用法が精神化して森林美の理解を増進してゐることである。

近時日本に於ける此の種の發達を見るに、未だ顯著なるもの見ざるも、各地特有の地況に對する保護或は保存が喧しくなつた。之れは内務省の國立公園設置何々の呼び聲に應ずる對策としての現象とも考へられる。或る地界が特に國立公園として、又は保存記念物として指定された曉に於てはその土地に到來する旅人の數も増加し、自然發展策の主要素となるが故に競ふてその保護、保存を主張する様である。之れはなる程結構なことではあるが、實際に精神的から所謂 "*Heimat schutz*," を以てかゝる運動を主張するかどうか不明な點もある様だ。こう云ふことを耳にしたことがある。或る地方を特に人氣作らんとため、某政黨屋さんに頼んでその地方の自然風景を實質以上に宣傳をしたことを聞いた。本當それが効を奏しなかつたら愉快だ。若し効果でもあつて、他人が來て何うんだと云はれちや恥どころか、精神上の罪作りをしたことになる。何も人氣取りのための郷土保護をする必要はない、絶対にそうあつてはならない、自然が表現するまゝの力をのみ高潮して欲しい。自分達が旅行をしてゐる時、偶然に自然の極美とも云ふ可き所に出合ふことがある。これがもつと便利な所にあるならなあ……なんて反復することがある。溪谷美なんかは確かに不便な地、稀れな訪應地附近の澤なんかには大抵見出される。特に函とか瀧とかの在存を知つたらすぐに新聞紙上に取る様な所は澤山ある。斯様に日本一般社會上に於ては此の種理想發達は本流的のものでなく支流的なもので、一種の副産物として取扱はれてゐる。中には稀だが、本當に此の種思想發達の爲め



に努力する人がある、喜ばしいことである。

結局は未だ充分なる自然美、ことに森林美保存思想の發達を見出したとは云へない、幼稚な時代を形作るとしか申されまい。然し之れはその必要に迫られるだけの生活の餘裕があつて初めて向上するものであるから、その餘裕を見出す、成る可く見出すと云ふ觀念まで行かないとちつと困難な様な氣がする。『一生に一度は琴平さんに參るべし』と云ふ老人の言葉を聞いたら何を意味してゐるかは誰にも解るだらう。

以上の様に森林の美的觀察は極く低級なものであるが、之れを強調させる手段が全然ないかと云ふにそうでもない。

近時登山熱が向上した一原因の様に、新聞、雜誌での宣傳を多分に用ひたら或る程度まで効果を奏するかと想ふ。實際近時の登山熱はすばらしい。流行兒の表現とまで思はれる位だ。車中にビツケル・ザイルの持ち込み一種の優越を感じたり、惜げもなく舗道をナーデルのまゝで踏涉したりする様では考へものであるが、そんなつたのも一種の風評の宣傳が効を奏したと云へ様。だから吾々が今森林美を納得させたり、愛着の念を抱かせたりするには、徐々に寫真なり報告なりで宣傳意識させるのが一番好い様に想ふ。餘り偏見かも知れないが。

登山家の皆が森林美追求或は溪谷美の探索をやるかと云ふと決してそうではない。此んなことは誰もが了解出來よう。第一登山の動機から云つても明瞭に認識出來る。冒險心、征服慾、登高慾とか云ふ動機に起る登山は森林美とかは相手にならない。一種の慰安物となつてゐても自分では意識出來ない。只登高に登高にと云ふ慾心が總てを密閉してゐるからだ。只人生迴避への登山とか、原始の追求とか云ふ氣持だつたら、森林の在存或は溪谷の在存は何より慰安物並に障礙物として受け取られるだらう。かゝる者への反應は各自異なるものであらうが、受ける森林美は充分に満足を與へる。日本山岳地帯の様に森林が大部分を占有する所では、此の森林より與へられる慰安が登山家の胸中に可なり反映するものと想ふ。全く頂上まで樹木にて覆はれてゐる山が大部分を占めてゐることは確かだから感覺も大きい。古來より山水風景の美に樹木が幾分なりとも助力を與へざるものはない。耶馬溪、神居古潭、瀨八丁、近江八景、朝鮮金剛山、富士五湖等、總ては風景樹の爲め

にと云つてもよい。又アルプス地方の倭松地帯から草原地帯、或は岩石地帯に變ずる所までの林相の變化は、その山なるものの價値を充分左右してゐるのがうなづかれる。九州の阿蘇山及び久住山の如き、地形そのものが平凡な所に雄大な面影を有する所では樹木無しでも特奇な風景美を有するが、雄大な面積を有する稀れな無立木地だから常に樹木山を追ふ。又見せつけられる人には可なり奇異な觀を興へる。此處には森林美と異なつた自然風景が潜在してゐる所以よりして、此の問題とは又關係もあるまい。

現在森林が精神的利用を受けてゐる所を観るに、一番顯著なるものは社寺林からであらう。此處には林木と云ふものゝ存在を認めて初めて、その神社なりが表現出来る様な氣がする。次に近代文化の一發展とも云ふ可き公園の存在である。之れはどうしても林がないと淋しいし、月寒牧場の如き土地が若し公園と撰定されたのじや意味をなさないだらう。次に遊覽地だ。温泉なり、海岸なりの或る部分には森が重要な慰安所となつてゐる。黒松の影、又潮風に響く松音、總ては生きた印象を興へる。他に記載す可きは近時夏季に行はる林間學校だ。之れはどうも林間じやないと成立しそうもない。之れの發達は年々著しい進歩だけれどもまだ明瞭な林木保護の氣持が同時に行はれてゐない様な氣がする。只森から受ける精神作用は充分に發揮されて居る。

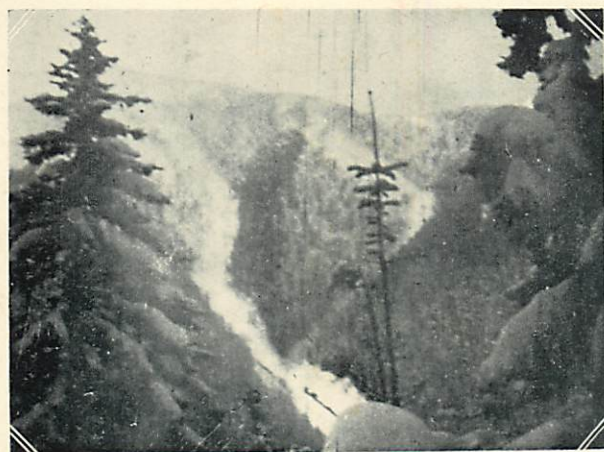
現在利用されてゐるのは之れ位のものだらう。外に物質的と共に併合して應用されてゐることもあらうが、此處ではこれで止める。

然らば將來森林美を利用する方法として、如何にすればよいかを斷片的に記載する。

前記の様に二三利用方面が増進且つ効果を擧げてゐるが、此處に特に記して置きたいことは總ての林木、それが喬、中、倭の如何なるものにせよ、繪畫の見地から見て欲しいことだ。此の繪畫と云つても畫家が云ふ畫材云々の意でもなければ、色調何々でもない。美しい自然生物、自然物中一番美點を多分に有するは樹木であると云ふ繪畫意識を常に作用させてもらひたいことである。さすれば林の成立を見ると今までと違つた感象が生ずることゝ想ふ。習慣づけられるまでに繪畫心を



天 狗 嶽 頂 上



天狗嶽中腹より屏風嶽の尾根を望む

有すると、林の皆無は淋しさと單調さを語るに違ひないだらう。

之れを登山或は散歩かに引き込んで考へると、自然森林美が動作中に判明し初め、彷徨の一步を微分化しても相當の効果が擧つて來ることと想ふ。總ての旅行團體等が必ず行る杖折りとか、紅葉折りとかは、此の遠曲法の繪畫心を興すことに依り違からず中止されると解す。又改めて特筆したいことである。

× × ×

餘り山登りとか、スキーから遠視して駄筆しても價値がないことだらうから、情緒的に書きなじつて結末をつけよう。

澤をぐいぐい登り続ける。熊笹が兩方から迫つて來る、薄黒い深い澤だ。腰の所までも浸つて登り続ける。夕日がほんのり笹に輝いてゐる。キャンブして休みたいがそれらしい所もない。小雨が何時の間にか降つて來た。急ぐ。函らしい所に出會する。無理に踏み越す。少し廣い澤に出た。標高は七百米位だ。まだく澤は絶きそうもない。思ひ切つて此處でキャンブだ。腹が減つた。薪火が仲々集らない。枯れた笹は何より心持よく燃へるが集めるには少々苦痛だ。がんびの皮も見あたらない。ほんのきは馬鹿に眼につくが燃へるだけの素質がない。……やつと飯が出來た。天幕張り。霧が多くなつて來て夕暗が早く來る。何でもかまはない天幕の中に轉び込む。今まで氣づかなかつた澤流の音がひしと耳にしむ。今日歩いて來た道を次から次へ考へ出す。とどまつの純林、熊の足印、笹くぐりの悲痛、本流に出會した喜び……………。

(オコタンへ湖行きで)

こうまで苦しんで歩いてどうする、

然しやめたくない……

常に變化極り無き場面の展開、

一息ついて又歩き出す、

重いリユツクはすてたくなるが、

ぐいぐい續けざまに歩く、

夕暗近づくと、足の音が次第に大きくなる。

(三段の澤にて)

x x x

スキー、ことにスキービクニツク位森と親しい感じを興へるものはない。遊び滑る間に何時の間にか林の影に消へて行く。又木を利用してのボーゲンの練習は度胸を投げ出したくなる。ことにスキー地を遠望したとき、其處に樹木が佇んでゐる様はユートピアの理想郷となつかしみを覺へる。昨夜の吹雪で樹氷と化したらしいガンビの小枝は、微風につれて鈴音よりやさしい音調を發する。スキーの味ふ森の美！永久のものである。どんな町のエロ、グロよりもなつかしいものだ。

一つキツスして見たい甘い樹氷かな

野糞かなタンネの裏の人待ちよ

己は奴にほれ込んだタンネ林

(一九三一、五、三、日記より)

## 無意根小屋

鈴木重雄

山に寝ね山に目覺める者に取つて、心配の種にならなくとも氣になる第一のものは、泊る場所があるか如何かである。無意根山の近くにスキー小屋を渴望したのも随分前の話だつた。今は故人となつた「板さん」もその一人であつたではなかつたらうか。その遺稿集には登山記録として、元山の鑛山の廢屋に泊つて遂に無意根山に登山して居る。

僕等の代となつてからは、あの雄大なタンネに包まれた無意根山に登る事は、矢張り一つの大きな計畫の一つに違ひなかつた。併し薄別温泉が出来てからは一般スキーヤーが、無意根山、無意根へとどん／＼登る様になつた。併し尙氣むづかし屋の無意根山はその登頂を許された者は、一シーズンに餘り多くはなかつたらう。或る友人は三回企て、三回共俗に呼ぶジャンツエから追返されたと聞く。登頂許りでなく變化に富んだスロープに一日を遊ぶ事が出来る様になつたらと、夢想したのも今は實現される様になつた。所謂札幌を中心としたスキー小屋の連鎖も殆んど完成されたわけだ。

無意根小屋建設の経過を簡単に記して見よう。今年二月スキー部のある重大な要件で大野部長宅に御伺した節、此のケツテの御話があつたので、無意根山に一つあつてもいゝがと言葉も終らぬ内に、是非小川の上流か、俗に呼ぶジャンツエの近所かにスキー小屋が必要だと極言されたので、スキー部二十週年の記念事業として出来ませうまいかと御相談したのでしたが、先決問題は金であります、金の出道がない。色々と考へた末、スキー部有志で株式組織の様な事にして建てようか等と云ふ程度の事で其夜は御暇したのだつた。その後暫らく御話する機會もなく、従つてその小屋の問題は一時中止の形となつて居

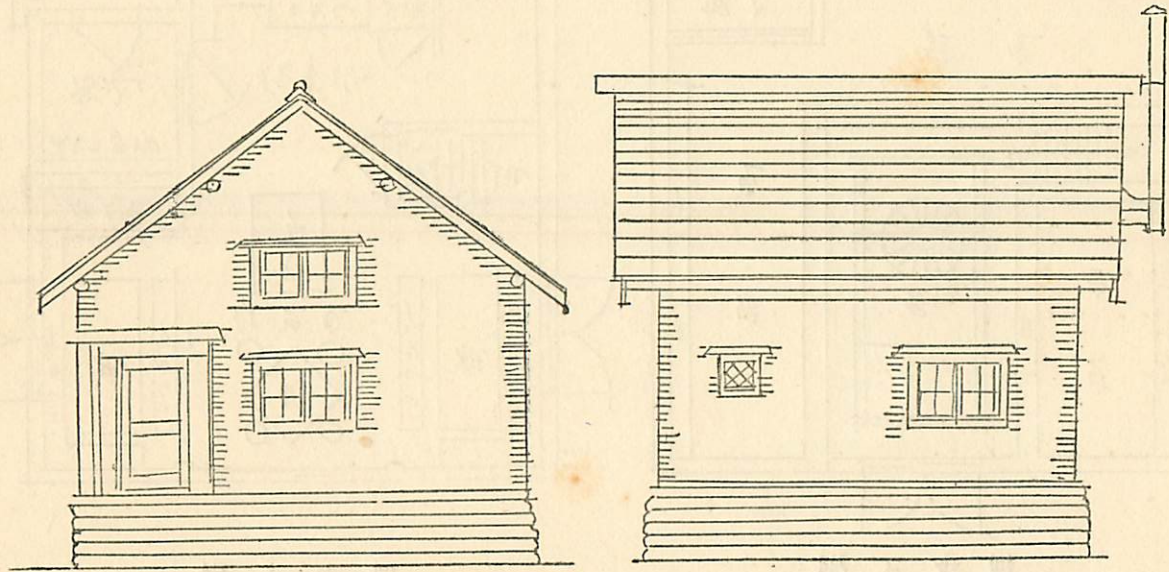
た。大野部長が京都の學會から歸られた四月十日の夜、札幌驛に降りられると直ぐに喜色満面で『無意根山に小屋が出来る様になつたよ。その金も或る篤志な無名氏から貰ふ事になつたよ』と聞かされたときは、非常に驚き且喜んだのでした。がもう半年も前になつて居る。

早速雪のある内に候補地を探さねばと云ふ事で、當時未だ札幌に居たスキー部先輩宇都宮君に御願して、部員三名と四人が出掛けたのでした。私は丁度醫局に入つた許りで、第一回の候補地探しに行けなかつた事は今更ながら残念でたまらない。宇都宮君をリーダーとする諸氏の懸命なる努力によつて、候補地としては所謂シャンツェと呼ぶ無意根山の頂上と長尾山との間に流れて居る、地圖に一二〇〇米と記されて居る瘡の殆んど眞北位に、一本のさゝやかな澤がある。此の澤は吾々が飛行場と呼ぶ平坦なタンネの切れた、本當に飛行機の着陸場にしてもよい位廣い所に出て、大きな澤に入つて小川に注ぎ豊平川へと流れて行くのである。その飛行場から七十分位も入つた所に、冬でも雪がわかれて水を何時も用意して居て呉れる所がある。此處より外には適當な場所はなかつたとの事だつた。同月二十九日の天長節には、部長と私と他の三四名のスキー部員と此の候補地を見に行つた。吾々も途中候補地を探しながら此の場所に行つたのだが、宇都宮君の言はれる様に、雪のわかれた所が一番よかつたので場所は決定した。

東は無意根山と長尾山を續ける尾根が大きなタンネを通して眺められ、北は一寸した小高い所に登れば定山溪天狗の登山者を誘へて止まない岩を見せるし、南に當る所は三〇度近くもある絶好な斜面となつて居る。而も此の邊一體は美しい大きなタンネに所々に白い心持よい肌を持つた白樺がある。無意根の三角點迄は往復一時間半もあれば充分な、風の當らない、世にも恵まれた場所である。スキー旅行者に充分な休息と心を樂しませる景色に、心よい夢を結ばせるであらう場所でありながら、その標高は一〇四〇米位數へる事だらう。持歸つた水も何等有害となる物質もなく、飲料に適すと云ふ藥局の酒井先生から立派な證明を得て、吾々は設計にと仕事を運んで行つた。

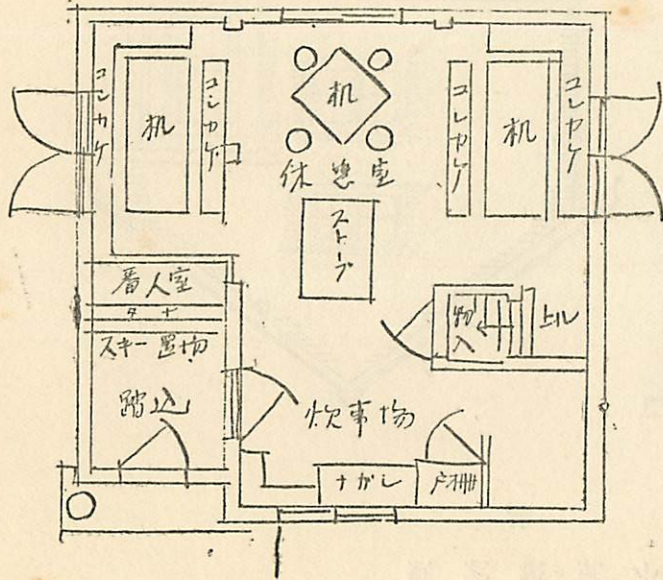
最初解剖學の山崎先生に御願ひ仕様かと思つたが、丁度再度の外遊前で御多忙中の事とて、營繕課の太田氏に御頼みして

無意根尻小屋略圖  
建圖

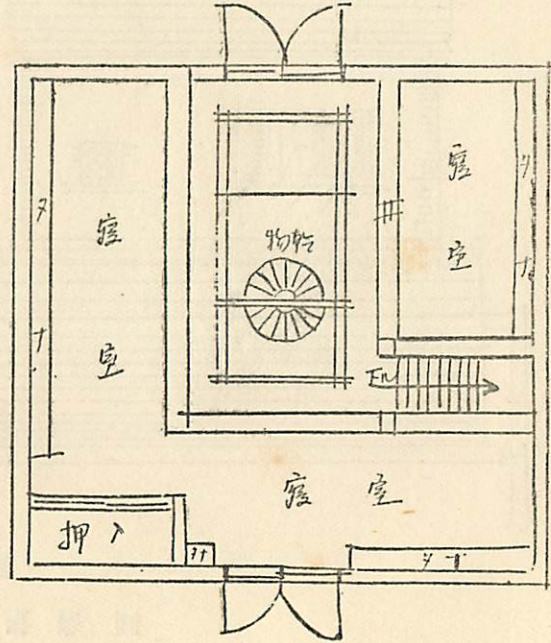




階下平面



階上平面



圖の様な設計圖が出来上つた。大體空沼小屋の其れと同じ様な設計である。階下は中央にストーブがあり、机を置いて休息室に臺所がある。階上は全て寢室となつて居て、ベットが二十許り入る豫定になつて居る。三間の四間の二階建て、總建坪數が二十六坪の立派な小屋である。

次に最も問題になつたのが道路であつたが、小川の上流二股迄は帝室林野局の道があるが、昨年の出水ですつかり洗ひ流されて材料の運搬に用をなさない。尙その上に其處から小屋迄は全く道とてはない。如何しても道がなければ仕事にならないので帝室林野局に御願ひした。所が二股迄は修繕の豫定だつたから修繕はするが、小屋迄新に道を切る事は豫算にないから不可能だと御斷りを頂戴したので、それでは小屋の建設費から出してでも道路を作る様取計ふと云ふので、先づ第一回の交渉は終つた。併し建設費とて澤山あるわけでなし、尙再三の交渉の結果、井上局長、沖野出張所長等の特別の御好意によつて、道路の方は建設費に手をつけずに出来上つたのは八月の末の事だつた。従つて工事を始めたのが九月の始め、而し十月の二十六日頃には落成の豫定で居る。今は唯内部の小さな設備と備品を上る許りになつて居る。その設備も空沼小屋に全て準じて、あの山の御殿の様な小屋が更に一つ増へる事になるだらう。

更に定山溪鐵道會社、定山溪青年團の奉仕的努力で、小屋から無意根の頂上迄立派な道路が作られ、夏期登山も可能となつた。夏には殆んど誰もがその頂上に立たなかつた無意根山も、日曜祭日毎に登山者で賑ふ事だらう。併し彼の女の使命は冬にある。今冬處女雪を迎へる彼の女は本道スキー界の花形としてスキーヤーに見へる事だらう。

若し吾らが一度地圖を擴げて見る時に、彼の女を中心として無意根山の白く硬く氷結した三角柱をストックで打ちシーハイルを叫びたくなるし、又は無意根山を縦走して並河スプリ喜茂別岳を通り、あの親切な三上老人の守る中山峠の小屋にも行きたくなるだらう。そして中山峠の雪の洗禮を受けぬ人は一人前のスキーヤーでなく、又スキーを語るべからずさへ言はれて居るゲレンデを楽しみたくもならう。或は又長尾山を通り今度スキー部の手に完成した長門小屋を訪れ、仲々その登頂を許さぬ余市岳に登る事も出来よう。又は俱知安へと出掛ける事も出来るし、無意根特有の美しく緑に色どられた大きな

タンネの中、又は樹氷咲く白樺の林の中を充分にスキー術の享樂も出來よう。

斯う數へて來れば彼の女の使命は本當に多い。彼の女こそ來るシーズンのスターであらう。更に次のシーズンには彼の女は姉となり、彼の女の妹は漁岳の下に大きな期待を掛けられてその姿を現はすだらう。

彼の女よ、彼女を慕ふスキー登山者に充分な休息と心持よい眠りを與へて呉れ。

(一九三一年)

### 無意根小屋使用規定

第一條 無意根小屋ハ一定ノ手續ヲ經テ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 小屋使用希望者ハ北海道帝國大學產婦人科學教室無意根小屋管理者ニツキ問ヒ合セラルベシ

第三條 小屋使用ヲ出願セントスル者ハ所定ノ願書ヲ小屋管理者ニ差出シ使用許可證ヲ受クベシ右許可證ヲ有スル者ニアラザレバ小屋ヲ使用スルコトヲ得ズ

第四條 小屋使用ハ許可證ノ指定スル期間内ニ限ル但シ止ムヲ得ザル事由(例ヘバ天候、病氣等)ニヨリ使用ガ期間外ニ亙ルトキハ使用済ノ上直ニ届出テ指圖ヲ受クベシ

第五條 小屋使用者ハ次ノ使用料ヲ納付スベシ  
自十月一日至六月三十一日

一人一日ニ付 金貳拾五錢 (一泊五拾錢)  
自七月一日ヨリ至九月三十日

第六條 一旦納付シタル使用料ハ事由ノ如何ヲ問ハズ之ヲ返附セズ  
一人一日ニ付 金拾五錢 (一泊參拾錢)

第七條 小屋使用者ハ充分登山及スキーノ經驗アル者タルヲ要シ

其一行中ヨリ主腦者一名ヲ定ムベシ而シテ右主腦者ハ同行者ノ小屋使用ニ關シ其責ニ任ズベキモノトス

第八條 使用ヲ許可セラレタル者ハ特ニ禁止セラレタル小屋ノ部分及ビ備付器具ヲ除キ一切ヲ使用スルコトヲ得

第九條 使用者ハ使用者心得ヲ嚴守スベシ

第十條 同宿者多キ場合ニハ小屋ノ使用ニ關シテハ主腦者相互ニ於テ之ガ協定ヲナスベシ

第十一條 故意又ハ過失ニヨリ小屋又ハ備品ヲ毀損シタル者ハ賠償ヲナスベシ

第十二條 使用者ハ使用者名簿ニ所定ノ記入ヲナスベシ

第十三條 使用済ミノ上ハ直ニ使用許可證ト共ニ鍵ヲ返却シ且ツ使用狀況ヲ報告スルヲ要ス

第十四條 失念其他故ナクシテ所定ノ期日ニ鍵ヲ返却セザルトキハ其期間ノ小屋使用料ヲ追徴スルコトアルベシ

第十五條 小屋使用ニ關シ不都合ノ所爲アリタリト認ムルトキハ前後ソノ同行加入スル一行ノ小屋使用ヲ許可セザルコトアルベシ

北海道帝國大學產婦人科學教室

無意根小屋管理者 鈴木重雄

(表)

無意根小屋使用許可證

|               |                            |     |         |
|---------------|----------------------------|-----|---------|
| 一、主 腦 者       | 住 所                        | 職 業 | 氏 名     |
| 一、同 行 者       |                            |     |         |
| 一、使 用 期 間     | 自昭和                        | 年   | 月       |
| 一、發 着 地       | 至昭和                        | 年   | 月       |
| 一、使 用 目 的     | 發ノ上到着使用後                   |     | ニ向テ出發豫定 |
| 一、鍵 番 號       | 第                          | 號   |         |
| 一、許 可 年 月 日   | 昭和                         | 年   | 月       |
| 一、許 可 取 扱 者   | 北海道帝國大學產婦人科學教室<br>無意根小屋管明者 |     |         |
| 一、宿 泊 期 間     | 自                          | 月   | 日       |
| 一、宿 泊 人 員     | 至                          | 月   | 日       |
| 一、使 用 料       | 金                          | 名   |         |
| 一、使 用 料 領 收 日 | 昭和                         | 年   | 月       |
| 一、使 用 料 領 收 者 | 昭和                         | 年   | 月       |
| 一、鍵 返 却 年 月 日 | 昭和                         | 年   | 月       |

(裏)

使用者心得

- 一、謙讓ノ德ヲ守リ登山道徳ヲ重ンズルコト
  - 二、小屋内ニテハ脱靴スルコト
  - 三、小屋ノ内外及諸物品ハ努メテ清潔ヲ保チ汚損セザル様留意シ使用シタルモノハ必ズ手入ヲナシ所定ノ場所ニ整頓シ置クコト
  - 四、火氣ハ特ニ注意スベシ
- イ、就寝ノ際ハ消燈スルコト

- ロ、階上竝ニ寢臺ノ上ニテ喫烟セザルコト
- ハ、小屋使用済後ハ燧燻ノ殘火ヲ充分ニ消火スルコト
- ニ、石油其他燃エ易キモノハ火氣ニ近付ケザルコト
- ホ、其他火器ヲ用ユルトキハ注意スルコト
- ヘ、山火ニ注意スルコト

- 五、燃料其他ヲ濫費セザルコト
- 六、退去ニ際シテハ拭掃除ヲシ窓及入口ノ戸締ヲ嚴重ニスルコト
- 七、附近ノ樹木ヲ損傷セザルコト
- 八、使用者名簿ニハ一行ノ氏名到着及出發ノ年月日時刻其他行程滞在ノ狀況ヲ主腦者ヲ先ニシ以下順次概略ヲ記入スルコト
- 九、小屋使用料ハ前納トシ一旦納付シタル使用料ハ事由ノ如何ヲ問ハズ之レテ返付セズ
- 一〇、交付ヲ受ケタル鍵ハ大切ニ取扱ヒ小屋使用済後ハ直チニ返却シ使用狀況ヲ報告スルコト
- 一一、失念其他故ナクテ所定ノ期日ニ鍵ヲ返却セザルトキハ其期間ノ使用料ヲ追徴スルコトアルベシ

無意根使用許可願

- 一、使用期間 自昭和 年 月 日至昭和 年 月 日
  - 一、使用者 (住所、職業、或ハ所屬團體、氏名)
- 無意根小屋使用規定竝ニ使用者心得ヲ嚴守可致候間小屋使用御許可相成度此段及御願候也
- 昭和 年 月 日

住 所  
職 業  
主 腦 者  
住 所  
職 業  
證 明 者  
北 海 道 帝 國 大 學 產 婦 人 科 學 教 室  
無 意 根 小 屋 管 理 者 殿

## 小樽、札幌間スキー滑走記

中村新一郎

青山温泉の冬期合宿を終へると間も無く、飯山の學生スキー大會を手始めに、北海道豫選、又樺太に於ける全日本スキー選手權大會、それから秩父高松兩宮殿下の御來道記念スキー大會、それからそれと約二月に亘つて行はれた各種のスキー大會も、次々と著しい進歩の跡を残して何時の間にもやら過ぎ去つた。又來春米國に於て行はれる冬期オリンピックのスキー派遣選手も略々決定して、夫々來るべき大會に備へるための練習をして居る。

輝く陽光も一日一日と強烈の度を加へ、半歳の間大地を蔽ふた白雪も正に又來ん冬まで暫くその姿を消さんとして居る。溶け行く積雪を眺めつゝ、過ぎ行く此のシーズンを省みれば、今學窓を去り行く吾身に盡きぬスキーの憶出の數々が浮んで來るのである。

スキー競技に志して足掛け五年、期待したる學生生活の最後のシーズンも豫期に反せる惨めな結果を残して過ぎ去つた。之でもうスキーも止め様と思つた事も再三であつたが、然し競技に對する未練は容易に競技をして思ひ止まらしむるまでには到らない。且又スキー仲間との約束、滿四十歳までは事情の許す限り競技を繼續すると云ふ事もあつたので、僅か一二度の失敗で競技を放棄して氣を腐らすのも勇らしくない、改めて又の機會を待つて努力を續ける事にした。

健康状態が恢復した三月初めから毎日練習を續けた。自分には果して四十軒とか、五十軒とか云ふ長距離を滑走し得る能

力が失はれたのであらうか。全く今シーズンの競技會の結果を省みて、自分の體力を疑はざるを得なくなつたが、然し身體が全く平常の状態にあり、又適當の練習をなす時は、必ず長距離競走に對して相當の成績を上げ得ると信ぜられた。

ダウエルラウフはその練習に依つて如何に影響があるかは今更云ふまでもない。三十一五十籽の長距離を滑走し、而かも良好の結果を得るには相當期間の練習を経なければならぬ。勿論如何なる競技にもかゝる事は必要な事であらう。否良結果を得るには必要欠くべからざる事である。又不充分なる練習で長距離競走に出場しても良結果を望む事は難い事である。まして何等練習なしに競技に出場するはもつての外である。

思へば自分は今シーズンは殆ど練習なしに競技に出場した様なものであつた。勿論何も怠つて練習をしなかつたのではない。不幸にしてシーズン中の大半を風邪に悩まされたからであつた。そして競技の結果は果して失敗に終つた。

身體の健康恢復と同時に毎日練習を始めた。勿論競技會は終り、シーズンも半ば過ぎたのでさ程猛烈な練習でもなかつた。毎日四―十五籽を欠かさず練習した。目的は別にない、長距離滑走の能力を試みて見んがためであつた。又同時にかつて先輩岡村源太郎氏の行はれた札幌小樽間スキー滑走をやつて見たかつたのもその一であつた。又出来るならその記録も更新して見たかつたのだつた。

只之等を目的として約二週間餘の練習を續けた。この内にも春の陽光は一日と強烈の度を加へて行つて、雪質も一週間を経ぬ内に全く一變した。そして雪の量も見見る減つて行つた。三月十日頃からは降雪も殆どなく、雪質は全くのザラメ雪となつた。二三の仲間と相談して、適當の日を選んで札幌小樽間を滑走する事を約した。而しこうして居る内に平地の雪は次第に溶けて行き、又學校の試験もそろ／＼終りに近付いて、友人も何時か春の山へと出て行つてしまつた。

三月十六日、前日三段山に登山し少々疲労が残つて居たが、珍らしい好天氣、風も無い。急に札幌間スキー滑走を思立つた。思ひ立つたら矢も楯もない。朝學校に卒業論文を出しに行き、歸る路々札幌間のコース等を頭の中に考へながら急ぎ家

に歸る。早目だが充分に晝食を攝つて、仕度を終へて札幌驛に向ふ。

先輩岡村氏のとつたコースは札幌(恵迪寮前)―小樽(水産學校)で、朝凍雪の時を利用して滑走をされた。自分も前々までは同一コースをとる積りで居たが、思ひ立つた當日の午後は非常な好天候のため溶雪甚だしく、止むなく小樽に行き、夕刻雪面の凍り始めるを待つて走り始める積りで、小樽札幌の逆コースをとつたのである。

午後一時十六分札幌發の汽車で小樽に向つた。午後二時十四分築港小樽で下車、岡村氏の逆コースをとる積りで水産學校に向ふ。溶けて馬糞だらけの道路を歩いて水産學校に着いたのは二時半近く。而し太陽は尙頭上で輝いて居る。スキーを着けて歩ると、溶けて氷水になつた様な雪は二寸位も滑る。全然滑らぬ。

止むなく尙三十分近く待つ事にして、スキーを着けて小樽中學校裏まで行く。そして出發點を中學校裏と決め、歩るきながらワツクスの工合を見たり、コースを考へたりして、午後二時四十五分中學校裏に到着。

殆ど無風にして、太陽は盛に春の熱と光を送つて居る。この雪按配では札幌まではどうしても四時間は要する。若し途中で暗らくなつたら汽車に乗る積りで早速スタートする事にする、尙一度ワツクスを利かすためにヨーデルを更に厚くこすり付ける。

午後二時五十分札幌に向つて第一步を踏み出す。スキーは殆ど埋つて滑らぬ。大腿の一步一步に力を入れて道路に沿ふて走る。十分も経ぬ間に全身汗でびつしよになる。

午後三時〇五分朝里川を渡る。これから先が張碓峠で今日のコースで最も苦しい所だ。僅に足跡の残つて居る軍用道路を登る。汗が盛に眼に流れ込む。仕方なく時々雪を握つて眼を拭ふ。登高十分餘にして道路は幸ひ山の北側になつた。お蔭で雪は未だ溶けずに居る。靴跡と、何日か前に付けたスキーのスパールが微かに残つて居る。左方眼下に春の石狩灣を眺めつゝあへぎながら登高を續ける。峠近くに到るに従ひ雪は次第に硬くなる。又東南の微風は心地よく眞面から漂つて來る。

朝里川を渡つてから、紺碧の海を眺めつゝ登高を續ける事三十二分許り、午後三時三十七分張碓峠を通過して滑降を初め

る。夕陽を斜に受け雪面は漸く凍らんとして居る。スキーは程よいスピードで滑降して行く。(この下りで腰に付けたパンを半分食べる)やがて道路からそれて電線路に沿ふて一氣に張碓川まで下つてしまふ。

雪は程よく凍つて來た。スピードは次第に加はつて來た。錢函に到る平坦なるコースは瞬く間に過ぎて行く。奥手稻、遙山もいつの間にか側方に見向く様になつた。

午後四時十分錢函川の橋を渡つて國道に沿ふて二段滑走を續ける。雪は大部落けて減つてしまつて居る。道路は馬糞で全然滑られぬ。然し雪は全く凍つて充分のスピードを興へて呉れる。體の調子は至極良好。錢函を過ぎる事約一哩位にして後方より來た汽車に追越される。幾ら頑張つても汽車は早い。

國道を離れて山側に沿ふて平地滑走を續ける。途中星置川に出た時どうした事か、川面の雪が全部溶けて渡り得る所は一つも見つからぬ。この川に就いては途中相當注意して、大きな川に近付く時は國道附近を走る様にして居たが、偶然星置川に出た時は渡る所はなし、渉るには深し、時間の過ぎるのに氣をもんだが、結局國道に出て橋を渡る事にした。切角橋に出ると雪は全く溶けて、橋上は馬糞でスキーを着けた儘では到底渡り得ぬ。止むなくスキーを手に下げて橋を渡る。その間に談費した約三分許りの時間を回復するため、輕川まで全力を腕及び脚に盡して滑走を續けた。

午後四時五十五分輕川神社の雜木林を抜けて漸く眼の前に藻岩山、圓山を望む。全コースの略々三分の二は過ぎた。三時間以内の記録を得ると否とは残りの三分の一の努力如何に依るのだ。小學校前の小川を渡る時残りの半分のパンを食べ盡して、水を飲み元氣を付ける。

光風館前より國道右側の電線路に沿ひ雜木林の中を滑走。夕陽は完く手稻の後方に没して、密な雜木林の中には早や夕暗が迫つて來て居る。可成凹凸のあるコースを一心に三角山に向つて走る。

午後五時三十分雜木林を出て直ぐ目の前に三角山を見る。午後六時までに發寒川に來る豫定にて、稻葉君に出迎に出て貰ふ約束があるので、少なからず疲れを覺えた體にも亦一段と元氣が湧き出て來た。それと覺しき人影を探ねつゝ次第に發寒



川に迫る。

發寒川に來た。渡るべき所を尋ねて迂廻せる時、夕暗の前方に突然稻葉君の姿を見出した時は嬉しかった。

午後五時四十分無事に發寒川も渡り、後は札幌神社迄だ。別に障害物もない。一切のチーズを口に頬張り、ガラ／＼に凍つた雪の上を應援の稻葉君に元氣付けられつゝ、屋根三角の林檎林を經、十二軒澤の半鐘の下を過ぎて、最終點札幌神社の第二鳥居前に到る。時正に午後五時五十二分。所要時間合計三時間〇二分。

三時間以上にて滑走し得た事は残念の極みである。

使用スキーはノールウェー製ヒツコリー、ワツクスはブラトリーのクリステルを厚く塗る。滑走終つてスキーの裏を見るに、ワツクスは少しも脱落して居らない。僅かにスキーの前方とエツヂの部分、而かも一部分だけ剝けて居るのみだ。

練習日記より――

『午後二時五十分より四時半頃までは南西斜面の溶雪甚だしく、ために著しく滑走スピードを減ぜられた。

今日と同一のコースを凍雪時（早朝）滑走する時は、恐らく二時間四五十分の記録を得るであらう。

錢函附近は既に溶雪、地表の露出せる所が點々あつた。

幸ひにして近日再び同一コースを走るの機會あらば、二時間臺にて走破し得ると思ふ。』

札幌小樽間は先輩故岡村源太郎氏が嘗て滑走せられ。以來毎年之を行はんとして行ひ得るの機會を持たなかつた。三年後急に思ひ決して此の滑走を行つた日が、偶然にも無き大先輩の札幌間スキー獨走を行はれた日と一致したのも何かの因縁であらう。

## 山班のスキー術 (殊に今年のものに)

宇都宮 嵩

山にての初めてのスキー術の練習は、山の傾面と自分との關係から初まる。それが雄大な、或は短小なと云ふ夫々の傾面に應じて自分の體も氣持ちも變つて来る。初めの人には雄大な斜面は將來を期してやる氣持ちはあるが其の場では決して滑走しない。第一に短小を何より選ぶ。その姿がホツケだらうが、蟹股だらうがかもはない、なんせ轉ばずに滑り通せばよい。實際に皆んなこうやつてゐる。最も重要な初歩の形がこう云ふ場合に區區だから、少し傾面が變化し出すと伸々苦勞する。これがやつと達者になると雄大な傾面を追求する。これもどうやら行り通すともう轉回の練習だ。無理に體を曲げたり、重心なんか自分にはないかの如くスウングされる。一向味く行かない。短時間で多く覺へたいのだから自家獨特にやり通す。やり通せば何よりだがそうは行かない！ こうしたスキー術の傾向が一九三一年に於ける表現だとも云へよう。實際スキー術は下手にはならないが目立つて上手になつたとは僕には云はれない。

之れは何に原因してゐるかと追求すると、スキーは自ら滑るものであると云ふ間違つた意識のもとに置かれてゐるからではあるまいか。スキー自身は勿論傾斜の所に置くと滑り出す、然し決して曲らうとはしない、只滑るだけだ。最大傾斜面に沿ふて滑る。人間のスキー術なるものは決してそう云ふものじやない、母體と云ふ身體のもとでスキーを滑すものである。常にスキーは一種の附屬物であつて、常に體で引き護る様な氣で滑らすのが人間スキー術である。その證據には一流の外國のスキーマンは常にスキーを自分で引きづつてゐる姿が見られ、又シュナイダーの如きは山より滑歩する時に重心を前方に

荷けてゐる。即ち自分自身が滑動してゐる氣持ちで、スキーは單なる滑步條件を満足さす具備に過ぎない様だ。之れは最もスキー術の總てを納得するに最大必要條件と自分は確心する。

此の基本を常に念頭に置いて北海道山班スキー術を少し探研しやう。

山班に於ては多くはスキーそのものゝ快味を充分味はん爲めに多くの廻轉をする。如何なる傾斜面に於ても、又雪質の善惡にかゝらず廻り遊びをする。それが爲め我々は常に廻轉方法のみを講ずる。一三二八年頃即ち四年前までは、山班では多くクリスチアニアの類を種々に利用して廻轉して居た。今の様にボーゲンからでなく、基本を純クリスチアニアと云ふ者に於て致はつた結果、クリスチアニアを基本として左右廻轉の術を練習したものだ。只ボーゲンと云ふものは山の急傾面に於て止むを得ずなしたに過ぎない。クリスチアニアは多くオープンなる種類のもので、身體を上方に立て、廻轉する時の姿勢は自ら後傾斜を呈し、スキーそのものの廻轉の結果多く尻を墜く結果になつたもので、これが自分の逆廻りになると殆んど人は失敗で、その廻轉が成功したときの動作はオープンでなく、所謂ステムクリスチアニアの形を呈したものだ。それを成功者自身は何等それに氣づかずやはりオープンの氣で練習する。それだから山に於て實地に應用するとまるで連續轉倒と云つてよい。

その様だつたスキー術が、色々の人の雜誌並に本に依りてSTEMボーゲンと云ふ廻轉術が實地に應用されたのは、一九二八年の終期から一九二九年に始まつたものである。内地ではどんなものがなされてゐたかわからない。今年二月盛岡に行つたときは、一九三〇年の終り頃流行し出したそうだから、内地でも餘り早い方ではない。此處に又一言したい事はホツケと云ふ熟語である。之れは一九二六年の合宿の際に始めて練習したものだ。此のホツケとSTEMクリスチアニアとの交叉から生れ出した結果は、僕の經驗から檢ると一九二八年だつたと思ふ。斯様に斷定すると者と否定する者もあらうが、山班に實地に應用されたのは此の年と云つても好い。何故なら、班と云ふ團體班が總合してやり始めたのは此の時の合宿及び諸山登行に實行され出したからである。それから今年まで三年になる。此處に注意して置きたいことは、重いリュツクの下降の時は



ニセコアンヌプリの遠望



ニセコアンヌプリの中腹

杖に非常に體を託してゐた關係上自然ホツケの姿勢は忘却され、只轉はずに降ればよいと云ふ一傾向もあつたことである。之れは現に相當根強く多くの人から實行されて居る。

次にスキーと重心の位置の關係から此の普通の下降法を考へると、今リュックが二貫目内外の重さを有してゐた場合とすると、下降してゐる姿は少からず前傾の形を呈する。それが故にスキーの中心より前方に重心位置が在存し體の不自由を感じる。此のとき廻轉を決定する場合は、重心の位置の不自由さから自ら後傾し必ず轉倒の止む無きに至る。此の時に彼の不自由を征服することが出来れば、所謂熟達した人としてスプールの痕跡を残す。今年に於て最も見る可き一傾向は此の姿勢の發達であつたと想ふ。然し之れは數人の向上であつて、二年目位のスキーマンは只廻轉したい一念からの動作であつた爲め無理な廻轉をなし、體に特に足部に相當苦痛を感じてゐるらしい。

次にホツケ姿勢からの廻轉だが、之れは殆んど山班の人から研究實行されて居た。而して直滑降から急に廻轉を實施する場合に、ホツケ姿勢そのままから廻轉する者と、ホツケを變化し普通の立つた姿になつて廻轉する者との二別を考察する。前者は總てステムに依る廻轉であつて、重心は常に直滑降してゐた場合と同様な位置に於て、只左右足部に加はる重力の變化と今までの速度とを利用してステム廻轉するものである。その時に表はれるスプールの痕跡の變化は只動作の急緩に依る表現に過ぎない。此の場合に重心を後退すれば必ず尻部を雪面に附着さす。特にリュックが負荷されてゐる場合は之れが非常に多い。又之れは割合に轉倒せず只尻部を雪面に残すのみで廻轉する。スキー部の山班の多少經驗ある人は皆んなと云つて好い位之れをやつて居る。此處に一考を要することは、此の重心を雪質に應じて或は少く、或は可なり多く變化させることである。自分が前記した重心不變の規則と云ふものは一つの定義であつて、所謂良好な雪、粉雪或は之れに近似してゐる場合を總稱して述べたもので、濕性の酷い、或は硬雪化した傾面に於ては自ら利用變化を生ず可きである。此の變化の爲めステムではあるが、色々な名稱を有するスキー術の表はれとなりて實行される。例へばステムボーゲン、シェーレンボーゲン等の名稱のスキー術が出る。自分は之等の區別は決してしたくない。又する必要のないものと思ふ。只安全に下降廻轉

が出来れば止む得ずとも満足する。一番主張して置きたいのは只重心がホツケの場合の如く出来る限り不變な位置にあり、スウイングが最大斜面になつた時に實行されんことである。

次に後者の場合を見ると、之れは初めから普通の立つた下降より廻轉する場合と同じ理由で、その長所及び短所は前述より考へらる。之れは斜面が雄大で且つ平易な所では面白く實行されるもので、前者を練習する前の一方法と云つても差し支へない。

斯様に記述して見れば、今年の山班のスキー術の一般傾向は些少とも納得出来るものと想ふが、之れを又分解して廻轉法の種類に示すと、ステムボーゲンとステムクリスチャニアの二つに分割される。又ステムクリスチャニアを左右兩足の重さの加へ方に依り色々の名稱のもとに區別出来る。然し之れは吾々が山を歩く時に必要に迫られる事はない。只徒らに名稱に應じ動作を爲すと雪質の變化に應ずることが甚だ困難である。容易に迫られ次第に自分で廻轉法を考案したものが一番理想なもので、其れには必ず自ら名稱が附く。こう云へば基本スキー術はステムボーゲンのみで結局治りが着く理由である。之れは實際今年山班に表はれた一現象であつて、その進歩のみが今後の山班スキーの運命を左右するものと想ふ。

終りに、總括して分類的に今年の山班のスキー法を列記すると、

- 一、普通の滑降からステムボーゲン或はステムクリスチャニアを爲しての（ストックの使用如何に關らず）廻轉法。
- 二、ホツケ姿勢のまゝでの廻轉法で主にステムクリスチャニアを行ふ。
- 三、一及二法組合せのもの。

四、幾分クリスチャニア及びテレマークでの下降法を認める。然しこれはステムの一種と見做し得。

山班のスキー術と云ふとシードポット以上まで記述する必要ある様にも考へるが、僕は只單なるスキー術と云ふ名稱のもとでそれ以上の事は書かない。まだ／＼スキー術の研究はその入門位の程度だから、今後の實地に伴ふ研究が多分に殘されてゐる。若きスキーマンの元氣と自重とを期待して良好な成績を待つ。

## ニセコ附近の温泉と山

### 小池 茂

最近素晴らしい勢でスキー登山が一般化されて来た餘波を受けて、嘗つては吾々北大スキー部員にのみ許されたる祕境であつたニセコアン一帶も、急速なテンポでポピュラーになつ来た。然して昭和三年畏くも秩父宮殿下のニセコ、チセ、御登行の擧あつて以來、北海道のニセコは一躍日本のニセコへ躍進したかの觀がある。

此の今日の繁榮をなした原因を考へて見るに、雪量の豊富な事、ニセコ、チセ等の見るからに登山者として垂涎たらしむる様な美しい山々の存在、見渡す限り眞白な素晴らしいケレンデ等々をあげる事が出来る。が、然し之等の優れたるフアクタも其の處々に點在する數多の温泉宿の存在に依つて一〇〇%効果づけられて居る事を忘れてはならない。吾々は之等の何れかを根據とし、或ひは又温泉から温泉を辿り歩く事に依つて、思ふ存分山とスキーの快味に陶醉する事が出来る。

今や札幌を中心とする附近の山々のヒュッテンケツテも完成されんとして居る今日、之と對稱してニセコ附近の温泉と山の關係を見直すのも面白い事と思はれるので、左に極く大雑把ではあるが、温泉を中心とするスキーコース其の他に就て書いて見たいと思ふ。何かの参考になれば幸である。(以下五万分岩内區参照)

### 青山温泉

此の一帶には青山温泉不老閣を中心に宮川温泉、紅葉谷温泉等がある。言ふ迄もなく不老閣は北大スキー部の合宿所とし

て永年おなじみ深い處、又昭和三年には長くも秩父宮殿下のニセコ、チセ等へ御登攀の際の御宿所となつた光榮を有して居る。昆布驛より約二里。驛から直に夏路に依り容易に達する事が出来る。最も入り易いだけにスロープ迄少々距離のある欠點がある。

大學スロープ、温泉から十五六町、八三九・三通稱モイワの山麓がそれである。二〇度から三〇度位の可成りに豊富なゲレンデを有し、初心者の練習にはもつてこいの場所である。現在日本のスキー競技界や山岳スキー界に重きをなして居る、多くの先輩諸兄も嘗つては此のゲレンデから巢立つた事を思へば、實になつかしい思出のゲレンデである。モイワへはスロープの尾根を其の儘登れば良い。約一時間半もあれば頂上に達し得る。

ニセコアンヌプリ、(一三〇八・五) 其の容姿の秀麗なる且つ又標高の點から言つても、先づ此の一帶で斷然群を抜きまさに王座を占むべき山である。此の一帶の通稱を誰れ言ふとなく「ニセコ」で表現する様になつたのもむべなる哉である。温泉から香川團體を横切り「狩太村」の「太」の字の當りにとつつき、標高數字一〇〇〇米の邊りに出で、第二峰直下を迂回して鞍部に出て頂上に達す。晴天の際は目睫の羊蹄は勿論、遠く無意根、余市から日本海、噴火灣等に至る迄望み得て壯快。登路を下る。若し時間に餘裕のある際は七〇〇—八〇〇邊りの森林地帯でゲレンデを楽しむのも一興。登り四時間、下り二時間。

イワオ、(一一五四) 無名山、(一〇八二) 前者は其の名の示す通り恐しい岩に富み、且つ廣いドームを有する點でまさに一異彩を呈して居る。モイワ或ひは其の東方の夏道の示す峠を経て新山精鍊所跡(現在ニセコ温泉)に出る。此處からは温泉裏の急傾斜を登り廣い平地に出で、其れより比較的岩の少い西南の火口壁を登ると、温泉からニセコアンベツ河口に添ふて登り、ニセコとイワオの鞍部の手前邊りから東南の急壁にとつつき、岩と岩との間を通つて達するの二通りがある。後者の場合は地圖の示す通り急峻なるのと露出した岩石の多い爲、往々表層雪崩を伴ふの危険がある。頂上附近は非常に廣い爲に吹雪やガスの際は餘程注意しないと頂上を誤り易い。歸りは登路の何れかに依る。



無名山へはニセコ温泉裏の急傾斜を登つた平地でイワヲのコースから分れ、地圖に表はれて居る三つの中の最南端のコブに取つゝのが普通である。平凡な山ではあるが、歸路の取つときのコブ下の長い急傾斜は吾々を満足させるに十分である。所要時間、イワオ往四時間、歸り二時間、無名山往四時間半、歸り二時間半。

チセ、スプリ（一一三四・五）無名山（二〇七六） 此の兩者は青山からは最も遠い位置にある。然して前のイワヲ、無名山が同時に掛けられる様に、普通チセへ出かける時には大概此の無名山をもかけてくる。大體のコースは宮川温泉西のスロープを登つて臺地に出で、馬場温泉行き夏道とニセコアンベツ川の支流との中間を平行に馬場温泉に達し、其處からは澤添ひに雑木林の間を登行し、直ちにチセに登る場合には其儘大體標高數字の位置を辿つて行き、若し先に無名山を濟ませて來る場合は標高八〇〇の邊りからチセの裾を大體同高に巻き鞍部より無名山に達する。無名山とチセの鞍部には有名なる娘の股なるエロな名稱を有する好スロープがある。多くの登山者は無名山そのものよりも、むしろ此の娘の股のスロープに憧れて來る人が多いかも知れぬ。然し娘の股で無暗に貴重なエナジーを消耗する事は餘り利口ぢやない。何故なら、此の次に來るチセの盡る事なき豊富なゲレンデを享樂するべく餘りに疲勞してしまふであらうからである。娘の股からチセへ登るには大體南西の位置をとるのが最も良いだらう。最も近いと思はれる鞍部からの登行は、ダケカンバの密生の爲却つて餘計なアルバイトを費さなければならぬだらうから。チセの下りはスキーを享樂する上から言つて先づ此の一帯隨一だらう。先づ東南の方向に下向し初める。最初は四十度から三十五度位の稍コンケーブの急傾斜がしばらく続き、やがて三十度から二十五度邊の稍コンベックスのスラロームを描くには絶好のコンケーブの急傾斜がしばらく続き、やがて三十度から時間に餘裕があつたら、スキー術を享樂するには恰好の場所である。此處等邊りから南に折れて、雑木林の間を縫ひながら馬場温泉に達し、此處で改めてグライドワックスでも塗り、青山温泉に至る迄のグラ／＼下りを軽くストツクを突張りながら、心ゆくばかりスキーを滑らせてくるなら全く無駄のない一日である。所要時間、チセ往四時間半、歸り二時間半。無名

山による場合は一時間半餘分に見れば可。

### 馬場温泉

青山温泉の西北、昆布驛より約三里、青山温泉に至る夏路の途中より分岐せる夏路を辿つて容易に達し得る。此の一帶の温泉の湯本である。スキーの上からの此の温泉の價値はチセ、娘の股等の豊富な然して變化に富めるゲレンデを樂しむ點から最も恰好な位置にある事である。それだけに他の山に對して非常な不便な位置にある事が少々物足りない。青山からチセ等へのコースの中繼所として此の温泉の存在は心強く感ぜられる。チセ、無名山等へのコースは前述と同様。

### 山田温泉

ニセコアンヌプリの東麓、比羅夫驛から約一里、眞正面に羊蹄の靈峰と相對して眺望の良い事先づ隨一。スキー宿としては附近のゲレンデを樂しむ事と、ニセコアンへの登山があるだけ。ニセコアンへのコースは温泉裏から直ちに澤添ひに登り、九七一・三北方の廣い尾根に出で、其處から第二峰にとつつき、鞍部に廻り頂上に達す。登路を下る。上り三時間、下り一時間半。

ニセコアン温泉（井上温泉）

新山精鍊所跡に二三年前に新設された温泉と言ふよりもスキー宿である。大體ニセコア

ン、イワオ、チセの中心標高七四四の處にある。宿の周圍一帯が、ことごとく實に素晴らしい眞白なゲレンデに取圍まれて居る。先づ附近の山に登る上からも、スキーを樂しむ上から言つても最も恵まれた位置にあるわけである。それだけに難を言へば、鐵道からは最も不便な位置にある事、充分なる人數を收容し得ない事等である。此處へ來るには大體三つのコースがある。俱知安驛より入るのは最も普通で、此のコースには俱知安スキー俱樂部員の手指導標が出来て居る。大して苦しい登りは無いが、平凡なコースだけに案外時間のかゝるコースである。大體五時間から六時間見るのが至當だらう。比羅夫驛

から入る場合は、山田温泉に出で、其處からは山田温泉の處で説明したコースに依りニセコの頂上に達し、更にニセコの東北の腹を巻きながらイワオの鞍部に出で温泉に出る。所要時間五時間―五時間半。昆布驛から入る場合は、青山温泉を通つてモイワを越え温泉に下る。大體五時間。

附近の山への登山コースは、イワオ、無名山（一〇三二）等へは前の青山温泉で説明したコースに依れば良い。ニセコへは山田温泉から来る場合の逆コースをとれば良いのであるが、ニセコの西北面は常に強風にたゞかれて居る爲に、多くの場合斜面がクラストになつて居る事多く、且つ相當急峻なのでアイゼンを用ひなければ多少登行に困難を感じる様な事がある。登り二時間、下り一時間。

チセへは無名山から標高八二八の鞍部に下り、其處からチセの東側にとつゞけば良い。無名山の西北面は非常にグテカンバの密生して居る處で、雪の少い時は相當骨の折れる下りである。往き三時間、歸り二時間。

ワイス、ホルン（一〇四五・八）へは大體元山精錬所へ通ずる夏路に従ひ、大沼の東方から斜に尾根に取つゞき、尾根傳ひに頂上に達す。往き三時間、歸り一時間半。

さて、此の温泉に來たなら、歸りの一日をも享樂する事を忘れてはいけぬ。モイワを下つて青山から昆布へ出るのは少々物足りない。さりとて指導標だよりに俱知安へ出るのは愚の骨頂だ。先づ次の四つの何れかを撰ぶのが最も有効だらう。

ワイスから小澤に出るコース、あきる程直滑降を樂しむにはもつて來いである。唯此の際にスタートの尾根を間違はないう様にすることが大切である。即ち頂上から西北に出で居る尾根の最初のコブから東北に分岐する大きな尾根を掴み、それを辿つて「中ピラ」と書いてある處の夏路にぶつつかるとするのが最も經濟的である。之を間違へると驛迄引き返すのに大變な餘分の時間を費してしまふ。温泉から驛迄の所要時間は大體四時間乃至四時間半も見たら十分だらう。次に比羅夫からニセコ温泉への逆コースに行くのも仲々變化があつて面白いコースである。所要時間は比羅夫驛迄四時間。

次にチセへ登り、馬場温泉に下り、夏路を昆布驛に出るコースは、チセの下りを享樂しながら歸る意味で又面白いだらう。

然し馬場温泉から驛迄のグラ／＼は少々長すぎて退屈である。所要時間は大體六時間位。

最後にチセから無名(一〇七六)新見温泉をへて目國內岳に出で、更に岩内岳を経て岩内に下るコースである。此の全コースを一日で突破した人もあるが、先づ途中新見温泉で一泊するのが安全であらう。無名(一〇七六)迄のコースは大體前述したものを綜合すれば分る。無名山から新見温泉へのコースは頂上と其の北方の廣いコブとの中間を西に下り、温泉わきを流れる澤に突き當り、澤添ひに温泉に下る。温泉から目國內へは温泉から岩内へ通ずる夏道を、標高數字七五八の手前邊りから斜に九八〇・八の尾根にとつぎ、九八〇・八を経て頂上に達す。更に尾根傳ひに岩内岳に達し、其處から五万分岩内區に表はれて居る最西の尾根を下り、筍山(五万分島古丹参照)の「山」の處から東北に分岐して居る尾根を擱んで岩内に出る。此のコースは行程も可成り有り、相當骨の折れるコースだけに興味も最も深い。可成りのスキー年齢と體力に自信のあるスキーヤーに依つて行はれてしかるべきコースだらう。(此のコースは青山温泉を基點として馬場温泉を経て行ふ事も出来る)所要時間、ニセコ温泉―新見温泉七時間、青山温泉―新見温泉八時間、新見温泉―岩内驛四時間半。

### 小川温泉

ワイスホルンの東南麓、俱知安驛から約三里、夏路が通つて居る。ワイスへは直接標高數字の處を登ればよく、イワオへは新山精錬所跡へ通ずる夏路をイワオの西方通稱小イワオの處から東に折れてイワオの西南壁を登る。ニセコへはイワオの東麓をまきニセコとの鞍部に出で、ニセコの東北面を巻いて登る。歸りは何れも登路を下る。所要時間、ニセコ往三時間半、歸り一時間半、イワオ往二時間半、歸り一時間。

### 新見温泉

目國內川の上流、蘭越驛から約三里、夏路が通じて居る。チセ、目國內、岩内等へ登山するに便利な位置にある。チセへ

はニセコからの處で説明した逆コース、目國內、岩内岳は岩内へ通ずるコースに従へば良い。目國內から温泉へは可成り享樂出来る下りである。所要時間、温泉―目國內二時間半、目國內―岩内一時間、歸り岩内―目國內一時間、目國內―温泉一時間。

以上極く大雑把ではあるが、大體に於てニセコを中心とする一帯の温泉と山の關係に就て其の殆んどを盡したと思ふ。登山コース其の他は大體部員の嘗つて通つたコースを基準として、極く一般的な道すぢを示すに止めた。

言ふ迄もなく冬の山には大體の方向は決つて居ても、登山路と言ふものは決つて居ない。故に細いコースの撰び方は、時間、天候、其の他のコンディションに従つて、各人各様各々其の時に應じ、地圖と磁石とに依つて求めて行く處に冬山獨特の妙味があるのである。又所要時間は大體餘裕をつけて見積つたものではあるが、之とてもコンディションに依り増減の有る事勿論である。

最後に、最近ニセコ附近が急激にポヒユラーになつて來た結果、ニセコは誰でも容易に行ける山と誤解して居るらしい人の實に多いのに驚かされる。現に單獨で俱知安からニセコ温泉へ目指して、遂に方向を失つて途中から引き返すのやむなきに至つたもの、温泉附近で一夜を明したもの、又はどうやら目指す温泉へは來たもの、遂に温泉から一歩も踏み出し得なかつたもの、等々見聞するだけで十指に達する事實を知つて居る。事實ニセコ附近は一般的に知られて居る程樂な山ではなく、殊に十二月下旬から二月初旬頃迄にかけては天候に支配され、半日乃至一日で忽ちコンディションを一變してしまふ事など珍しくなく、堂々たるパーティーで登山してさえ相當困難する事が往々ある位である。自分はニセコを目指す一般スキーヤー諸君が、より眞摯な氣持で、然も勝れたる指導者を有する相當のパーティーで決行する事に依り、前述の様な失敗をさけ、且つ我々スキーヤーの爲に與へられた天恵の大自然を思ふ存分享樂せられん事を切に希望する次第である。

## ヒユツテ廻り

今井勇三郎

春の陽光を浴びて手稲山の頂上にスキーを立て、腰を下す。眼を北から西、南、東南へと廻らすならば、北に石狩灣を見下し、山は所謂錢函天狗に初まり奥手稲、迷澤、百松澤、砥石、藻岩山に終る一脈と、和字尻、遙山、朝里、白井、余市、美比内、長尾、無意根、喜茂別に至り迂廻して、廣く平地の如く見える中山峠を経て狭薄、札幌、漁、空沼、惠庭に通ずる一脈とを認める事が出来る。迷澤山の向ふには一人容姿を異にした天狗岳が峨々たる險峯を表はし、より遠く遙か西南に眼を及ぼすならば、多分此處に登つて誰もが最初に眼につくであらう羊蹄の秀嶺に接する事が出来る。これ等紺碧に煙る白銀の嶺峯を見ては、山を愛し雪に親しむ者は必ず之れ等の連峯を踏破したいと云ふ希望に燃えたと共に山の魅力に射落されるであらう。實際北海道に居て雪程吾々を魅惑し、北海道の雪程スキーに適し若者の血を躍らすものはなからう。タンネの森、粉雪、岳樺、雪庇、クラスト、克蘭ボンズ、そして頂上、雄大にして男性的な緊張味を帯びた登山が此の北海道では内地よりも容易に味ひ得るのである。然かも吹雪と濃霧とを除いては危険が割合に少ない。之等の變々極りない大氣自然の姿、雪と森林と山の美と快を一緒に味ひながら、約十日間のスキー旅行で手稲山から支笏湖へ山傳ひに抜けるのが大野部長の計畫であり、又吾々の目的とする楽しみである。

かゝる目的を遂行する爲に最初に建てられたのが手稲山のバラダイスヒユツテである。以後續いてヘルベチャヒユツテ、中山、空沼、朝里、山の家等の小屋が、主にスキーヤーの爲に建られて、此の外に定山溪、薄別の温泉と、帝室林野局の二

股の小屋を借りれば、面白く容易にスキーで此の計畫を全うする事が出来るやうになつた。唯一寸困るのはヘルベチヤヒユツテ定山溪間で、小樽内川に沿ふコースを取ると平凡で興味がなく、一方朝里、余市を越えんとすると、一日の旅程としては無理となる。こゝで長門或は元山に小屋が一つあれば非常に便利なのである。こんな理由から部員の手により雪を凌ぎ得るだけの小屋が長門に出来た。薄別、中山時間之亦平々凡々な道であるが、無意根、喜茂別を経て行くと興味津々たるものである。然し之れも少々普通の人には無理なコースである。こゝで又大野部長の御盡力で無意根の麓に一つ小屋が建つ。此の兩小屋は来るシーズンには完全に使用出来るやうになる。今一つ漁岳附近に小屋があれば悠々と惠庭を越えて支笏湖へぬける事が出来る。此の小屋は來年多分建設されるだらう。之等が全部完成すれば、スキーヤーは實に恵まれたものである。

前述の和宇尻より始まり余市岳、無意根山、空沼岳に連る山々の踏破を試みんとして、今春同好者と「ヒユツテ廻り」と稱して二班に分ち、第一班は空沼から、第二班は錢函から出發した。第一班は天氣に恵まれたが、吾々第二班は天候に恵まれず、余市岳は登る事が出来なかつた。

次に拙い日記の一部を書いてみた。

一行 今井勇三郎、川上洗吉、池八郎、東芳雄、古山甲三、荒城秀雄

地圖、錢函、定山溪、石山、

昭和六年三月十九日（晴、午後より曇）

八時三〇分札幌驛發、九時五分錢函驛着。初春の太陽は朗らかに温く照り、吾々の前途を祝福するかのやうだ。試験の爲くしやくしてゐた氣分も此の數分間で何處かへ一掃されてしまつた。通りなれた道を錢函天狗を左に、雪崩かけて大きな黒い口を開けた尾根の端を右に眺めながら氷切り場の上まで来てスキーをはく。尙ほ歩む事四十分にして川は二つに分れて澤は狭くなり、道はその右の澤に沿ふて入る。いよゝ山道の感じが出る。春はよく雪崩れてゐる例のガレを越して、汗を拭ひながら石狩灣を望む。黄濁の北海の海は白蠶を立て狂奔し尙ほ冬の名残を止めてゐる。その侵蝕から白皚々の平野を底

ふが如く、或は太く、或は細く、或は厚く、或は薄く落残りの葉をつけたカシハの林が褐色に浮き出てゐる。海を隔てゝは暑寒別岳の群峯が乗り出してゐる。

休息と眺めは盡きぬが、一杯の紅茶に渴を慰して登る。約二十分にして夏道なれば二又する頃からコースを右にとり、和宇尻山を右に見て遙山に向ふ。十一時廿分晝食。遙山頂上到着十二時五十分。約一週間分の食糧を詰込んだりリュックサツクは相當に重く、古山君はかなりヘバツクらしかつた。重荷を下して暫く休息。此處から南に下る尾根を滑降して鑛山事務所跡の南方に出て、指導標を傳つてヘルベチャヒユツテに至る。時に午後三時廿分。白樺の林は相變らず綺麗だ。清楚だ。小樽定山溪間の道路開通の爲に俗びない事を望む。其の夜は同じ汽車で来て奥手稻山を廻つた中川君の一行と、唯二つのバーチで、山小屋の氣分こまやかに氣持のよい夜であつた。明日の晝食を作つて天氣の快晴を祈りつゝ寝につく。九時半。

三月二十日（曇、風稍強し）

起床五時。七時十分出發。小川に沿ふて家屋が四乃至五軒出來た。多分道路人夫の家だらう。最後の家の附近から道路に出で左曲して橋を渉る。少時にして朝里、白井の間から流れ出る小川を渉り、割合に廣い、のんびりした澤をだらだらと上り、突き當りに出て來る一寸白い尾根に取りつく。沿つて來た澤は此の尾根の左へ大きく入つて行く。右の澤は水も少く型ばかりとなる。此の左の澤を隔てゝ、白井嶽から伸びて來てゐる相當に急峻な山が見られる。上るにつれて後方の眺めはよくなり、白い氣持よいゲレンデに來る。之れを登りつめると又大きなゲレンデに來る。少し急かも知れぬがボーゲンヤステムクリスチャニヤのストラロームを畫くには好適だ。

此の邊から針葉樹に代つて岳樺が出て來る。僕は此の岳樺の林が一番好きだ。針葉樹に綿のやうな雪の降りかゝつたのもよいが、晝とか店頭などでよく見るせいか何んだか俗びた感じだ。之れに反して節くれだつた太い岳樺が丁度程よい間隔を保つて一群をなしてゐる。恰も寒さに抵抗するかのやうに頑強に。北海道に來て初めてスキューを習つた青山の合宿で、ニセコアンヌプリの中腹から強烈な吹雪の爲追ひ歸へされた。丁度此の時休んだのがやはり岳樺林だつた。そして此處から引き



返へした。この時から此の林が忘れられぬものになつてしまつた。何處の山へ行つても岳樺を見るとニセコの林を思ひ出す。登つて行く時は招き、頂上に向ふ時は元氣をつけてくれる。下つて來ると温い懷を開いて迎へてくれる。山に來てスキーを樂しむのは何時でも此處である。眞當に郷里のやうな、母のやうな懐しい氣のする處だ。

此の岳樺の林を縫ふて登ると一〇九七米の地點に達する。此の頃から猛烈な濃霧と風で二、三間先より見えない。時々リユツクが風にあふられる。少し下つていよ／＼朝里の尾根に取りつく。木蔭に風をよけて防寒具をつける。左側は大きな雪庇になつてゐる。右側は岳樺の林で絶好のスロープなんだが残念な事には何もわからぬ。登るにつけて木は小さくなり、時々ミヤマハンノキが小群をなしてゐる。山は段々平になり、雪はクラストとなり、雪坊主を生じて來る。雪坊主とは岳樺或はミヤマハンノキの如き灌木が全く雪の爲埋れて雪の塊の如くなつたもの。之れは山の頂上附近に特有で、風と寒氣で固められてゐる爲ストツク位でつゝいても孔は開かぬ。

頂上三角點を見つけたのが九時五十分。手袋を取り代へて緩い下りを歩いて、上りとも下りとも解らぬ平地の如き原を歩く事一時間半。頼るは唯地圖と磁石と時計で歩いた距りを知るのみ。濃霧と風。此の分では余市には登れそうもない。余市嶽を越えて南へ出るコースを變更して、右股川と左股川の間のかな標高を書いた尾根を下る事に決定。鞍部らしいササ、イヌツゲ等の出てゐる處に來る。確かに余市の麓の鞍部だ。下り口を捜さうと云ふので、此の附近を二回ばかり往復す。急な谷ばかり、少しも尾根らしいものが見當らぬ。一行の不安はつる。方向を異へてゐるやうな氣がする等云ひ出す。風の方から考へて決して方向は異つて居ない。而も磁石によつて來たのだから。でも皆は不安らしく歩くのが嫌になつたらしい。晝食をするにも適地はなし、腹はすく。西南に降れば、間違つてゐても右股或は左股に降るので澤に下る事に決定し、岳樺の林を見つけて晝食。十二時十分。昨夜作つたパンにかじりつく。

數日來の好天氣の爲解けた雪が氷つて、かんかんになつた急坂を逼ふやうにして下る。餘り急だつた爲二人轉んだ。幸ひストツクが谷底まで落ちた位で事なきを得た。谷は流石に濃霧も風もなかつた。少し休んで一時十五分出發。これからは唯

谷に沿ふて下降するのみ。思つたよりも急な谷で、スキーを脱いだり穿いたりして暫く下ると、やゝ廣い澤に出て又急に迫つて斷崖に衝突した。川は此の中へ流込み、雪は兩岸壁から雪崩込んで川を埋む。斷崖からは琥珀の氷柱を立て、谷はますます迫つて頭上を壓す。遂に此の難關は通り得ず西に廻つて進む。此處で小さな澤を合す。多分之れが左股川の上流一〇一三米から兩側に出る川の合流點ならん。然し餘りに澤が小さい。少し尋常でない。行く事暫くにして大きな絶壁を東側に見る。此の時略々左股川へ下つてゐると思つてゐたのは間違ひで、右股川へ下りてゐる事が解つた。川沿ひの急斜面、函の如き所を、スキー擔いだり、穿いたりして行く。四時五十分遂に左股川との合流點に來る。此處で右股川を下つてゐた事が判然とした。

約二十分の休息をして、函から這ひ上り川に沿ふて下る。スプールを見付け之れを傳ひ、四十分にして白井川との合流點の發電所水源地の燈を見つけ思はず皆んなで叫んだ。此の小屋をかりて休息し、その日の食糧もすつかり平げ、バイナップルの罐詰を開ける。水筒の紅茶もなくなる。水を入れて燈をつけ七時出發。九時五十分やつと定山溪元湯に到着。川上君のズボン、古山君のシャツを焼き大騒ぎをした。湯にて疲れを慰し寝につく。十二時。

三月二十一日 (風強曇時々小雪)

川上君のズボンの無いのと天候險惡を幸ひ、疲れを治す爲温泉にて一日休息。東君來る。

三月二十二日 (曇)

起床五時。六時十五分出發。薄別着七時十五分。スキー聯盟の團體と一緒に。小川を廻る。八時二十分小白山を左に見た崖にて小時休息。此の頃より小雪となる。九時三十分所謂シャンツエの下にて休息。無意根頂上十時五十分。シャンツエに上つた時分から喜茂別を呑みかゝつてゐた濃霧は丁度此の時來りて眺望全く遮らる。西南へサイドステツプで降り大きな雪塊の蔭で晝食、十一時三十分。

無意根山から喜茂別岳に連る山々の中腹を横切つては鞍部に出で、横切つては鞍部に出て、喜茂別岳に到る十二時四十五

分。途中中山峠から来た人々に出合つたのだが濃霧の爲め姿を見ず。唯新しいスプールとストツクの跡を發見したのみ。無意根から喜茂別に至るこのコースは、好天氣の日なれば非常に氣持のよい所なのだが残念な事をした。紅茶に渴を慰して、喜茂別の三つの降起を通り最も東の隆起より、標高九六四に續く緩やかな廣い尾根を下る。喜茂別川の上流九六四の北側の澤で昨日札幌で川上君が買つて来てくれた羊羹を食ふ。青山合宿の羊羹も忘れられぬが、此の甘味も又特別だ。二時四十五分。此處まで非常に良いスロープである。天候がよくて晴れてゐたならば見晴しもよく、下るのに道を間違へる心配もなく面白いだらう。殊に九六四は西北が非常に急斜をしてゐる爲誰にもよく目立つ山だ。此の山の東側の中腹を横切つて喜茂別川に下る。時に三時四十五分。

食事をして腹を作り、中山基線の東北地境境界線の東に上り、七九〇米の麓の狭い澤に下つて、此の澤を傳つて又上る。小さく澤が二又する點から左に少し上つて小屋に至る。小屋は谷に向つてタンネの中にあり、速く羊蹄山を望む事が出来る。前には大きな岩がある。小屋には生憎番人が居なかつた。然し戸の鍵はかけてない。前にハガキで豫め通知しておいたので、多分僕等の來るのを豫想して此の擧に出てくれたものと感謝にたへない。到着五時十五分。

### 三月二十三日 (曇)

起床五時。六時三十五分出發。小屋の上一帶はまばらに針葉樹の混つた美しい岳樺の林だ。曇天ながら朝の靜かな落ち着いた氣分はなんとも云へない。此の林を通りぬけて九八〇・二米の東北の瘤の頂上へ出る。丁度七時。踏破して來た山々が北方に見える。殊に余市岳、無根意山は眞白の巨驅を横へて雪の曲線美を表はしてゐる。東方から東北へかけては漁岳、空沼、狭薄、札幌岳等の山々が見える。此れ等の山を眺めると、越えて來た苦勞と楽しみが錯綜し、楽しみのみは浮縞の希望となつて表はれる。

コースを尙も東北にとつて小さな澤の合流點まで下る。此の下りはなかく面白所だ。中山驛遞及び九八〇・二米から出て來る澤の出合ふ所だ。七時五十分。此の頃から又濃霧來る。十五分休み出發。道を發見す。尙川に沿ひて下り豊平川本流

と合す。本流を脚下に見下しながら下つて八時四十分二股小屋に到着す。此處までは降りばかりであつたが、之れから暫くは上りばかりなので、糖分や食物を充分に取り、一時間餘りも休息して十時出發。

小屋のすぐ上に架つた橋を渡り、急な川岸を下り漁入澤を渡つて漸く山に登り始める。上るにつれて想像以外に密林となつて来る。相當に急坂な所もある。十一時三十分三四九・八米に到着。此處にて少し休む。此の邊を越えてからは屋根は段々開けて岳樺林となり、左の澤から上昇して來たエゾマツ、トドマツ等が少しづつ混生してゐる。此處を下るのだつたら實に愉快だらうと迷想にふけりながら上る。

風は強く、雨に霰を混じて吾々の頬に強く打ち付ける。防寒具を着て帽子の垂れで顔を包む。十二時三十分。此の邊から尾根は狭くなり、地圖で思つてゐたよりも脊尾根で山々は段々急になる。灌木、倒木等は雪庇の下地となり、雪庇は階段状となり半間、一間、遂には一丈位にまで高くなつて上る事が出來ぬ。尾根の左側は大小針葉樹及び灌木の密林である。雪庇と密林を避けて急坂な右側を斜に上る。新雪が積つてゐなかつたのと岳樺が疎らに生えてゐたのは、雪崩に對する危険を一掃してくれたので此のコースを撰んだのである。濃霧は濃度を増し、唯岳樺が矮小となるのと、之れにミヤマハンノキの群落が混じて來るので頂上近く來たのを知るのみ。遂に見覚えのある尾根に來り頂上に至る。一時十分。

直ちに西側の岳樺林中に風を避けて食事をする。此處は札幌岳、空沼等から登る道で、これから先はもう經驗のあるコースである。狭薄の北の瘤の西を巻く頃から雪質悪く、水分が多くなつてスキーに付き、滑らないばかりでなく龍骨突起の如くなつて重くて困る。霧は益々深し。時間は未だ早いので悠々と歩んで、三時に一一四〇米の平な地點に達す。ワックスを塗つて見たが附かないのでそのまま、浅い澤を下つて眞簾沼に至る。四時。針葉樹を縫ふて東に進むと足下に万計沼上の眞白い岡が見える。此の岡まで着くと小屋も森の間に見えた。到着四時三十分。

最後の夜なので出来るだけ御馳走をして、苦しかつた旅程を語りつゝ、食事を終る。残る一日の好晴を祈りつゝ九時半就寝。

三月二十四日 (曇)

ヘルマチア  
ヒユツテ



パラダイス ヒユツテ

起床七時。出發八時半。久しぶりで用意もゆつくり整へて昨日の道を一四〇米の地點まで引き返へす。此處からコースを北にとり、下り坂の急斜面に突き當つて西北に折れて下る。狹薄澤の突き當る所、札幌岳、狹薄澤と略々三角形の一頂點をなす瘤の右側を巻いて横ぎる。此の山は遊ぶには面白そうなる山だ。小さな枝澤を渡つて札幌岳からの尾根續きの所謂二見山の左側を巻いて鞍部に出る。此處で防寒具もつけて十二時十分出發。

坂は急になり所々這松が出てゐる。頂上近くの西側は非常に急坂になるので略々二〇〇米位の所から山を右にして西に廻つて登る。頂上一時。濃霧の爲眺望もきかず、直ちに北北西をさして下る。西と北との間の大部を占めてゐる廣い此の尾根は實に面白い。札幌岳の魅惑の一つは此處にあるだらう。愉快に滑り滑つて最後の日を飾つた。雪質はよく、スロープは好適。思ふ存分滑つた。お蔭で澤を間違へて瀧ノ澤へ下る豫定だつたのが冷水澤へ下りてしまつた。大爺淵の口の一番通りに出て馬橋道を定山溪まで滑つて五時五〇分驛に着く。五時頃から降り出した雪は風を交じへて寒く吹荒びかけてゐた。七時十九分豊平着。吾々のスキー旅も終つた。

一行の足並と氣分がよく一致してゐた爲、愉快に旅行を續ける事が出来たのは何より嬉しかつた。此稿を終るに臨んで、時間的に詳しい記載が出来ず、自分の意のままに山々の形狀を畫き出す事が出来なかつたのが残念だ。

## ヒユツテを利用する札幌附近の スキーコースに就いて

安藤政三  
伊藤信康

現在北海道に於けるスキーのゲレンデを大別すると次の三つになる。

一、青山温泉を中心とするもの。

二、札幌附近ヒユツテを利用するもの。

三、十勝吹上げ温泉を中心とするもの。

而して一及び二は夫々温泉宿を中心としたるゲレンデである。二の札幌附近のゲレンデには、其の山々の間に建てられたヒユツテの利用に依り、一日に或は数日のスキー旅行を楽しみ得る特種のスキーゲレンデである。

此の数年の間に札幌近郊に於ける山々には大小の色々のヒユツテが増設されたのである。之等ヒユツテを利用する事に依つて、札幌近郊（主に附録地圖に含まるゝもの）の山へ登山する爲に特種の専門的な露営具等の登山旅行具の力を借る事なく、容易に且安全に行ふ事が出来る様になつた。勿論ヒユツテの増設と共に諸スキーテクニククの發達も、一層ヒユツテの利用價值を倍加した事は云ふまでもない。

土曜日又は休日夕べに、從來學生又は特種の登山専門家に依つて占有せられて居たヒユツテは、昨今では一般スキーヤーで充され、或る時には女流スキーヤーの姿さへ見受けられる様になつた。大正二年のスキー登山の記録に、我々のスキー部の先輩が札幌の西方に特有の山容をしたあの手稲山をスキーに依り征服した喜びの記録が残されて居る。然るに昨年五十軒のレースコースの一部にあの手稲山の一部分が含まれて居る。年々とスキーコースが、或はスキーゲレンデが新らしきを求めて奥へ奥へと擴らまつて行き、スキーはそれと共に一般化して來た。之が爲ヒユツテの増設の必要を感じて、現在では次の六つのものと、今年新に建設された無意根及び長門の小屋を合せ、又他の二三の小屋とで附録地圖上に示された様に完全に環状になつたのである。而して大體に於て一日で樂にヒユツテ間を連絡し得る様になり、其のヒユツテ間に存在する山々への登山もアザラシ皮を利用する事に依り樂に且安全に登山し得るのである。

勿論之等近郊の山々には、岩山とか、冬期の残された處女峰と云はれる程の山岳はないが、之等ヒユツテの利用に依り、十二月から翌春五月までは完全なる一大スキーゲレンデとなり、此の内に含まれる種々多様のスロープ、山々の持つ夫々特有の山姿、其の麓を包む針葉樹或は白樺の林、其の間に降り積つた粉雪とは我々を樂しますのに充分であり、四月以後のゾンメルシーとザラメ雪は陽氣な春山特有の氣分に浸らしめて呉れ、且之等各々のヒユツテを利用し、日歸りに、或は數日のスキー旅行をなし得るゲレンデとして、東洋に於いて第一位に位すると言つても過言ではあるまい。

此の最上のコンデイションにあるゲレンデの各コースを、日泊ビュラーになつて行く今日、先輩の、其の他の人々の殘せし記録を基本とし、微力ながらも我々の經驗を合せて附録地圖と並行し各コースを總括したいと思ふ。之が一般スキーヤーの爲に少しでも參考になれば幸甚である。

次に我々スキー部の關係せる二三のヒユツテの内に、特種階級の登山専門家には無用に、或は不滿なものもあるかも知れないが、小さなヒユツテ一つの建設が、一人でも多くの人をば煤煙の街の空氣から離れて、一夜でも樂しく靜かなヒユツテの生活を味ひ、且一日でも樂しく且安全にスキーを樂しむ事が出來たならば、我々のヒユツテも且又他のヒユツテも大半は



其の役割を盡して居るのである。

次にヒユツテ並びに其の位置、管理者を示す。

- |             |      |             |
|-------------|------|-------------|
| 一、バラダイスヒユツテ | 手稲山  | 北大スキー部      |
| 二、奥手稲山の家    | 奥手稲  | 札幌鐵道局       |
| 三、ヘルベチヤヒユツテ | 小樽内川 | 北大醫學部内山崎教授  |
| 四、朝里ヒユツテ    | 朝里岳  | 小樽スキークラブ    |
| 五、長門ヒユツテ    | 長門   | 北大スキー部      |
| 六、無意根小屋     | 無意根山 | 北大病院婦人科鈴木重雄 |
| 七、中山ヒユツテ    | 中山峠  | 北海道山岳會(道廳内) |
| 八、空沼小屋      | 空沼嶽  | 北大醫學部大野教授   |

以上スキー専門のヒユツテとして建設されたものであり、食器、飲事具、寢具、薪、ストーブ等の備付あり。次の二つは林野局の小屋であり、スキー旅行に利用せらる。

- |        |           |
|--------|-----------|
| 九、二股小屋 | 豊平川上流     |
| 十、萬計小屋 | 空沼小屋の下にあり |

以上を利用する際には必ず管理者と交渉し許可を得、鍵を携帯する必要がある。次に各ヒユツテを中心としたコースを類別して行く。各コースは必ず附録せる地圖と並行して讀まれん事を希望します。

### 手稲バラダイスヒユツテ

北海道に於て建設された最初のヒユツテであり、之等山々に入る第一の人々であると同様、北海道のスキー界を發達せし

めた搖籃の地である。又其の位置が札幌から最短の處にあり、且色々のスロープを背後に有して居る、初心者の方にも経験者に伴はれるならば一日でも往復出来る位置にあり、札幌の圓山附近で味ふ事が出来ない快味を味ふ事が出来る。冬期シーズン中小屋番が居り、收容人員約三十名、使用者は北大スキー部の輕川驛前休憩所で鍵使用券、宿泊券を受くる事。

#### 登路

輕川小學校——植林中の防火線——千尺高地——ヒユツテ（一時間半—二時間）。指導標あり。此のコースが一番樂であり又安全である。

#### 歸路

(一) 登路を逆に下るもの（一時間—一時間半）。

(二) 地圖上手稻山の北部の五〇一の所より下るもの、之を大曲のコースと通稱する。

(三) 小屋——（一時間）——手稻山頂上——永峰澤——右股——小別澤——札幌圓山（三時間—四時間）。但し右股、小別澤間は平坦地であつて、此の間は何等興味もないが、頂上より右股までのコースは愉快なコースである。指導標なし。

(四) 小屋——奥手稻山（三時間—三時間半）。指導標あり。ヒユツテの裏を右の上方に白樺の林の中を登り、六〇〇—七〇〇附近を等高線に行き、九七一米の手前の鞍部に至り、九七一米の北側のスロープの雪庇の下を通り、九七一米の北側尾根に登りつめアザラシを取り去り、奥手稻（地圖上九四九・二米）の東側の鞍部まで滑り續けて行く。此の鞍部から次の四つにコースが分れる。

A 鞍部——奥手稻山の家（三、四十分）。指導標及び電線ありて、鞍部より南側に少々下りて、次に等高線を行きヒユツテに至る。

B 鞍部——奥手稻頂上。指導標及び電線を傳ひて北東に行く尾根を行き、地圖上→印のある凹地に至る（此の間ブツシュ多く下滑には餘り愉快でない）之より北西にコースを取る（此附近よりブツシュ少し）而して西側の澤に下りて錢函に

至る。

C 鞍部——奥手稻山頂上——西方尾根を下り、七〇〇米附近の白樺の林の中を滑つて西側の澤に入りヘルベジャに至るもの(二時間—三時間)。指導標あり。此のコースは頂上から一氣に滑り下る事が出来る。

D 鞍部——頂上——頂上北側の瘤より地圖上境界線を行き錢函峠に至るもの(一時間半)。之より遙山——錢函へ下る(二時間)もの。錢函峠——(二時間)——錢函驛へ下るもの。

(五) パラダイスヒユツテ——(四)のコースの九七一米の所に至り、奥手稻に下るコースを少しく南方に取り、九九四米に至る尾根を通り迷澤山に至る(三時間半)、——地圖上の二つのコースの何れかを選びて迷澤山頂上東方の九〇〇の瘤に至り——八五八・九米の所との間の尾根を發寒川に下りて右股に至る。但し此の間注意すべきは發寒川に下る尾根であつて、吹雪等の場合早く下り過ぎるとスロープ急にして、又樹木が多いから注意を要するが、如何に吹雪いても東方に向ふ澤を下る時は發寒川に下れるが、迷澤の頂上の東側の澤は瀧の澤となり定山溪に至るのであるから注意を要する。

パラダイスを中心としたスロープは頂上及び八三七米附近のスロープはネオバラと云はれ、又永峰澤に下るスロープもヒユツテから一日遊びに充分なる快味を味ふ事を得る。

### 奥手稻山の家

札鐵局の建設所有になり、小屋番もシーズン中居り、設備も完全であり、錢函驛、ヒユツテ間に電話もあり、各方面への指導標もあり、又所謂ユートピアスロープの間にあり、春四月の頃でも偉大なる針葉樹の蔭に粉雪を求める事が出来る。收容人員三十八人、使用券は札幌、小樽、錢函の各驛にて發賣して居る。位置……奥手稻頂上に至れば、指導標及び電話線により安全に小屋に至る事を得。(奥手稻山南方にある澤の上流の支流の八六〇米附近にあり。)

登路

(一) パラダイスヒュツテより(四)のAのコースを取る(三時間餘)。

(二) 錢函、小屋間即ち前述Bを通るもの(四時間—五時間)。即錢函の西側にある小川に沿ふ指導標に行く。

(三) 前述Cの逆コースを通りヘルベジャより來るもの(三時間餘)。

(四) 前述迷澤山、札幌圓山間を逆に來るもの。之は登路として最長、困難にして、圓山を早朝に發して一日のアルバイトと見て來れば良いが、雪質或はバーテイ等の諸條件を満足してのみ行はれるコースなり。

(五) 又特別に定山溪方面より迷澤に來り此の小屋に至るものあり。然し之は相當困難なコースである。別項宇都宮先輩の天狗岳より來る項に参照されたい。

#### 歸路

(一) 山の家——北側澤に下り、奥手稻からヘルベジャに至るコースに合するまで指導標に傳はつて行く。

(二) 前述登路(四)を逆に札幌圓山に至る(四時間—五時間)前項迷澤山、圓山間と同様なり。

(三) 奥手稻に至り前述の錢函に至るもの。

(四) 山の家——迷澤——百松澤(三段山)——小別澤——札幌圓山。此のコースは春等の天候の落ちついた日、早朝小屋を發して行けば夕方には圓山に着く事が出来るが、天候に注意しなければならない。勿論指導標等はないが地圖上のコースの尾根と瘡に注意して行かねばならない。

スロープとしては小屋の附近一帯好スロープに恵まれて居り、又前述の通りシーズン中は大抵の場合粉雪を見出す事が出来る。

#### ヘルベジャヒュツテ

小樽内川の白樺の密林の中に建てられたのが、今では夏期に於て小樽、定山溪間の自動車道路の横になつて終ひ、此の小

屋特有の静かな山小屋の気分が失はれて行く様に思はれ、我々に取つて一つの寂寞を感じしめる。收容人員約二十人、設備も完備して居る。位置は小樽内川の錢函峠方面より下る澤と、余市方面より來る澤の二股より三、四町、余市側澤を廻りし所にあり。

#### 登路

- (一) 錢函——錢函峠——ヒユツテ（四時間—五時間）。
- (二) 前述奥手稻より來るもの。
- (三) 定山溪より小樽内に沿ひて來るもの。之は餘り通らないコースである。
- (四) 朝里岳ヒユツテより來るもの（五、六時間）。但し此のコースは朝里岳を通る故天候に左右される。
- (五) 長門——余市——ヘルベジャ。此のコースは長門小屋建設に依り本年よりの新コースである。故に次にある余市登山の項と、長門、余市間の項を参照され度い。

#### 歸路

- (一) 奥手稻に至るもの（約三時間餘）。
  - (二) 登路(一)を逆に行き鑛山事務所跡（地圖上）に至り、錢函峠——錢函驛に至るものと、地圖上數字のある尾根を登りて九〇・九米の遙山に至り錢函に至る。兩コース共に四時間—五時間で遊びながら下る事が出来る。
  - (三) 朝里ヒユツテに至る。之も登路(四)と同様なり。
  - (四) 余市——長門小屋。之も登路(五)と同様なり。
  - (五) 小樽内——定山溪（四時間—五時間）。之は平坦な澤を行くのであるから愉快ではない。
- スロープとして、テクニク練習用として股下山の北側に好スロープがあり、他は白井、朝里のスロープである。登山すべき山として余市、白井、朝里の三山である。

## 朝里、白井、余市岳登山コース

之等三山は標高一三〇〇附近或はそれ以上であつて、札幌近郊の山では最高のものである。故に天候の影響を受ける事甚だしく、一月、二月等の眞冬に於ては吹雪かれる事を覺悟して行かなければならない。又春三月以後の晴天の時でも強風に依り登高を遮ぎられる事もある。余市——白井——朝里間の平坦な尾根は多くの場合クラスト状になり、シュタイグアイゼンを携行する方が安全である。

登山コースとして天候に恵まれた場合は之等三山を五、六時間で登れるのであるが、順序として白井、余市、朝里の順か、或ひは此の逆コースを取る。前者の方は朝里ヒユツテ間の雄大なスロープを滑降する事が出来る。

ヒユツテ横の澤を廻りて二股に到り、それより白井側の澤に入り、地圖上數字のある八〇〇米附近の尾根を登りつめる。もし早く尾根に取り着く時はスロープ急になり、頂上東北側の崖の印の所に着き、クラストの所を横に沿つて進まねばならない事がある。此のコースの滑降も愉快なものである。

白井より尾根を西方に取り朝里、余市の間尾根に到る。地圖で見ると通りの廣い尾根である故、吹雪等の時は特に注意を必要とする所である。茲より地圖上境界線上を余市岳に取り一四八八・一米の頂に達するのである。之より朝里岳にコースを取り、朝里岳の東北側の一〇九七米より東方に滑降する。九三八米附近まで至りヘルベジャヒユツテ上流の二股まで滑り下つても良い。余市、長門間は以上と長門ヒユツテの項を参照して戴きたい。春期に於てヒユツテ附近の澤の増水の爲、雪橋が流れて渡れない時もあるから注意を要する。但し四月下旬以後の事である。

もしヒユツテより錢函への歸路に於て時間があるなら、春の天候の良い時ヒユツテの横の澤を廻り、二股より北方澤に入り屏風岳附近を通り、和宇尻山の西側遙山（九〇六・九米）に行つても良い。

## 錢函峠和宇尻、遙山について

之は錢函驛より登り三時間餘あれば充分であり、札樽より一日で遙山のスロープを楽しんで来る事が出来る。

二コースは登路として地圖上夏路を通り峠に至り、和宇尻と遙山の間に行き遙山に達する。遙山東側のスロープは頂上より百米位相當の急斜面でスキーを楽しむ事が出来る。春四月中旬以後天候の良い午前中に上衣とシャツ類を脱ぎ棄て、暖い春光を浴びながらスキーをする事が出来る事もある。又前述の通り遙山にヘルベジャからの歸路に来るのも良い。遙山より歸路は峠の夏路を滑降するか、或は和宇尻との間の北側尾根を下り地圖上八〇〇、七〇〇の數字を下り、五〇八米の瘤より禮文塚の橋まで滑り續けて錢函に達する。所要時間二時間餘。

和宇尻山は樹木が多く餘りスキーには適しないが、登路として禮文塚川を廻りて和宇尻に来るか、又は前述の下り路を逆にして遙山に來ても良いのである。雪の良い時は此のコースは澤を登る方が樂であり、下る時は地圖上五〇八米の尾根を下る方が良いが、雪質の悪い時は澤を下る方が安全の時がある。

### 朝里ヒユツテ

小樽スキークラブ所屬、收容人員約二十名で、小樽方面からの之等山々に入る唯一の入口である。登路としては小樽のみである。他はヘルベチャより來るもの、長門より來るものとある、前述の通り長門、朝里岳ヒユツテ間は今年よりの新コースであり、一日の行程と見れば差支へない事と思ふが、余市岳が中間に存在する故樂なコースではない。朝里岳ヒユツテ及び長門の小屋附近を熟知せる人々には安全である。ヒユツテの位置は、朝里川の上流三五〇米附近の二股の西側の澤を登つりめた所にあり、小樽よりは毛無山を通るコースを取る。

### 朝里岳への登路

ヒユツテ南側の尾根に取り着き、地圖上の境界線上を朝里岳に向ふ(四時間餘)。之よりヘルベジャヒユツテに至るも、又再び此前述のコースの通りである。(以上安藤記)

## 長門ヒユツテ

此小屋は豊羽鑛山長門跡に、今年部員の努力に依つて建設されたもので、此小屋自體に關しては三浦義明氏の「長門ヒユツテに就て」に於て詳細に述べられてゐる。此小屋を訪れるには、

無意根小屋よりは無意根小屋の項を参照されたい。又は定山溪鐵道錦橋驛より白井川に沿ふのであるが、錦橋を渡つて豊羽鑛山跡の發電所（驛より約一時間半）までは道がついてゐて、其後人家も絶えるが大體夏道がわかるので、それに沿ふて行くのが最も良い。發電所を過ぎてから道は急に左に曲り再び右に曲るが、此邊に釣り橋がある。此橋を経て澤傳ひに天狗嶽に登るのであるが、それは宇都宮嵩氏の章を参照されたい。右股川と白井川との出合附近に發電所水入口の番小屋があり人も住んでゐる（發電所より約一時間）。其後澤も狹まり元山迄は廢屋一つ見えず、只ケーブルカーのみが所々に殘され寒風の吹く儘に哀れを感じしむる。此邊からの天狗嶽の眺は實に立派である。元山には大きな廢屋があり（右股川との出合より約二時間半）その上を通つて大江澤を渡り、其後も川の中は岩石で通行困難であるから夏道の如く左側の餘程上に行く。ヒユツテは川の右側、ゲレンデに良好なるスロープの中腹にある（元山より約一時間）。ヘルベチアヒユツテよりはそのヒユツテの項を参照、又朝里嶽ヒユツテよりは朝里嶽ヒユツテの項を参照されたい。

此小屋を根據としての登山（此項は長門ヒユツテは今年建設されたものであるから、元山を根據とせる先輩及び其他の諸氏の記録を參考とした）。

余市岳（一四八八・一米）

ヒユツテのすぐ横のスロープを登りつめて、九八三・〇と八七九・六との間の尾根に出る。此尾根は頂上まで續いてゐるのであるし、脊は廣いので樂で安全ではあるが、東側に沿ふて大きな雪庇が形成されてゐるからシユバルテに注意せねばならぬ。九八三・〇を過ぎると大きな崖の瘤がある。その左を巻いて、次の二の瘤は雪庇の下を行けたら近道だ。一二六三を過



ぐればウインドクラストで、次の瘤を左に巻いた所でシーデポット（三月初旬頃からは必ずその必要がある）しても良い。雪庇に注意しつゝ折れ朽ちた三角柱の頂上へ出る（小屋より約五時間）。此頂上は廣く、餘程の天候に恵まれざる限り猛烈な風とガスに悩まされる事が多い。歸りは登りと同コースを取るのであるが、頂上附近は風及びガスの劇しき時には、錯覺の爲に西側に寄りすぎる恐があるので東側の雪庇を注意しつゝ降る。一二六三の降りとヒュツテの上の尾根のスロープは痛快なゲレンデだ。又天候の許す際には境界線に沿ふて尾根を滑降し、八二九への分岐點より澤を降るのも面白いだらう。

#### 美比内山（一〇六三米）

ヒュツテの西側、川向ひのスロープをぐんぐん昇る。八百米附近よりタンネンもまばらになつて美しく、頂上の東側の雪庇を左又は右へ避けて、小屋より約二時間で頂上に着く。降りには來たコースを降つても良いが、尾根傳ひに軽い粉雪を荒しながら一一一・六の三角點へ出て（美比内より約一時間）、數字のある尾根を元山へ（一一一・六より約三十分）一氣に滑降しても面白い。又此逆コースも可能なわけだ。元山より長門迄約一時間である。此美比内山、長尾山間の東北斜面は大ゲレンデであるから、降りコースは何れをとつても豪快である。

#### 長尾山（一一〇三米） 無意根山（一四六〇・五米）

最短コースは元山迄（小屋より約一時間）降りて、鑛山廢屋の南側のスロープを登る。登り口は急スロープとブツシュで悩まされるが、間もなく針葉樹もまばらになつて、胡桃澤を左手に見て行く。等高線六六〇の小山の附近は多くの小澤が切込んでゐる上に、尾根が細いので右山に取つて登る。等高線八四〇の小山を越えると大部廣くなり、カンバがまばらに生えて左手の上に地圖上の岩が眺められる。此邊で澤を一つ渡つて左手の尾根に出ても良い。之から相當急な登りだ。一一一・六と長尾山間に出て眞白な頂上へ（元山より約二時間）。

無意根山へ尾根傳ひに登る。一二八〇の小高い所の先は馬の脊の如く細いので右に避けると好い。此邊から波型のウインドクラストとなつて廣い長い尾根だ。頂上には三角柱の四本の短い脚が雪に包まれてゐる（長尾山より約一時間半）。

であらう。無意根の尾根の一・二八〇米からは痛快なゲレンデの連続だ。無意根山—約二〇分—長尾山—約三〇分—元山—一時間—長門ヒユツテで、後の二コースは以上に約三十分位は多く費さなければならぬ。

歸りは登つたコースを取つても良いし、一一・一・六を経て數字のある尾根を下つても、又更に美比内山へ縦走しても面白い此ヒユツテより

ヘルベチアヒユツテへ。(長門ヒユツテ—六時間—余市嶽—一時間半—白井嶽—二時間—ヘルベチアヒユツテ)

余市嶽(長門ヒユツテより余市嶽への項参照)の廣い頂上から地圖上の境界線に沿ふて東側の雪庇を注意しつゝ、一二九六及びその次の高原を経て白井嶽の尾根に出る。天候にも依るが、余市嶽手前の鞍部から一二九六手前の鞍部迄スキーを擔いだ方が總ての點に於て安全と思はれる。此高原は鱗状のクラストで、此と白井嶽との鞍部に出る所に相當大きな雪庇があるが、其處の南側に雪庇の無い又極めて小さい所があるからそれを容易に抜けられる。残りのコースに就てはヘルベチアヒユツテ—白井嶽の項を参照されたい。此コースは吹雪に遭遇した場合などには、朝里嶽の茫漠たる高原を行く程恐怖に襲はれる事はない。朝里嶽を經る際は(長門ヒユツテ—五時間—余市嶽—一時間—朝里嶽—一時間—ヘルベチアヒユツテ)であつて、余市嶽より境界線に沿ふて廣漠たる朝里嶽に行き、ゲレンデを楽しみつゝ一〇九七を経てヒユツテへ降る(ヘルベチアヒユツテの項参照)。

朝里嶽ヒユツテへ。(長門ヒユツテ—五時間—余市嶽—一時間—朝里嶽—一時間半—朝里嶽ヒユツテ)余市嶽(此項参照)より朝里嶽一〇七九・八を経て境界線に沿ふてヒユツテへ降る(朝里嶽ヒユツテの項参照)。

無意根小屋へ。長尾山へ登り(長尾山、無意根山の項参照)、無意根山への廣い尾根を下つて、東に走る尾根の南側を滑降し澤を渡る。此邊は凹凸が劇しいが、所謂シャヤツエの北側急坂の下に行つてそれに沿ふ小澤を降れば好い(長門ヒユツテより約四時間)。又シャヤツエを降つて二二〇〇、一一〇〇間の東斜面のダケカバ林をくぐり抜けて、一〇六〇の小さな尾根即ちヒユツテの南側上に出る(長門より約四時間半位であらう)。

錦橋驛へ。白井川に沿ふて此小屋に來た逆コースを取るのだが、約五時間を要する。

### 無意根小屋

此小屋に關しては「無意根小屋建設について」鈴木重雄氏を参照せられたい。尙無意根小屋は今年建設されたものである故に、以下に述べられる時間的各記録は、各記録を綜合して割り出したものであるから正確は期し得難いのである。此小屋を訪れるには、

長門ヒユツテよりは、長門ヒユツテの項無意根小屋へを参照されたい。

定山溪よりは薄別まで道がある。豊平峽へ行くのと別れて豊平川の橋を渡り、薄別川の橋を過ぐれば直に薄別温泉だ（約一時間）。温泉から尙暫らく行けば右側に廣い澤を有する小川が流れて來てゐる。此川に沿ふのである。此澤の中は小皺が極めて多く入り混つてゐてコースは詳述し難いが、今シーズン中に指導標が設けられる筈であるから略しても差支なからう。薄別温泉から約三時間で充分である。中山ヒユツテからは中山ヒユツテの項を参照されたい。

此小屋を中心とせるスキー登山。

長尾山（一二〇三米）

小屋の北方の無意根山との鞍部より東方に走る尾根に取り付き、その鞍部に出て長尾山へ登る（小屋より約一時間半）。又シャンツエを経て（無意根山の項参照）頂上へ出ても好い（小屋より約二時間）。歸りは登りコースの何れをとつても夫々興味を興へる。

無意根山（一四六〇・五米）

ヒユツテの南側の急坂を小さな尾根に登り、等高數字のある尾根所謂シャンツエの大スロープに大きな樺の林を抜け出て、無意根の尾根目がけて一直線に登る。無意根山の大きな雪庇も此分岐點附近では盡きてゐる。尾根は何時も波状のクラスト

だ。平で長い。柱の短い脚が雪に包まれて辛ふじて三角點を認識出来る（小屋より約一時間半）。此尾根の滑降は不快だ。だがシャンツエのゲレンデはそれを補つて餘りある。此ゲレンデの南斜面は時として、殊に三月頃から表層クラストを形成するが、地圖上一三四〇米等高線上に笹の印がある其附近は雪庇は何時もないので、其處を降れば雪の良い事がある。一二〇〇米、一一〇〇米の東斜面を存分荒して小屋へ。途中で遊ばなければ頂上より約三十分位であらう。

中岳（一三八七・八米） 並河岳（一二六五米） 喜茂別岳（一二七六・九米）

無意根山を経て、又はその東斜面一二〇〇米附近を巻いて夫々登山出来るが、此小屋を根據としては、之等の山々は鱗状のクラストを殆ど例外無しに有するから、全くスキ一の興味は失はれる。中岳は五時間、並河岳は六時間、喜茂別岳は七時間位で夫々往復出来るであらう。

此小屋より

長門ヒユツテへ。長尾山へ登り（長尾山の項参照）長門ヒユツテの項長尾山、無意根山に於て述べられてゐる各降りコースを取る。何れをとつても約五時間前後のコースである。

定山溪へ。小川の澤を指導標に沿ふて降る。相當面白い。薄別まで約二時間、薄別から定山溪まで約一時間で、薄別からは道がある。

中山ヒユツテへ。無意根山に登り（無意根山の項参照）又はその東斜面を巻いて、中岳、並河岳は頂上へ登らずに腹を行き、喜茂別岳迄約四時間である。此山から中山ヒユツテ迄は約二時間で、中山ヒユツテの項喜茂別岳を参照せられたい。

## 中山ヒユツテ

位置は中山驛遷の南方九八〇・二米の西方に流れ、橋の符號がついてゐる小澤に沿ふて等高線七二〇米附近、美しきタンネンに圍まれてゐる。大さは手稲山のパラダイスヒユツテ位で、丸太造りの二階建、三十人位は樂に宿れるだらう。寢具は藁

蒲團と五六枚の毛布があり、薪が備付けてあるが相當寒さを感じる小屋である。北海道廳内の北海道山岳會が建設し管理を爲してゐるが、虻田郡喜茂別村字黒橋、三上喜六なる人が小屋番人で、此の人に使用申込をしておく必要がある。郵便の都合上少くとも行く四五日前位に申込状を出さなくては間に合はないであらう。頼めば米噲位は小屋にあげておいて呉れる。此小屋の附近は有名なシーゲレンデで、四月の中旬でさへ粉雪を樂しむ事もある。九八〇・二の瘤山と中山峠附近は殊に享樂を與へずには置かない。此小屋を訪れるには、

二股小屋を経ては、二股小屋の項を参照されたい。定山溪——薄別——中山小屋。定山溪より道に沿ふて、發電所の附近で豊平峽へ行くのと分れ豊平川の橋を渡る。薄別川の橋を過ぐれば直に薄別温泉で（定山溪より約一時間）冬期には定山溪か此温泉を利用にせねばならぬ。薄別温泉から小川を右に見て後薄別川を渡る。此の橋は春季の洪水によつて破壊されてゐる事もあるが、橋がなくとも三月初旬頃迄は大丈夫徒渉の心配は無い。國道も雜木林の中に廣く緩傾斜に設けられてゐてすぐにわかるが、多くの澤に沿ふ長いくその曲折は全く單調な氣持にしてしまうものだ。此曲折を避ける爲に薄別川を登りつめて水準標八三四・四七米附近に出ても良いが、狭い澤とその岩石は反つてアルバイトを増すかも知れない。八三四・四七米附近からは茫莫たるダケカバの林になつてゐるが、白樺が道の兩側に沿ふて植えてある。中山峠は驛遺跡の建物も淋しくヒュツテにも近いが、それを見出すには一苦勞するかも知れない。峠より三番目の澤附近から黒板に白の矢印が指導標として樺の木に打ちつけられてゐるが、若し發見出来なかつた場合には九八〇・二米の瘤山へ登り、岩石の北側から西方へ滑降りし、小澤と云ふよりは極めて小さな凹に沿ふのが最良の方法であらう。薄別から八、九時間と見做さなければならぬ。

京極線脇方驛或は喜茂別驛より黒橋を経て。函館本線俱知安驛より分岐せる京極線の終點脇方驛、又はその支線の喜茂別驛より夫々此小屋に達し得る。脇方驛からは和歌山團體の南方の尾根傳ひに七三四米の北側を巻いて七六九・六米に登り、その東南に走る尾根の痛快なゲレンデを樂しんで黒橋へ降る（脇方より約三時間）。黒橋には此小屋の番人三上喜六氏がおられるから御世話になると都合が良い。黒橋からは喜茂別川を遡つて、右から入る三本目の支流を指導標に沿ふて登る。中



山 の 家



朝 里 獄 ヒ ュ ツ テ

山基線には廢屋があり、右側の七九〇の北側は急スロープだ。それを過ぐれば澤は二つに分れ、左のを登れば直に小屋である（黒橋より約三時間）。喜茂別驛からは道路を通つて黒橋まで約五時間。

此小屋を根據とせる登山。

喜茂別岳（一一七六・九米）

小屋のすぐ北側の尾根を降り氣味に圖の如く巻き、ブツシュの多い小澤を横切つて地類の符號がある平な尾根に出る。此處は眞白で西端に針葉樹が集生してゐる。此尾根を横切つて相當急な深い喜茂別川を渡り、九六四を目指してその尾根をぐんぐん登る。九六四の北側は岩の崖だ。その左を巻いて大きな樺林の廣い鞍部に出る（ヒユツテより約二時間）。千米附近からは樺も盡きて、頂上の尾根は廣くクラストを形成してゐる。三角柱は無い（頂上まで鞍部より約一時間）。歸りは大體來たコースを楽しむのであるがヒユツテ迄約二時間位だらう。天候と雪のコンディションが良ければ九六五・一を経て九二六・八、中山驛邊に連なる長い愉快な直滑降を楽しんでもシーハイルだ。

並河岳（一二六五米） 中岳（一三八七・八米）

喜茂別岳へ登つて（喜茂別岳の項参照）夫々小屋より並河岳は約七時間、中岳は約九時間位で往復出来るが、之等の山々は波状のクラストを有する事が多いからスキーの興味は殺がれるのである。並河岳は境界線に沿ふて、中岳は並河岳の東側を巻いて登る。尙無意根岳も約十時間にて往復出来るだらうが、無意根小屋より登ると時間も早く興味も極めて多い。

此ヒユツテより

二股小屋へ。 九八〇・二の北側をけすつて廣い樺林の尾根をしばらく歩き、次の瘤を左又は右に巻いて、その東北のタンネンに圍まれた瘤に到る。此處より東方に走る尾根を一氣に澤の合流點へ降る。此長い滑降は痛快だ（此處まで約二時間）。それから澤の中をしばらく降ると左岸に夏道の通つてゐるのがわかる。前の合流點より約一時間で道のすぐ下に二股小屋を發見する。

無意根小屋へ。喜茂別頂上（喜茂別岳の項参照）より西の瘤へ殆ど平なウインドクラストの尾根を歩き、並河岳との鞍部へ下る。強風の際は此鞍部で休憩する。並河岳、中岳の尾根は殆ど何時も鱗状硬雪でスキ一の興味は少いから、頂上へは行かずに右に巻いた方が労力も省ける。此鞍部からダケカバ一つ無い廣漠たる雪面を行くのであるが、無意根山と中岳との鞍部まで約一時間半位だ。此處より無意根山の東斜面を所謂シャンツェに出ても良いし、天候の許す際には頂上に登るのが面白い。それには境界線に沿ふて急な登りにジツクザツクを切る。九五〇米附近よりその東側に雪庇が形成されてゐる。下の鞍部から四十分位で平な所に出ると直に壞れた三角柱だ。以下は無意根小屋、無意根山の項を参照されたい。中山小屋より無意根小屋迄約六、七時間のコースである。

定山溪へ。二股小屋を経て。「二股小屋」の項を参照。

中山峠、薄別温泉を経て。道路（勿論人跡絶えてゐる）に沿ふて行くのであるから、安全ではあるが無味單調は免れない。ヒユツテ横の小澤に沿ふてしばらく登る。指導標が大體道に沿ふて九八〇・二一の北尾根附近までついてゐるから、それなどをたどつて峠に出る。峠からは茫漠としたダケカバ林であるが、道の兩側に沿ふて所々白樺が植えてあり、水準標八三四・四七附近からは針葉樹木を切り通してある。途中一ヶ所、崖道が崩れ落ちて滑り落ちる危険がある。ヒユツテより薄別まで約八時間、薄別から定山溪まで約一時間である。

無意根小屋を経て。無意根小屋への項及び無意根小屋定山溪への項を参照されたい。約十時間位要する。

黒橋を経て京極線脇方驛或は喜茂別驛へ。ヒユツテ横の澤を降り、中山基線を経て喜茂別川に沿ひて黒橋に達す（約二時間半）。脇方に行くには七六九・六を登り、尾根傳ひに七三四の北側から和歌山團體の南の尾根を脇方へ一氣に降る（黒橋より約三時間）。喜茂別には道路傳ひに約五時間で達する。

## 二 股 小 屋



位置は豊平川上流、漁入澤と本流との合流點で、一名二股と稱せられる地點の本流筋の橋の上方である。日本式の小屋で、小さなストープ及び筵類以外には燃料、夜具の設備はない。此小屋は帝室林野局札幌支局の大夫休泊小屋であつて、其の御好意に依つて宿泊出来るのであるから、一應支局に斷つておく可きであると思ふ。

此小屋は他の小屋に行く中間宿泊所としてのみ多く利用され、之を根據としては小漁山、漁岳、札幌岳、狹薄山等に登山が出来るが、スキーとしての興味は殆ど無いから省略する。此小屋を訪れるには、

空沼小屋より空沼岳、漁岳を経て。空沼小屋の項を参照されたい。

空沼小屋より狹薄山を経て。空沼小屋の項を参照されたい。空沼小屋より中山小屋へ、又はその逆コースは普通一日で行はれるが、天候其他の事故の爲に此處に宿泊せねばならぬ事もある。

中山小屋より。中山小屋の項を参照されたい。

定山溪より。定山溪より豊平川を廻るのである。豊平峽までは道がついてゐるが、其より上は造材が入つてゐなければないのである。夏道には沿ひ得るが途中崖にかけた橋が落ちてゐる故に注意を要する。兩方とも三月中旬過ぐれば通行不能であらう。約四時間を要する。

此小屋より

中山小屋へ。中山小屋から此小屋へ来る逆コースを行くのが最も樂で時間も早い。小屋のすぐ上にある夏道に沿ふて三十分ばかり行き、豊平川本流より西に分れる中山澤を行くと澤の別れ目に出る。此處まで小屋から約一時間位かかる。此澤と澤との間の尾根を行くのであるが樂な登りである。第一の瘤をすぎると針葉樹も少く大きなダケカバの林で美しい。第二の瘤の右又は左を巻いて廣い平な尾根を行くと、眞黒な岩の聳立する九八〇・二の頂上に合流點より二時間半位で着く。之から痛快な滑降だ。岩の北側より西方へしばし滑らせれば小さな澤がある。それに沿ひて行く内に突然一段と急な傾斜に出たと思ふとヒュツテだ。九八〇・二から十五分はかゝらないだらう。

狭薄山を経て空沼小屋へ。小屋の下の橋を渡り、漁入澤を横切つて合流より一番目の澤の右又は左の尾根を八四九・八の廣い平な所に出る。美しきタンネン林だ。漁入澤は三月中旬以後は徒涉せねばならぬだらう。それから此尾根をグングン登る。千米附近より尾根は急になり狭くなつて苦勞する。南側は大きな雪庇で注意を要するし、北側は密生するブツシユである。だがそれも三十分位で樂になつて頂上も近い。頂上まで二股小屋から約三時間半である。以下は空沼嶽の項狭薄山を参照されたい。

漁岳、空沼嶽を経て。之は春山のコースであり、冬期一日間にては困難と思はれるし、漁岳附近のゲレンデは興味あるが平地が長く比較的單調である。春山の記録を述べる。二股小屋より大體夏道のように漁入澤に沿ふても良いが、八五六・二の三角點附近に出て、そのテニスコートの様な眞平な尾根を行くのも樂である。漁入澤の二股附近の函は大したものでもないが、矢張りその右上を求めるのが安全である。此二股附近には來シーズン迄にはヒユツテ建設の計畫があると云ふ由だ。二股小屋より此處まで約六時間である。それから合流の眞中の尾根を行く。此尾根は瘠てゐるが殆ど雪庇もなく、登高に従つて廣大するので困難ではない。漁岳頂上迄漁入澤二股より約二時間を要する。以下は空沼嶽の項漁岳を参照されたい。

定山溪へ。定山溪より此小屋に來たコースの全く逆を行くのであるが、約三時間を要する。

### 空沼小屋

位置は方計沼の北側、方計澤の源である。鬱蒼たる針葉樹に圍まれ、颯々たる風籟と共にそのどつしりした建物は訪れる者に神殿の如き感を與へる。畏れ多くも此小屋は、秩父宮殿下の御出資に依り昭和三年十二月に建築落成し、昭和五年二月十一日から一般に解放されたものである。尙北大醫學部大野誠七氏が管理されてゐるから、使用希望者は申込み鍵を借りねばならぬ。所謂純スイツツル式の立派な丸太小屋で、設備は山小屋としては實に完全であるが、小屋番は居ないので食料だけは必ず用意せねばならぬ。此小屋を訪れるには、

定山溪鐵道石切山驛より。多く用ひられて来たコースである。それだけ安全で、それだけ樂ではあるが又單調とも云へる。驛前より左へ半町程行くと、右に岩石の切割へ行く道がある。切割を過ぎて眞駒内川に沿ふ殆ど平地の道を行く。土場の小學校まで約一時間半。湯澤と眞駒内川との合流點の手前で橋を渡る。小學校から約一時間位。此附近でシールを付ける。しばらく針葉樹林を通り抜け川の流れに沿ふ。橋から約二十分で右に万計澤が入つて來てゐる。此澤の左尾根を傳つても良いが小さな凹凸が多いので、夏の登山路に沿ふ方がより樂である。それは万計澤の次に合流せる澤を過ぎて、その次に入つてゐる小澤の左上を行つて所謂「馬の脊」を登る。八百米附近まで相當急な登りである。八百四十米附近には小沼と稱する沼があつて、その北側を経て西方へ進む。暫く平坦であるが突然城壁の様に急峻となる。此スロープを登りつめると空沼小屋と万計沼だ。御料の小屋は空沼小屋のすぐ下、万計澤岸にある。石切山驛より約五、六時間を要する。

定山溪瀧の澤驛より札幌嶽を経て。地圖上の赤線のある夏道即ち瀧の澤の停車場を降りて、少しく道を東に登り、それから南方に行つてゐる夏道を通る。約二十町位で小さな橋を渡り、平らな所を南に行き、小さな丘を登つて數ヶ所人家のある所に來る。此澤附近から札幌嶽への夏期登山路は左側の深い谷に降つて居るが之に降らずして、右側の澤に入る。此の邊からは兩側は鬱蒼として迫つて來る。其の澤は二つに分れてゐるから右の方の澤を登ると、九三六・二米の瘤の南側の鞍部即ち夏道の峠に出る。其鞍部には峠の記號の杭がある。鞍部から南方には札幌嶽から來た尾根が立つてゐる。其最初の瘤は右を巻いて居るが、その附近は針葉樹の密林で、其の間をジツクザツクを切つて尾根にとつくと、風の關係で尾根の上は雪庇が続いて居り、雪庇は波形をなし凹凸が劇しい。それを過ぐればカバ林の廣大な鞍部だ。樂になる。頂上附近はクラストとなつてゐて、三角柱は失はれてゐる（瀧の澤驛より頂上まで約四時間半位）。此コースは今シーズン中に指導標が設けられる筈である。以下は札幌嶽の項を参照されたい。

定山溪より豊平峽、札幌嶽を経て。定山溪より道傳ひに發電所附近で薄別へ行く道と分れ、豊平峽を小瀧の澤まですゝむ（定山溪より約一時間半）。此澤の出合の手前に發電所水入口番小屋があるからわかり易い。小瀧の澤に沿ふて右から入

る三本目の澤か、又その右尾根傳ひに九四六・五に出てぐんぐん登る。樺と針葉樹の混淆林で狭い尾根だ。一一〇〇米附近からは廣大となり美しい樺の純林で、更にその上は固く雪に埋れた偃松である。頂上まで豊平峽より約三時間半位であつて、以下は札幌嶽の項を参照されたい。

二股小屋より狭薄山を経て。二股小屋より漁岳、空沼岳を経て。二股小屋の項を参照されたい。

此小屋を根據とせる登山。

狭薄山（一二九六・一） 札幌嶽（一二九三・八）

万計沼よりその西側の小澤を登れば相當急なスロープとなる。之を登つて岩の印がある瘤の北側附近に出るが、瘤と云つても之はそう目立つものではなく、此附近は針葉樹の密生せる南北に走る尾根の如くなつており、之に沿ふて更に西側に之と同じものがある。此二つを横切つて平原の様な真簾沼に出て之を縦斷し、西方より走り來る尾根の左側をノージツクザツクで登り廣く平坦な地形に出る。平坦と云つても比較的であつて凹凸が多いのであるし、曇つて居る時、又は吹雪の時は尾根を取違へる恐があるから注意を要する。此地形を今假りに便宜上真簾平と名付けておく。一二〇四より來る尾根はその南側に大きな雪庇があるからすぐにそれと知る事が出来る。又その尾根と狭薄山の尾根との間の澤は猛烈に急であるから、後者の南側に沿ふ様にすれば殆ど誤りはない。此尾根の一一二〇附近は小高くなつており相當長い降りだ。次の瘤の右を巻きすぐその右側の瘤との尾根に出てその瘤の左側を行き、又次の瘤の右側を巻いて狭薄山との鞍部に出る。狭薄山は南側は切り立つており、西側はウインドクラストで、北側はカバが密生してゐる三角形だ。その北側を斜に登り西側に出て頂上に達す。普通小屋より約三時間である。頂上より小屋に直接引き返すならば來たコースを辿るのである。小屋まで約二時間半であるが、天候さへ良ければ札幌嶽をも極めると面白い。

それは狭薄山のすぐ北東の瘤の北側に出て、その瘤より東北方に走る尾根を降るのであるが、冬期に於ては何時も良好な粉雪で楽しんで餘りある滑降だ。此滑降も盡きんとする所は急峻となつてゐるから、一つ南の尾根にその手前で移れば後が

樂である。一一四〇米の瘤はその左側を登り氣味に巻く。北西側は大きな凹を爲してゐる。札幌嶽の尾根に出て二つの瘤の間を通る。此瘤から南西に走る尾根には大きな雪庇が形成されてゐるが、此附近のスロープはゲレンデの誘惑を興へずには置かない。札幌嶽の頂上に達するには二通りある。一つは此尾根を登るのであるが、一二〇〇米附近からは急峻で堅雪であるから、シュタイグアイゼンの必要も無いがスキーを脱しなければならぬ。他はダケカバの林より上には出ずに頂上の南側を巻き、數字のある尾根の雪庇を切つて西側より達するのである（狭薄山より約三時間）。

札幌嶽へ小屋より直接行くには、眞簾平に達したならば狭薄山、又は一〇五九・四へ出る尾根へと取違ぬ様に注意する。それには前述の如くして狭薄山への尾根を確めた後、眞簾平の西側に沿ふて目的の尾根を降るのである。百米程登りの瘤はその右側を巻いて、之より北東に走る尾根の東側に形成されてゐる雪庇を切るか或は左に避ける。次の小さい瘤を降れば以下は前述の如くである（小屋より約四時間）。歸りは小屋より直接に來たコースを取るのである。頂上より東南の尾根を下るには矢張り安全な所までスキーを擔がねばならぬ。二つ瘤の滑降は此コース中唯一のゲレンデである（頂上より小屋まで約二時間半）。

#### 空沼嶽（一二五一・〇）

小屋より直に方計沼を横斷し、その南方の小高い平な所を過ぎて、殆ど平な地形を右寄に南方に進めば、眞簾沼の東方瘤より東西に走る針葉樹の密生せる尾根に打衝る。それを越えて降ると空沼嶽より西に走る尾根が大きな雪庇を以て迎える。此雪庇の東寄にその切れ目があるからそれを通つて、南側のダケカバををくゞり頂上に達する（約一時間半）。歸りは登りコースを全然たどる（約一時間）。又尾根傳ひに眞簾沼に降り狭薄山を登るのも面白い（空沼嶽より狭薄山まで約三時間）。狭薄山の項を参照されたい。

#### 漁 嶽（一二一八・〇）

距離の長い割にスキーには興味の少ないコースである。空沼嶽へ登り（空沼嶽の項参照）之より南に走る尾根を境界線沿

ひにたどるのである。一一〇米附近の約四〇米程の降りは狭くて急であつて、此處を降れば小さな雪庇があるがその下を巻くと樂だ。間もなく平坦な地形に出れば、之は約一時間も続き、僅にダケカバの倭小なものがあるのみである。天候が良ければ支笏湖、惠庭嶽も眺められて散策気分もする所だ。此地形も盡きる所の瘡はその南斜面は偃松で、不快な滑降だからその少しく西側を下る。鞍部は針葉樹林だ。次の瘡からはダケカバも少く、漁嶽東側は廣大なスロープを展開する。境界線に沿ふて頂上の尾根に取付くのが最もよい。此尾根は長く細く、三角柱は失はれてゐる（小屋より約六時間）。歸りは登りと同コースを取る。漁嶽のテレスの滑降は相當面白い（頂上より小屋まで約三時間半）。

#### 此小屋より

札幌嶽を経て瀧の澤驛へ。瀧の澤驛より此小屋に來た逆コースを取る。約七時間を要する。

札幌嶽、豊平峽を経て定山溪へ。定山溪、豊平峽を経て來たコースを取るのが最も面白い。九四六・五から直に小瀧の澤に入つても良いが、地圖の如くやせたブツシユの尾根を右に避けて降るのも面白い。札幌嶽より定山溪まで約三時間半を要する。又札幌嶽より冷水澤を下つても良いが、澤に入つてから九三六・二の南方の峠より來る澤の二股附近までは猛烈なブツシユだ。それを過ぐれば比較的樂になる。札幌嶽より定山溪まで約四時間位である。

狭薄山を経て二股小屋へ。二股小屋より狭薄山を経て空沼小屋へ達した、コースの全然逆を行くのであるからその項を参照されたい。空沼小屋より二股小屋まで約七時間である。

空沼嶽、漁嶽を経て二股小屋へ。漁嶽へ登り（漁嶽の項参照）その頂上より西方に走る尾根を降つても良いし、又小漁山へ登り尾根傳ひに八七三・二へ、理想的なゲレンデを滑降しても極めて面白い。之は春季のコースであるが、約十時間で小漁山を経る場合は約十一時間を要する。二股小屋の項「二股小屋より漁嶽、空沼嶽を経て空沼小屋へ」を参照されたい。

空沼嶽、漁嶽を経て丸駒温泉へ。之も春季に多くとられるコースである。漁嶽頂上より東南に走る尾根傳ひに九六八・〇の東方の瘡まで行き、それより東北に走る尾根を漁川まで降らずに、右に巻き氣味に澤を二つ越して六七六の南西の鞍部

に出る。それより一番北の澤を支笏湖へ降り、湖の岸を傳つて温泉へ達する。漁岳より約六時間乃至約七時間を要する。

(以上伊藤記)

### 札幌より日歸りにて登山し得る山々は

(一) 百松澤山(通稱三段山) 圓山—小別澤—左股、之より南方に行き、常次澤に入る前の澤を西に入り、狭い急な澤を登りつめて七四五米の瘧に達する。之より尾根傳ひに頂上に行くのが登路にも歸路にも普通とられるコースである。若し札幌を早朝に發すれば烏帽子嶽或は神威嶽に達し定山溪方面に下る事も出来るが、餘り面白いコースではない。

(二) 迷澤山 前述の迷澤山札幌間を参照されたい。

(三) 砥石山 三段山と同様に圓山を發して幌見峠を越え、盤の澤へ出で夏路を少し辿り二股を左に取り尼寺に達す。それより向ひの尾根にとりつき六〇一の肩につく。之より直に頂上への尾根を登るのである。歸路は登路の逆コースか、或は頂上の北側の瘧の東側の澤、即ち中の澤を下り盤の澤に到るのが最も面白い。又頂上の南側の澤を下つて簾舞にも降り得る(防火線を通る事が出来る)。

(四) 手稻山 パラダイスヒュツテの項を参照されたい。

(五) 奥手稻山 奥手稻山の家の項を参照されたい。

(六) 遙山、和字尻山 ヘルベチアヒュツテの項を参照されたい。

(七) 札幌嶽 空沼小屋の項、其他を参照されたい。

(八) 無意根山 定山溪電鐵の一番電車で札幌豊平を發して行くなら日歸りで登山し得る。コースとしては無意根小屋の項を参照されたい。但し相當の強行である。

(九) 神威嶽、烏帽子嶽 三段山を経るものと、定山溪電鐵の「一の澤」で降り百松澤を登りつめるコースがあるが、之

はスキーを對稱とするより、只之等の山々への登山が目的であつて、スキーに依る楽しみは餘り無いのである。

(以上安藤記)



## 長門ヒユツテに就て

三 浦 義 明

豊平川の上流白井川の奥、余市、美比内、長尾の三峯に圍まれた邊りにスキー小屋を持つといふ事は、この附近の美しいゲレンデを享樂する上にも、亦ヒユツテの連鎖といふ様な方面から考へても、かなり有意義であるとは兼てから感じて居た處でありましたが、春の休暇に「ヒユツテ廻り」といつたプランを立てた際に、はたとその不便さに直面して、その必要性を一層痛切に感じた譯であります。

この附近は舊銀山の跡で、かなり腐朽しては居るが、ひよつとすると一夜の風雪をしのごに足る建物が未だ二三残つていやしないかといふ淡い希望が手傳つて、先輩にすゝめらるゝ儘に、第三學期の試験が終るとすぐ、三四人でこの元山、備前、長門の附近を相當時間をつぶして尋ねまわつて見たのでした。その結果は長門の橋印のある左岸に、雪にうづもれて軒下一尺許りを現した、頑丈な大きな建物を捜し當てたのでしたが、勿論そのまゝではどうしようにも仕方がなかつたのでした。

その後、東京に開かれた四月の學會から大野部長がお歸りになつて、東京の某特志家よりヒユツテ建設費として多額の寄贈を受けたから、ムイネシリに本格的なスキー小屋を建設する傍、その費用の一部を裂いて長門にも小屋を作つてよからうといふ吉報がもたらされたのです。そこで早速鑛山監督局を訪れて同鑛山の所有者をしらべたところ、日本鑛業株式會社といふことで、部長が自身同會社及び帝室林野局に御交渉下さつて、その方面の許可承諾も得、又ムイネシリの方の請負人はこちらの仕事もして貰ふことに話が定り、五月八日のスキー部懇親會の席上で、部長からこの計劃が發表されて、いよ／＼

その實現が可能になつて來た譯であります。

この小屋の建設期日に就ては、ムイネシリの方が終つてからすぐにその大工達に廻つて貰ふといふ大野部長のお話であり、又請負人の考へでもあつた様でしたが、暑中休暇が終りに近づいて、部員がそろ／＼札幌に集つて來たが、ムイネの方は意外に工事が遅れて未だ木挽が製材にとりかゝつてゐる始末なので、これちや長門の方は別にして掛らなければものにならまいと、兎に角九月の始めに請負關係の大工と人夫を連れて、四人許りで實地調査に出掛けたのでした。

長門までは、鑛山跡だといふ譯か、相當立派な畑分が出來て居ました。目的の建物は全く破壊せられ、腐朽もしては居りましたが、それ等の古材を利用しうることは知ることが出來ました。

大工の見積を得て、歸つてから早速相談して見ましたが、さて部長は上海へ出張中であり、豫算が思つたより大分多くかゝるので、こゝに一寸立ちすくみの形になつたのであります。しかし徒らに時日を延して居ては、氣候の關係もあり、工事が順調に進まず到底今シーズンのものにはならないので、出來る丈早めて仕事に取りかゝることにしました。豫算に就ては幹事會まで一時一般寄附募集といふ説もありましたが、之はオリムピック派遣選手への分とかちあふので、結局不足の分は一部を先輩の寄附により、残りは現在部員の寄附をあふいで補充することゝ致しました。さて豫算は定まりましたが、その後會社からの正式許可や材木等の問題で遅れ／＼になり結局十月の半ば過ぎ、十六、十七、十八日と日曜神嘗祭の休みを利用して、大工五人、柁工一人、監督一人、それに部員が五名加はつて合計十二名で大舉長門に出かけたのでした。

その間三日といふものゝ、實は登り下りに殆んど丸一日を費して居るので、實際仕事が出来たのは中二日間でした。建設に要した所謂手間の中、大工、柁工の技術的な仕事は別として、現場の地ならしから、切り込んだ材木の運搬、途中豊羽鑛山迄軌道で上げた柁十數把、建具、食糧等の運搬に至る迄、雑役は殆んど全く部員の手で之を行ひました。何分一把二貫もあらうといふ朝露にしつとりぬれた柁が十數把もある外、トタン、ガラス、長い建具材などがあるので、之等を澤ぞひの細い刈分を傳つて二里餘りもかつぎ上げるのは、相當苦しい仕事でした。けれども部員の献身的な努力と、それに大工達がラ



テルネの光で夜業迄してくれたので、兎に角三日掛りで、二間に三間の小屋が出来上つた譯であります。

この設計は一二の部員、先輩及び請負人に相談して合議の上こしらへたものであります。ベツトは二段になつて居りますが、あれは現地に行つてから特につけたして貰つたもので、初めは豫算の關係から全然二段にするといふことが期待できなかった都合上、この設計に就ては非難すべき多くの點があるかも知れませんが、その邊の事情をくんで諒として戴きたいと思ひます。

この小屋はもと／＼、唯ほんの一泊に役立つ程度のほつたて、小屋といふ積りで計畫されたのですが、結局出来上つてみると、豫想外に立派なものとなり、中途に色々困難な支障に遭遇しながらも、兎に角吾部創立二十週年記念事業の一として、今シーズン飾り得たことは部員諸兄と共に大いなる喜びとするのであります。

以上極めて簡單ではありますが、竣工に至るまでの経過報告を記載致しました。設計の詳細については圖を見て戴けば明なことで、こゝには蛇足を要さないと存じてはぶくことに致します（又小屋の位置に就ては巻頭の地圖を御参照下されば容易に判りませう）。唯壁は板が不足であつた爲に隙間が多いので、近々中に全部紙で張りつめる積りで居ります。その外内部の備品は未だ全く不十分であります。今シーズン中に部員の手で追ひ／＼に満して行きたいと思つて居ります。藁蒲團や毛布等も費用が許せば幾つでもそなへたいと望んで居りますが、之はちと難關です。

最後に大野部長を始め、建設費の寄附その他色々御後援を賜つた先輩並びに部員諸兄に感謝の意を表します。特に又大野部長の御旅行中、色々交渉斡旋の勞を取つて下さつた鈴木先輩、及び建設の際、文字通り献身的に努力して下さつた部員諸兄に厚く御禮を申し上げます。

(六、十二、十)

尙長門ヒユツテの鍵は農學部農經一年目伊藤信康君が保管し、使用料は薪代として學内二十錢、一般三十錢で小屋使用の便宜をはかる筈であります。伊藤君の住所は北六條西十二丁目東向。電話二四一〇番です。

## スキ―隨想

楠 見 正 雄

運動競技の進歩發展は文明の進歩發展に伴つて從屬的に必然性を持つて現はれて來るものである。日本が明治維新に頑迷なる鎖國の扉を開いてより急速なるテンポにて歐米諸國の文明を吸收同化して、今や世界の先進國となるに當り色々な運動競技が普及發展して來た。中でも最近に於けるスキー、其はスキーの持つ所のスピードと環境の美、心身鍛鍊の上に於て他の運動競技に勝るとも劣らぬが故に、尤な趨勢であると思ふ。而して健全なるスキーを上手に合理的に利用しうるや否やは一つに吾々スキーヤーの態度如何によるものなのである。

スキーを合理的に利用して雪國の冬を享樂すると云ふ事は、斜面の傾斜の状態、又樹木の狀態、雪質等によく適合した滑降法を如何に上手に使ひわかるかと云ふ事になると思ふ。北歐スカンヂナヴィア半島の諸國、即ノールエー、スエーデン等ではシュナイダー氏の所謂、万能クリスチアニアなるステムクリスチアニアを專用する様であり、アルプスを中心とする中央歐羅巴諸國では雪質とか、斜面の狀態等によつて滑降のテクニツクを使ひわかる様である。

ステムクリスチアニアを專用する爲には、其を充分習得活用し得る様に練習する事が必要であるが、例へ其をマスターし得たにせよ、僕の考としてはそうする事が必要なのであつて、スキーを享樂する意味に於て決して充分ではないと思ふ。重イルツクサツクを負つて、ウインドクラストで今にもがばつと落ち込み相な所や、ブツシュの多い緩傾斜面で降雪多き時などは、テレマークも又捨て難い所がある。

人類の發展は即慾望の發展であると云ふ如く、慾望の權化たる人間は常に變化なき一様の滑降法で満足するものではない。或テクニクにあきて來た時、又他の人の別な滑り方を見た時、常に新しい變つた滑降法を望むものである。この意味に於て僕は前述の中央歐羅巴地方の様式をとり度いのである。

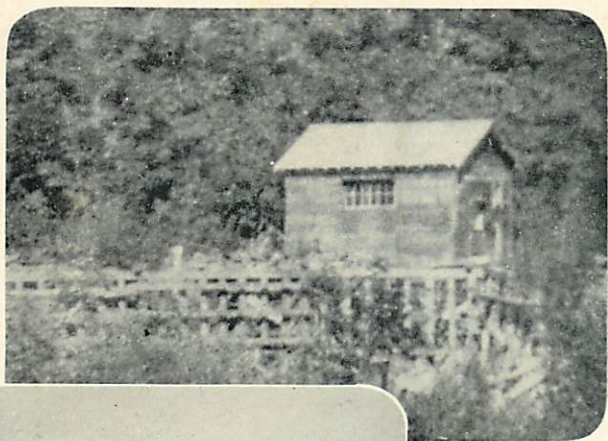
今参考までに瑞西サンモリツツにあるスキー學校の教師であるフオン・シヨゼフ・ダヒンデン氏による、各雪質による滑降法の一覽表を掲げて見ます。

|                                   |                      |                             |
|-----------------------------------|----------------------|-----------------------------|
| Pulverschnee Stützschnee          | Harsch Hartschnee    | Bruchersch Windgangehn usw. |
| Gleichschwung technik             | Stemmschwung technik | Sprungtechnik               |
| Gleichschritt                     | Dreischritt          | Schrittschritt              |
| Aufschifahrt                      | Hockefahrt           | Aufrechte und Hockefahrt    |
| Telemark gleichschwung kristiania | Schneeflug           | Geländesprung               |
|                                   | Stemmfahren          | Quersprung                  |
|                                   | Stemmhogen           | Umsprung                    |
|                                   | Stemmkristiania      | Drehhocksprung              |
|                                   | Schrenkristiania     | Drehsprung                  |

Von Josef Dalinden;—Die Ski-Schwünge und ihre Gymnastik

アルプスの山々と北海道の山とは非常に状態を異にして居るのであるから、滑降法も自から異なるべきであるから、吾々北海道のスキーヤーは新しく進路を開拓せねばならぬと思ふ。

僕一個人としての考を云ふならば、制動滑降法（ステムボーケン、ステムクリステアニアも含む）を中心として其に併用するにテレマークとジャンプタン、出來ればホツケシユブルングも練習出來れば充分であると思ふ。



長門ヒユツテ

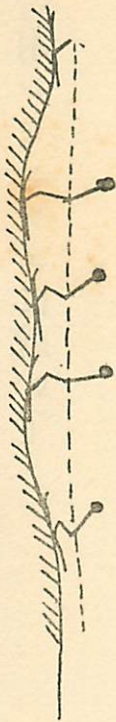


無意根小屋

話題が變つて、僕が初めて青山温泉のスキー部の合宿に行つた時には、直滑降の姿勢は氣を付けのままで、利足を一寸前に出し、腰と膝を曲げた極めて重心の高い、不安定且スウィングを急に行ひ難い姿勢でした。ところが昨年春の春シュナイダーが來てから急に、重心の低い非常に安定なホツケー姿勢になりましたが。これは當然來るべきものでありまして、アルプス地方でもスキーヤーは一部の醫者の反對にも關らず、このホツケー姿勢を採用して居る相です。醫者がホツケー姿勢に反對する理由は、其専門的の衛生の立場から、呼吸の不充分なる事を理由として居る様ですが、之は問題にするに足らぬと思ひます。

ウインクラー氏（慶大と東京高校の教授で、奥國人にしてスキーを初めて日本でやつた人）によると、アルプス地方でホツケー姿勢を採用する以前は、毎年大腿骨を折る人數の平均が八九人であつたが、ホツケー姿勢採用後は一―二人に減少したと云ふ話です。

一般のスキーヤーが餘り注意しない事ではあるが、スキーを享樂する上に於て大切なショツクの抜き方に就て簡単に申し見ませう。一言にして云ふならば、重心の軌跡が一直線である様に滑れば、斜面の凸凹によつて生ずる反動を軽減し得ると思ふ。即膝關節の力を抜いて自由に軟にして居て、若しも凸所に來たならば體全體を持ち上げずに、腰と膝の關節を曲げる事によつて抵抗を避けるのです。又其反對に凹所に來た時も體全部を凹に落す氣にならずに、足を伸ばして滑れば良いのです。左に圖示して御参考に致します。





## 手稻パラダイスヒュツテ附近に作らるべき

### 練習用シヤンツエに就いて

#### 關 四 郎

近年スキーが他のスポーツと同様に著しい進歩普及を見せ、それに伴ひ各種のスキー競技會が非常に増加した。然もシーズンには短いため競技會は殆んど毎週一回位は少くも行はれる事になり、次第に競技會の期日は繰上つてシーズン中競技會に追はれ、特にジャムプに於て自分達のフォームの完成に精進することは次第に困難になつた。ジャムプ競技に例をとつて見ても、一昨年は一月十二日に荒井山でシヤンツエ開き、又昨年は一月七日に既に野澤で全日本ジャムプ大會が舉行されてゐる。而も技術と記録の向上に伴ひ次第に競技會は大シヤンツエで行はれる様になつて來た。

斯様な條件の下にある爲めどうしても自分達のフォームは競技シーズンに入る前に、出來得る限りよく纏めて置く事が必要となつて來た。この様な事は昔も今も變りない事であらうが、殊に最近の様に競技會が頻繁に行はれ、而もその記録も五〇米の聲を聞かうと云ふ様になつて來たため、この事は非常に痛切に感ぜられて來た。即ち五〇米のジャムプを目指す様になつて來たのであるからその練習も、目的のシヤンツエをとぶ前に少くも一〇米内外の臺と、二五米乃至三〇米位とべる臺での練習と二段の道程を経る事を必要とする様になつて來た。その目的は大體に於て、前者は運動神經や筋肉に昨シーズン得たフォームを思ひ出させ、その上全身を充分ジャムプに對して適應させる爲めのもので、後者はフォームの完成と、空中に於ける充分なる飛行意識を得る事を目的とする。この二つの過程を経ずには五〇米を目指す競技會で充分技倆を發揮し、

快心の成績を納める事は不可能であらう。

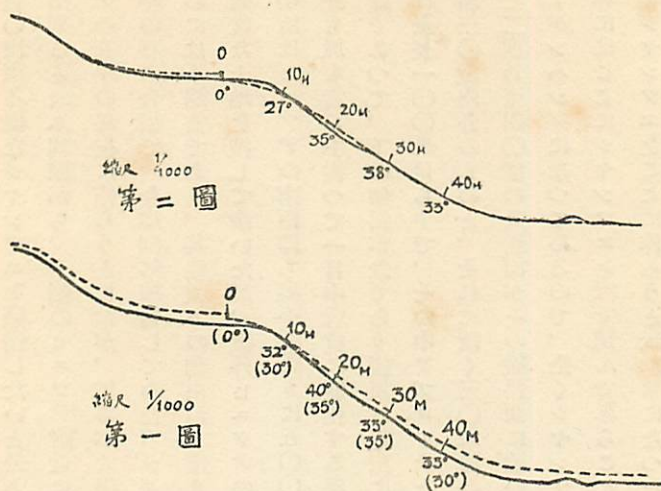
この様なトレーニングの階段を経るため出来る限り早くから、出来るなら十二月初めから二〇米乃至三〇米のジャムプの練習の出来る様なシャンツエを築造したいと云ふ希望は、可成り久しい以前からであつた。それで早くから雪が降つて練習が出来ると云ふ利點から、手稻のヒユツテ附近に適當の土地を見付けるのが一番良いと考へてゐたのである。昨年等もヒユツテの左手の尾根に作らうとしたが、工事が大掛りになる爲めと、斜面の方向の南向きである事等から中止となつた。所が今年の春の合宿で、今迄例年練習してゐたパラダイスのシャンツエは、自分達の練習の最大目的である強い前傾姿勢を獲る爲めには不適當であり、其他種々の理由から倦き足らなく思つてゐた矢先、一日吹雪で練習不可能の日に、別のシャンツエに適當な土地を捜して歩いた所、案外ヒユツテの直ぐ近くで非常に理想的な地形を捜し當てる事が出来た。

場所はヒユツテの南西即ち奥手稻寄りに五〇〇米程行つた所にあるもので、斜面は北北西に向ひ、密林に囲まれてゐて、日光も風も當らず従つて一日中雪質の變化する事なく、又如何なる吹雪の日でも練習が出来る。これは實際に春の合宿での經驗であつて、下の傾斜が急であり横風は絶対にないので、風があるとむしろ前傾の練習には好適な位であつた。斜面の長さは全長一〇〇米足らずで、その中アプローチとしてとるべき部分は、平地からスタート出来る様になつてゐる長さ二〇米傾斜三〇度内外のものと、それに續く三〇米程の平地に近い緩斜面であつて、着陸斜面ともなるべき部分は長さ四〇米位の間三二度乃至四〇度の急斜面がその緩斜面に續いてゐる。下の平地への續き工合も良く出来てゐて、且つその平地が僅かにゲーゲンハングになつてゐるので、全くシャンツエの爲めに自然が與へた地形の様なものであつた。

春にはここにシャンツエを雪で積んで専らここで練習したのであるが、結果が非常に良かったので、自分達積年の希望の練習シャンツエをここに作らうと云ふ事になつたのである。昨年例によると、パラダイス附近でも十一月中頃で積雪一・五米位あつたのであるから、今から笹を刈つたり斜面の手入れをしておけば、少くも十二月早々から三〇米近いジャムプの練習が出来ると云ふ事になる。實に練習用シャンツエとして、自分達の條件を一〇〇%に満足させてくれるものと云はなけれ

ばならない。

この様な立派な斜面では、何等シャンツェに對する設計なども必要ない位であるが、春の練習の様子と夏の斜面とを材料



にして、大體かう直したら好いだらうと云ふ見當をつけて、それに對して最も實際に近いだらうと思はれる假定を置いて、サツツ、アブローチ、飛距、ショツク等の關係を全く機械的に計算して見て、まあこれなら好いだらうと云ふ確心を得たわけである。然し實際に於てこれがどの程度によく合ふかと云ふ事は、相手が各人の個性が非常に關係するジャムプだけに、結果を見なければ判らない。僕等に親しいストラウマン氏の理論を用ふる程でもなく、又その他の高級な理論も使ひたいにも知らないので、全く簡単な中等學校の物理の本にかいてある程度の事を、只コツ／＼計算して見たに過ぎない事をお断りしておく。

さてこの斜面のプロフィールは積雪時のものは怠慢にも測つて見なかつたが、雪のない時のものは極く大體ではあるが先日測量(?)した所に依ると第一圖の如くである。點線は昨春の積雪状態の想像圖である。同じく括弧内はその時の傾斜角を示してゐる。この圖で分る様に、三〇米附近で土崩れの爲め傾斜が少しゆるくなつてゐる。積雪が一米位になつたら直ぐに練習出来る爲めには第二圖の如く加工するが良いと思ふ。但し點線はその改造状態を示し、傾斜角度は改造後のものである。この加工については、別に自分の貧しい経験以外に大して根據のあるものではない。理想的には飛行行程に丁度沿ふ様に作つたらよいであらうが、練習用としてそれ程

ショックを減らす必要もなく、又費用の點も重大に影響して来るので最も加工が簡單である様に、ショックが場所により平均でない様に、大體に於て飛距の自乗以下に、出来る事なら一・五乗位に比例すればよいことにしたのである。従つてこの點線の如く加工したものと考へて行く。

次にこのジャムプ臺についてシャンツエの位置を定める事であるが、之は非常に大切な事であるが、これには春に作つたと思れる位置を基準として（第二圖點線）ここから前へ出したり、後へ引込めたりした種々の場合について計算して見たのである。

以上の如く加工したものととしてその上に次の様な假定を設けた。

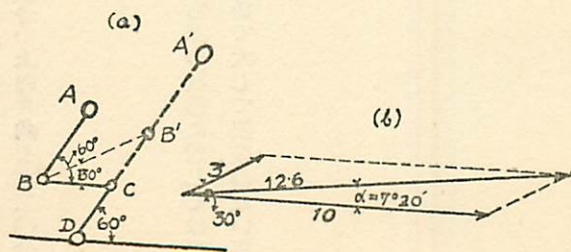
○假定

1 シャンツエは水平でその高さ一米、その端に於ける水平速度は一〇秒米とする。これも春の練習の經驗からである。

2 飛行行程は普通の抛射體と全く同じく抛物線に一致せるものとす。これはスピードが十秒米位で空氣の抵抗も浮力も少く、且兩者の効果が相殺すると考へたからである。

3 サツツは最も實際に行ひ得るものに近く、第三圖に示した様な方法によるものとする（これには種々異論があるかも知れないが、自分の經驗から見て恐らく今の所これが爲し得るものの中で最も理想に近いものと信ずる。この後の前傾の効果は2の假定があるから考へない）。圖について説明して見ると、アプローチの姿勢は第三圖(a)のA B C Dの如くで、サツツし終つた時A' B' C Dであるとする。この時の身體の重心はB'だけ變位するとす。サツツを爲すスピードも働きの起し始めは零で、それから次第に加速し、伸び切つた時最大速度であるからその方向も大きさも圖とは異つて来るが大體に於て圖の通りとし、その速度も三秒米とす

第三圖



(この速度はサツツ動作の時間と變位の大きさと加速の程度から定めたものである)。

以上の假定から第三圖の(b)で明かな様に、このシャンツェに於けるジャムプは十二・六秒米の速度で、上向き角七度二〇分で拋射された拋射體の運動と同じ事になる。これを一般の拋射體の運動の式

$$y = x \cdot \tan \alpha - \frac{1}{2} g t^2 \left( \frac{x}{V \cos \alpha} \right)^2$$

に入れ拋物線をかいて見て、これをシャンツェのプロファイルと重ね合せて見ると、第一圖の點線即ち春の状態に對しては飛距は二八米を得る。これは春の合宿に於て獲た最長不倒距離にほぼ近いもので、この假定の大體に於て大して誤差のない事を示してゐる。着陸時のショックについて考へて見ると、ストラウマン氏に依れば常に

$$V^2 \sin \delta < 150$$

なる事を要するとの事であるが、この場合に於ては

$$V^2 = v_h^2 + v_v^2 = v_h^2 + 2gh = 10^2 + 2 \times 9.8 \times 13 = 355$$

但  $v_h$  = 水平速度(米/秒)

$v_v$  = 落體の落下の時の垂直速度(米/秒)

$h$  = 落下の垂直距離(米)

$$\sin \delta = \sin 18^\circ = 0.3090$$

$$\therefore V^2 \sin \delta = 110$$

即ち可成りショックは強いが立ち得る事が分る。もし初速やサツツ等は今と同じとして、最大可能不倒距離(理論的に)はどれ位かと云ふと、シャンツェをもう三米前に出した場合であつてその飛距は三四米となる。次にシャンツェをそのままにしてサツツは同じとし、水平速度を増した時の最大可能不倒距離を見ると、水平速度十三米の場合でその飛距は三八米であ

る。次に全然サツツをしない時の飛距を見ると十一米で、これも實際に春に於ける結果とよく一致する。

次に今の斜面の儘で加工せずにシャンツエを前の位置と同じ所に置いた場合を考へると、即ち第一圖の實線の様な斜面でシャンツエは點線の所で一米の高さである時、最初の假定通りならば矢張飛距は二八米でショツクも前と同様位であるが、もしスピードが出なかつたり、サツツの弱かつた爲めに着陸地點が二八米以下となると、この邊は土崩れの爲めコンケイブの斜面となつてゐてショツクを過大にする。例へば二五米の所に着陸した時は、降下角度は二三度で  $V^2 \sin^2 \theta = 140$  となり非常に立ち難い事が分る。これが斜面を第二圖點線の如く加工せんとする理由である。而もその部分にうめるべき土は上の五米附近の凸出部分を削つたものを用ひ、斜面を拋物線に近づける事が出来るため一舉兩得である。

さて着陸斜面を第二圖點線の如く加工したとする時、次の各場合について考へて見る。

A 最初の假定(1)(2)(3)に依る場合のシャンツエの位置、飛距、ショツクの關係。

B Aの場合に於てシャンツエの上向き、水平、下向きの比較。但(2)(3)の假定は同じとする。

C シャンツエ端に於ける水平速度の種々の場合についての比較。これも(2)(3)の假定はそのまま正しとしてである。但しサツツの方法に關してはその他の場合について考へて見るのも非常に興味ある問題だが、計算が複雑になるので省略した。

以上三つの場合についてしらべて見ると、

(A) この場合シャンツエの位置の基準として、第二圖に於ける0の點をとる。且この點よりアプローチ側を(一)、着陸斜面側を(+)とする。この時のシャンツエの位置に對する飛距とショツクの大さを表にしたものが第一表である。この第一表より見ると矢張り0の點が良い様に思はれる。

(B) (A)と同様なるも、唯シャンツエの傾斜のみを變へて(A)との比較に供する。この計算して表としたものが第二表及第三表である。これと第一表と比較して見ると偶然にも、このシャンツエに於ては下向きものは餘りよくなく、むしろ上向き

で引込めた方が良い様な結果となつて表はれてゐる。これは着陸斜面が三〇米から三五米附近で最大傾斜面を有することに依るとは思はれるが、實際に於てサツツを爲すのに、上向きは下向きに比べて前に蹴り難いと云ふ事を考慮に入れず計算したのであるから、この事を考へに入れて見ると何れも一得一失ある様に思ふ。又速度に依つても變化するから、何れが良いかはその場合に依り定めらるべきものであるが、經驗上上向きシャンツエに於ける練習はフライトで前傾を増す爲めの練習にはよいかも知れないが、サツツの時の強い前傾の練習には餘り適當でないと思はれるし、且このシャンツエの様に着陸斜面の急な所で上向きにしたりすると、フライトに於ける身體の變化が大き過ぎて、五〇米位のフライトに對する準備とし

第一表

( $v_{11} = 10^m/sec$ の場合)

| シャンツエの位置 | 飛 距 | $\delta$ | $V^2 \sin \delta$ |
|----------|-----|----------|-------------------|
| - 5      | 12  | 10°      | 26                |
| - 3      | 22  | 10°      | 43                |
| - 1      | 27  | 14°      | 81                |
| 0        | 28  | 16°      | 100               |
| + 1      | 30  | 18°      | 124               |
| + 2      | 31  | 19°      | 145               |
| + 3      | 32  | 20°      | 162               |

第二表

(下向き 5度の場合)

| シャンツエの位置 | 飛 距 | $\delta$ | $V^2 \sin \delta$ |
|----------|-----|----------|-------------------|
| - 3      | 10  | 5°       | 13                |
| - 1      | 21  | 10°      | 48                |
| 0        | 25  | 15°      | 90                |
| + 1      | 27  | 16°      | 98                |
| + 3      | 29  | 16°      | 114               |
| + 5      | 33  | 22°      | 180               |

第三表

(上向き 5度の場合)

| シャンツエの位置 | 飛 距 | $\delta$ | $V^2 \sin \delta$ |
|----------|-----|----------|-------------------|
| - 5      | 19  | 7°       | 27                |
| - 3      | 23  | 14°      | 79                |
| - 1      | 31  | 16°      | 107               |
| 0        | 33  | 18°      | 135               |
| + 1      | 34  | 20°      | 158               |

てはその必要は認め難い。この様な理由から水平のシャンツエを探る事とした。又その位置も(A)に記した様に0點にとつた。自分達のランディング技術から云つて、ショックは一〇〇位にとり餘裕を残しておいて、思ひ切つたサツツの練習をした方が効果がある様に考へられるからである。

(C) (2)(3)の假定の下に於て、種々の水平速度に對するシャンツエの位置、飛距及ショックの關係をしらべて見る。ここでは水平速度をパラメーターとして、その各々についてのシャンツエの位置、飛距、ショックの大きさを示したものが第四表、

第五表、第六表である。これに依ればアプローチを適當に積んで一五秒米の速度を出させシャンツエを六米引込めると、シャンツエの高さ一米のまま優に四〇米を突破し、しかもショックは一二五であるから立つ可能性があると云ふ事になる。最も一五秒米位の速度になると空気の抵抗等も相當影響して来るから、正しくかうなると云へないかも知れないが、この斜面で四〇米とべる事になるから一寸愉快な氣がする。この時に前に凸起を削つた事が有効になつて来る。何故かと云ふと、何しろこれよりシャンツエを六米も引込めるのだからホルバウが相當長くなり、あの突起を削つておかぬとあたらず四〇米の

第四表  
( $v_h = 8^m/sec$ の場合)

| シャンツエの位置 | 飛 距 | $\delta$ | $V^2 \sin \delta$ |
|----------|-----|----------|-------------------|
| - 1      | 12  | 9°       | 22                |
| 0        | 15  | 14°      | 46                |
| + 3      | 20  | 19°      | 89                |
| + 5      | 23  | 21°      | 115               |

第五表  
( $v_h = 12^m/sec$ の場合)

| シャンツエの位置 | 飛 距 | $\delta$ | $V^2 \sin \delta$ |
|----------|-----|----------|-------------------|
| - 5      | 20  | 6°       | 29                |
| - 3      | 30  | 12°      | 85                |
| - 1      | 33  | 17°      | 140               |
| 0        | 36  | 20°      | 176               |

第六表  
( $v_h = 15^m/sec$ の場合)

| シャンツエの位置 | 飛 距 | $\delta$ | $V^2 \sin \delta$ |
|----------|-----|----------|-------------------|
| - 7      | 39  | 10°      | 94                |
| - 6      | 42  | 12°      | 125               |
| - 5      | 44  | 16°      | 170               |

ジャンプが一五米の邊で玉碎する様な悲しい事になり相だからである。

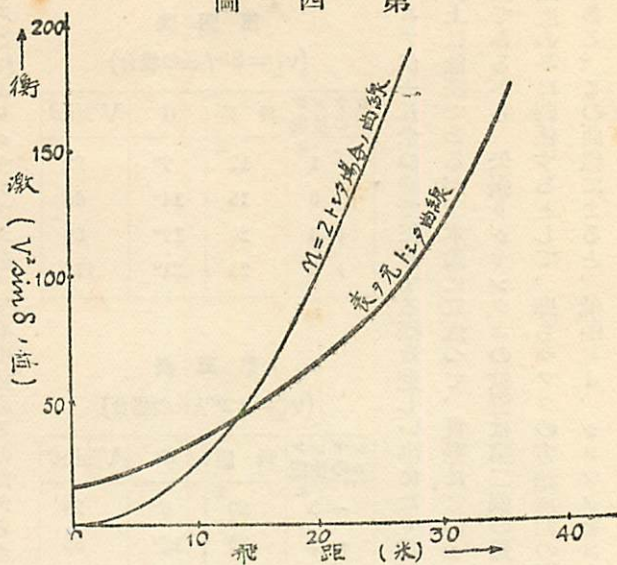
以上は餘談であるが、本論に立返つて、實際にこのシャンツエはアプローチを加工しない限り水平速度は一〇秒米内外が限度であるから、矢張りシャンツエの位置は第二圖の通りで良い事になる。次に第一、四、五、六表から飛距がアプローチの速度のみに關係するとして、即ちサツツの方法は前の通りとしての、飛距とショックの關係を曲線にして見たものが第四圖である。この曲線によると、飛距をd、ショックをSとすると

$$S = Kd^m$$

但しKは或る當數



第 四 圖



の關係ありとしたならば、この $n$ の値が

$$n = 1.35$$

位となり、先に一・五乗位ならばよいとしたものよりむしろ良過ぎる位の値となつた。最もこれにより斜面の傾向を表はすのは便宜上の事で、これは決して基準になるとは思はぬ。他の好いと云はれるシャントエの各々についてやつて見たら、大體の目安ともなるべきものが出来たかも知れないが、時間が無いのでこれだけで打切つた。

右の様な結果からシャントエを斯く決定したわけである。

以上で大體自分の述べ様とする所を了へたつもりであるが、もし時間があればこの外に、同速度に於けるサツツの強さ、及方向と飛距の關係を實際に數字を入れて計算して曲線とし、サツツの強さや前傾度を百分率で表はしておけば、一定の速度の下で、その人の飛距からそのサツツの強弱、方向等を百分率で知る事が出来て、大して當てになるものではなくとも面白いと思つたが、時間が無いので、これは考へ方によつては却々むづかしいかも知れないが、自分の方法では簡單であるから省略した。

元來自分達が練習の爲めにシャントエを作る様な場合には、適當の斜面について實際に經驗からどの邊にシャントエを作

るかを定めてやつてゐたものであり、理窟抜きにむしろこの方がずつと良いかも知れない。しかし又ある斜面を見て、これによつて机上で圖面を引き、正しいかどうか分らない計算をコツ／＼やつて見て、そしてその結果と實際の結果とがどの程度によく合ふかを見るのも、亦全然興味のない事ではないと思つてやつて見たのであるが、さてやつて見て、計算したデータからどの邊を採り出すかと云ふ事になると、これも亦全く經驗によるより外ないので結局は不徹底なものになつてしまつた。殊にまだシャンツエの設計等考へて見た事もない自分が勇敢にも、こんな事を書いたのは或は非常に無暴な事かも知れないが、ストラウマン氏の理論を利用しなければならぬ様な大シャンツエの設計に關する數字的根據は、昨年ノスキー年鑑に樺太の下平、土肥兩氏が立派な結果を懇切に發表して下された結果に依り知る事が出来たが、それ以下のものには勿論大した必要のない事でもあるし、理論も理論とは云へない位ずつと簡單になるのでつまらないからでもあらうが、餘り設計についての具體的根據を示してくれたものが少いので、そう云ふものを欲してゐた矢先であつたので、一つ自分が最初に槍玉に上げられ、以上書いて來た事の種々の誤謬や缺點を遠慮なしにこき下してもらひ、誰かがシャンツエを作るについての根據らしいものを定めてくれる様にとの念願からである。

考へ方について、誤も随分多いであらう事は自分でも認めてゐる。例へばサツツについても(3)の假定の様に考へると、重心の移動は膝關節を中心とする圓に沿ふと考へる方が本當らしいが、そうすると伸び切る瞬間にはその運動の方向はその圓の切線の方向であるから、結局三〇度下向きに移動する事となつてしまふ。従つて便宜上あの様に考へたが、もつと別のいい考へ方があるかも知れない。その他種々疑問とする點もあるが、諸先輩やスキージャムピング同好の諸兄の御教示を仰げるならば望外の喜びである。

(一九三二—一〇—二〇)

追而右のシャンツエも數日前に費用の出所も定まり、輕川町近藤氏の多大な御好意に依り愈々出來上る事になつた事をお知らせする。

## ワツクスに就て

宮 村 六 郎

今日ではワツクスの研究がスキー材の研究と共に重要問題となつて居る。殊にワツクスの研究は雪面と直接に接して居て重大な役を成して居る故、むしろスキー材の研究よりは重要性を有して居る。

パラフィンを火熨でジュー／＼スキーの滑走面に付けてゲレンデを遊びまわり、又競走に参加したのは最早一昔先の事となつた。現今ではランナーは勿論一般スキーヤーもワツクスの研究を積み、大いに實際化されて來たのである。

昔は全くグライドワツクスの獨り舞臺であつたが、このワツクスは登行に於て後滑りをするので段々とシユタイグワツクスが使用される様になつたのである。然しグライドワツクスも依然使用時に依り此ワツクス獨特の價値を有するのである。

下降スピードに依り殆ど勝敗の決せられるジャンプに於ても、又海豹の皮を使用する時は登行に於ては後滑りの心配がないので、降りに於て充分なるスピードを出す爲にグライドワツクスを使用するが如きである。登山に於ては必ず常にグライドワツクスは持参すべきである。

ゲレンデに於てもジャンプに於ても昔日とは異り、雪質、溫度に依り各種のワツクスが使用される様になつた。例へば北海道豫選が最後に札幌ジャンツエで行はれた時に、試合前日にチヨット變つた雪が降つた。友人はナンゼンを塗り試合に出場した。彼は二十米大のみより距離が出ないのに反して、パラフィンのみを使用した者は二十七、八米も出して居た。之は勿論サツツの差もあらうがワツクスに支配された所が甚大であると思ふ。ナンゼンを用ひた友人が後でアプローチで止り相

であつたと云ふ。之に依つても試合當日の雪質、溫度に依りワツクスの使用法を變へねばならぬ事がわかると思ふ。

次にグライドワツクスの主な種類を挙げると、パラフィン、エストビーのホツプ、ハンセンのレコード、テントウ、フィングール、ナンゼン、スキーオリン等あり。

以下何れの場合に於ても同様であるが、ワツクスを塗る時にはスキーの滑走面が平滑にされて居て、且又良く乾燥されて居らねばならぬ。もし古いワツクスが附着して居る場合には、揮發油又はテレピン油にてふき取るべきである。塗蠟は滑走面に軽くワツクスを塗りて平掌ですり込むのが最良である。平掌で擦ると熱が出て來てワツクスが木質の中に入り込むからである。

我々が主に使用するワツクスに付て二、三述べて諸君の参考に供したいと思ふ。

**テントウ** 之は四角なインキ瓶の如きガラス瓶に入つた液體ワツクスで、先年來朝せるノルウエーの三大スキー人ヘルセツト中尉、コルテルード、スネルスルードより初めて教へられたものである。テントウは大體全シーズンを通じてグルンドワツクスとして我々は用ひて來た。浅い經驗ではあるが未だ試合に於て失敗した事がない。之は平掌で滑走面に前日又は前々日に薄く塗つて乾燥させ、試合當日この上にパラフィンを軽く一本飛ぶ毎に塗るのである。時としてはテントウのみを用ふる事があるが、主にパラフィンを上に塗つて使用するのである。

**ナンゼン** 之は多分にタールを含み黒色を呈して居て、磨研用のコルクが付いて居る。このワツクスも我々は主に新雪の時には勿論、普通のコンデイションの時にもグルンドワツクスとして使用して居て、前と同様に使用時にはパラフィンを上に塗つて用ふ。パラフィンを塗つた後軽く平板又は皮の手袋でこすると良い事もある。

レコード、フィングール等も前記のワツクスと殆ど同じである。塗蠟の時に注意すべきはワツクスを凸凹に塗らぬ事である。凸凹はスピードを削ぐからである。ジャンプの試合は勿論、練習時一本飛ぶ毎にパラフィンを塗る事はスピードを出すのみならず、グルンドワツクスを長持させるのである。ジャンプに於て、春先のザラメ時の練習に、又はゲレンデスキー

に於て、以上のワックスが高價なものと大量に消費するからシエラツクを滑走面に塗ると良い。之は春のサラメに對して殊にスピードが出るし、割合にはげない特長を有する。之は藥舗にて四合瓶四、五十缺で求められる。塗布後二、三日位で十分かはく。使用の時にはナンゼン、レコード等のグライトワックスを塗り、その上に更にパラフィンをこすりつけるとよい。要するにグレンデの下降ジャンプに於ては、出來うる限りスピードを取る様に適當のワックスを使用すべきである。

上記の何れの場合にも殆ど用ふるパラフィンにも色々の種類があるが、融解點が低いものが良く滑る（四二―五八度位）。次にシタイグワックスに付て述べると、滑降及ジャンプに於ては單に降りて最大スピードを得る様に努めたのに反して、デイスタンスレース及びグレンデスキーに於ても、登行に際してはあざらしの皮の如き後滑りを防ぐ、下降には最大スピードを出し得るシユタイグワックスの研究が大切である。グレンデスキーに於ても登山旅行の際にも、シユタイグワックスが海豹皮の領分に侵入して之に代らんとして來て居る。殊にデイスタンスレースに於てはコースは主に三分の一―システム、即ち登りと降りと平地が三分の一づつ取まぜられて居るコースが採用されて居るから、單にグライトワックスを用ひる時には、其處に必然的に後廻りと云ふ事が生じて來るのである、競技中に於ける後廻りは競技者に精神的に又肉體的に打撃を與へ、競技成績を著しく低下せしめるものである。

競技者及一般スキー家に取つて、下降に際しては最大のスピードを得させ、登行の際には後廻りせずして、最も樂に無駄な時間と勞力を徒費する事をさせないシユタイグワックスの秘訣を把握して、一般スキーヤーはグレンデに、登山に於て出來る丈最少の時間と勞力で目的を達し、競技者は成績を向上せしめる様に精進する事が急務であり、又興味ある事である。デイスタンスレースに於てこのシユタイグワックスに依り勝敗が決せられると云つても敢て過言ではないと思ふ。

近時舶來ワックスが多數輸入されて來て、其と共に使用法もやうやく煩雜になつて來た。悉く之等のワックスを研究しつくすと云ふ事は至難の事であり、又種々のワックスに色々と手を出して生半分囓るよりは、一種又は二種の會社のワックスを専心研究應用される様に御奨めする。要するに多數のシユタイグワックスがあるが其の目的とする所は一つであつて、登

行に於て後滑りせず、滑降に最大速度を得んとするのにあるから、自分で最上と信ずるワックスを一、二種選んで旨く使ひこなせばよいのである。

次に掲げるワックス名は皆舶來品であるが、國産品獎勵の様ではあるが、悲しい事に未だ日本製のシュタイグワックスに信頼するものがないからである。日本に最も多く輸入されて居るエストビーのシュタイグワックスから順次に使用法をのべて行く。

前にも少し述べたが、新しく買つたスキーの滑走面に時々漆、ラック、その他色々のもが塗られて居るが、之は單に滑走を妨げるものであるから、硝子かけか安全かみそりの刃の如きものですつかり取去らねばならぬ。それから紙やすりで平滑にするのである。而る後パラフィンや火麩又はベンゼンランプにて何邊もやき込み、最早や浸込む餘裕のない位にやき込むのである。之は材を堅くして水分を吸収し難くし速かにすべる様にするのである。パラフィンをやき込んだ後は再びガラス片か安全かみそりの刃の如き者で不要の部分を取つて平滑にして、後紙やすりをかけるのは前と同様である。

又亞麻仁油を塗り油が吸収されたら塗り又塗り、かく何度も繰返し塗るのである。然し之は八、九月頃よりなされて使用直前には完全に乾燥して居らねばならぬ。直前乾燥してゐないものは雪を附着させるから注意を要する。塗油後矢張り硝子片の如きものでけづるか紙やすりで磨ぐのである。之は競技用スキー、一般用スキーに關せず行ふべきである。この上に各種のワックスを塗つて行くのである。

塗蠟前には滑走面が綺麗に且平滑になつて居て、古いワックスは揮發油でふき取られておらねばならぬ。又乾燥して居ねばならぬ。濡れて居るとワックスが付きにくいのである。

スキーヤーでテールを大切にしない者があるが、之は大變な間違ひで之を大切にせねばならぬ。それで塗蠟時は頭端の方を下にテールの方よりワックスを塗つて行くのである。

以下の各ワックスは失敗すると後すべりと氷りつくから、豫備のワックスとナイフを用意しておるべきである。

### オコトビーのスカレー

ザラメ雪、凍り又は濕氣を含んだ雪が古くなつた時は平に用ひて、タールを多量に含んで居てチューブに入つて居る。使用法は、平滑にされた滑走面に約二、三寸置位にジツクザツクに塗りて手掌で之をのぼすのである。あまり堅い時は火にあぶつてから延すと大變のびやすいが、強く火にあてたり、又は火麩等を使用する時はワックスが變質を起すから避くべきである。溝にはこの種のワックスは塗らぬ様にすべきである。

### クリスター

氣温十二、三度以上の、手に握ると水が出る様な濡れた融解性の雪及びザラメ雪、一旦とけて凍つた場合等に用ふるのが普通である。以上二種のワックスのみならず全てのワックスもさうであるが、氣温の下るに従ひて塗蠟の量を少く即ち厚さを薄くぬり、氣温上るに従ひて厚味に塗つて行くのである。之等のはワックスはベト／＼して居る事があるから、塗蠟後は手をふれたり、ごみをつけぬ様に注意すべし。又塗蠟後は寒所に三十分間位放置して後少しく乾燥するのである。スカレークリスターは夫のみで用ひずにグルンドワックスとして用ふる。その時は前日に塗り、翌日その上にミツクス、ホリメデーム等を適當にかけて使用するのである。例へば吹雪の後で一體に吹きとばされ所々に吹溜りのある様な時、クリスターのみでは吹溜りでグツト止りとんぼかへりをするが、クリスターの上にミツクスをかけると、吹溜りの所でもグツト止らずに滑走出来る。又生のクリステルスカレーがきかない時に、之をベンジンランプ又は爐火でやいて使用するとき事がある。昨年の飯山のインターカレッツデの十軒の時は斷然優秀な結果を示した。

### メデニューム

一、二度より零下五、六度の、手に握ると凝る濕性新雪に用ふる。氣温の上るに従ひ厚く、下るにつれ薄く塗るのである。メデニュームは雪が降りつゝある時は凍り付き易いから注意すべきである。此種のワックスは軽く滑走面に塗りて手掌でたんに念にこすり、凸凹がなく鏡の面の如くみがくのである。よく磨くとビニュー／＼となる。それがよくなる程我慢でこれをうぐひすの鳴聲と云ひ、互に競争するので合宿所内に時ならぬ賑ひを呈する。降りつゝある雪にはサライシュームが良いと云ふ。之も番號があり各氣温によりて異なるのである。

### ミツクス

氣温零下五度以下の、手に握つても凝固しない乾燥粉雪に使用するのである。之も氣温が上るに従ひて厚く

ぬり、下るに従ひて薄くぬつて行くのである。このワックスは下りに於てのみは大體の雪では良くすべるからグライトワックスの代用をなす事あり。

以上は一種のワックスの使用法をのべたが、一日に於ても色々状態がかはり、又長距離競走の如く多様の雪質の状態を含むものにありては、たとへ出發時のワックスが最良であつても、途中に於て各種の地形の變形と時間による雪質の變化に依り、初めのワックスが効かなくなる事が非常に多いから、以上の様な一種のワックスのみを用ふる事が最適の事でないから、二種又は二種以上のワックスを混合して用ひると良い。しかも各々ワックスの中間にあるワックスを、兩者を混合したものが各一種のワックスを厚く又は薄く塗るより斷然効く事がある。例へば吹雪の粉雪の零下一度の場合に、クリスタールを七、メデュームを三の割合にぬつた所が、降り登り共に非常に良かった事がある。その他クリスタールとミックス、クリスタールとメデューム、クリスタールとメデュウムとミックス、メデュームとミックス、等色々の塗り方がある。又足の下とか一部分メデュウムとかミックスとかと云ふワックスを塗る方法もある。

次にブラトリの各ワックスに就ては、殆ど前のエストビューの夫れと同じである。ブラトリの方が一、二度位氣温が高いかと思ふ。即ち一、二度使用範圍の温度が暖い方に上るのである。此のワックスもエストビューのものにまけない位良くすべる。特に自分は去るシーズンの終りの宮様デーの十八軒の時は、ブラトリを使用して快心のスピードを得た。ただこのワックスはあまりかたくないので所々にたまる傾向があるから、注意して万邊なく延す様にすべきである。

**ダウンテンゲル** 黒字の罐は零下二、三度以下の乾燥雪に用ひ、エストビューのミックスとメデュウムに似たもので、厚さにより加減して行くのは前と同様である。赤字のパツプの罐は濕性粘雪に用ひる。黒の方は氣温零下二、三度以下の時に、もし他のワックスの失敗して後滑りをする様なら、黒を足下一尺位にゴシ／＼と延さずにつけ、延さないと登りには大體効く。二、三年來此のワックスが盛んに用ひられる様になつたが、兎角落ち易いきらひがある。しかし廉價なものと、他のものより廣い範圍に効くので盛んに使用されて來た。



以上のワックスが主に使用されるものであるが、他に未だ色々なものがあるが簡単に述べる事にする。

**ヨーデル** 初め平に叮嚀に手でのばして、出發する前に穿いて見て、もし後滑りする様であればその上にもう少し厚く塗る。粘着性の雪には薄くぬり、濕氣のある雪には厚く凹凸にぬる。然しこのワックスは一體に迂りが良く無い様である。粉雪の場合には我々は數へる位しか成功して居ない。主に用ふる場合は濕氣のある雪の場合、クリスターを前日塗り、其上にヨーデルを厚くゴツ／＼にこすり付けて使用する。登りは後滑りしないが、下りはあまり快心のスピードが出ない。雨降りの時は之が特に有効である。

**テントウ** 之は黄色の小判形の罐に入つた液體である。夫が罐に付て居るブラシで此のワックスを薄く塗る。之を何邊も少し間を置いて繰返す。しかし厚くでなく非常に薄く塗るのである。もしスピードが出なかつたならば一緒に入つて居るテントウボックスを塗る。又もし後滑りする様だつたらブラシでもう一度薄く塗るのである。之もグルンドワックスとして用ふる事もあるし、又樺太の如き零下二十度近い所ではテントウのみを前日薄く塗つて翌日試合に成功した事がある。あまり研究してゐないので何んとも云へないのは遺憾である。

其他クヌツベン、ゼーベルグ、ミカ等があるが、あまり使用して居ないので此處では省略する。

以上使用法を大體述べたが、各時に對して常に最適當のワックスを選擇して應用することは至難の事で、定義通りに行き兼ねる事がまゝある。温度のみならず雪質により支配される事甚大で、雪質も氣温によりてのみ支配されるものでなく、風的作用により、又大氣中の濕氣により變化される。かくするとワックステクニクは益々難くなる。競技者は此のワックスを試合當日如何に採用するか依り、一年來の折角の豫備練習も無駄になり、思はしくない成績に甘じなければならぬ悲運に陥る。良き例は去りしオリンピックの五十軒レースに於て、自他共に世界一と許して居るノルウェーの選手にして、ワックスの失敗より勝をスエーデンにゆずらねばならなかつたのである。他國のみならず我國にも、諸君は此種の例を見且又聞いた事であらう。

一般スキーヤーがゲレンデに於て、登山に於て、當日に適當したワックスが効いたならば、如何に時間的に勞力的に精神的に愉快にスキーを享樂する事が出来るだらう。或る友人が適當なワックスを塗ると、登りに於ては後滑りをせず、下りには良く滑ると云つた所が信用しないので、論より證據と一日彼に塗蠟して穿せた所、成程これは便利と感心しそれより大いにワックスに興味をもち出した。

最適のワックスを決定するには主に氣温が基礎をなす故に、之を知る寒暖計を必要とするのである。然し我々は所謂感じでワックスを塗る事が多い。又一日中に於て氣温の變化により、ワックスをはがしたり落したりせねばならぬ爲に揮發油が必要である。又氷付いた時にはナイフが必要である。競技者は勿論一般スキーヤーも、常に之等はそなへておくべきである。少くともナイフは常に携帯すべきである。

ワックスの研究はスキー競技者のみならず、スキー登山を行ふ人や一般スキー家にとつても重要な事で、此の研究の目的とする所は、下降に際しては最大のスピードを出し、登行に於ては後滑りする事なく、最も樂に無駄な時間と勞力を徒費する事なく、スキー競技者は優秀な成績を得、スキー登山家は最少の時間と勞力にて目的を達するを得、且又スキーを充分に樂しく享樂せしめるのである。

多くのスキーヤーにより之等の關係を大いに研究し、スキー界の爲に良好なる結果をもたらす事を望む。幾分でも自分の淺薄なる智識が諸君の参考となれば幸甚。

## デスタンス・レースの夏季豫備練習に就いて

西

武

- 一、緒言 (目的—範圍—種類)
- 二、下肢運動 (必要範圍—練習法—注意)
- 三、上肢運動 (必要範圍—練習法—注意)
- 四、その他の練習 (綜合練習—各種の運動—一般勞働)
- 五、内臓鍛練 (必要—内臓諸器官)
- 六、跋言 (日程作成—結果)

便宜上、積雪期を冬季といひ、それ以外の季節を夏季と呼稱する事にする。

十二月から始つて三月に終る一シーズンは、複雑なスキー・デスタンス・レースの諸種のトレーニングをするには餘りに短い。又この積雪間に獲得した身體の調子や技術を、永い夏季を超えて次のシーズン迄持ち越す爲に、是非夏季の豫備練習が必要となつて来る。

各種の練習の中には、勿論積雪期でなければ會得することの出来ないテクニク、例へばワックステクニク、滑降テクニク等に關するものも多々あるが、強い脚力、強い腕力、強い内臓、即ちデスタンスレーサーとして激烈な競走に堪え得る身體と、規則的な練習生活による精神的の緊張とに、夏季豫備練習の必要價値を見出せ得るし、これと同時に之等がデス

タンスレースに於ける重大な要素となつてゐるのである。その期間も普通は融雪期（四月）より降雪期（十二月）までの一シーズンより長い一期である。その間休養に、或は各種の練習に、適當に處して行くべきである。

吾々が普通三つの要素と呼んでゐる處の

- (A) 合理的の走法
- (B) 規則的の攝生生活
- (C) 不斷の練習

- (a) 本格練習（積雪間）
- (b) 豫備練習（夏季）

に於て、夏季には主として(B)及び(C)の(b)で、これ以外は不可能であるから、我等の夏季に於いて練習すべき範圍は自づから定つて来る。

デスタンスレースは全身運動であるから、この豫備練習には殆んど如何なる運動でも幾分かはこれに裨益する所があるといひ得る位に廣汎を極めてゐる。然し乍らそれ等の方法によつて夫々その結果を異にするから、吾等は完全な豫備運動を遂行する爲には、適當に取捨撰擇吟味して効果的な、そして出來得るならば興味のある運動とすることが必要である。元來デスタンスレースは個人競技であるから、その競技者の夫々の體質や走法や生活等に從つて異なる事は止むを得ないが、レジャーとして少くとも次の如き數種に互るトレーニングをなすべきであらう。

- 一、下肢運動
- 二、上肢運動
- 三、その他の練習
- 四、内臓鍛練

以下各項によつて筆を進め度いと思ふ。

## 一、下肢運動

スキートクニツクは下肢の諸種の關節及び筋肉の微妙な作用に基くものであるから、ランナーとしてこれに就いての練習の必要は當然の事である。先づデイスタンスレースに入門した者は誰れしも最初に下肢の筋肉の硬化疼痛を経験するであらう。これは夏季の練習によつて完全に防ぐ事が出来る。又足部のスプリングをつけることや急ピツチで走ることも、夏季のトレーニングによつて養成する事が出来る。

練習法としてはトラツクに於ける陸上競技の競走、或はクロスカントリー等は最も合理的なものであるが、その他の脚力を要する總べての運動が適してゐる。例へば水泳、登山、野球等はよい。室内運動でも、籠球や手を前後に振つて、バランスをとりながら前かがみをして適當に足を曲げる體操によつて、略々これに近い効果を表すことが出来るし、ポートの豫備練習のバツク臺も上腿部、腹部の諸筋に伸々好いものと思ふ。

以上の中、クロスカントリーランニングはスキードスタンスレースを最もよく夏季に適用したものだと思ふ。その脚部の運動状態のみならず、心臓その他の内臓、腰部及び精神的の所謂ねばりや頑張り等にもその共通點を認めることが出来る。夏季に他の運動に携らないものはクロスカントリーランニングを主として練習を始めるのが最も普通であり、自然であらう。毎日約五軒—十軒位、時間でいへば約三十分—五十分位、コースは登り、降り、平地を適當に混じてとるのが理想的とされてゐる。毎日記録をとつて見るのも面白いことであらう。(札幌附近のコースは後述)

陸上競技は長距離、マラソンに於ける耐久力、短距離、中距離、跳躍運動に於けるスプリント、跳躍力等、吾々はこれによつて下肢運動の部分的に發達させて行くことが出来る。その他蹴球、登山等も夫々顯著な特徴をもつてゐる。

脚部は筋肉と同時に關節が大切であるから練習中も注意すべき事である。又トラツクに於いては、スキールランナーは著しく脚が上らないといふことも研究すべき餘地がある。乃ちスキードスタンスレースと陸上競技の相違である。

## 二、上肢運動

スキーデスタンスレースに於いて、上肢運動は下肢運動と同程度の重要性を有してゐる。これは主としてステックによる推進作用をなすもので、下肢運動の耐久的な力強さに比較して、上肢運動は何處までも軽快でスピード的である。ステックテクニクに於いて、吾國人の腕力の特色は歐米人のそれに比較して、前に振り出したステックを體側まで引き寄せる力が優つて、それから後へ推しやる力で劣つてゐると發表されてゐる。それで吾等は引き寄せる迄の優つてゐる點を主要點として、強い握力と素早いスナップを利用して相當早いピッチの走法をとる方が有利だと思はれるから、この點に留意して豫備練習を進める方がよい。

訓練すべき範圍は上膊、前膊及び肩部から胸部、背部に互る諸筋、並びにスナップ、握力等である。

練習は一般に漕艇が推賞されてゐる。又水泳や投擲運動もいいが、普通我等が練習時間表製作の上から云へば、夜間及び雨天の際に室内でこれを行つた方が好都合である。それには三段滑走のステックによる推進作用と、運動を同じくするエツキスバンダーがいいと思ふ。丸い乳ゴム又は自轉車のチューブ等の弾力性のもの一端を柱に固定して、他端を引く装置による運動も同じ理窟である。その他鐵啞鈴體操、腕立伏臥の姿勢の腕の伸屈運動等がある。いづれも二頭膊筋、三頭膊筋、肩部諸筋及び關節の練習となる。

以上いづれも興味が薄いので稍々もすれば規則的に行はれない様な傾向があるが、その弊に陥れば殆んど價值がないのであるから、勉めて時間を定め、回数を決めて規則的に行ふ必要がある。

スナップはストックテクニクの際に素早くフイニツシュを利かす爲、夏季にはハンマーや砲丸投の練習により、握力はストックを強く握つて推進力を補助させる爲、機械體操（鐵棒）や漕艇（オール）によつて養成する事が出来る。

注意事項としては前述の規則的に行ふ事である。記録的に顯著にはならないが、知らない中に効果が生じてゐるものであ

る。

### 三、その他の練習

デスタンスレースは獨特の身體のこなしの必要な全身運動であるから、夏季の練習に於いて完全を期する事は出来ないが、他のこれに比較的近い全身運動によつて夏季中代へることはいろいろと考へられてゐる。然しいづれも顯著な効果はあがらなくて、他の者よりも割合にいい條件に置かれてゐる位の程度であつた。好い豫備運動といはれてゐる水泳、漕艇等も夫々特徴を有してゐるが、肉體的影響の外に、實際的にも前者は雪國にとつてそのシーズンの餘りに短い點に缺點があり、後者は到る處にその設備がないといふ短所がある。クロスカントリーのランニングもその儘では上肢運動が餘りに足りない過ぎる。然し矢張り之等の運動を中心として、その不足な點を他の運動によつて補充して行くのが適當であらうと思ふ。

デスタンスレース獨特の身體の舉動（こなし）も、他の運動でこなしのこつを憶える事によつて比較的早くそれを會得することが出来る。豫備運動としては野球、庭球等が効果的である。これはその目的の性質上興味深いものが好いのであるまいか。

夏にスキーを穿いて、雪に近い摩擦係數を有する物の上を、雪上の滑走と同じ要領で走る事が一部の人の間に考へられてゐた。これが砂上や麥藁上で試みられたのを見ると、腕力、脚力、腰部等に相當効果があるが、平地のみに止りいささか登りの練習に缺けてゐる憾があるし、矢張りスキーの迂りの點にもう少し工夫の餘地があると思ふ。然し三段滑走には理想的の練習となるであらう。アウトシーズンにゾンメルシーを山に持ち出して走る事は、この夏季に於ける唯一の一般スキーテクニクの練習となるであらう。序に一般スキーテクニクに就いては、日本人は歐米人に比して關節が割合に軟らかくて、ステムボーゲンやクリスチャニアに非常に便利な相であるから、下肢關節の體操等によつて練習して置いた方が、冬季にその本領を一層發揮し易いだらう。

デスタンスレース中に何かの調子によつて身體のバランスのとれない時はスピードは非常に鈍り、又はよく轉倒するものである。これは平衡器官の調子の亂れによるもので、スピードの落ちる一方に身體のエネルギーを冗費するもので、吾々がクロスカントリーのランニング中、或はエックスパンダーの上肢運動中にもこの亂調子を調節して、呼吸を合せて平衡器官の活動を助長することが出来る。平衡器官の運動としては平均體操が好いであらう。平均臺上の歩行もスキーマのランナーが斷然上手だ相である。

然し平衡器官以外に腰部の疲労した時もバランスのとれない事がある。デスタンスレースは特に腰部を使ふから夏季より鍛練して置かなければ、冬季に入つて先づ最初に此處の疲労を招來する。夏季クロスカントリーの登りや漕艇や腰の伸屈、廻轉の體操を平常やつてゐれば大丈夫である。その他強靱な手首、足首を有する方が便利であるが、これは特に練習しなくとも他の運動に附隨して養成されて行くものであらう。

最後に一つ極めて注意に價するものがある。それは一般筋肉労働である。北歐諸國の著名なデスタンスレーサーは労働に従事する者が多くて、學生が殆んどないといふ事實がある。尤も雪に埋れてゐる彼地ではスキーは生活の一因子であるから、吾國に比較して無論一般に普及してゐるであらうが、彼地の學生は無限の體力を有する彼等の前に出ては一層委縮してしまふであらう。吾國に於いても平常勞務に従事してゐる著名な選手を次第に多く見る様になつて來た。

労働の種類としては耐久的なものやスピード的なものが好い筈であるが、實際はそんな差別なく各種に互つてゐる。これは役務としてゐるから最初の苦痛も次第に訓練されて來て、緩める時がないから體力的に完成されてゐる。これをデスタンスレースに練習と工夫によつて無駄をはぶき、有効に適應させてゐるのである。

次下更に内臓に就いて述べて肉體的の練習を終ることにする。

#### 四、内臓鍛練



以上述べて来た事は瞬時的の筋肉作用に關する事で、實際デスタンスレースは一定の時間の耐久性のものであるから、それには更に強健な内臓が必要となつて来る。力のある人は必らずしも健全で耐久力があるとは限らない。内臓の鍛練といふ事は一定の激動によつてもその機能に障害を起さない内臓を得る事に存するのであるから、先づ周到なる注意を以てこれを消極的に保護しなければならぬ。要するに内臓の健康は攝生の生活によつて保たれるものである。

最初は練習前後のウォーミングアップや發汗等による皮膚の保護位である。然る後次第に運動の量を増して行くにつれてそれに適應した内臓を得ればいいのである。次に各内臓器官に就いて私見を述べて見る。

心臓はエネルギーの源泉であるから、その強健か否かは直接結果に影響して来るので、夏季より訓練する必要を充分に認めるのである。醫家以外の吾々にとつては脈膊が最もよく循環系統の状態を表はしてゐる。運動家特にスキランナーは普通人よりも一般に徐脈の傾向にあるといはれてゐる。運動直後の脈膊をとり、これを數分間後（普通は約三分位）の脈膊に比較して、その減少の程度を知ることにより概ね心臓の疲労回復の状態を知る事が出来る。個人々々でこれを試みて、運動の量（例へばクロスカントリーの距離）と共にこの心臓の状態の統計をとつて見るのも何か教へられる事があるだらう。血壓は夏季と本格練習に入つてからとに相違を見るといはれてゐるが、いづれにしても餘り高くなく人並であればいいであらう。大抵の異常は脈搏や血壓に出て来るものである。

呼吸器官はレース中息をはづませ、喘ぎながら冬季の寒冷な空氣を呼吸する關係上、稍々注意を怠れば異常を起し易いのである。北歐の極寒の地ではマスクをかけて走る相であるが、寒い日でも其の程度の注意をすれば間違ひがなからうと思ふ。然しレース中よりも寧ろレース後の處置の如何によつて害されることがある。又數ヶ月の休養から急に激烈な運動生活に移つたり、斯様な運動生活から急に退いたりする場合に、肺、肋膜の疾患を起す事が往々あるから、少くともウォーミングアップ的に豫備練習の生活に一時入るべきである。其他レースは冬季の事であるから、咽喉や氣管支を害する事があるから注意を要する。

消化器は是非健全でなければならぬ。耐久競走では四時間乃至五時間位も走らねばならないから、普通午前九時に出發しても、午後の一時か二時でなければゴールインが出来ない。平常でも空腹を催すのであるが、その間四、五時間の間斷なき全身運動であるから、途中には食物給與所があるとはいへ、レース中咽喉を通る食物は僅少なものであり、それを消化しなければならぬのである。レース中に空腹の爲スピードのがた落ちた例、或は消化不良の爲に腹痛を起して折角のレースを捨てなければならぬ例は随分多いのである。レース前の腹の注意と共に日常生活中でも、俗説の教へるやうに食物の量を一定し、或は減少して攝生すべきであらう。又レース中に横腹部の痛いことは往々にしてあるが、そんな時は少しの苦痛を押し切つても、走つて居る間に癒すより外に應急の處置はないのである。クロスカントリーランニング中にも同様なことがあるので、夏季中にこの試練に遭つた方が冬の爲になるであらう。

身體の諸器官として皮膚がある。冬季レースで厚着をしても結局汗でびつしより濡れてしまつて、零下數度の氣温にあふからたまらない。見る見る内に凍つて皮膚までも冷し感冒のもとになる。これを未然に防ぐには發汗後の處置を怠つてはならない。秋冷の頃、豫備練習のクロスカントリーの途中でもよく肌を冷して疾病の元を作る事があるから注意を要す。夏季中より海水浴や日光浴で皮膚を紫外線に當てるのも抵抗力を増して効果があると思ふ。着衣も毛織物の中に着て汗をはぎかせ、綿物を外に着てそれを吸収させると、汗は直接肌につかなくて豫防になるであらう。

眼部に就いては、眼鏡を掛けて走ると汗と雪とがまみれて全く曇つてしまふ。それで近視十五度以外位の人は眼鏡を外して走るであらうから、平常眼の度數を進ませない様に心掛けた方がいいであらう。眼部マッサージを規則的にやれば多少有効と聞く。

疲勞した筋肉の回復には何と云つても入浴とその直後のマッサージ（殊に滲透性藥劑を用ふれば更によい）が効果がある。此處で一項を割いて一言を附すべきであるが他に譲る。「山とスキー」第九十四號所載の「入浴とマッサージ」奥井由雄氏譯を併讀されんことを願ふ。

今迄各項に就いて述べて來た中には、取逃した問題も多々あるであらうが、練習法の大略を得る事が出來たならば幸である。吾々はこれ等の豫備練習をなすには矢張り規則的に、自分の趣味、環境、體質に従つてプログラムを作成し、それによつて行動した方がいいであらう。普通は冬季近くになるに従つてその運動量(プログラム上の運動時間を指す)を増加してゐる。

例へば北大スキー部のデスタンスレーサーの練習表を簡単に記せば。

午前 起床後 上肢及び腰部練習(各個人)

晝時間 トラツクの平地疾走、二千—五千米

午後 四時 クロスカントリランニング、圓山奥、約六籽—十籽

疾走後 入浴及びマツサージ

就床前 上肢及び腰部練習(各個人)

日曜 休 養 稀ニクロスカントリランニング、三十籽—四十籽

服装は暖い時はランニングのユニフォームにパンツ、寒い時はその上にアンダーシャツ或はセーターに長いトレーニングパンツを着ける。以上の練習を九月初日より實施してゐるが、効果は相當擧りつつある。参考の爲に札幌附近のコースを記載すれば。

〔圓山電車終點を起點として〕

一、終點—瀧ノ澤(俗D點)—神社山—十二軒澤—終點(約三〇分)

二、終點—八十八ヶ所—圓山頂上—(折返し)—終點(約一五分)

三、終點—瀧ノ澤—幌見峠—盤ノ澤—盤溪峠—(十二軒澤)—終點(約一時間)

四、終點—(十二軒澤)—盤溪峠—小別墓地—(小別澤)—トシネル—(十二軒澤)—終點(約四〇分)

五、終點—瀧ノ澤—幌見峠—奥ノ院—(折返し)—終點(約一時間二〇分)

六、終點—(圓山スロープ)—延命閣—瀧ノ澤—終點(約三〇分)

レースにフアイテングスピリットを持ってとよく云はれるが、試合には誰でも持つもので人並の事に過ぎない。冬季練習中は勿論、夏季練習中からその意氣込でなければならぬ。然し一年中の緊張は不可能であるから、適當に休養をとる必要がある。

冬季の成績は必ずしも夏季の練習に比例するものではないと雖も、かくして練習してゐる中に顯著ならずとも身體は次第に鍛へられ、精神は無形の力となつて練られ、身心共に緊張して待つ冬こそは眞に有意義のものであらう。かくして始めて雪上の本格練習に入り競走の時に備へるのである。

皮相の見解の點、或は眼の到らなかつた點に就いて諸賢の御叱正を希ふ。

(一九三一、九、稿)

## 飯山遠征日記より

奥 井 由 雄

一月四日

午前七時、第四回全日本學生スキー競技會に出場すべき我等一行は先輩、校友多數の激烈な聲援裡に、感激の塊となつて一路信州飯山を指して出發した。

一行は中村新一郎、稻葉忠七郎、宮原重規、關四郎、村井延雄、宮村六郎、黒田敦、奥井由雄、小池譽、吉田初雄、西武、足羽進三郎、山田四郎の十三名。

一月五日

汽車は曉の薄明の中を、雪の無い水田を左右に見ながら驀進してゐた。讀書とランプに愉快な車中の時間はどんく過ぎ去つて、雪の名所高田も近くなるとスキー客も多くなつて來るが、窓外には一片の積雪も見えない。

豊野で乗り換えて、汽車は千曲川に沿ふて溯る。月光が河面に映えて明るい夜空に、山々は雲を卷いて峻險に聳えてゐる。夜の九時過、我々一同は目的地飯山へ着いた。街路には雪は皆無で、數日前の降雪も今は全く溶けて非常に汚れてゐた。

明治大學の諸氏が迎へに來て呉れて、先づ中嶋屋旅館に落ち付いたが心の中は甚だ落ち付かない。雪が無いので一同不満の聲を盛に發してゐる。一家族で營なんである此宿の中には昔しの面影が残つてゐて、家人も亦柔味の豊かな親切な人達であつた。

僕達は今は雪量豊富なそして防寒設備のいゝ北の國から、雪の見あたらぬ、外氣との境ひは僅に紙一枚の障子だけである當地に乗り込んだのである。雪辱と覇權を信じつゝ。

一月六日 雪、暖

朝から種々の通信事務に忙殺。スキーの荷造りを解いたりする中に早や夕方近くになつた。先刻まで降つてゐた濕つた雪が積つてゐるのでスキーを穿く。クリスターを塗つたら見事に失敗、すつかり氷付かして仕舞つた。もうパラフィンを塗つても追付かない。時刻と雪質に對して注意が不足だつた事を後悔した。他の學校の人達も凍らしてゐた様だ。

夜は讀書とトランプ。村井君と宮原君は氣の毒にも到着早々風邪に襲はれて床に就いてゐる。

一月七日 晴

昨夜來の新雪が晴れ上つて青空が輝いてゐる。クリステルをレイトランプで焼いて行かふと思つたが、ランプが思ふ様に働かぬので斷念して、薄氣味に塗つたクリスターを上から *Red* で塗りつぶして行く。道路は未だ寒冷に凍つてゐたが、家を離れた日當りのいゝ山路はもう可成濕つて來てゐた。濃緑の杉林の中にポーランツエが美しく陽を一ばい浴びて望まれた。Wachsの具合は若干後亡り氣味だ。塗り換えてゐる人達もあつたが、僕はそのまゝ續けたら次第に調子が良くなつた。斯うして午前は内地獨特の屈曲の多い、杉林に圍繞された山路を滑走して大川町へ出て歸つた。山路を降りて平地へ出るともう雪は極度に軟化して、*pu* には水が浸み出て、身體には稍もすると水がはね掛つたがそれもやがて暫くで、僕達は遂にスキーを脱いで飯山までの泥濘の悪路を、空腹を抱いて一里近く行軍せねばならなくなつた。皆んな首、顔にかけて眞白に潮を吹いてゐる。スキーを肩に歩いて宿に着くと全身汗みどろになつた。

午後。Kittler を若干厚く塗つて之を爐火で焼き、その上を *Talcum* で塗り覆せて出掛ける。宿の大きな爐火はレイトランプよりも更に簡單に Wachs を焼き付ける事が出來た。Wachs の調子は下の方では雪が午前の暖氣で融けたのが今は凍つてゐたので非常によく利いたが、峠の頂に近く杉林の中は未だ粉雪の所が残つてゐて、此邊になると雪がスキーにくつつき過

ぎて重くなり、峠へまでの頑張りにへとくになつた。

滑降。氷結の細い山路は松林の中を遠慮なく曲りくねつてゐて、怪ひpeakが出る。あゝ、不甲斐無くも身體は Rucklage となつて轉倒數回。氷盤の様に凍つた路、一方は石垣で縁取られてゐる崖であるこの路を制動して降つて來たために脚が非常に痛い。午後の滑降で僕はすつかり自信を無くして宿へ歸つた。

夕食後、體溫を測つて見たら三十七度一分あつた。七時頃先輩木原先生が野澤ジャムプ大會の歸りに寄つて下すつた。一九三〇年のホルメンコール大會の話しから、色々と激勵のお話しを承つた。

#### 一月八日 曇

起きて見ると咳が非常に激しく出るので全く不愉快だ。あまりひどいので練習を休んで盛に含嗽したり、吸入器を掛けたりして今日一日で治さうと努めてゐる。

中村主將も關君も同じく風邪、元氣が無い。健康な一同は又 Training に行つた。ジャムプも當地では未だ飛べないので一處に走つてゐる。

#### 一月九日 曇後小雨

依然として咳に苦しむ。當地に居てはジャムパー達は何時になつても練習が出來ぬので野澤温泉へ分宿する事にした。色々と用意に手間取つて稻葉、宮村、五十嵐、小池、吉田、山田の六人が自動車で出發したのは午後三時であつた。重苦しい天候。合宿内は急に淋しくなつた。

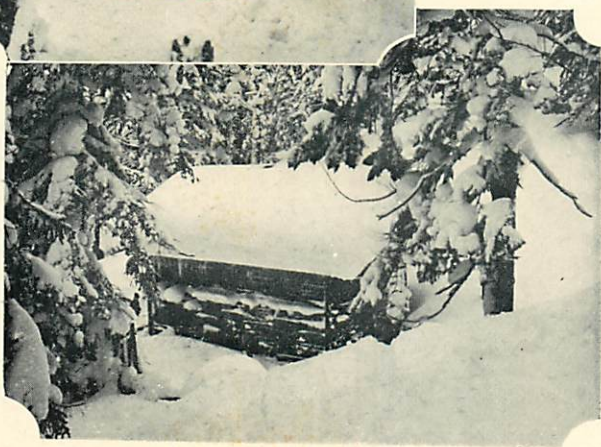
明後日の Helvetia Cup 争奪滑降競走のコース、規定等も發表になり、又黒田、西、足羽の三人が元氣で練習より歸つて來たので可成賑やかになつたが。

夜。頓服薬をのむ。咳は昨日より激しい様だ。

#### 一月十日 晴後雪



空沼小屋



中山ヒュツテ



汗は出なかつた。身體全體が火の様に熱つて眼が充血し、握力なんか全くない。體温三十八度。極度の Melancholie に陥り、戰に對する自信を失ひ、終日床中に在つて苦しんだ。村井、關、宮原の三君も亦同じ様に病床に喘でゐる。中村主將は今晩より床を起つた。

夜の檢温器は三十九度まで上つた。

一月十一日 大雪

朝は熱は三十七度まで下つてゐた。戶外は盛に雪が降つてゐる。日曜なので、それに今日は滑降レースが舉行さるゝ爲に東京方面よりの人達も多い。我部よりの參加者は中村、山田二名。

山田君は野澤分宿一同の情報を齎した。皆んな元氣で四〇〇米をぼん／＼立つて居る相で、残つてゐる一同大いに意を強ふした。

今日のレースの結果、山田君は第八位、中村君は第九位であつた。

頑強な體軀の黒田君も遂に今日より風邪氣味だ。それで今晚のコース圖協定には中村主將のみ出席。

六時の汽車で野澤へ歸つた山田君が未だ當方へ歸着せぬとの野澤よりの九時半頃の電話に、合宿中は俄然不安の渦。停車場、各合宿、その他要所々々へ問合せ見るが手掛りが無い。然し十一時半頃に至つて、大雪のため渡船場に居る事がわかつて一同安心した。

一月十二日 快晴

全身汗にまみれて喘ぎつゝ夜を明した。南窓よりの輝しい陽光の訪れに氣分も爽かになる。

今日はレース・コースの設定の日だ。中村、足羽、西の三君は四十キロへ、黒田君は風邪で行かれぬ。更に慘なのは一八キロの方である。設定に行き得る者は一人も無き有様で、氣を揉みながらも床の中に我慢してゐなければならなかつた。

中山君が札幌より應援に来て呉れた。此の事は此際僕達にどんなに心強さを與へて呉れたかは測り知れない。

野澤より六時頃電話があつて、吉田君が關接大振挫を報告し、又心配が一つ加はつた。

一月十三日

試合の日も近い。今日から斷然床から離れる事にする。村井君、關君、宮原君も黒田君も皆床を離れた。

午後。村井君、關君と明大の練習臺へ行つて見る。暫く病床にあつた爲、恐ろしくて練習は愚か直滑降すら出來ずに歸つた。村井君が病後にかゝわらず元氣で練習してゐた。次にレース用に窄き換えて、ポラシヤンツエへ行つて見ると修繕が終つて早大の連中が飛んでゐた。

合宿には野澤の分宿隊が歸つて來て非常に賑やかに活氣付いた。然し宮村君の風邪が重くて一晚中苦しんでゐた。

一月十四日

午前はジャムプ練習。Sclaire を登つて行くときの呼吸の辛い事、又止まつた時に出る咳の激しい事。

各大學の間に交つて五十嵐、稻葉、山田、小池等の野澤組が斷然他を壓倒す。殊に新進氣鋭の山田のジャンプは一本は一本より見事な進境を示して、並居る彼の先輩、同輩を嘔然たらしめ、他校の驚異の的となつた。關、村井、奥井は完全に駄目、元氣が無い。

午後。極く薄い Tentsu に Milk を交せてコースへ出掛ける。雪が次第に濃く降り出してスキーに雪がくつき始めた。餘り降雪が激しくてコースも見えず途中で引き返す。體温を測つて見たら矢張り三十八度あつた。

一月十五日 小雪、暖

昨夜はひどい發汗と突發的な咳があつて二時過ぎまで眠れなかつた。

緒方直光先輩が應援に來て合宿に加はつて下さる事となつた。激勵の辭に感激して一同ジャムプの練習に出掛ける。

山田、五十嵐、稻葉、小池が好調。關、宮村も恢復して來た。村井はあまり良くない。僕も立つには立つが酩酊の極で醜態を演じてゐる。

午後。稻葉、宮村、山田の三君と共に一八キロのコースへ出掛ける。昨日の Mix を薄く延ばした上に Dunzingel の黒を塗つて行く。長い長い登り。喉が素晴らしく潤く。極度に水が欲しい。へばつてゐるのだ。歸途の屈曲の多い松林の中の滑降を享樂して合宿へ歸つたのは既に暗くなつてゐた。杖の手入。檢温三十八度。

一月十六日 快晴

昨夜來左膝の振轉が痛くて睡眠不足。折から應援に來飯された横濱十全病院の先輩藤本氏に診て貰ひ、今日一日又安靜を云ひ渡された。

ジャンパーと複合の連中は Schanze へ、四〇キロの連中はコースへ出掛けた。皆んな非常に元氣になつた。

午後は稻葉、宮村、吉田の諸君が十八キロの中未だ走つてゐない最後の牛ヶ道以後の松林中のコースへ行く。折から夕方近くの氷結した堅コースと激しい屈曲に、又自信を無くして歸つて來た。今まで好調だつた西君が明日が大事な戦だといふ今日になつて、急に齒髓炎に掛つて顔一ぱいがはれ上り、長野市の病院で診て貰つてやつと歸つて來た。

夕食後、明日は愈々試合といふので、各自スキーの手入れに合宿内は戦場の様な有様である。先づこれまでの Wachs をすつかり揮發油で洗ひ去つて、パラフィンを浸み込ませ Sand Paper で綺麗に滑べ滑べした面を造り、その上に今日の Foro より考へて Tenton を塗つて寒氣に當て、乾かす。

武野君も今晚來た。部屋中激勵電報で一ぱいだ。

一月十七日 小雪時々晴

起床六時三十分。早くも鼓舞的な野澤温泉小唄のレコードが廻つてゐて、合宿内は既に試合氣分で横溢してゐる。

新雪二寸、尙降りつゝありとの聲に Tenton を拭き取つて仕舞ふ。四〇軒の人達は今日の Wachs は難しいだらう。矢張りシナー自身が Wachs を持參する事は最も望ましい事の様に思ふ。假令豊富な應援隊が隨所に用意されてゐたとしても。

先輩及び明日出場のジヤムパー達は夫々要所々々に出動して、我校の選手に飲食物及び Wachs の用意と激勵を與へる爲

に一足先に出發した。

午前九時入場式。やがて四〇籽レースのスタート。我校の中村、宮原、黒田、西、足羽の諸君がどれも美しい走法でスタートを切るのに精一ばいの激勵を興へて宿に歸る。宿に残された十八キロの連中は刻々に迫り来る戦と、目下戦友達が全身を投げ出して苦闘してゐるその姿を想つては期せずして上つて仕舞ふ。

Wachs の豫定は下に Mix 上に Dunningel の積りであつたが、溫度が加速度的に上昇して来て、雪質も刻一刻と軟化して来たので、午後三時頃の狀態を考へて Kisker を燒きその上に Mix を覆せて會場へ行つたが、来て見ると豫想外にひどくなつてゐるので更に Tordell を覆せた。斯る雪と天候の變化の狀態は嘗て高田や大鰐で經驗したのとはほ同様な、全く内地獨得なるものである。此頃四〇キロの選手は既にいづれも苦闘の跡あり／＼とゴールインしてゐた。

午後二時、十八キロ（複合を含む）スタート。我校よりは稻葉、吉田、小池、宮村、山田、奥井の六名。僕のスタート番號は37。一分前の早大矢澤君を追へど全く近付く事が出来ないばかりか、目覺しく引き離されて行く一方であつた。Wachs の狀態は良好だつた。然し病後の練習不足の悪影響は更に大きい。身體が異常に重くて大低の登りコースは歩かざるを得なかつた。此事は中村、黒田、宮原、宮村、西の諸君に於いても同様だつたのだ。

藤本先輩、關君等が應援して呉れた最大難關の兎澤の登りに掛る。精神は張り切つてゐるが身體が追従せぬ。登りの中途山田君が腹痛を起してゐるので先になつて行く。他校の應援隊が盛で超走に實に苦心する。「牛が首」からの松林の滑降に移る頃、腹痛の治つた山田君が再び素適な元氣で超走して、ふつ飛んで行つた。此處より僕の Speed はガタ落ちに落ち、疲勞甚だしく滑降も Rucklage となつてすぐ轉倒し易い。決勝點が近いといふ田甫の畔路上のコースをもダツシュする事なくゴールインして仕舞つた。

控所に入つて見ると直ぐ前にゴールインした山田君に、水と間違へて揮發油を飲ましたと村井君が大いに周章てゐる。ビール瓶に詰めた飲料水と、同じくビール瓶に詰めた Wachs 洗用の揮發油を咄嗟の場合に判別して行動出来なかつたのは、

與へた者も飲んだ者も全く過失で、それ以上の何物でもない。

四〇籽の戦跡は、中村主將力走大いに努め、前半の *pace* 頗る好調を示して優勝を想はれたが、後半振はず遂に第五位、三時間五一分一六秒、得點二點。黒田君は非常な期待を受けつゝ早大岩崎を追走したが、途中十籽位でスキーを折損し、僚友宮原のスキーを借りて追走せしも遂に七位となつて無限の恨をのむ。若年の足羽君も力戦して第九位。同じく西君も亦齒髓炎にはれ上つた顔にもひるむ所なく奮戦し、宮原君は途中身體の變調に棄權した。

十八籽の結果は、病後の宮村君の奮闘涙ぐましく第六位に入選し一點を獲得したのみで、奥井は第七位、山田は第十一位、稻葉は第十四位。タイムと得點は左の通り。

|    |           |     |    |           |    |
|----|-----------|-----|----|-----------|----|
| 宮村 | 一時間三六分二〇秒 | 得點一 | 奥井 | 一時間三七分    | 無し |
| 山田 | 一時間三九分二秒  | 無し  | 稻葉 | 一時間四四分五二秒 | 無し |

以上の如く今日は得點三といふ慘な結果に終つたが、僕達は明日のジャムブに、複合の結果に、リレーに充分の自信と期待を持つて臨む事が出来るのである。

夜は藤本、緒方二先輩の指導の下に山田君の胃洗に大變であつた。太いゴム管を通して、油の浮いた水や、晝飯の鶏卵等が未消化のまま出て来て、揮發油の匂いがブーンと鼻に来る。

ジャムブスキーに *Tento* を塗り、レース用の *Walls* を洗ひ落して入浴、サロメチールを塗り込みマツサージして、就寝十時三十分。

一月十八日 快晴

太陽が緑黒の杉の梢に赫々と輝いてゐる朝。先輩伴氏も今朝東京より飛型審判員としてやつて来た。一同服装を整へて出掛ける。

午前九時半、複合ジャムブ開始。先づ昨日の複合十八籽の結果の得點は次の通りである。宮村一〇八點、奥井一〇六點、

山田九九點、稻葉八二點。宮村、山田共に第一ラウンドに轉倒して入選の望は絶たれ、稻葉、奥井十八籽の失敗を恢復し様と極力頑張り、殊に稻葉は技群の優秀ジャムプを示して斷然複合ジャムプの首位を示め遂に第六位に入選。奥井も亦早大栗山を抑へて第四位に入選した。吉田君が三十六米を飛んだが轉倒せしは残念だつた。

複合ジャムプが終つてより直ちに純ジャムプ競技が開始された。我軍よりは稻葉、武野、關、五十嵐、小池、山田の諸君が母校の榮えある傳統を背負つて奮闘する事になつた。宮村君が複合ジャムプの第二ラウンドに肩を痛め、遂に純ジャムプは勿論、リレーにも出場し能はざる苦境に陥つたのは實に絶大な打撃となつた。

スタート番號第一の稻葉君が美事に空中を高く泳いで三二米を出したが惜しくも倒れて入選の望みを逃し、第一ラウンドに三一・五米を立派に立つた五十嵐が第二ラウンドで轉倒して長蛇を逸し、又練習不足の武野が振はなかつたのは返す返すも残念至極であるが、就中最長不倒距離を出した新進山田を始め、關、小池いづれも果敢極まる飛躍をなしてがつちりと立ち、傳統を誇る北大ジャムパーの活躍は依然場内を壓へて居た。競技成績左の如し。

第二位 山 田君 三〇・五米 三四・五米 決定點約一三七・六 得點五點

第四位 關 君 三二米 三二・五米 決定點約一三三・五 得點三點

第六位 小 池君 三〇米 三二米 決定點約一三一・七 得點一點

第二位の山田は僅か一・五點の違ひで優勝を法大の神代君に許したのである。

複合競技決定成績は左の如し。

第四位 奥 井 一二六點 得點三

第六位 稻 葉 二一九點 得點一

午前の總得點は豫期に反して十三點に甘んじなければならなかつた。

午後、リレーレース。スキーには Kistler を焼き、Kunppen をその上に生のまゝ厚く塗つた。中村主將は前日のレースに

指を甚だしく傷け操作非常に困難なので、又一方山田が午前中のジャムプの成功に非常に氣を良くして張り切つて元氣な所から彼を起用し、又傷付いた宮村の代りには足羽を用ふる事にきまり、オーダーは次の如く發表された。

山田、足場、黒田、奥井

午後二時スタート。山田良く滑り出し、そのまま早の坪川、明の木村の跡を追走して第三位で姿を消して行つた。やがて四〇分餘經過して第二走者となつて早、明共に通過し、法政も過ぎ、遂に弘前高校、日大が通過しても山田が姿を見せぬ。心配の中に山田が途中空腹の爲に倒れてゐるとの報に、我軍の第二走者足羽が Dick Ford のために迎ひに現場へ急行したが、そのときは既に山田の身體は救援隊のために合宿に運び去られて仕舞つた跡で行き違ひとなり、遂に我チーム乗權の止む無きに至つた。山田の遭難を想ひ残念で仕様がなかつた。

合宿に歸りスキー發送の荷造り。

夜、小學校で賞品授與式。今年も亦早大に破れ、剩へ明治に破れて第三位に落ちねばならなかつた。

九時五分の汽車で飯山を去る。早大の人々が見送つて呉れるにつけても敗慘の苦痛が身を刻む。木原、緒方、伴、藤本の諸先輩と同伴して種々の注意と激励の言葉を戴いた。

一月十九日

目覺むると汽車は慘敗に疲れ切つた一同を載せて雪の無い關東平野を驀進してゐる。東京では先輩田中次郎氏に莫大な厄介となり、一日を各自思ひ々に過して、夜九時の汽車で札幌へ向つた。伴、村本、神澤氏の諸先輩の温い慰めと激励の下に。

一月二十一日

午前九時札幌着。驛には大野部長を始め廣田、宮下先輩と部員が出迎へて慰勞して呉れた。疲れた身にも粉雪の吹雪く札幌が實に有難く感じて、再び燃え上る闘志に勇躍を誓ふ。

最後に、今回の遠征に多大の應援、激勵を與へて下さつた部長始め先輩各位に深甚な感謝の意を表して筆を止めます。

# 一九二九年以前のカンチエンジュンガの歴史

Kangchenjunga Adventure By F. S. Smythe

"The Junes" Correspondent and photographer, and the leading  
Englishman, on the Expedition.

楠 見 正 雄 譯

## 1 野心と夢

山脈には三つの種類のある事を學校の地理學の時間、に書物の上で知つた。餓えて居る中世紀の籠の様に吾々の自由地理畫帳の頁に哀つぽく散らばつて居る、小さな足に兩側から支えられて居る一本の線で表はされて居る或山脈があつた。山を描寫する方法は影線法として技術として知られて居る。しかし吾々の地理の先生はかく百足の様に無遠慮に畫れてある山脈に付て色々と説いて、而してよく考へた上で、こんなにだらしない型に家で畫て來た地圖に悪い點を與へたものだ。さて陰影法なるものがある。この陰影法なる觀念は、山脈の唯一面にのみ太陽が照つて居ると云ふ想像によるものであつて、其反對側は暗い陰影となつて居るのである。上手にすれば大變有効なものである。鉛筆の汚れを擦り消す爲に一枚の紙を上下にこすらすにすむ子供は減多に無い、が世界中に普及して居る。若し形と助言に就て曖昧な印象が與へられんか、吾々の畫た山脈は月世界の陰氣な並木の様に淋しい。そして餘りにも立派でない不快な、物戀しいものになつてしまふものである。最後に等高線法なるものがある。この方法は時間と勞力を要する點から餘り一般的ではない。何故ならば、若し正確にほぼ



近い精密度が得られなかつたならば、かくして畫た地圖は地理の怒りを買ふ事が確實であるから。

私自身に就て云ふならば、地圖と、其他の家での勉強の事柄に付て以外の他の事は除外して、熱心に畫をかく事と、そして全ゆる山脈の部分の色取る事を大變満足に思つて居るのである。地理學は私が學校で、何か興味を感じた二、三の新らしい事の内の一つであつた。若しも地理學だけが進級の資格を與へるに必要なものであつたならば、私は多分六年生に進んだであらう。しかし事實は其に反し、不名譽にもこの五年生に取り残されたのであつた。

地圖の緑色の低地は私にとつては大して魅力はなかつた。精神的に、私は商賣の行はれて居る平野から逃げ出さうと以前から考へて居た。そして崇高なる美德に、不接近性に、又文明の中心から遠ざかる事によつて示されて居る之等商業發達不可能なるバーレン地方に入り込もうと思つて居た。私の信ずる聖者はスコットであり、スケレドンであり、且エドワード・ホインパーであつた。地球表面に私がどの他の部分よりも以上に屢々注視する一部がある。其は中央亞細亞中に腹遣て居て、地圖では赤と褐色の中間色の部分である。何時間も私は山脈や砂漠やそして町々が、私の指先の下にかくれる位熱心に見つめた。私の知つて居る海岸や倫敦に至る距離と比較して、數千哩もあると測られて居る距離にある山脈に就て、何か或觀念を得んと勉めたものであつた。其山は即ヒマラヤ山脈なのである。

想像の世界で、私は緑の平原を出發して、まがりくねつて居る川に沿ひ上つて、地圖の淡褐色の所を通り抜けて、暗褐色の所に至つて遂に止つた。而も白い破片の上に、其は最も高い峯が雪で被れる絶頂であつた。其處へ私は止りそして夢見た。尙其上全地球の上方遙かに聳えて居る偉大な山脈を心に畫かうと試みた。即其處では灰色のどんよりした教室の壁は退却して消失し、まぶしい位眞白な大きな峰々が私を取圍んで居る。天國の大氣は私に接吻し、吹雪は私を勵ましてくれた。そして地理の先生の嚴めしい聲が、怠慢と不作法な不注意に對する嚇と罰の宣告によつて目を覺まさすまで、私はよく夢を見続けたものであつた。若し先生が夢の内容を知つて居たならば、彼は物わがりの良い人であつたから、私を夢の頂に其儘にしておいてくれたであらう。

私が山の事に就て居つた位、地理等の他の方面をも勉強しておつたならば、實際私は優等生であつたに異ひない。事實に於ては、私が色々の本から見付け出して獲得した知識には引け目があつた。そしてまた、モンブランがスイス中に於ける全く一番高い山でなくて、ドームであると云ふ事を勇敢に議論して、全くひどい目にあつたと云ふ確な記憶を今もなほもつて居る。

エヴェレスト山 *Monte Everest* と *マッドウイン・オースティン山 Mount Godwin Austin* (今日では  $K_2$  と呼ばれて居る) と、そして *Kangchenjunga* なる三つのヒマラヤ語の名は、全ゆる他の物の前に聳え立つて居る。嘗てエヴェレストは二万九千呎でなくて二万九千二呎であつたと云ふ事を知つて居る事が、私の進級に際して外見上一番にさした。そして暫く一番に居て地理の先生の寵愛に浴して居た(何故ならば、先生は識別力のある人であつたから)。しかし後になつて私はびりに餘り遠くない水準に下つた。

数年の間、私の野心は多くの英國の丘や岩に集注せられた。勿論其次に來たものはアルプスであつた。其等アルプスの山々は私を満足させた。若し非常に満足さして居らなかつたならば、彼等は私をして私の若き時代の夢の土臺の上に、より頑丈な想像の城を建設さしてくれたでせう。そして其等アルプスの峰々で私は登山の方法や技術をならひ、又山腹にある組合なるものを知つた。或人々にとつては英國の丘は彼等の終局であり、又他の人々にはアルプスが。しかしながら登山家の旅の終局はエヴェレスト山の絶頂である。

多くの人は『一體全體山登りは如何なる價值があるのか』と問ふ。かゝる問を發す人々には何等價值は無いが、然らざる人々に價值があるのである。冒険は人の心深き所に其根を持つてゐる。若しも人間が存在の始めから冒険によつて鼓吹されて居なかつたなら其人は生存し得なかつたでせう。と云ふ譯は、其人が自分の環境と云ふものを征服し得なかつたであらうから。又若しも其冒険精神が早くに死んでしまつて居たら、人類は唯退歩するのみであつたらう。

冒険と云ふ事に就て私は唯必然的に肉體的の犠牲のみを要すと云ふのではない。精神的の全ゆる新しい思想、或は新しい發

明も又冒險なのである。外形的に最高の位置を占むる冒險は肉體の其と精神の其とが混然溶け合つたものなのである。椅子に腰を掛けて而して何か新しい發明をすると云ふ事も精神的な冒險でありうるかも知れぬ。しかし本當の冒險と云ふものは完成までの過程が非常に遠大である爲に、一生を犠牲にせねばならぬ位なものなのである。かく供せられた犠牲と云ふものは決して無意味なものではない。而して其犠牲と云ふものは金錢により測りうべき性質のものではない。精神的な活潑さは實に肉體的な勇氣に依るものなのである。而して神秘的な大自然は、人類は嘗て宇宙の根源的な勢力に對して戰を挑んで居たと云ふ事を判定して居る。而して若しも人間が敗北を自認するならば恐らく平凡な人生に低下し、尙も動物の程度までも沈んだであらう。人間には冒險心とも云ふべき或物が與へられて居た。キャプテン・スコットと其友達連、又マロオリヤアヴィンが經驗したものはこの冒險精神なのである。彼等の最後の慘酷な瞬間にさへもアル百一號の乗組員達は、自分等は決して無役に滅びるのではないと云ふ事を深く覺つて居た。ジー・ホインバー・ヤング氏は書いて居る。「冒險之は山に對する感じと時々非常に愉快に一致するが<sup>II</sup>に對する衝動は其機會と共に消滅し去るものであらうか。或は又自然の要素に打ち勝つて居る他の時代の内に新しい出口が見出されるものであらうか」と。人類が地球と云ふものを征服した時、彼等は新しい出口を發見するであらうと私は思ふ。即彼は彼の眼を星の世界に向けるだらう。

## 2 カンチエンジンガの性質及一九二九年以前の登攀史

大まかに言ふならば山には二つの型がある。山波、山の背、又は氷河より突出して點を作つて居る山と、山波や山の背等からはなれて立つて居て其特殊の氷河系を持つて居る山とある。前者の型の好例としてベルン・オーベルランドの峰がある。其等は個々別々であるとは云へど、ミューレン或はヴェンゲルン・アルプより見る時は特に偉大である。其等は唯雪を被つて居る高原や氷河の連結系の上に浮き上つて居る點であるにすぎぬ。他の好例は偉大なヒマラヤ山系の峰である<sup>K</sup>である。多くの點から見て世界中に於ける驚異的な峰の一つであるとは云へ、もつと適切に云ふならば、其はカラコラム山脈の氷河

や雪原の上の孤獨な岩の頂であり、且もり上れる氷の塊である。

獨立して居る山としてはカンチエンジュンガよりも好例はない。其は數個の頂上より放射狀に放出して居る獨身の多くの氷河を持つにふさはしい大きさの山なのである。そして主體をなして居る山塊より放射して居る氷河に關與して居る多くの附屬的の峰によつて圍まれて居るとは云ふものの、すつと下の谷を覆つて居る熱帶森林の縁に遙かに流れ下つて居る氷河は山嶽王國の明かな所有である。世界中に於ける最初の六個の峰に付て云ふならば、カンチエンジュンガは規模の大なる點に於ては世界中に於て光榮を負ふべき唯一のものである。エヴェレストとカラコラムの偉大さは、彼等が生れ出た遠い不變の天地を貫通するに必要な時と金とを得る事の出来る人々によつてのみ觀察されるのであるが、しかしカンチエンジュンガは、誰か丘町であるグーデーリングを訪れんと心掛けてゐる人々か、或は其低い町にある塵芥の丘を登つた人々によつて見られるであらう。かくて人は疲れた彼の眼を雪に向ける事が出来る。そして彼が靈感と希望とを以て見守る事の出来る未征服の靜かな世界がある事を反射的に感じうる。

カンチエンジュンガが世界中で高さに於て第二なるや第三なるやは今尙確實では無い。と云ふわけは其高さは凡そ $K_2$ の高さに等しいから、而して其事は名譽ある地位を得ると云ふ事に關し議論さるべき事柄である。印度の測量によつて決定された所によると、 $K_2$ は二万八千二百五十呎の高さで、カンチエンジュンガよりは百九十四呎高い。之等の高さは非常に正確な三角測量法によつて評計されたものである。よくある所の僅かの誤差は非常に念入な計算の中にもは入つて來がちなものであるから、其等の價は唯凡のものに過ぎぬとも考へられる。測量の權威者として最も偉大なるサー・ドーニス・ホルデイチ氏は、屈光に依り誤差は生ずるものであると云つて居る。例へて申すならば、雪を被つて居る所の上にある稀薄な空氣を通過する太陽の光線は屈光による誤差をよく生ずるものである。其他困難な事はヒマラヤの様な大きな山で實驗された事が與つて力がある。山脈の近くでは水面に僅かながら傾斜があると云ふ事は有名な事である。故に機械的な水準は影響を受けないと云ふ事は出来ない。

説明に用ひられた之等の要素によつて世界の三高峰の高さは、印度の三角測量法の權威者であるコロネル・エス・ジー・ブラード氏によつて算出された。而して氏は左の如き結論に達した。エヴェレスト山は二万九千四百一十呎、カンチエンジュンガは二万八千二百二十五呎、K<sub>2</sub>は二万八千九百九十一呎。かくの如くカンチエンジュンガはK<sub>2</sub>よりも三十四呎高いとされた。この僅かな差は殆ど注意するには足らぬものであつて、頂上に於ける各季節の降雪状態に依る高さの變化なりと説明すべきものである。又第二には死ぬ程苦しい暑さのある事にも衆人同意であらう。カンチエンジュンガは獨立國なるネパール國の北東部に位して居る。そして英國の委任の下にあるシイッキム國の北西部にも加はつて居る。北北東より南々西に走つて居る主脈は之等二國の間に自然的の境界を作つて居る、と同時に分水界からは數個の重要な河が流れ出て居る。カンチエンジュンガの北方十二哩の地點には西藏の國境がある。この國境を嚴格に云ふならばヒマラヤの主分水嶺にそつて居るのである。そしてこの分水嶺は北には乾燥せるチベット高原と、南には肥沃な降雨の多いネパールとに分つて居る。しかしながらこの分水嶺にはカンチエンジュンガに及ぶべき高さのものはない。そして其山と其巨大な山塊から突出して居る附屬的な峰とはヒマラヤ主山脈から南方へ突出して居る。概して山或は山群が孤獨であればある程氣候の變動が激しいものである。カンチエンジュンガは大きさに於て單に彼個有の天候を作つて居るだけでなく、其に加ふるに既成天候の全能力を捕獲するに充分である。唯山麓にある低い丘がベンガル平原より天候を區別して居る。しかし之等の丘は南西より來るモンスーンより其個有の天候を守る事の出來る程の高さでもない。其結果として年降雪量はヒマラヤ山脈中心の他の峰々よりも恐らく大であらう。何故ならばこれカンチエンジュンガは世界中に於ける最も豪壯なる雪と氷の景色を誇つて居るから。

カンチエンジュンガは唯單に氣節風の勢力を打破するだけでなく、氣節風の非常な程度の空撃から主分水嶺を北側にかばうて居る。この結果として小面積の内に景色と氣候の異狀な變化があるのである。ロナーク溪谷の頂の方にある乾燥した塵つばい丘々やドググニイマ山脈、そして西藏の高原の彼方とは、カンチエンジュンガより南方に放出して居る溪谷とは非常に面白い對象をなして居る。其理はカンチエンジュンガの氷河よりも相當小さい氷河や、又幾分は高い積雪水準を持つて

居る乾燥した山嶽國があるからで、尙其國が非常に接近して居るからである。登山家と云ふ立場から見ると莫大なカンチエンジュンガの降雪量は大變不利なものである。何故ならば其降雪は山其物を塗りつぶし、其の上氷のしつかり附着して居る塊をもつて居る全ての穴を埋めてしまうから。今日までづつと築き上げられて來たこの雪量の爲に引力は加はるのである。之等の氷塊は彼等が今まで養つて來た主氷河に合すべく下方に向つて動き初める。時々彼等は山腹高くで止つてしまつて、そして急坂を流下出來なくなる。其處に於て岩の斷崖が其下にあるならば、其れ等は數呎の厚さある幾百の塊に裂けて、氷雪崩の型となつて數千呎下方の氷河に落下する。この氷雪崩こそはカンチエンジュンガの持つ所の極端な殺人的武器なのである。

カンチエンジュンガに於て曝らされた危険よりも、より大なる危険に出合つた山を登山家は知らぬであらう。何故ならば彼は争うべき氷雪崩れを持つて居るだけでなく、原因と効果に於て測り知れない所の不正確な天候を持つて居るからである。人々が眼前にかかる山を見た時、カンチエンジュンガを取圍んで居る谷に住まふ人々が、大山嶽の高潔さと神祕さによつて滲み込まされて居ると云ふ事を、恐らくは小さいながらも驚異とするであらう。彼等にとつてはカンチエンジュンガの五つの絶頂は五つの雪の寶なのである。而して其等の上には或全能の神の玉座がもうけられてあるのである。彼等の繁榮と彼等の生活と云ふものは此神様の御氣嫌に依るものなのである。何故ならば神様は暴風を以て彼等の作物を吹き飛ばす事も出來れば、或は洪水と雪崩とで彼等の村々をも破壊出來るから。遠き過去よりこの勢力ある神に捧げられた、見るだけでも陰鬱になる様な人類犠牲の物語も幾多あるのである。

概略を云つて見るに、カンチエンジュンガに進む進路となつて居る主脈は四本ある。其一はクンザヤカンバツチエンを貫通してネパールのタマール河の溪谷を遡つて居る。其二はネパールのユラン溪谷を、其三はシイツキムのテースタ河の溪谷を、而して其最後のは尙スイツキムのタラン溪谷を遡つて居るものである。カンチエンジュンガの南方に面せる見張峰の一つである、二万四千二呎のカブルー氷河に源を發して居るランギット河が一つユランとタアルンの間に流れて居る。し

かしながら前二者に比較する時は單に從屬的な存在であるのみで決して主要なる進路ではない。

カンチエンジュンガの附近に非常な探險を試みた最初の歐洲人は、植物學者として又探險家として有名なるサー・ジョゼフ・フーカー氏であつた。カンチエンジュンガを取巻いて居る多くの溪谷は八年前までは未知未探の世界であつた。猛烈密搬は又大變困難であつた。一八四八年フーカー氏はタマール溪谷を横切つて、次でマンゴ山の北側にあつてネパールの北東部より西藏へ通じて居るワルンとヤンマの峠を訪れた。そしてカンバツチエンを通り抜けてダージーリンへ歸つた。其途中ヤルン溪谷とシンガリラの梁嶺とを通過した。一八四九年一月彼はラソン溪谷を経由してドゾリへ到着した。けれども降雪の爲其以上進む事は不可能なものであつた。其四月には彼はテースタ溪谷からラツチエンに登つた。而して一万九千二百五十呎のランゴボ峰を數回登らんと企てた。其効あつて彼はボーキ河を登り、トムラツチエン河との分流點の近くを渡りツェム氷河に至らんと試みた。しかし之は遂に失敗に歸したので、彼はラツチエンとラツフウング溪谷を探險し、又夫々二万二千七百と二万三千百八十呎の高さのカンヘンジャウとパウフンリの登高をやつた。

之等の計劃は水泡に歸したとは雖、彼等は單に通過すると云ふよりも以上に注意しなければならぬ何者かを獲得した。丁度この時分一方アルプス方面での登山が初つた時分であつて、マツターホーンが征服せられたのは之より十六年以内の事であつた。が此方面ではツェルマツの巨峰よりも高き事八千呎の山々の登山が計劃されて居つたのであつた。其後フーカーはラチエン溪谷の頭上部にあるチヨラモ湖に登り着き、其處から小さな峯々を登り、ドンキイ・ア・ラ（一万八千三百三十呎）を横切つてラチュング溪谷上部に入り込んだ。

フーカーと彼に同伴せしダージーリングの長官であるカンパベル博士は、シイツキムの宰相であるナムガイの命令に依つてダージーリンへの歸途トウムロンにて捕獲投獄された。其から暫くして釋放された。がこの亂暴な行爲に對する罰としてシイツキムの一部即グレート・ランジット溪谷の南部は英政府に併合された。この地方は嘗てはネパールに屬して居たの

だが、一八一七年のグルカア戦争の後シイツキム政府に取上げられた。しかし其年の内にシイツキムはダージーリンを吾國に割譲した。今日ダージーリングは産額多き茶畑によつて覆はれて居る。

フーカー氏は彼の放浪を説明せんが爲に小規模のシイツキムの地圖を作つた。しかしこの地圖は一八六一年ゴーラー大佐の軍隊の進軍による、カーター中尉のダージーリンとトウムロン間の偵察測量が行はれるまでは其儘残つて居つた。印度測量局の皇室附技師であるキャプテン・エツチ・ジェー・ハーマン氏に依つて、シイツキムの測量が完成されたのは一八七八年以來の事である。ハーマン氏はトウルンのモナステリーに至らんとする企ても含めてであるが、數回の旅行をしたが住民の反抗の爲に歸らねばならなかつた。彼は尙カンチエンジュンガの麓まで行かんと試みたが、健康が熱帯地方の溪谷の爲に害されたので又も止むなく歸つた。

エツチ・シー・ヴィ・タンネル大佐は其測量の繼續を試みた。彼が三人の印度の測量家を訓練する事に相當名聲あるものと思ふ。バンデイトト(印度に於ける博學の學者の事)達はエス・シー・デー・ユウ・ジイーとアール・エヌと各自署名した。かかる人々は後に相當價値ある仕事を完成した。本當の三角測量はタンネル氏と彼の助手であるロバート氏に依つて企てられ、そしてバンデイトト達は地形上の細々した事を附加した。

一八七九年にエス・シー・デー (Balu Sarrt Ohanara Das) 即最も有名なバンデイトトはカンゲ・ラ(一万六千三百七十三呎)をシイツキムからネパールに横斷してカンバツチエンの溪谷を上り、二万二百呎のジョンリン・ラとチヨトン・ニイマ・ラとを横切り西藏のタシイ・ルンボに至つた。之は確かに世界のあの部々の記録にある最も勇敢な旅行に異ひない。尙ジョンソン・ラの横斷、即高い氷河を通過すると云ふ事は偉大な功績と云はねばならない。其より二年おかれて一八八一年、彼はカンバツチエンの北方にあるナンゴ・ラを横切つた。而して續いてラーサルへ行つた。

一八八三年にはベマヤン・ステテ・モナステリーのラマ・ウギエン・キアトリオと云ふ土人によつてテースタよりラーサ、次にはラツチュン溪谷へ、而してドンキア・ラへと云ふ勇敢な旅行が企てられ、そしてアン・ルウト(道に就て)と云ふ貴重な



スケツチが作られた。

同年十月より十二月にかけてロバートと彼の助手で、嘗てはタルン溪谷からトルン・モンステリへ探險した事のあるリンジン・ナムギアルによつてシイツキムのすつと接近し易い部分の測量が完成された。一八八四年十月には彼はカン・ラを横斷してネパールに入りヤルング溪谷を探つた。尙サラート・チャンドラ・タスの路に依つてジョンソング・ラを越した。然しながらチョントン・ニイマ・ラを横切る代りにロナーク溪谷をラツチエン溪谷との接合點へ下り、一八八五年一月三十一日にダージリンへ降つた。

カンチエンジュンガ近傍に於ける之等の豫備的探險は、其への進路に就いてはつい先まで殆ど知られて居なかつたと云ふ事を示して居ると思ふ。若しもこの豫備的探險が行はれて無く、且其道が將來の登山家に對して明かにされてなかつたならば、世界のこの部分に於ける最も美的にして且興味深い所は接近するには餘りにも困難であつたらう。未來に於てカンチエンジュンガを計劃せんとするパーティーに取つて記憶されねばならぬ事は、彼等に對しては最早取つて置き道がないのと同様であると云ふ事である。最初にして且純眞な登山隊とも呼ばれるべきものが一八八三年に現れたと同年に、ダブリュ・ダブリュ・グラハム氏はシイツキムに於ける登山を初めた。彼は最初に四月の初めにドゾングリを訪れ、次にシンガリラ嶺の一万余千呎の邊の峯を攀ぢた。一週間目には彼はダージリングへ歸らねばならなかつた。其後十月に彼はカプール山脈の一万余千三百五十呎のジュボース峯とカング・ラの西方の一つの峯とを登つた。彼は前者を二万呎、後者を一万余千呎と云つて居る。遂に彼は二万余千二呎と云ふ頂上に達したのである。この登山は非常に議論の多い問題である。彼がカプールを極めたや否やは今日尙疑問に附せられて居る。彼は恐らくはホークド峯と間違つたのであらう。

グラハムは一つ面白い事を云つて居る。『五月は雪崩の月である。尙續いてシイツキムに於ける大規模な登山は全てモンスーン（氣節風）の間か或は後に行はれたものである事は注意に價する』と。シイツキムのヒマラヤに對して敢行された最も貴重なる山岳探險は、一八九九年のフレツシユフィールド氏のパーティーの其である。ダージリングを九月五日に立つ

て、其一隊はテースタ溪谷とツエム氷河とを登り、ロナーク溪谷の頭部に横入し、次にはジョンソン・ラを横断した。大變な降雪の爲に彼等の計劃は大いに妨げられたので、彼等の最初の望劃であつたカンチエンジュンガか、或は其附近の一峯の登高計劃を遂行する事もなくカンバツチエンに下つた。何等登高は出来なかつたとは云ふものの、フレツシユフィールド氏は多くの貴重な登峯可能性に關する推量と觀察をなした。又一方彼に伴つて行つたシグナー・ヴィトリアは數多の美しい有益な寫眞を取つた。フレツシユフィールド氏はカンチエンジュンガが氷河より突出つて居る其の西の壁を試登した最初の人なのである。彼はこの氷河に付て書いて居る。『この氷河は其の源を頂上より唯千二百呎下にして、海拔二万七千呎の高峯の本に横はれる雪源か或は臺地に發し、其處に至つて居る最後の岩の嶺梁は大變接近し易い様に見へる。しかしながらこの臺地の下には最も驚異的な馬蹄形をした斷崖が伸び擴がつて居る。少くとも普通の登山者ならば唯斷崖と云ふであらう。しかしながらこの氷河は私の意見としては可能性あるカンチエンジュンガに至る唯一の進路なる資格を有するものと思ふから、彼の云ひ續けて居る次の言葉を吟味する必要がある。私は意味を強める爲に「唯」と云ふ字を用ひるが、稍都合悪い様には見えるが、私の友達達の寫眞に就て研究して見出し得る唯一の進路であると云ふわけは、全ての山の危険は少くとも人間の熟練によつて避け得られるから、龜裂や立方形の雪塊等は上に垂れ下つて居る氷崖からの崩雪によつて埋められ、或は打落されるから急坂と雖も坂の連りを次々に征服して行く事によつて打勝ち得られる。そしてこの段階に於ける危険が去つた時には、道は同じ様に現れて居る雪棚に沿つて發見されるものである。』

クンザの通過を終てフレツシユフィールド氏はマージン・ラとカング・ラを横切つてドゾングリ、次にはダージャーリングに行つた。彼は彼の古典的な著書なる「カンチエンジュンガを圍りて」Round Kangchenjunga に彼の經驗を書いて居る。不幸にして其は今日絶版になつて居る。この遠征の間にフレツシユフィールド氏の友人の一人なるイ・ガルウッド博士は、今日も尙非常に貴重なものとして残つて居るカンチエンジュンガと其環境に就ての地圖を作成した。實際大變に正確な出来で、而も其は非常に困難な状態の基に作られたものなのである。

一八八九年と一九〇二年の間にシイツキムの政務官であつた故クラウド・ホワイト氏は色々な探險をしたが、残念な事には詳細な記録は殆ど残つて居ない。彼はバンドイムとシイムツ山の間にある狭谷を調査した最初の人である。而して一八九〇年グイチア・ラを横断してタルングとテースタ溪谷を登つて居る。彼はツエム氷河を約一万五千呎まで登り、タンチャング・ラとセー・ラを横切つてロナーク溪谷に入つた。

カンチエンジュンガ地方とヒマラヤ山系に於ける登山開拓者としてエ・エム・ケラス博士の名聲は拔群のものである。恐らく彼は現代の登山家がアルプスを運動場と見做す様に、ヒマラヤ山系を同様に見做した最初の人であらう。彼に取つては大いに重要な地形的の、又化學的の考察は其の重要性に於て決して登山其の物の背後に位するものではない。尙シイツキムの北東及北西兩部への登山遠征の數々の行程に於て、其の地方が他日ヒマラヤの運動場となる運命にある如く、シイツキム國が公開された時には、將來の登山家にとつて大變貴重なものとなる地形的知識を彼は得ずにはおかなかつた。

ケラス氏の登山は詳述するには餘りに多過ぎるが、しかしカンチエンジュンガのスグ近傍にて彼が登り或は計劃された、二万から二万三千呎の多くの峯や道の内、ネパール・ギャツプ(二万一千呎)は特筆されなければならぬ。其のギャツプはツエムとカンチエンジュンガ氷河とを分離して居て、其の前者を彼は四回も割て殆ど頂上に達したのである。二万二千三百六十呎のシイムツを一九〇七年に歐洲の案内人と共に三度企てたが、悪天候と悪雪質の爲に頂上に達する事は出来なかつた。一方七千七百呎のシイムウ鞍部と一万九千三百呎のツエム・ギャツプとは一九一〇年五月に彼はツエム氷河から登つた。ランボ峯は一九〇九年の九月に登られ(二万二千八百呎)、一九一〇年五月にはチョテン・ニイマ・ラの東なる二万一千二百四十呎或は二万一千七百呎とも云はれて居るセンチネル峯を、一九〇九年十二月には二万四千三百四十四呎のジョンソン峯を、北西梁から二万一千呎まで登つて悪天候の爲に打ち伸ばされた。

ケラスの死前一九二一年にエヴェレストに行はれた最初の遠征は、彼の遠征としては最後のものであつた。而して彼は一方九千三百三十呎のナルシンを征服した。彼の登山は非常に遠大な効果をもたらした。彼はポーターシルシエルバやブーティア

を計劃的に雇ひ且訓練した所の最初の人であつた。一九〇七年の或機會に彼は歐洲人を伴ひ、又他の機會には土人達を伴つて登つた。少しも訓練してない土人としてのかかる人々を訓練する事によつて、非常によく働き且エヴェレストやカンチエンジュンガに於て非常に見事な登攀をした人間にする事が出来ると云ふ事は、彼等が元來非常に偉大な登山家であると云ふ事を示して居る。ジョンソン峯にて從順に彼の足跡に從つた一人の男の様に、私は不安なくケラス博士が進路發見の技術の上から見て、又登山の技術の上から見て、ヒマラヤ登山の最優秀な開拓者として群を抜いて居ると云ふ事を公言し得る。單なる登山と云ふ事を別問題として、高所の登山と云ふ點から見て生理的に亦物理的に貴重なる科學的な記事を多々彼は寄せて居る。覺へ書や色々の論說に時々ある物足らなさを、若し彼が彼の登山の事に就て詳細を書き加へたならば、後進者及登山の文獻はより豊富な内容を持つたであらう。

カンチエンジュンガ其物に對する企てに入る前にも一つの登高を云はなければならぬ。其れは一九〇七年十月に二人のノールユー人、メツセルス・シー・ダブリュ・ルベンソンとモンラッド・アースに依つて二万四千二呎のカプールの對してなされた計劃である。彼等は大規模な氷崩となつたカプールの氷河を經由して山に取付いた。そして彼等は五日の間氷の峯やそして氷の裂目の複雑な迷路を切開いて進まねばならなかつた。かかる難事は約二万一千五百呎の邊で終りをつけた。そして彼等はダージリングより見れば大變平坦に見える二つの峯の間にある氷崩の上にある高原に天幕を張つた。其處からして彼等は東峯に達せんと試みた。最初の攻撃は出發が遅くて時間が不足な爲に追ひ歸へされた。十月二十日にキャンプを二万二千呎まで進ませた。而して再度登高を企てた。嚴寒の爲に彼等は午前八時三十分まで出發する事が出来なかつた。午後六時には絶頂より二百呎下の邊まで達した。しかし水平距離はまだ〳〵相當あつた。其處で彼等は西風の猛烈なのに曝された。其にも關らず進むと云ふ事は殆ど不可能であつた。落陽と共に寒さは益々其度を加へた爲に、凍傷を避けんにはどうしても退却せざるを得なくなつた。

最後に降つて來たルーベンソンの隙が悪しくも滑り落ちたので下降は臺無しになつた。モンラッドは彼を引き止めたが反

動が大變大きかつたので五本の撚の内の四本は全く切れてしまつた程であつた。彼等がキャンプに歸つた時にはモンラー  
ド・アース氏の足は凍傷でやられて居た。

非常に元氣な計劃もかくして終りをつげた。特に元氣であると言ふのは、ルベンソンがこの遠征するまで一度も山に行つ  
た事がないと云ふ事實によるのである。頂上に登る事は失敗したが、二万呎の高緯度に於て相當長い時間を過す事が可能で  
あると云ふ貴い發見をした（この場合は十二日であつた）。而して其處で普通に食ひ且寝る事も出來、體の調子も良かつた。  
尙其上別に取立てる程の肉體的の衰退もなく馴化し得たのであつた。

## ノールウエーに於けるスキー練習

オ　カ　ツ　譯

(これは獨逸の一ロイフアーが、雪の降らぬ前からノールウエーに出掛け、彼等と一緒に練習した時の日記を簡單に書いたものであります。原文がとても簡單で、トレエニングに對する具體的な事は少く、甚だ抽象的でありますし、それに拙譯を來て居りますから、表題倒れの形です。でも、競技をやる皆様にまつて少しでも参考になつたらと思ひ、敢へて出して戴きました。)

スキー練習法と云ふものは各個人に夫々獨特のもので、これを一つにまとめ得るものではない。併しこれは甚だ難い事ではあるが又甚だ重要な事である。

どんな人でも最も合理的なフォームを作り上げるには、初め意識的にそうする様にし始めるなければならない。ノールウエーの人達も昔から頭と體の一致、即ち無意識の中に合理的なフォームで走れる様努力して來て居る。

總て競技に對しては二ヶ月の練習期間が必要だと思はれる。然しこれは全部にあてはまると云ふ譯では無いし、スキーの練習にしても餘りかたよつて居るかも知れない。

滑行競走だけならば吾々は、のんびり楽しくスキーが出来るし、又エネルギーを要する練習もそんなに必要でない。然しながらラングラウフは今も尙國際的な競技種目になつて居る。だから滑行競技専門と云ふランナーを作らず、ラングラウフも走れる選手を養成し、一方又今迄と違つたコースを定め、優秀なる選手をどしどし出す様に勉めなければならぬ。

これからは一氣に三百米(表高)を登り、又下ると云ふ様なコースは決めない事だ。コースの撰定者は細いレース様のス

キーでそのコースを何回も何回もスパートして、良く檢べてから發表して欲しい。一氣に三百米を登ると云ふのはとても出来ない事である。第一筋肉を硬ばらせ、弾性的な輕快味をなくさせる。中歐の人々がホルメンコーレンの大會で、何故あれ程みちめな成績を得るかと云ふ根本的原因が、この山に存在して居るんぢや無いかと思はれる。

ノールウエーのコースは、彼等のあり餘る技術を遺憾無く發揮出来るやうに、五十米登り、又五十米下り、それから眞直ぐなジツクザツクに富んでゐる。スパイクの代りにスキーを一寸足につけたと云ふ様な、あり合せの貧弱な技術の持主にはとても走破出来ぬコースである。

然しながら一方こんなコースでも、練習の如何に依つては全く別の調子で樂に走る事が出来る。ある競走の後、スウキスのラングラウフに於ける第一人者 *Ritzmann* が『良く走れると云ふのは皆練習の賜物だ』と私に話した事がある。彼はそうスキーの巧みな人で無かつた。それに又それ程スピードもスプリントも無いし、地を跳んで行くと云ふ風な輕快さも持つて居なかつた。又登りに全力をつくす爲に、外にはそれ程馬力も出さなかつたのに、未知のコースを走破してチエツクの次に中歐に於て一番早かつた。彼はこの練習の効果と云ふものを十二分に利用する事が出来たのである。

スキーレースに對する最上のトレエーニングは、勿論スキーをつけて走るのが一番良い。スキーと雪の無いトレエーニングはどうしても、レースに對して必要な各器官の準備とか、又そのレースに耐へ得る體を充分に作る事が出来ない。然しレースはシーズン早く始るし、雪が後れる事もあるから、どうしても所謂トレエーニングなるものが必要になつてくる。

オスローに於ては人々は大概、秋の中からトレエーニングを始める。併し初めは唯 *nordmarken* の山々や谷間に於て、所謂山歩きをするに過ぎない。將に來らんとする冬を前にして、體を作る爲トレエーニングをするのも良いけれど、餘り熱心過ぎて失敗する事があるから注意すべきだ。

ノールウエーの人達は吾々の様に、一所に澤山集つてトレエーニングはしない。然し吾々の方法も一利あるもので、相當體が出来てから團體競走をやると、前以て自分の弱さを知る事が出来るし、又早く最上のフォームに達し得る。

ノールウエーに於ける一流のランナー Bergendahl, Haugh, Gröttnus, Branten 等は次の事を確信して居る。『デスタンスのランナーは、彼の最上のフォームを四週間以上保つ事は出来ない。』 権威者達の説に従へば、一シーズン七つ位の大會に出場する吾々は餘り多く出過ぎるやうである。

ノールウエーの人達だけが正しいトレエーニングを行ふ事が出来るとは私は決して云ふものではない。一面彼等から教はつて居る點があるとは云ふものゝ、トレエーニングについてはむしろスウェーデン、フィンランドの方が發達して居る。

私は豫備トレエーニング、即ちシーズン前のトレエーニングとして樵夫の仕事を一番重要視した。晩秋になつてからある小さな森に行き、薪割をしながら心臓、肺臓及スキーに必要な筋肉を鍛錬して行つた。これに似て重要な仕事は、スコツプを用ゐてやるあの雪かき等である。ノールウエーの人々はこの様に、既に存在して居る力強い仕事を以て、體全體の均齊された力の養成に必要なものと考へて居るトレエーニングの爲に、特別何かやると云ふやうな事は割合少ない。(Conditions training)

自分で相當強くなつたと感じ、所謂馬力がついたと思つたら、變化に富むゲレンデに出掛けるのである。初めは山の下りを走るだけで決して猛烈にやつてはならない。後になつて登りを走り、又下りはゆるく走る様にする。十一月の半頃になつたら毎週二回位づつ全部を馬力で走り通し、脚のトレエーニングを充分にする。この頃は一番御天氣も良いし、清新な氣持で運動が出来る。

いよいよオスローに行き、そこで日に少くとも一時間半以上トレエーニングをした。十二月の半になればいよゝ雪がやつて来る。最初の練習に依つて筋肉も呼吸も餘り確かで無いのがわかる。これからは順序正しく本當のスキー練習をして行くのである。

次に参考の爲十七籽の練習表を示す。これは四週間の練習期間を要するものである。

第一週

8k—10k

二回

1/2の調子で

樂なコース



第二週 10k—12k 三回 2/3 一ツツハハコーン

第三週 14k—16k 二回 3/4時々スパートして見る つハハコーン

第四週 18k—20k 二回 Full つハハコーン

レース前三日か四日位は全然休む。

毎週一回以上を走つて居れば大概、レースに於ては自信の付くものである。

ノールウエーの人々は練習にはレースより一寸重いスキーを用ひる。

一週間に二回なり三回なり、唯走るだけでは決して効果が無い。此の外に重要な要素が必要である。もしこれを軽んじたならば、いくら猛練をしても決して強くない。次に注意すべき點をあげると、

先グシャツは練習には少し厚めに着た方がよい。練習後は直ぐ取り換へる。又練習後入浴する。一寸したマツサージは大變良いが、やゝもすればこれに慣れるからそうせぬ様注意すべきだ。ノールウエーの人達はスウエーデンやフィンランドの人達とは反對に、餘り多くマツサージをせぬ事にして居る。

睡眠は練習中は氣温の良い室で最小八時間は必要である。それから朝食前十五分間の體操は身心に非常に良い結果を與へてくれる。

食物についてだが、これはとても重大な問題である。即ち心臓、肺臓のトレエーニング以上に胃のトレエーニングが必要である。胃を丈夫にして置く事が最も大切な問題である。

勿論練習期間中食べ過ぎとか、雑多な食物の亂食は考へものだ。ノールウエーでトレエーニングの間、人氣のあるものとしてはオートミル、ミルク、一寸したトリンケン及び肝油等である。御茶やコーヒはなるべく止めた方がよい。つひ飲み過ぎて胃をこわしたり、又神経を疲らせたりする。

練習期間中に於て既に胃を丈夫にして置く事である。食後直ぐ練習したり、又練習直後たらふく詰めこまぬ事だ。往々人

に依つて『腹のすいて居る時は調子が良い』などと云ふけれど、なるべく腹の減つた時に走らん方が良い。コースがとても樂だつたり、又短い時には稀にこの言葉の當てはまる場合もある。しかしスタート前には神經過敏にならぬ事だ。腹がすいて居るのに何だか一杯な氣がしたり、即ちあがつてはならない。

ワックスの問題は又決して怠つてはならない。これはいくら熱心にやつても、短い間の練習では確實に又細心になれない。ノールウエーの權威者達がワックステクニクを決して誤らぬと云ふのも、彼等の豊富な經驗に依るもので、一度失敗しても他の塗り方や又滑らせ方に依りてスキーを再び良くする事を知つて居る。要するに絶ゆるまざる努力が大切である。

猛練をしても決して體が悪くなるものでない。中歐の人達は北歐の人々に比して甚だ神經質的な生活をして居る。まあ原則として餘り徹底した節制をすると、かへつて神經衰弱になるから充分氣をつける事だ。

練習中又は試合のシーズンになつてから、何だか元氣がなくなつたり、又はレースに對する興味を失ふ場合がある。これは明かにオーバーワークの爲であるから、少くとも二週間ままとまつた練習を休む。

自分の力とか、即ちレコードをたかめる事に對しては餘りクヨクヨせず、順序を追ふて色々な方法に依り慎重に練習をして行く。又或る一定のフォームに無理矢理自分を押しこめてはならない。敢へて無理にある一つの型にはめる必要はない。合理的な練習の後には、無意識のうちに自づと自分のフォームなるものが生れてくるのである。

(甚だ抽象的な一文が出来上りました。改めて御詫び致します。オカッ)



# 報 年

## 競技會記錄

### 一九二七年度

諒閣に就き諸競技會中止。

### 一九二八年度

一、第一回インターカレッジスキー競技會

(二月十四、十五、十六日 於青森縣大鰐)

三〇キロ競走 第四位 山田勝巳 三時間七分四一秒

第五位 宮本正雄 三時間九分二四秒

一五キロ競走 第二位 山田勝巳 一時間二分三六秒

第三位 中村新一郎 一時間二分二秒

第四位 長田光男 一時間二分三九秒

複合競技 第一位 村本金彌 得點一六・一五

飛躍競技  
 第二位 神澤謙三 一五・六二  
 第三位 杉村風次郎 一四・八六  
 第五位 龍田不二雄 一三・三〇  
 第一位 伊藤健夫 一七・九八  
 第二位 村本金彌 一四・四八  
 第四位 神澤謙三 一三・九四  
 第五位 龍田不二雄 一三・二二  
 第六位 小林辰雄 一二・六四

リレー競技 第二位 宮本正雄、長田光男、中村新一郎、宮下

利三 二時間十三分九秒

總得點五七點を獲得し優勝す。

一、第五回全北海道スキー選手権大會

(二月二十一、二十二日 於札幌)

一五キロ競走 第六位 奥井由雄

三〇キロ競走 第一位 宮下利三

リレー競技 第二位 (A組) 中村新一郎、宮下利三、宮本正

雄、長田光男

一、第六回全日本スキー選手権大會

(二月四、五日)

一五キロ競走 第一位 長田光男 一時間一〇分五一秒

第四位 中村新一郎 一時間一分二四秒

三〇キロ競走 第二位 宮下利三 二時間四分一六秒

第六位 山田勝巳 二時間五二分二三秒

第七位 宮本正雄 二時間五二分二七秒  
 シヤムプ競技 第一位 神澤謙三 得點一八・三一八  
 第四位 杉村風次郎 ク 一七・四九九  
 最長不倒距離 二八米 村本金彌

一、秩父宮殿下御臺灣學内スキー大會

五〇キロ競走 第一位 宮下利三 四時間二五分二〇秒  
 第二位 奥井由雄 四時間五六分五秒

七キロ競走 第一位 吉田 贊 三九分二五秒  
 第二位 黒田 敦 四〇分五七秒

第三位 中島 正 四四分  
 番外 中村新一郎 三六分二一秒

シヤムプ競技 (A)

第一位 神澤謙三 得點一七・五五  
 第二位 伊藤健夫 ク 一四・七四  
 第三位 杉村風次郎 ク 一四・二二

最長不倒距離 三〇米 伊藤健夫

シヤムプ競技 (B)

第一位 坂井龍二  
 第二位 植地勝太郎  
 第三位 村井延雄

複合競技 第一位 杉村風次郎 得點一四・八八

一、國際學生スキー競技會

(一月二十九日 於コルチナ)

シヤムプ競技 第五位 伴 素彦 飛距三六・五米、得點四一  
 一、第二回國際冬季オリムピック競技大會

(二月十八日 於オリムピヤンツェ)

シヤムプ競技 第五位 伴 素彦 飛距三九米(顛倒)、得點四

一九二九年度

一、第二回インターカレッジスキー競技會

(二月十二、十三、十四日 於札幌)

四〇キロ競走 第二位 山田勝巳 第四位 宮下利三  
 第五位 安孫子六郎 第六位 片 山

一五キロ競走 第三位 中村新一郎 第五位 奥井由雄  
 第六位 宮本正雄

複合競技 第一位 神澤謙三 第二位 杉村風次郎  
 第四位 宮村六郎 第六位 村本金彌

シヤムプ競技 第一位 伴 素彦 第二位 神澤謙三  
 第三位 村本金彌 第四位 宮村六郎  
 第六位 杉村風次郎

リレー競技 第一位 山田勝巳、中村新一郎、宮下利三、長田  
 光雄

總得點六一點を獲得、再び優勝す。

一、第六回全北海道スキー選手権大會

(二月十九、二十日 於札幌)

四〇新リース 第三位 中村新一郎 二時間五七分七秒

複合競技 第一位 長田光男 得點一七・〇九四  
 第三位 山田勝巳 ク 一六・五八三

シヤムプ競技 第五位 關 四郎 ク 一六・二九二

一、第七回全日本スキー選手権大會

(二月二、三日 於高田)

四〇新競走 第五位 宮下利三 四時間一分五四秒  
一八軒競走 第五位 奥井由雄 一時間四七分一八秒

第七位 中村新一郎

複合競技 第一位 神澤謙三 得點 一六・四〇六

第二位 長田光男 一五・九〇六

シヤムプ競技 第二位 村本金彌 一六・六二五

第六位 宮村六郎 一五・七五〇

最長不倒距離 二八米 村本金彌

リレー競走 第二位 山田勝巳、中村新一郎、宮下利三、長田

光男 二時間五分二〇秒

一、飯山シヤムプ大會

(二月五日 於ホーラーシヤンツェ)

第一位 神澤謙三 第三位 村本金彌 第五位 伴 素彦

最長不倒距離 三八米 神澤謙三

一、赤城山スキーシヤムプ大會

(二月十日 於赤城山第五號シヤンツェ)

第二位 神澤謙三 第三位 伴 素彦

最長不倒距離 四二・五〇米 神澤謙三

一、秩父、高松兩宮殿下御臺覽シヤムプ大會

(二月十七日 於赤城山第五號シヤンツェ)

伴 素彦 四八米の日本記録を作る。

一、手稻山滑降競争

優勝チム 宮本正雄、中村新一郎、宮下利三 (一九分四五)

第二位 稻葉忠七郎、井出英次、龍田不二雄

第三位 長田光男、山田勝巳、奥井由雄

第四位 辻岡教太郎、安孫子六郎、小館哀一

最短タイム保持者 宮本正雄 (一七分)

一、第一七シーズン學内スキー大會

(二月一七日 於三角山山麓)

一八軒競走 第一位 奥井由雄 一時間一七分五七秒

第二位 長田光男 一時間一九分一七秒

第三位 山田勝巳 一時間一九分一八秒

第四位 稻葉忠七郎 一時間二五分三二秒

第五位 黒田 敦 一時間二九分四五秒

第六位 小館哀一

七軒競走 第一位 伊藤健夫 三五分五四秒

第二位 弓納持虎雄 三七分

第三位 新 谷 三八分二三秒

シヤムプ競技 第一位 村本金彌 第二位 杉村風次郎

第三位 武野燬二郎

複合競技 第一位 長田光男 第二位 山田勝巳

第三位 黒田 敦

### 一九三〇年度

一、第三回インターカレッジスキー大會

(二月十八、十九日 於札幌郊外新井山)

四〇軒競走 第三位 宮原重規 三時間三一分五六秒

第四位 宮下利三 三時間三三分一〇秒  
第五位 小館哀一 三時間三四分一八秒

一八籽競走

第四位 黒田 敦 一時間二一分一四秒  
第五位 奥井由雄 一時間二二分四一秒

第六位 宮村六郎 一時間二五分三秒

複合競技

第一位 奥井由雄 得點二五・三〇

シヤムプ競技

第三位 武野毅次郎 九二・五〇

複合競技

第一位 奥井由雄 得點二五・三〇

シヤムプ競技

第四位 五十嵐勝藏 九一・五〇

複合競技

第六位 清水保雄 七三・一〇

リレー競走

最長不倒距離 武野毅次郎、五十嵐勝藏

リレー競走

第三位 黒田敦、中村新一郎、宮下利三、奥井由雄 一時間五五分五四秒

總得點二三點(第三位)

一、札幌紀念シヤムプ開シヤムプ大會

第四位 關 四郎 得點一七八・六

一、第七回全北海道スキー選手權大會

(二月二十五、二十六日 於札幌市外荒井山)

五〇籽競走

第一位 中村新一郎 四時間二六分三九秒

複合競技

第六位 安孫子六郎 四時間五一分三三秒

複合競技

第六位 吉田初雄 得點二一七・四

シヤムプ競技

第三位 武野毅次郎 一三四・二

シヤムプ競技

第五位 村井延雄 一一五・九

一、第八回全日本スキー選手權大會

(二月一、二日 於青森縣大鰐)

一、第一回御來道紀念スキー大會

(二月十一日 於荒井山近附)

一八籽競走

第一位 黒田 敦 一時間三一分二二秒

五〇籽競走

第三位 中村新一郎 三時間四九分四三秒

複合競技

第五位 宮原重規 四時間一二分一〇秒

一八籽競走

第三位 奥井由雄 一時間一九分五一秒

複合競技

第九位 奥井由雄 得點一三・一八七

シヤムプ競技

第八位 村井延雄 一四・七八七

一、第一八シーズン學内スキー大會

(二月二十三日 於荒井山附近)

一〇籽競走

第一位 石塚星郎 五九分一五秒

四籽レース

第二位 宮下利光 一時間三分

複合競技

第三位 關 四郎 一時間五分二〇秒

シヤムプ競技

第一位 宮本正雄(一七分三秒)、柳原(一七分三秒)、稻葉忠七郎(一七分三秒)

複合競技

第一位 辻岡教太郎 第二位 關 四郎

シヤムプ競技

第一位 酒 井 第二位 稻葉忠七郎

リレー競走

第一位 岩田周一

リレー競走

第一位 水泳部チーム(林秀夫、吉田初夫、宮下利三、安孫子六郎)

複合競技

第二位 柔道部チーム(村本金彌、稻葉忠七郎、伊藤信康、島井康)

シヤムプ競技

第三位 ア式蹴球部チーム

一、第一回御來道紀念スキー大會

(二月十一日 於荒井山近附)

一八籽競走

第一位 黒田 敦 一時間三一分二二秒

一、第八回全日本スキー選手權大會

(二月一、二日 於青森縣大鰐)

一、第七回全北海道スキー選手權大會

(二月二十五、二十六日 於札幌市外荒井山)

五〇籽競走

第一位 中村新一郎 四時間二六分三九秒

複合競技

第六位 安孫子六郎 四時間五一分三三秒

複合競技

第六位 吉田初雄 得點二一七・四

シヤムプ競技

第三位 武野毅次郎 一三四・二

シヤムプ競技

第五位 村井延雄 一一五・九

一、第八回全日本スキー選手權大會

(二月一、二日 於青森縣大鰐)

一、第一回御來道紀念スキー大會

(二月十一日 於荒井山近附)

長距離競走 (A組) 第一位 稻葉忠七郎 三二分一・一秒  
第二位 井田英次 三五分〇二秒  
第三位 西 武 三五分一〇秒  
第四位 黒田 敦 三五分四〇秒  
第五位 足羽進三郎 三八分二八秒

長距離競走 (B組) 第一位 宮下利光 三七分五八秒  
第二位 齋藤龍三 三九分二五秒  
第三位 小 林 四六分二〇秒

短距離競走 第一位 太 田 二五分  
第二位 今 川 二五分五五秒  
第三位 西 田 二九分五〇秒  
第四位 奥田正治 三五分四五秒

シヤムフ競走 (A組) 第一位 稻葉忠七郎 得點 一三四・五  
第二位 坂井龍二 一四・四  
第三位 宮村六郎 八七・五

シヤムフ競走 (B組) 最長飛距 三一・五米 稻葉忠七郎、小池譽

シヤムフ競走 第一位 太 田 得點 七二・五  
第二位 楠見正雄 六六・〇  
第三位 小 谷 六四・五

複合競走 第一位 稻葉忠七郎 得點 三〇一・五  
第二位 齋藤龍三 二〇四・五  
第三位 宮下利光 一五九・〇

リレー競走 第一位 圓山チム (稻葉忠七郎、黒田敦、宮村六郎、中村新一郎)

一、第二回御來道紀念スキー大會

(二月二十一、二十二日、三月一日 於荒井山附近)

長距離競走 第一位 宮村六郎 第五位 黒田 敦

第八位 稻葉忠七郎

複合競走 第二位 宮村六郎 第三位 稻葉忠七郎

大長距離競走 第二位 宮村六郎 第九位 黒田 敦

一、小樽札幌間單獨疾走

(三月十二日午後三時)

中村新一郎 三時間五分

## 山の部

### 第十八シーズン (一九二九—一九三〇)

空沼小屋

黒住久彌、伊藤信康

昭和四年十二月末日 (曇)

豊平二番電車。電車になつて始めて、同じ景色も美しくい程乗心地萬點。石切山(前九・三)積雪一尺。土場堂本氏宅に小憩、晝食(二〇・五)後三・四。道以外にそれる事は不可能。御料小屋(現在なし)

手前でスキーをわらす(三・〇)。お蔭で馬脊登りは後滑りしない。小沼附近、何處でも通れそう。小屋着(三・〇)。先づ薪が心配、一人

でも二十人でも同じだ。アルペンカレンダーを掛けるのが唯一の正月の用意。

第三位 中村新一郎 一時間三二分一秒

第五位 奥井由雄 一時間三三分五秒

第六位 安孫子六郎 一時間三五分五秒

第三位 中山二郎 一時間四四分四秒

第四位 關 四郎 一時間四七分一秒

(二月十六日)

三五軒競走 第一位 奥井由雄 三時間四六分四〇秒

第七位 小館衷一 四時間一八分五〇秒

第九位 黒田 敦 四時間三一分五九秒

### 一九三一年度

#### 一、第四回インターカレッジスキー競技會

(二月十七、十八日 於長野縣飯山)

四〇軒競走 第五位 中村新一郎 三時間五一分一六秒

第七位 黒田 敦

一八軒競走 第六位 宮村六郎 一時間三六分二〇秒

第七位 奥井由雄 一時間三七分

複合競技 第四位 奥井由雄 得點二二六・〇

第六位 稻葉忠七郎 二一九・八

ジャムプ競技 第二位 山田四郎 一三七・六

第四位 關 四郎 一三三・五

第六位 小池 譽 一二七・六

リレー競走 最長不倒距離 三四・五米 山田四郎

棄権 山田四郎、足羽進三郎、黒田敦、奥井由

雄

總點一六點、第三位を得たり。

#### 一、第八回全北海道スキー選手権大會

(二月二十四、二十五日、於札幌市外荒井山附近)

五〇軒競走 第五位 山田四郎 五時間二九分二六秒

一八軒競走 第六位 奥井由雄 一時間五八分四三秒

ジャムプ競技 第五位 村井延雄 得點 七二

複合競技 第四位 奥井由雄 一八五

リレー競走 第二位 中村新一郎、黒田敦、山田四郎、奥井由

#### 一、東北地方スキー豫選大會

(於青森縣大鱈)

ジャムプ競技 第一位 五十嵐藤藏

#### 一、第九回全日本スキー選手権大會

(二月七、八日 於樺太豊原)

五〇軒競走 第三位 中村新一郎 四時間二三分三一秒

一八軒競走 第四位 奥井由雄 一時間二九分二六秒

ジャムプ競技 第三位 宮村六郎 一時間三五分四二秒

第五位 山田四郎 得點一九〇・五

リレー競走 第七位 奥井由雄、中村新一郎、宮村六郎、山田

四郎 三時間八分四二秒

#### 一、第一九回シブズン北大學内スキー大會

(二月十五日 於サツボロシヤンツエ附近)



十八糎レースに於ける中村新一郎君



十八糎レースに於ける奥井由雄君

昭和五年一月元旦（晴後曇）

未明起床（前四・五）。かしわ手打つて萬計の若水を抱んで、名ばかりの正月をする。空沼岳に向ふ（六・五）。松は白い、流石何處でも通れる。頂上（八・五）。今しも地平線をはなれた一九三〇年の赫々たる旭日は先づ此處と惠庭岳に訪れた。黄金に白銀に、日月を映する支笏湖は黒ずんでまだ一九二九年の灰色の中に沈んでゐた。眞籬山を経て歸着。晝は大好物のポテイトーと豚のフエツト。

一月二日（晴）

三日定山溪へ出るので、終日薪割、掃除に専心。塵を出さない様に夕食す。御料の方々來宿、苦勞は無爲、だが明日の掃除は免除。

一月三日（曇小雪）

出發（前八・〇）。湖上シーハイルを交して右と左。夏路を眞籬沼（八・五）。右へ、複雑な平坦な地形の中程へ。雪と札幌岳とが交互にちらつく。百米登の瘤は右側に雪庇の上（九・五）。次の瘤は二つのまんながりの間。札幌岳の鞍部で腹ごしらへする（一〇・三・二・〇）。岳樺を抜けない所で左に同高、雪庇の上に出て頂上（二・五）。降りれば冷水澤に探る。澤は右側を。一つ小澤に逢つて澤の中へ（後三・〇）。瀧のない澤だが埋れてゐない。九倒の苦しみの後、地圃水のある澤に出て樂になる（二・四）。造材道を見出す（三・五）。着電所の用水路をたどり、道路に出て、定山溪着（四・五）。

### 暑寒別岳

宇都宮嵩、川上洗

一九三〇年一月一日、圓山のスロープで暑寒別岳が決まつた。夜

九時四十分の汽車で出發。深川着が朝の一時過ぎ。増毛行に乗り換へるのだが、一番列車が朝の六時だ。仕方がない、待合のルンペンに群に投じてストープを圍み六時を待つ。増毛着が前十時。こゝで買物したり、晝食を喰つたり。天氣は良い方。十二時頃山神小學校に向つて出發した、着いたのが三時前。こゝで今夜泊めて貰ふことにして、翌日のため途中五百四十位の所までラツセルした。荷物はなし、雪は長し、降りと思ふ存分享樂す。正月まで小學校では仲々の歡待を受く。全小學生十一人、校長先生が一人だ。夜、小學生に山穴の話で大いにおどされた。いささかしよげた形。

三日目。雪。前七時小學校發。昨日のラツセルも夜來の降雪で大部消えて居た。國領（五萬分の一）の「山の神」の字の南の夏路に大體沿つて南に昇る。標高四百五十邊から尾根傳ひに、右に相當大きな澤を見ながら南へ南へ。唯だら／＼なものも云はず。一〇七五邊までは相當降られた。此の邊から少し天候回復の兆が現はれて降雪も止む。標高一二〇〇邊りからは猛烈に寒冷を覺ゆ。この邊り實によいスロープだ。一四六〇の瘤の下を西に巻き、この瘤と暑寒の一四九一の間に上る。こゝに上る十五米位の所から氷の山だ。實に急坂で、アイゼンを付けたが下へ何んだか引込まれそうな感じがする。こゝから頂上までは猛烈に西から吹風かれた。鼻の穴が氷の塊りだ。鼻をこすり／＼△點に付いたのが午後二時。直ぐ東側を一四六〇の瘤までまく。アイゼンの音は何んとも云へぬ、全く魅惑された。こゝでスキーをはき降る。七轉八倒、標高六〇〇位まではまたたく間に來た。これからが大變だ。昇のラツセルは殆んど消えてない。大部降つたらしい。また小學校まで降りるラツセルだ。邊

りはもう薄暗い。昨夜の山犬の話の思ひ出して心細くなる。小學校に着いたのが四時半。夕飯を喰ふ暇もあらばこそ、六時増毛驛發の終列車に間に合はんものぞ驛目がけて一目散。殆んどラングラウフにも等しい。小學校を出るとすぐ暗くなつた。U君ラテルネをさげてトツプを切る。驛へ入り込んだときだつた、汽車の汽笛を聞いたのは、で、致し方なく旅館で大巨風を吹かせる。

翌朝十時増毛發で札幌に着いたのが午後五時前だつた。實に慌て、ゆつくりした暑寒行だつた。(川上記)

### 空沼小屋附近

大野部長、鈴木重雄、藤本信彦、小笠原光信、推崎

一月三日 (晴)

空沼小屋午後四時着。

一月四日 (晴)

小屋發 (前七・五) — 空沼嶽 (九・五) — 發 (九・三) — 漁岳頂上 (後二・〇) — 小屋 (四・〇)。

一月五日 (晴)

小屋發 (前九・五) — 狭薄山 (後二・〇) — ゲレンデの分小屋着 (四・三)。

一月六日 (猛烈なる吹雪)

小屋發 (前六・三) — 札幌嶽 (後二・五) — 冷水澤を降つて定山溪着 (五・〇)。

x

黒住久彌、伊藤信康

一月五日 (曇)

石切山 (前九・三) — 一號の橋 (九・四) — 土場堂本氏宅 (二・〇) — 二・三 — 三號の橋 (三・〇)。ルウツクが重いので、道が硬いので、まだスキーを引ずる。御料小屋 (現在なし) (後二・五) — 小沼附近、膝を没すが、遂に小屋まで引ずり上げた (三・五)。部長以下六名、狭薄より歸着 (四・〇)。夜は部長を中心に、ライスカレーと紅茶。

一月六日 (吹雪)

出發 (前八・五)。夏路を眞簾沼へ。右に平坦な地形の中程へ。積雪バタバタ落つ。上で部長等は定山溪へ、すぐ見えなくなつた (九・五)。此の吹雪、狭薄の尾根を見出し得ない。この地形は登らずに右にすべきだつた。引返す (二・三)。掃除、薪割、スケツチ。工學部營繕課御料の十数名來宿。明日は漁岳。早く就床。

一月七日 (曇吹雪)

漁岳へ出發 (前七・五) — 空沼頂上 (八・五)。漁側の下りは狭まくて急。平坦な地形を約一時間。下りは直滑降一本 (一〇・五) — 一〇・二。次の登りは岳樺を抜けた所で、南斜面に吹雪をさけて晝食 (二・〇) — 二・三。吹雪は北斜面を巡つて愈々強い。ウインドクラストを登る。吹雪の中ヒラミット型の何處かの頂をさ思ふまもなく、體がさらはれた。合議引返す (後三・五)。この下りは面白かつた。低所は平穩。無味な平坦な地形は吹雪にさらされる。往路を見付けた。空沼岳の空沼 (水がないそうだ) に向つた斜面でゲレンデす (一・五) — 一・五。空沼の登りはシールなしには困難。空沼頂上 (二・五) — 小屋歸着 (三・〇)。御料の方々の好意により、明日から豫定變更、中山に向ふ。

空沼から中山へ

大房、三田地、安達（以上御料局員）角田吉夫、井上良則（以上法政山想）黒住、伊藤（以上北大スキー部）

一月八日（曇後晴）

出發（前七五）―眞簾沼（八・三〇）―狭薄尾根（九〇五）。二つの瘤は右に巻いて、前後の狭薄の登り（二〇三五）。小柴に悩まされながら頂上（二〇五十一・二〇〇）。雪雲たれ下り、吹雪が豫想される。降りば八四九米の三角點に走る尾根。これと分れてま西に澤につきる尾根を重視して、左に尾根を換へ、狭薄の崖を見出しもこに返へつて晝食（二〇五十二・三〇）。地圖の尾根よりひどく瘠せてゐる。雪庇あり、雨側小柴。やつと平坦な地點（後二・五）―地圖、千米附近。上から白く見える部分で、悪い箇所は千二百米あたりからこれまでである。これから廣いゆるやかな滑降。笹が立つてゐるので三角點まで降らず澤に入つて、豊平川（三・二〇）、結氷不完全、やつと渡る（四・〇）。夏路を、二股小屋の前に新しい橋が架る。小屋着（四・五五）。前もつて薪と藁が用意されてあつたが、前だけ暖くて、春中はマイナス四度、寒くて睡れない。

一月九日（曇）

うさ／＼してゐる中あたりが白らんだ。誰も炊事しようとしな。朝食を攝つても動かうとするものがない。出發（前二・三〇）。造村道を驟遅澤に取る。九八〇からの澤の合流の状態は著しく異つてゐた。此處から尾根に取付くべきだつたが、積雪、小柴の状態があやしいので澤を進む（三・〇〇）。澤のつきんとするあたりを、國道の見通しに出入りした。後三・〇〇に至るも發見し得ず。夕方の吹雪が襲ひ來る。腹ごしらへして小屋に引返へす（三・三〇）。小屋歸着（五・〇五）。

寒い小屋も、安達さんの有名な熊さの格闘の話で和氣が満ちた。

一月十日（曇、小雪）

左程寒く感じないまゝに、充分睡つた。小屋出發（二・〇〇）。玉道を馬糧になつて滑る。豊平峽を前に晝食（二・五五三・〇〇）。ガラ／＼道を定山溪着（後二・二〇）。定山溪ホテルで肉鍋でシーハイル。

### 三段山

黒住久彌

一月十一日

圓山（前二・〇）―振子澤入口（九・五）―鈴木兄に逢ふ。澤頭で小笠原、藤本兄外一人と行動を共にす（二〇・二二・〇五）。雪庇のある登りに巻く、小柴でひどかつた。頂上（後三・二五）。宇都宮兄に逢ふ。降りはお先に（二・三〇）。圓山歸着（三・三〇）。

x

鈴木重雄、小笠原光信、泉、中川

圓山電車終點發（前八・三）―三段山頂上（後一・〇〇）―圓山電車終點發（四・〇〇）。

x

一月十九日

リノダ小笠原光信、黒住久彌、柳原、名取忠夫、佐藤

圓山電停（前七五）―振子澤入口（八・五五）、シールをつける。振子澤頭（二〇五十二・〇〇）―頂上（二・五）―降り（後三・三〇）―常次澤（二・二〇）―荒井山シャンツェ（三・三〇）、リレーリースを應援す。

## 札幌嶽

鈴木重雄、藤本信彦、泉

一月二十五日（小雪）

定山溪奥一番通り小坂氏宅着（後二・三〇）—發（二・四五）—小瀧の澤五合（二・一〇）—九四六・五米附近までラッセルをする（四・〇〇）—小坂氏宅（五・〇〇）。

一月二十六日（小雪後晴）

小坂氏宅發（前六・望）—昨日のラッセル終り（八・五）—頂上（一〇・望）—發（一一・〇〇）—小坂氏宅（一〇・〇〇）。

## 手稻山

伊藤信康、遠藤嘉數、内藤孝三郎、廣森

一月二十六日（大雪時々吹雪）

輕川驛（前九・三〇）—頂上（後二・三〇）—ネオパラダイスを經て千尺高地（二・三〇）—輕川驛發（四・三〇）。

## 無意根山

リーダー宇都宮嵩、鈴木重雄、森田昇、塘、黒住久彌、伊藤

信雄

二月一日（晴）

豐平（後二・一〇）—定山溪（三・〇〇）—遊びながら薄別温泉着（四・三〇）。

二月二日（晴時々曇）

温泉出發（前七・一〇）。薄別川を登る。無意根と長尾の澤の合流（八・五〇）。その上の平な處を進み、シャンツェの一二二〇ミ標高の出てゐる

るあたりの北斜面を登つて上に（一〇・五）—頂上（一一・一〇）。岳樺地帯まで下つて晝食（一二・三〇）—後三・二〇。降りには、登つた處より奥の急斜面、雪がもう少し多かつたら面白かつたらう。薄別（二・三〇）。定山溪（二・五）。足がそろつたので樂だつた。

## 三段山

大野部長、藤本信彦、鈴木重雄、松永、谷川

圓山電車終點（前八・一〇）—頂上（後二・〇〇）—圓山電車終點（三・三〇）。

## 指導標を打ちに

小池茂、黒住久彌、楠見正雄、松田俊夫、伊藤信康、遠藤嘉數、林

二月六日—八日 時間的記載でなく、コースを説明する。

## 鏡函ヘルグエチア間

指導標は上には黒でヘルグエチア小屋行、下には赤で矢印、要所々々に打つ。他は赤ペンキで立木を利用。冬路は馬橋道をかなり奥まで入つてゐる。この通り進む事も出来るが、一個處、雪質によつて危険であるから、右上にあげてある。峠の平な降りには、ほぼ夏路通り。鏡山事務所の降りには夏路より左にそれてゐる。これよりかなり上、峠の澤に倒木があるから、雪解期に利用されたい。此處の澤渡りは、積雪状態によつて自由である。要は對岸に渡ればよい。これから澤の中を往くのであるが、あまり左右する必要はない。ほごんご左側がよい。夏路小澤ある所を少しく登る個所、此處は積雪の状態によつて對岸に渡つて直ぐかへるのも、左岸をへつるのも、又

上を巻くのもよい。要は、二十米悪いのである。前後の渡りは、夏路の個處よりかなり手前で渡る事も可能であるが、あまり得にもならぬ。雪解期には夏路の個處から數十米上に倒木の完全な橋があるから利用されたい。白樺の純林を赤いマーグづたひに、小椋定山溪ドライブウェイによぎつてヒュツテに到着する事が出来る。

奥手稻ヘルヴェチア間

指導標は前と同じ。奥手稻からは夕日澤の尾根(標高のある尾根)を降るのであるが、標高七六〇と出てゐるあたりから尾根が分れてゐる。この尾根は白樺が密で、登るにはよいが下るにはよくない。考へて、七二〇の瘤の先は雑木で悪いから、此の瘤の横から夕日澤に降りてゐる。澤の中は、峠の澤より水量がないから、何方でも通れる。概して右がよい。夕日澤は合流の手前に瀧があるので、尾根のつきる所で尾根に出て降る。恰度、ヘルヴェチア夏路の曲り角に出る譯である。

後記。これはヘルヴェチアから登りにつけたもので、奥手稻から来る人には不親切である事は否めない。夕日澤より一つ上の鳥井のある澤を登る事は前述の如く可能である。我々の受持つたこれらの範圍は、後日修正を加ふべき個所を見出したが、不幸にして今日に至つてゐる。(黒住記)

錢函奥手稻間

鈴木重雄、森田昇、糖

パラダイスヒュツテ奥手稻間

宇都宮萬、市川國十郎、安藤政三、増山、川山洗、其他

無意根山—空沼

黒住久彌、楠見正雄

二月九日(曇) 午後から薄別。

積雪状態は二人歩きに最上だつた。出發(前七二〇)。長尾と無意根の合流(八五五)——シャンツェの標高のある長尾を登つて上に(九五〇)。吹雪出す。頂上(一〇二五—一〇三〇)。長尾山を廻つて降りる豫定を中止。シャンツェで晝食、ゲレンデす(一〇五二—一〇五七)——薄別(後三・五)。橋まで引返へして豊平峽のダムに向つてスキーを引する。うまく發電所員に逢ひ内所でダムをかりる(二二五)。夜七時頃さんだ遭難事件で、ダム使用が公然となつた。

二月十日(晴後曇)

昨日の事件で、シールが一本紛失した事に氣付いた。出發(前二〇三〇)。小澗の澤(定山溪御料地の御の字の澤)を九四六の三角點の尾根に取付く。下は非常によい斜面だ。三角點附近は恐しく瘠る。晝食(後三〇五—三二五)。右の千米の瘤はよく分る。この附近は平坦で氣樂に歩ける。降りにもこの取れる千八百の登りを登つて頂上(二二一—二二〇)。ステームの蒸氣の様なガスが襲ひ来る。雪庇を横滑りで降り、圓い大きな瘤の雪庇の上(二二五)。平坦な地形の登りは蒸暑くてのびる(二二五—二三五)。夏路の如く小屋に滑り込まんとして、長沼よりになり、空沼の沼上の白いはげを見出して其の方向へ。小屋着(二三五)。部長以下誰彼と會ふ。

後記。眞簾沼沿ひにこのはげに向ふのが間違ひない。

空沼小屋—狹嶺岳—札幌岳—定山溪

〔第二班〕 大野部長、鈴木重雄、楠見正雄、黒住久彌、三村

奥田

二月十一日 (晴後曇)

湖上、ヒユツテ開きの式後出發(前八・二五)。眞簾山ミ次の瘤の間を眞簾沼―平坦な地形を右に狭薄の尾根に取付く(九・三〇)。狭薄のいよゝの登りは北斜面を頂上(〇・四〇―二・〇〇)。第一班と分れる。この降り次の瘤ミ標高一六〇米入つた瘤ミの肩で音信を傳書鳩に託す(二・二〇)。この肩の澤に入る。合流で澤が埋れてゐないので上に尾根を巻いて渡り、晝食(二・四半後三・〇五)。この次の圓い瘤は同高に巻いて、次の瘤は二つのさんがりの間を、札幌岳は左に同高雪庇の上に出て頂上(二・三〇―二・三三)。ガスかゝる。千八百米の降りの屋根に氣着かず、標高のある尾根を下つて氣付き引返へす(二・二五)。三角點附近は瘠て悪い。三角點のはしから、小瀧の澤に向つた尾根を降る。上少し悪かつたが、あまは非常によかつた。豊平峽(二・二五)―定山溪(四・〇〇)。

〔第一班〕 宇都宮嵩、宮下利三、中村新一郎、稻葉忠七

二月十一日

空沼小屋―狭薄山―二股小屋―中山ヒユツテ。

二月十二日

中山ヒユツテ―二股小屋―定山溪。

奥手稻―ユートピア―バラダイス

リーダー黒住久彌、弓納持充夫、進藤省三、佐藤、外一名  
二月十六日 (晴時々曇)

札幌(前七・四)―錢函―奥手稻晝食(二・三二―二・四〇)。夕日澤の尾根を、ユートピアの下の圓い白いはげに向ふ。シールしてユートピア(後三・三〇―一・〇〇)。登つた處を降つて、シールして九七一着(二・四〇)―バラダイスヒユツテ(二・三三)。休憩、輕川に下る。

### 三段山

伊藤信康、上田敏雄

圓山電車終點(前八・三)―頂上着(後三・二〇)―發(一・〇〇)―圓山電車終點(三・二〇)。

### 三段山―砥石山―籬舞

森田昇、糖

木村三郎氏搜索

三月六日。農學部畜産科一部三年目、部員木村三郎氏午前九時半スキー及辨當を持ち下宿屋を出て後失踪す。

三月七日。搜索本部を學生課に置き、山岳部員と協力し八方搜索す。

三月八日。バラダイスヒユツテ逆行つた事が判明し、搜索本部を輕川に移し、錢函、輕川方面を専ら搜索することになつた。

x

豫料の試験最終日試験中に出勤命令が下つた。一行黒住久彌、長野忠一、名取忠夫、伊藤信康。

三月八日 (曇後雪)

兎に角一時の汽車に乗つて鏡函着。本部の方に出迎へられ、食糧、通信の手はずなきめ、先輩岩垂兄、田中兄と共に登る、峠で山岳部先輩大戸兄と共にヒュツテ着(五四〇)。

三月九日(曇、ガス吹雪)

山岳部の山口健兒兄、我部の宮下利三兄と協議。この附近それらしい足跡のない事と、パラダイスと通信不自由なため、山口兄を主班とする一隊は奥手稻を経て星置澤を下り輕川に出る事、僕は禪山—ユートピアを経てパラダイスに出て、ヘルヴェチアの報告をなす事になつた。

ヒュツテ出發(前八三)—禪山頂上(二〇三)—ユートピア附近晝食(後三〇五—三三三)。ガス深くたれる。九七一(四〇五)—パラダイス着(四三三)。今日の搜索状況はヘルヴェチアの決議報告後、パラダイスの本隊に編入された。(黒住記)

發寒川上流の搜索隊は迷澤山、ユートピア方面を搜索後本隊に合す。本隊は九七一の急坂にシツクザツクを切つて登つたシユプールを發見し、夫が獨行ミシールを使用しない足跡である事から、九七一及びユートピア方面を搜索す。

三月十日

手稻頂上に三隊に分れて進み、頂上附近を搜索後、途中、手稻第二峯の崖をつぶさに見て九七一米に出て、一列に分散してユートピア(九九四)に向ふ。濃霧が劇しい。一隊は奥手稻に向ひ、一隊は直ちに九七一を経て歸着。此の日降雪二尺以上あり、足跡をたゞる搜索法は不可能となつた。

三月十一日

木村君と手稻山頂上附近で逢つたこと云ふ某君の報告があがつて來たので、搜索行動は手稻に極限された。手稻頂上より八三七米の瘤及びネオバラ方面に分散隊形で搜索し、かなり下まで降つたが、不幸にして四月十五日の發見位地までに至らなかつた。再び頂上に歸り、頂上崖をシラミツアシにしたが無駄だつた。此の日終日ガスがこめ、夕方吹雪、新雪尺餘を加へ、更に不可能の度を加へた。

三月十四日(雨後曇)

雪融の時機迄搜索中止の報に依つて、本據パラダイスヒュツテを引き上げる事とした。八三七の北東鞍部に二隊に分れ、一は尾根傳ひに光風館を経て輕川へ、他は澤を降つて琴似村へ、各々搜索したが遂に發見出来なかつた。

羊蹄—ニセコ—目國內縱走

黒住久彌の提案で、札幌に始まるスキーのみによる尨大なるものであつたが、ある事情で半月湖に始まる事になつた。

黒住久彌、伊藤信康、安藤政三

三月十八日(晴後曇)

札幌(前九五)—比羅夫(後二二三)—ルウツクが重いのであめた。

半月湖驛停(三三三)。羊蹄山は青山を搖盪とする僕達のスキー術の最高の對象であつた。胸躍り血湧く。危急食糧及携帶品を分配して九時就床。

三月十九日(晴)

氣づかされた天候は新雪三寸、からりみ晴れ渡つてゐる。出發(前七二)—馬返し(八二〇)—尾根に取付く。三合目(八二〇)。四合目、



このあたりは理想を超越した地形である。巷間ならば先づメーンストリートである。タンネを抜ける(八三〇)。新雪は一、二寸、下の古い雪が硬くて危険。千三百米附近、平坦な所でシーアホー(八、五九、九〇)尾根の右のくぼみを登る(左を取れば上は石室)。石室上の斜面を左上に。風強く次第に險悪なる(二〇五)。一八四三を左に一八九三の奥の頂上(二二二〇)。冬の吹雪と變りがない。一八四三を経てシーアホー(後三〇五、三二五)。次に展開する理想的な地形の滑降は實に面白い。驛停(二〇三、二〇〇)、山田温泉着(五、二五)。夜小雪。

三月二十日(曇、カス深し)

山田温泉出發(前七三〇)。くぼみ上の尾根に出て澤を右に保ちながら進む。知らぬ間に一つの瘤の上に立つ(九〇五)。澤はこゝから著しく曲る。澤沿ひに少しく登り、澤を渡つて尾根に取付く。これはニセコの標高のない峯より東に走る尾根である。此處で出札來、腹をこぼしてゐた安藤君に分れた(九三〇)。視野は極度に狭い。晝食(一〇、五二〇、三〇)。千二百米あたりから右に直接頂上に向ふべきであつたが、カス深きため標高なき峯に出て頂上(二〇五)。此の降りには藻岩(八三九)に向つた尾根を降る。岩雄側斜面はびじいウインドクラスト。横滑り、遮二無二此の尾根を降る。クラストを抜けた所で岩雄側に入る。岩雄の斜面を見出してほつとした。井上温泉(後三三〇)。午後は伸びる。

後記。屢々ニセコ頂上附近より觀察し得たのであるが、東に走る尾根の七三三の瘤は九時〇五分に立つた瘤らしく、山田温泉の尾根にくつ附くのではないか考へられる。不幸にこれを正す機會がなかつた。井上温泉への降りは俱知安側に相當降つて岩雄側にうつ

るべきであつた。(黒住記)

三月二十一日(快晴、風あり)

井上温泉發(前七四〇)。温泉裏のくぼみの丈より高い樺は四、五寸小枝を残すのみ。小沼附近(八〇五、八二〇)上の瘤に出る。無名峯(一〇八二)に雪烟が立つ。頂上(八、五九、九〇)正南に同高の白い瘤がある。今登つて来たは瘤二十米を出てゐない様に考へられる。これが地圖に表はれるか甚だ疑問である。然しこゝがもう少し廣く平坦に出るべきだ考へた。降りには、村境の尾根をチセコの低い所(八二八)へ。一寸面白かつた。休憩(九、五九、四五)。シールして村境の尾根を登つて頂上(二〇三〇)。こゝでは眺望がよくきいた。西斜面のクラストを想像して、標高のある尾根を降つて、後は三角嶺山沼に至る小徑の峠まで斜滑降一本。チセコのこの斜面に合宿で惱まされる岳樺が大きいもの數本には驚いた。晝食(二〇、五二、二〇四)。一〇七六には登らずに左を次の瘤でシールを取る(後三三〇)。九五八の向ふまで澤の内側を斜滑降したい慾望にかられたが、雪庇と斜面の状態が未知なので、村境の如く九五八に出た(二〇五)。次の瘤の右を新見温泉へ夏道に出て温泉着(二、五五)。午後はグレレンテで過す。湯の湧出量は實に豊富だ、人間の温室のあるのに驚く。往年の山岳部の合宿をしのぶ。

三月二十二日(晴、風強し)

山はゴッ／＼なつてゐる。温泉主人は中止を勧める。目國內は風で吹雪の中だ。こゝは平穩、決心して出發(前七三〇)。澤の状態は主人が悪いと云つたので、最初の直接目國內に至るコースを捨て、夏路を進み、七五九からの澤を渡つて、九八〇を右にその鞍部(九、〇〇)

千百米頃から、快晴から吹雪に突入する譯だ。頂上はスキーをぬいで登る（九・五五）<sup>（九・五五）</sup>。北斜面はクラストでよくない。この低部は村境の尾根に風をよけて晝食（二〇・五〇）<sup>（二〇・五〇）</sup>。岩内岳に雪烟が立つてゐない。岩内の登りはリウツクを置いて頂上（二二・二〇）<sup>（二二・二〇）</sup>。岩内の町は眼下に。海は氣味わるく黒い。積丹の上の雲に險惡を豫想される。急に恐怖心を抱く。こゝも風にあふられそうだ。ルウツク所（二二・三五）<sup>（二二・三五）</sup>。降りには地圖島古丹の筈山とある尾根。上は少しクラスト、あまは非常に面白かつた。筈山の山に始まる小徑が解らない（後三・三五）<sup>（後三・三五）</sup>。山に始まる地圖岩内の二五五の三角點（新しかつた）のある尾根を降る。よい氣になつて降り、雪もない笹の中に入つた。苦心して小徑に出て、磯の香を次第に近く、驛着（二・四五）<sup>（二・四五）</sup>。此の行、二人は完全に雪目になつた。

後記。僕達は一切食糧を携帯したが、その必要はない。すべて半日の行程であるから氣樂に歩めた。この行の逆はよい斜面のみ滑降するのであるから甚だ望ましい。

### ヘルヴェチヤ行

黒住久彌

四月二十一日（曇）

前日午後上る。朝里に登つて歸へる。出發（前七・四五）<sup>（前七・四五）</sup>—朝里の尾根に取付く（八・二五）<sup>（八・二五）</sup>—一〇九七（八・五）<sup>（八・五）</sup>—頂上（九〇・九五）<sup>（九〇・九五）</sup>—ヒュツテ（一〇〇・五二・二五）<sup>（一〇〇・五二・二五）</sup>—峠（後三・三五）<sup>（後三・三五）</sup>—錢函（二二・五）<sup>（二二・五）</sup>。

### 暑寒方面

宇都宮嵩、黒住久彌

テントを携帯しないで、好天を當て、野宿して踏破しようと思ふので、油紙を多く持つた。甚だ漫談的であつた事にこの行は面白味があつた。

五月十日（曇時々晴）

夜來の雨で氣づかされたが、雨が降つても出發する事になつてゐた。漠然と決めた札幌（前八・三）<sup>（前八・三）</sup>の汽車に集つた。瀧川じまりであつたので瀧川で降され、次の汽車を待つた。結局増毛着（後四・五五）<sup>（後四・五五）</sup>。このあたりは大漁で大したものだつた。然しそれだけに、胸についた磯の香は武好まではなれなかつた。別刈（六・四五）<sup>（六・四五）</sup>。道は次第に高く、電柱の配列するのによつて左に、落葉松の植林に入つて野宿する事にした（六・五五）<sup>（六・五五）</sup>。面白い油紙の家が出来た。暮色せまる險惡な雲は遂に一滴も降らなかつた。

五月十一日（曇後雨）

野營地出發（前八・三）<sup>（前八・三）</sup>—六六八で雨になる。油紙が雨具に早變りだ。武好驛邊（二・五五）<sup>（二・五五）</sup>。今日の行程はこれまで。雨ががり、天狗岳に登つた。中々面白い。

五月十二日（ガス深し、時々雨）

豫定が一日違つたので、出来るだけ暑寒に近く日歸りする事にした。六時出發用意出来たが雨が降り出し止むのを待つて、出發（前七・五五）<sup>（前七・五五）</sup>。油紙を肩と腰に巻いた、物々しい出立であつた。武好橋上の尾根（七・五五）<sup>（七・五五）</sup>。雄冬は夏路の如く—よい斜面ばかりだ。南尾根崖下（九・二〇）<sup>（九・二〇）</sup>—濱益御殿の鞍部（二〇・三）<sup>（二〇・三）</sup>—姫松の叢りを左右によけながら濱益岳晝食（二二・五二・五五）<sup>（二二・五二・五五）</sup>。此の下りは面白かつた。一〇二六（後

一(三)ーカスがひびく蒸暑い、時々小雨。群別手前の岩のある窟は氣が付かなかつた。群別の尾根千二百米あたりシアホー(二・五)。恐しい瘠せた峯を懸松にしがみながら頂上(二・三)。シアホー(二・四)悪。濱益の登りはカス深きため内側に巻かず頂上(四・三)。雄冬の登りは南尾根を崖の上に出て頂上近く同高(六・五)。この登りにあこを出した。この降りにはカスの中、皆目分らなかつたが非常に面白かつた。うす暗い中に電柱を見出してほつとした。武好の澤にエンユウソツが美しくかつたが、何んだか熊くさかつた。この恐怖は遂に切株を熊にした。武好驛還歸着(七・五)。

五月十三日 (曇後快晴)

雨は雪に變つて新雪三寸、出發(前七・〇)。クリステルを焼いてパラヘインが塗つてあつたので、飛びに飛んだ。別刈(八・三)ー増毛(九・四)ー汽車(二・五)。數日來の雨はからりまはれて、クヤシイやらウラメシイやら。

## 第十九シーズン (一九三〇—一九三一)

昭和五年四月十四日

木村三郎氏の搜索隊バラダイスヒュツテに根據す。午後過然にも熊狩の獵夫に依つて、遺骸がネオバラダイス附近にて發見さる。

昭和五年十二月二十九日 (晴後雪)

青山温泉より目國內廻り 宇都宮嵩、安藤政三、三浦義明

午前九時—青山温泉發。すばらしい新雪をラツセルして、十一時半

ーチセヌブリミ名無しの鞍部、娘の股に着、小憩。十二時—同處を發し、殆んど尾根傳ひに目國內に向ふ。途中新見温泉への峠附近から猛烈に吹雪かれたが、中腹で食事を取り、がんばつて午後四時頂上着。かなり時間もおそくなつたが岩内へ下ることに一決し、夕暗の中を岩内岳を右に巻いて、眞直に北に向つた尾根を下る。岩内近くで猛烈なブツシュに苦しめられて、午後七時—漸く岩内驛着。

### 幸躋山登行

今井、川上、中川

十二月二十九日

午前八時二十分青山温泉發。テレス着九時十分。ニセコ八合目十時二十分。天氣晴期、雪質又申分なし。山田温泉よりの一行に出合ふ。頂上に行かず此處より滑降。十一時十五分山田温泉着。眺望絶佳なり。半月湖着午後二時十五分。二時半より四時十五分までラツセル。

十二月三十日

午前六時四十五分驛還出發。八時昨日のラツセル終點に到着。此處より山は急坂となる。昨夕よりの降雪猛烈にて積雪深し。今も尚降り續く。夏道の一つ左の尾根を上つた爲、左右より熔岩流の深溝に迫まれ登行に苦しむ。山は益々急に方々雪崩の起きそうな裂あり。十一時全く森林帯をぬける。岳樺は大きな雪の塊さ化して登行非常に困難。その上猛烈な濃霧に襲はる。衣服は石の如く凍つて硬直し、濃霧は凍り着いて霜を結ぶ。十二時四十五分標高千八百七十米突位まで登り得た。時間の關係にて此處より夏道をさり降る。大

きな雪塊多く、目先は見えず、坂は急なり。シールをつけたまゝ森林帯まで下る。千里に降つて驛遡着二時四十五分。比羅夫驛着三時三十分。

十二月卅一日 (凡雪)

ニセコアンヌブリ 鹽谷、齋藤、中野、小池、外數名  
午前十時ニセコ温泉出發。頂上十二時。山田温泉午後一時。

ウインクレル氏を迎へて

ウインクレル氏、大野部長、楠見正雄、黒住久彌、今井勇三郎

十二月三十日

午後六時で來られる。部長の舊友であり、我國に古くスキーを持つて來られた、慶大豫科獨語教師である氏を迎へて青山温泉歸着(後七・四〇)。

十二月三十一日 (曇—吹雪)

出發(前八・三〇)—藻岩(一〇・二〇)—ニセコ温泉畫食(一〇・四一—二・三〇)—温泉上に出て、ドームで吹雪かれ引返す(二・五五)—ニセコ温泉(後三・一〇—三・四〇)—藻岩(二・三〇)—新雪三尺。大學スロープで遊んで歸着(三・四〇)。夜は東京のメイカリーの御馳走。

昭和六年一月元旦

元旦にふさはしい快晴、ニセコのアウトラインがくつきりみ浮く。出發(前八・三〇)—ニセコ第一テレス下(九・二〇)—八百米頃の岳樺の中て畫食(一〇・三二—一〇・五五)。昨日の新雪は風にたゞかれてよいコンデイ

ション。標高のない峯の南斜面雪底の上をかなり登つて、右に巻いて鞍部に出て頂上(後三・三三)。風はなし、僕達にもめづらしいことだつた。大學スロープ(一・四〇)。遊んで温泉歸着(三・〇〇)。翌日青山を引上げた。

一月二日 (曇)

手稻初登り 關、齋藤、他二十二名  
十時半バラダイスヒユツテ。十一時出發。十二時半頂上。一時ヒユツテ。三時輕川。積雪三尺ヒユツテの上アツシユ多し。

一月二日 (曇)

バラダイス—奥手稻山—錢函 鈴木、藤本、小笠原、推崎  
輕川發(前八・〇〇)—バラダイス發(一〇・三〇)—奥手稻山(後三・〇〇)雪深し。錢函(六・〇〇)。

一月三日

蘆別 岳 宇都宮嵩、安藤政三

札幌發午後八時。山部着午前一時半。之より驛の待合室にてシユラ一フツツに潜込んで五時まで眠る。但しストープが消えると寒さで眠を覺される。五時に軽い食事を取り、五時半發。睡眠不足で眠い事甚だしい。ユッフレ澤入口の南側の臺地に取り着き尾根を登る。相當アツシユがある。地圖上數字のある尾根に取り着く近くのスロープは相當急である。一四〇〇米瘤十二時着。此の頃よりガスがかつて來た。之より頂上に向ひ一時四十分頂上着。歸路は同じ

コースを逆に下る。尾根を下るに従ひアツシユ多く、相當時間を費され四時頃ユウフレ澤入口に着。五時山部着。午後五時半山部驛發。

### ウインクラ―氏及び獨逸大使館員案内スキー行

ウインクラ―氏、ドクター・フォン・エルドマンズドルフ氏、ドクター・ストラヒウイツ氏、大野部長、今井、楠見正雄、小池茂、黒住久彌

一月三日 (雪)

午前九時四十分札幌發。午後十二時四十分パラダイスヒユツテ。一泊。

一月四日 (曇) 氣溫零下十度

午前八時半パラダイスヒユツテ發。正午山の家晝食。午後二時山の家出發。午後五時ヘルベチヤヒユツテ着。一泊。

一月五日 (新雪約七寸) 氣溫零下五度

午前八時ヒツテ出發。午前十一時朝里嶽標高一〇三二着。晝食。其處より下山。正午ヒユツテ着。午後一時ヒユツテ出發、錢函峠を経て錢函着。歸札。

### 獨逸大使館員案内ニセコ行

一月六日

午後一時十六分札幌發。午後五時二十一分昆布驛着。午後七時半青山温泉着。一泊。

一月七日 (曇時々晴)

午前九時青山温泉出發。午後零時十五分ニセコアンヌアリ頂上。

頂上氣溫零下二十二度。登路を下る。午後二時青山温泉着。

一月八日 (曇、小雪後吹雪)

午前八時五十分青山温泉出發。午前十時十五分藻岩頂上。午前十一時ニセコ温泉着。晝食。附近のゲレンデを樂しむ。ニセコ温泉一泊。

一月九日 (午前中殆んど無風)

午前八時四十分温泉出發。午前十時無名山頂上、直に下山。午前十一時十分イワオ頂上、少憩後下山。正午ニセコ温泉着。午後一時半ニセコ温泉出發。藻岩經由、午後二時半青山温泉歸着。一泊。

一月十日

午前八時青山温泉出發、昆布驛に下る。午前九時十六分の汽車で外人を送る。

### ヘルヴェチア方面案内

東大學生課の岸道三氏、本道のスキーヒユツテ視察のため來道され、黒住久彌、小池茂、伊藤信康で案内す。寫眞家佐藤氏が同行された。

一月十三日 錢函―ヘルヴェチアヒユツテ。

一月十四日 ヘルヴェチア―山の家―奥手稻―錢函。

一月十八日 (晴)

### 遙山、和字尻山

鈴木、藤本、小笠原、宇都宮、楠見、増山、名取、三浦、伊藤、平野、奥田、倉持、川山、三村

錢函(前九・〇〇)―遙山(二・三〇)―發(後一〇・〇〇)―錢函(三・〇〇)。

砥石山 齋藤齊、戸倉清太郎、小池茂

午前九時五十分圓山電車終點發。午後零時十五分頂上。午後二時十五分下山、中の澤を下る。盤溪小學校着午後四時半。

一月二十五日

遙山 井深、安藤、他豫科生四人

札幌發午前八時半。錢函發九時。コースは海岸路の橋のある所から尾根に入る。十二時半頂上着。午後二時頂上發。四時廿分錢函着。

奥手稻山 川上 洗

三段山 楠見正雄、小池茂、齋藤齊、中野一郎、椎崎

午前中晴、午後降雪。八時半圓山終點出發。午後一時頂上。午後三時荒井山。

砥石山 奥田正治

迷澤山 今井勇三郎、伊藤信康

圓山電車終點(前八・〇〇)―頂上(後二・〇〇)―圓山(四・〇〇)。

一月三十一日

スキー術講習 圓山スロープに於て。

二月一日

砥石山 川上、安藤、他二十數名

八時四十分圓山終點發。十二時半頂上着。歸路中の澤―盤の澤―終點。

遙山 齋藤齊、中野一郎、中山二郎、豫科生徒數名

晴。八時半札幌發。十一時頂上。

錢函―奥手稻山―バラダイス―輕川 伊藤信康、奥田正治、猿渡、木村、山本

二月六日(快晴)

無意根山 奥田正治、三浦義明、遠藤嘉數、伊藤信康、山本

吉住、猿渡、倉持悦藏、高橋、外二名

札幌 齋藤齊、中野一郎、戸倉清太郎、小池茂

午前八時豐平驛發。午前九時瀧の澤。午前十時十五分澤の入口。午後一時十五分頂上。午後一時四十分下山。登路を下る。

二月七日―八日

迷澤山 井深、向井、安藤、他二名

七日午後五時バラダイスヒュツテ着。一泊。八日午前七時半ヒュツテ發。吹雪。風強く雪質悪く、迷澤山尾根に十二時半着。尾根を早く下り過ぎアツシユに悩まされ、馬橋道を下り發寒―小別澤―圓山五時着。

二月八日(吹雪)

札幌 今井勇三郎、三浦義明、伊藤信康、倉持悦藏、外

一名

瀧の澤(前九・〇〇)―吹雪の爲頂上附近にて引き返す(後二・〇〇)―瀧の澤(四・〇〇)。

無意根山 齋藤齊、小池茂

午前八時豊平發。九時定山溪。九時四十二分薄別。午後零時二十分吹雪の爲標高一〇〇〇米から引き返す。二時定山溪着。

空沼小屋—狹霧山—札幌嶽—定山溪

大野部長、木下醫學部教授、營繕課山理氏、宇都宮嵩、中野一郎、小池茂、齋藤齊、今井勇三郎、奥田正治、三浦義明、伊藤信康

二月十日（晴、風あり）

豊平驛發午前十一時五十分。石切山發午後十二時三十分。堂本氏宅着一時三十分。空沼小屋着五時五分。

二月十一日（快晴）

午前七時紀元節遙拜式を万計沼上に行ふ。空沼小屋發七時二十五分。狹霧山九時十五分。札幌嶽十二時。天候に恵まれ、シリメシ、増毛中央高地の連峯を眺望する。九四六・五の尾根を降つて豊平峽午後一時三十分。定山溪着三時十分。

二月十二日

無意根 宇都宮嵩、中野一郎、齋藤齊、小池茂

午前九時薄別温泉發。正午長尾山東方一〇二三・七の尾根より無意根と長尾山の鞍部へ出る。吹雪の爲め頂上を断念す。登路を下る。午後一時三十分薄別温泉。

二月十七日

簾舞より砥石山 鈴木、金井、原

簾舞（前九・二五）—砥石山（後二・〇〇）—中の澤を降つて盤の澤（三・一〇）—圓山（四・〇〇）。

二月二十二日

三段山を経て烏帽子嶽 鈴木、中村

圓山（前八・三〇）—三段山（後三・二〇）發（三・三〇）—烏帽子嶽（一・四〇）—發（二・〇〇）—三段山（三・〇〇）—圓山（四・一〇）。

定山溪奥長門方面スキ—小屋建設豫定地調査

三浦義明、奥田正治、遠藤嘉數、伊藤信康

三月八日（曇、風あり）

豊平驛發（後三・五〇）—錦橋驛着（四・三〇）—發（四・四〇）—豊羽嶺山跡發電所寄宿舎（五・五〇）。

三月九日（晴）

發電所寄宿舎發（前八・三〇）—元山（三・〇〇）—長門着（後二・〇〇）—發（三・〇〇）—錦橋驛着（九・一〇）。

定山溪天狗

宇都宮嵩、小池茂

三月十二日

午後四時豊羽嶺山跡着。一泊

三月十三日（曇）

午前七時二十分豊羽嶺山跡發。十一時鞍部着。シーアボー。十一時三十分頂上。午後十二時二十分鞍部出發、岩の下を巻き滑り澤を

下る。一時十分小樽内川、小憩。一時半小樽内川發、迷澤を登る。午後三時十分迷澤山頂上。午後四時半九七一。午後五時、パラダイスヒュッテ着。小憩後輕川に下る。

三月十日—十四日まで

パラダイス—山の家—ヘルベチャ 井深、廣森、横地、安藤  
粉雪を求めてテクニツタの練習に行く。

ヒュッテ廻り

伊藤信康、三浦義明、奥田正治、遠藤嘉數、倉持悦藏、木村  
西田、内藤、森田

三月十一日 (快晴)

豊平驛發 (前二〇・二五) — 石切山發 (二〇・三〇)。途中小學校で小憩、湯の澤で晝食。發 (後三〇・三五) — 萬計沼に入り (二〇・三〇) 冬途をたどる。天氣がよいので、久しぶりでかなりルツクが、こたへるので、のびながら空沼小屋着 (五・三〇)。

三月十二日 (晴)

空沼小屋發 (前七・三〇) — 狭薄岳頂上着 (二〇・〇〇)。西南寄りの例のやせ尾根傳ひに漁入澤に下り (後三〇・〇〇) 晝食。途中で澤を選び過ぎたせいか少し上流に下り過ぎ、意外に手間どつて二股小屋着 (一・五〇)。

三月十三日 (快晴)

二股小屋發 (前九・〇〇)。途中殆んど夏道傳ひに合流點から尾根につく (二〇・五〇)。コッパを二つ左からまいて九八〇・二米についた (後二二・〇〇)。之から實に愉快な滑走をつづけて中山ヒュッテに着く (二〇

五)。この途中内藤君が眼鏡で眼瞼に負傷したので、萬一をおもんばかり奥田、遠藤兩君つきそひ、中山ヒュッテ發 (二・三〇) 定山溪に下る。

三月十四日 (晴)

中山ヒュッテ發 (前七・四〇)。九六四米を経て (九・四〇) 喜茂別頂上に至る (二〇・五〇)。強風にあふられてすぐ蔭に下り、晝食。後尾根傳ひに無根意に向ふ (二・二五)。一寸吹かれたがまた晴れて無意根頂上着 (後二・二五)。途中森林地帯で小憩し、猛烈なクラフトになやまされつゝ、薄別を経て (四・三〇) 定山溪着 (五・二〇)。高山温泉に一泊。

三月十五日 (快晴)

高山温泉發 (前二・〇〇)。美しい天狗を眺めてヘルベチャ着 (後四・二五)。

三月十六日 (快晴)

天候に恵まれて、勇むでヘルベチャヒュッテを出る (前八・〇〇)。頂上でスキーデボーイ白井岳頂上着 (二〇・四〇)。好天に汗を流しながら尾根傳ひに余市岳に向ふ。頂上手前の鞍部でシーデボーイ、アイゼン無しで頂上に着く (後三・四〇)。余市の頂上で圓陣を畫いてテレモスの紅茶に喉をうるほし、朝里岳に向ふ。頂上着 (二・〇〇)。下りは雪のよさそうなスロープをさがしながら、愉快な滑走をつづけて (三・三〇) 小屋着。

三月十七日 (晴)

今朝は一寸氣もゆるんで (前二〇・四〇) 最後のコースに着く。山の家着 (後三・〇〇)。ユートピア附近で晝食して (二・三〇) 發。パラダイスヒュッテ着 (二・〇〇)、ヒュッテを出發 (三・四〇) して輕川より汽車にて



歸札。

暑寒別岳

宇都宮嵩、楠見正雄、安藤政三、三浦義明

三月十九日 (晴)

札幌發(前六五九)。増毛着(後二四七)。増毛の町をぬけて、馬そり道をスキーを引いて山の上小學校加藤校長宅に至る(五〇〇)。

三月二十日 (曇強風)

校長宅發(前五五〇)。猛烈な風にあふられて、起立姿勢にも不安を感じ、断念して八〇〇米附近より引きかへす(六〇〇)。尾根を左にそられて澤に入り、しばらく遊んでシヨカンベツ川をさかのぼり、二二〇米の合流附近から武好驛に一泊(後三四〇)。

三月二十一日 (霧)

猛烈な濃霧をおかして驛出發(前六四四)。九二一米のゴブでシユメイクアイセンにさりかへ(八五〇)雄冬頂上着(九二〇)。漸く、はれた三角點を認めて少し下り、のびて晝食(二二〇〇)。驛選にかへり(二四〇〇)驛選發。殆んど直滑降つづきの滑走を電線傳ひにつづけて苅別に下り、増毛着(後二二〇)。

ヒユツテ廻り

今井勇三郎、川上洗、荒城、東、吉池、古山

三月十九日 (晴後曇)

札幌發午前八時三十分。錢雨着九時五分。遙山午後十二時五十分。ヘルベチアヒユツテ三時二十分。

三月二十日 (曇、風稍々強し)

ヘルベチアヒユツテ發午前七時十分。朝里嶽九時五十分。吹雪かれて一二九六手前の鞍部十二時。右股川を下つて白井川との出合が午後六時。定山溪九時五十分。

三月二十一日 (風強く曇時々小雪)

三月二十二日 (曇)

定山溪發午前六時十五分。無意根山十時五十分。喜茂別岳午後二時四十五分。中山ヒユツテ着五時十五分。

三月二十三日 (曇)

中山ヒユツテ發午前六時三十五分。二股小屋八時四十分。狭薄山午後一時十分。空沼小屋四時三十分。

三月二十四日 (曇)

空沼小屋發午前八時三十分。札幌嶽午後一時。定山溪五時五十分。

北見天狗、屏風岳登行

宇都宮嵩、鈴木重雄、三浦義明

三月二十四日 (曇小雪)

午前六時五十九分札幌發。十時三分瀧川發。十二時二十分旭川發。午後二時四十五分中越着。こゝより新雪を喜びながらスキーにて驛選に向ふ。途中、五時十分合流點。こゝより右に入り、六時十分驛選着。

三月二十五日 (小雪後快晴)

午前七時驛選發。途中晝食をこり、午後一時二十五分一六三四米の頂上經過。二時五十五分天狗頂上。三時下り始めて、五時二十五

分農家武田傳吉氏宅に到着一泊。

三月二十六日 (晴)

午前六時五十分武田氏宅發。七時五十分二股經過。八時四十分左手の尾根にこりつく。タノネの密林中を猛烈なブツシュと闘ひつゝ、午後二時千米附近に達したが、時間の都合上、又この附近の尾根歩きの不利を覺り、休憩後三時十分澤に下り引きかへす。五時二十分登口。五時三十分五分二股。六時三十分武田氏宅。

三月二十七日 (曇後快晴)

午前六時十五分武田氏宅發。七時十分二股。之より左の澤に入り、八時十五分第一合流點。八時五十分第二合流點。途中小憩。九時二十五分第三合流點。九時四十分第四合流點。こゝでシールをつける。之より少し澤をのぼつてすぐ尾根につき、十二時十分一三一〇米つづきの尾根を越え一旦下り、頂上下より登り始めて頂上直下でスキーデボーをなし、三時十分屏風頂上着。四時發。七時四十分武田氏宅到着。八時五十分區長宅に着き一泊。

三月二十八日 (快晴)

午前八時四十五分區長宅發。途中チトカニウシ中腹を経て、午後六時中越驛到着。

三月二十九日 (雪)

午前七時四十分驛發。十時四十分中越驛着。午後三時十五分驛發歸札の途につく。

無意根小屋建設豫定地調査

宇都宮嵩、遠藤嘉數、三浦義明、伊藤信康

四月十日 (晴)

薄別着午後一時。直に小川上流方面を調査す。

四月十一日 (晴)

前日と同様の方向を探し、遂に千米附近に適地を發見する。午後四時頃定山溪より電車にて歸札す。

漁岳方面ヒユツテ建設豫定地調査

奥井由雄、楠見正雄、安藤政三、三浦義明、伊藤信康

四月二十五日 (雨後曇)

石切山(後一三〇)―空沼小屋(六三〇)。

四月二十六日 (晴後曇)

小屋發(前六三〇)―空沼岳(七三〇)―漁岳(九〇〇)。樽前、支笏湖、惠庭の豪華な眺望と太陽と芝生とを讚美する。發(九三〇)―漁入澤上流二股(二〇〇)附近を調査する。發(二二〇)―二股小屋(後三三〇)豊平川沿ひの夏道は崖くづれや橋墜落で通行出來ず、又増水の爲危険なる徒渉を断念して薄別中山時間の夏道に出る(六三〇)―薄別(二〇〇)。

無意根小屋建設豫定地行

五月三日 (晴) 大野部長、鈴木重雄、中村新一郎、奥井由雄、

稻葉忠七郎、楠見正雄、三浦義明、伊藤信康、遠藤嘉數、外一名。

五月十日 (曇) 鈴木重雄、楠見正雄、三浦義明、伊藤信康、外

一名。ソムメルシーにて充分楽しむ。

六月二十二日 (晴) 鈴木重雄、三浦義明、伊藤信康、大工。

## 雜報

### オリムピック選手山田勝巳君の事ども

一九三二年アメリカで開かれるオリムピックスキー競技會は愈々近づきました。各國の選手等のこの晴の舞臺で覇を競ふ勇壯な姿を思ふと、胸の戦く様な氣がします。

日本選手十二人の一人として北大スキー部出身の山田勝巳君も参加する事になつて居ります。同窓生として、又同時にスキー部に入つて、懐しい愉快な時代を過したスキー仲間として、君は因縁淺からぬ僕にとつては本當に人事でない様な喜びを感じて居ります。

勝巳君は一昨年林學實科を卒業するに直ぐ青森縣の大體管林署に赴任され、以來すつと同署に勤務されて居ります。スキー部時代は長距離競走の選手としてインターカレッジに、全日本スキー大會に幾多の華々しい記録を残して居ります。いつも明るいユーモアをもつた非常に面白い人ですが、いざ競技となるとそのフアイティンクスピリットは、一體どこから出るんだらうと思はれる位に烈しい人です。第一回のインターカレッジが大體で開かれた時、初陣の勝巳君が三十軒競技と十五軒競技に二日共走り續けて、不振だつた北大

ランクラウフ軍のために氣を吐いたあの時の姿を僕は忘れる事が出来ません。

スキー部時代は對外競技にはいつも長距離競走だけをやつて居りましたが、その頃から僕等と寄々シヤムプ競技をやりたいと言ひ言ひして居たものでした。そして學校を出てからの勝巳君はシヤムプ、複合競技を目指して進んで來た様に思はれます。

學校を出るに誰でもが運動競技から遠ざかるのが常です。遠ざからない迄も以前の氣力を持ち續け得る人は稀です。卒業後二シーズンに過ぎて、毎年僕等は約束通りスキー大會地で會つて居ります。僕等が一年毎に何だか氣力の挫ちけてく様な氣がするのに勝巳君だけはその反對でした。今年の全日本大會での複合競技、シヤムプ競技に於ける成績は全く堂々たるものでした。元來スキーのテクニクには勝巳君獨特のうま味を持つて居たのですが、忙がしい仕事の寸暇の練習であれ程の進歩をみた君の努力には心から敬服します。往年の熱意氣、あの強い自信を君は未だに持ち續けて居るのです。自信の人勝巳君であればこそ日本代表選手の一入たり得たのでせう。スキー部時代からの憧憬れを遂に達する事の出来る喜びを思ふにつけても、責任觀念の人一倍強い君がごんなに内心自重してゐるかを思ふと、涙ぐましくさへなります。

最近の便りに依るに、君は春以來一定のプランに依つて規則正しい日課を、トレイニングに一日を過してゐるこの事、尙十一月からは勤務中の管林署を退いて札幌の自宅で、更に専心トレイニングに意を盡すこの事です。あく迄も眞面目な、注意深い勝巳君らしいやり方に益々頼母しさを覺えます。

晴の舞臺での勝巳君の奮闘を思ひ浮かべながら、最後の五分間を健康に過ぎる心から祈つて止みません。

## 手稻ハラダイスヒユツテの報告

黒住久彌  
今井勇三郎

此のヒユツテの出現は日本の山小屋に對して甚だ期劃的なものであり、これが斯界に大いに貢獻しつゝある事は首肯を惜まない。

昔、アルパインに單杖、水杯して發寒川より手稻の冬季登攀の試みられた開拓時代、乃至ツックスにたよつて、小柴に惱まされながら奥手稻に立ち、南方、九九四の理想的なタンネのまばらなスロープは一日の行程には勝すぎ、健脚なもののみに許されたユートピアであつた時代には、たしかに有意義なものであつた。手稻が鬱蒼として男性的であつた單杖時代、白い白樺の純林に抱かれた此のあたりはハラダイスであつた事はおかし難い嚴なるものがある。

畏くも秩父宮殿下の御來道は、我が北海道山岳の冬季登攀の一般化に一大刺戟であつた。こゝ數年のシール(アザラシ皮)の普通化は實に驚異に價するものがあつた。冬山の流行は喜ばしいものゝ、冬山の輕視される事は否めない。ヒユツテに對する開拓時代の精神は忘れられ、一般山小屋のたごつた情緒に陥入つた事は否定出來ない。これに對して、經費の不充分なため經營のおろそかになつた事を告白しなくてはならない。

元來、此のヒユツテの如きは一北大のスキー部のヒユツテである

から、其の使用者の範圍を限定すべきであつた。然しスキーの普遍は遂に、この開放をよきなくした。

これに當つて、不文律で規定はあつたが、一般使用者のヒユツテ道徳に訴へる寛大な方法であつた。然し、彼等の道義心に待つた事は大いな過失になつた。

昭和四年度、宇都宮嵩、鈴木重雄、森田昇の三君によつて、小屋番として使用料、宿泊料を取る事が一年間試みられたが、不幸にして豫期の成績を擧げ得なかつた。

昭和五年度、十月、登山口より前田農場視察道路に至る道路の開鑿。同十七日を以て既報使用規定を設け、山幹事の監督の下に使用券、宿泊券を發賣し、冬季四ヶ月間には小屋番を置く等、よりよき施設と經營が劃された。本年四月、豫期の成績を擧げ得た事を報告する事は欣快に堪えぬ處である。これにあつて、輕川青年團の援助を多とするものである。

後記。ヒユツテ建設當時の詳細はスキー部念記出版號に報告されてある。(黒住)

×

黒住君が大麗骨を折つた。それは夢のやうで本當の事だつた。その翌々日君を大學病院に見舞ひ、ハラダイス小屋の仕事を頼まれた。前からの小屋の經營法や經過を聞かされ、初めて小屋の有様もよく解り、君がこれまで隠れた非常な努力と犠牲的精神を以て盡力してゐてくれた事や、やつと地盤がかたまり、これから楽しみましてゐた成績を擧げやうと云ふ時である事もわかつた。

自分を今日の如く、ごうにか滑れる程度まで築き上げてくれたの

は此の北大スキー部である。學校を出るまでには何か此の御恩に報ゆる處がなければならぬと當々思つてゐた。處が部の内容等をよく知らない自分には爲す事も知らず、所謂無能力者なる事を考へては、自分から申出る勇氣もなく過してゐた。

こんな時に小屋の事を依頼されたので、不肖ながらも出来るだけやつて見やうと決心して、仕事を引受けたのであつた。以來毎日曜或は土曜には小屋に行つてゐた。

一月三十一日、突然事件が起つた。それは番人高橋の行衛不明である。責任感の強い彼が行衛を暗らます？ 何うしたのだらう？ 死？ と云ふ直感に打たれた。果して二月一日死人となつてしまつて發見された。自分はこんな事件に會つたのは初めてであつた。

何んとも形容の出来ぬ感に打たれ、自分の無能力さを痛感した。二月三日葬式も終つた。スキー部からは僕が代表で列席した。

その後代りの番人は赤野園松と云ひ、北大スキー部休憩所の田邊のお世話で幸にも直ちに雇ふ事が出来た。彼は又高橋にも勝る勤勉と事務的才能とを以て、誠心誠意小屋の爲に盡してくれた。こんな課で小屋は豫期以上の成績を擧ぐる事が出来た。

三月三十日番人を解雇す。以後は小屋使用者の徳義心にうつつたる事にし、月二回を最小限度として小屋へ行く事に決めてゐる。

近時夏冬共に手稻山登山の人々が多くなつた事は眞に喜ばしい。そして出来るだけ小屋を使用して戴きたい。何時もこんな氣持で、「山は嚴父、小屋は慈母」。

パラダイス小屋も今年は五週年を迎へ、隨分破損ヶ所も出来てゐるので、記念事業として床板、ストーブ、二階の窓等を、本部と營

繕課の人々の御盡力により修繕し得た。これで来る冬のシーズンも氣持よく温く泊れる事である。

#### 昭和六年度パラダイス小屋會計

|          |             |
|----------|-------------|
| 全 收入     | 二四三・四一圓     |
| 全 支出     | 一三六・七五圓     |
| 内 譯      |             |
| 番人手當     | 四八・五〇圓      |
| 薪炭代      | 五八・〇〇圓      |
| 備 品      | 三一・九七圓      |
| 看 板      | 一〇・七〇圓      |
| 雜 費      | 一〇・五八圓      |
| 高橋番人香奠   | 五・〇〇圓       |
| お誘ひの會    | 二五・〇〇圓      |
| 積 立 金    | 二〇・〇〇圓      |
| 寄附(大野部長) | 二〇・〇〇圓 (今井) |

#### お誘ひの會を設けた動機

昭和五年一月の事だつた。空沼から歸つた直後、宇都宮兄と街會つた時、スキー部員坪田君の遭難に就て甚だ遺憾である事、これは我が部が一般のスキー合宿にしても、其他の機會に於て一般部員の訓練がた然なかつた事に對して、兄の抱負を話された。

選手制度の云々される現在、これは(冬山に對するこの種の試みは豫科にあるが)全學スキー愛好家を啓發する事になり、畢竟は我

部の理解される一手段であるので、宇都宮兄、鈴木兄、森田兄を主  
 疵としたお誘ひの會が生れたのであつた。實施第一年にて理解に  
 缺き、利用者は部員以外に出なかつた。然し畢竟の目的である部員  
 一般部員との交渉は深くなつた。

二月、故坪田君遺族から金一封が寄附されたので、錢函—ヘルツ  
 エチア、錢函—奥手稻—ヘルツエチア、奥手稻—バラダイスミ指導  
 標が附され、これに當つて多數部員の出勤を見た事は多しする所が  
 あつた。

四月、不肖私が山幹事におされ、主任宇都宮兄の指導によつて行  
 動した。兄が九月主任辭退で甚だ心細きを感じたのであつた。

十一月、新入生歡迎會でお誘ひの會の主旨の徹底を圖り、併せて春  
 休暇を利用するヒユツテ廻り、山岳踏破の計畫を發表した。

明けて六年一月、今迄集合目標がなかつたので、部族による事に  
 し、より一層全學一般の利用に志したが、不肖私の怪我により、後  
 事萬事今井勇三郎兄が献身的にやつてゐられる。

五年十月、バラダイスヒユツテ登山路開鑿、ヒユツテ修繕に部員  
 の献身的奉仕は、一に此の誘ひの會より發動する何ものかであつた事  
 を確心してやまないものである。(黒住)

### 歴代主任幹事

- |            |      |
|------------|------|
| 第一シーズン主任幹事 | 稲田昌植 |
| 第二シーズン主任幹事 | 稲田昌植 |
| 第三シーズン主任幹事 | 柳澤秀雄 |

技術優秀にして、北大スキー部に對して功勞あり、且つ部員とし  
 て恥かしからず、尙熱心なるものに對し、幹事會の推薦により與ふ  
 るもの。

### 北大スキー部モノグラム所持者名簿

- |             |        |
|-------------|--------|
| 第四シーズン主任幹事  | 二木春松   |
| 第五シーズン主任幹事  | 大島幸吉   |
| 第六シーズン主任幹事  | 岩崎直砥   |
| 第七シーズン主任幹事  | 福地義二郎  |
| 第八シーズン主任幹事  | 大宅農夫太郎 |
| 第九シーズン主任幹事  | 平井左門   |
| 第一〇シーズン主任幹事 | 中野誠一   |
| 第一一シーズン主任幹事 | 松川五郎   |
| 第一二シーズン主任幹事 | 本田治吉   |
| 第一三シーズン主任幹事 | 廣田戸七郎  |
| 第一四シーズン主任幹事 | 岡村源太郎  |
| 第一五シーズン主任幹事 | 小川玄一   |
| 第一六シーズン主任幹事 | 伴素彦    |
| 第一七シーズン主任幹事 | 小林辰雄   |
| 第一八シーズン主任幹事 | 伊藤健夫   |
| 第一九シーズン主任幹事 | 中村新一郎  |
| 第二〇シーズン主任幹事 | 村井延雄   |
|             | 奥井由雄   |

秩父宮殿下  
高松宮殿下

當部より特別モノケラム献上の儀お話し申し上げたる處、御嘉納下されました。

|          |          |         |         |        |         |        |
|----------|----------|---------|---------|--------|---------|--------|
| 大井上義近    | 並河 功     | 遠藤吉三郎   | 木原 均    | 岡見清二   | 相川正義    | 平塚直秀   |
| 成田秀三     | ハンス・コーラー | 鹿子木員信   | 高松正信    | 岡村源太郎  | 古田島薰平   | 安達良之助  |
| 大野精七     | 山崎春雄     | 今 裕     | 岡田正夫    | 須藤英雄   | 今田清二    | 小原博一   |
| 小川 泰     | 枋内吉彦     | 葛西勝彌    | 伊藤誠哉    | 茂木中男   | 鈴木金作    | 赤松 勳   |
| 宮 脇      | 木下良順     | 林 常夫    | 高野重一    | 笹部義一   | 興村禎吉    | 吉川 弘   |
| 一岡見聞多    | 二一色周知    | 三岩崎直砥   | 吉藤江永次   | 古瀬義雄   | 爪谷善重    | 阿部謹吾   |
| 四 大宅農天太郎 | 五 小林一勝   | 六 六鹿一彦  | 七 藤三戸 勳 | 小川玄一   | 小山邦雄    | 長谷川 敦  |
| 七 櫻井茅次郎  | 八 福地義二郎  | 九 鈴木市五郎 | 八 岩森秀夫  | 田口鎮雄   | 緒方温光    | 宍西村修一  |
| 二 田村丙三   | 二 大矢敏範   | 三 西尾 稔  | 九 伊藤秀五郎 | 大竹末三郎  | 七 伴 素彦  | 三 内海榮郎 |
| 三 岩野拓一郎  | 四 小笠原龜一  | 五 吉田稔巳  | 十 佐々木政吉 | 青山 馨   | 八 靜田不二雄 | 四 村本金彌 |
| 六 那須 修   | 七 後藤一雄   | 八 平井左門  | 十一 寺田愼一 | 三 藤江永次 | 九 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 元 大澤與美   | 三 中野誠一   | 三 加納一郎  | 允 高崎鐵之助 | 大 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 三 岡部彦庫   | 三 殖栗亮平   | 三 並河成資  | 允 小林辰雄  | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 五 板倉勝宜   | 六 松川五郎   | 七 網野兼一  | 允 坂本彌直  | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 六 青柳確郎   | 元 大久保鐵二  | 三 宮城孝治  | 允 山本吉之助 | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 三 三田村健太郎 | 三 稻 續 猶  | 三 廣田戸七郎 | 允 杉村麟太郎 | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 高 緒方直光   | 三 板橋敬一   | 三 内藤克三  | 允 伊久秀春  | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 毛 向井一郎   | 三 瀧田次郎   | 三 松川篤治  | 允 岩 垂 悟 | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 四 山際三郎   | 四 南波初太郎  | 三 青木三郎  | 二 植地勝太郎 | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |
| 四 岡本三男   | 四 本田治吉   | 三 齋藤 謙  | 二 宮下利三  | 三 藤江永次 | 七 靜田不二雄 | 六 小海 鼎 |

又キ一部所藏圖書目錄

洋書ノ部

|    |       |    |       |    |       |
|----|-------|----|-------|----|-------|
| 二六 | 加茂 巖  | 二九 | 稻葉忠七郎 | 三〇 | 小池健兒  |
| 二七 | 齋藤丈彦  | 三〇 | 武野毅次郎 | 三一 | 中村新一郎 |
| 二八 | 松本治雄  | 三一 | 宮本正雄  | 三二 | 近藤 進  |
| 二九 | 山田勝巳  | 三二 | 松田俊彦  | 三三 | 長田光男  |
| 三〇 | 宮村六郎  | 三三 | 倉島一天  | 三四 | 奥井由雄  |
| 三一 | 伊藤泰三  | 三四 | 辻岡教太郎 | 三五 | 楠見正雄  |
| 三二 | 山極末男  | 三五 | 星野三郎  | 三六 | 森田 昇  |
| 三三 | 淺井吉次  | 三六 | 入江浩四郎 | 三七 | 長尾健一  |
| 三四 | 安孫子六郎 | 三七 | 木村三郎  | 三八 | 材井延雄  |
| 三五 | 小館衷一  | 三八 | 鈴木重雄  | 三九 | 中山二郎  |
| 三六 | 五十嵐勝藏 | 三九 | 關 四郎  | 四〇 | 塘 正雄  |
| 三七 | 宮原重規  | 四〇 | 小池 茂  | 四一 | 藤本信彦  |
| 三八 | 小笠原光信 | 四一 | 黒田 敦  | 四二 | 黒住久彌  |
| 三九 | 弓納持允雄 | 四二 | 佐藤 亮  | 四三 | 今井勇三郎 |
| 四〇 | 佐藤 亮  | 四三 | 齊藤 齊  | 四四 | 中野一郎  |
| 四一 | 吉田初雄  | 四四 | 安藤政三  | 四五 | 三浦義明  |
| 四二 | 小池 譽  | 四五 | 西 武   | 以上 |       |
| 四三 | 伊藤信康  |    |       |    |       |

Alpine Journal No. 224—230

English Alpine Club

Alpine Plants at Home

1910 P. C. Avebury

An Ainu-English-Japanese Dictionary and Grammar

1903 J. Batchelor

A Winter Sports 1918,

1922 Spalding

British Ski Year Book

1921 Ski-Club of G. B.

Camping and Woodcraft

1922 H. Kephart

Figure Skating

1917 Sapporo Agricultural College

From Alpine Snows to Vulcanofres Aulus Gellius

Handy Volume atlas of the World 1910 Philips

Holidays in Tents

1921 Childs W. M.

How to Become an Alpinist

F. Buntingham

How to Ski and How not to 1913, 1922 V. Caulfield

Ice Sports 1901 B. F. Robinson

Maps 1921 H. G. Fortham

Map of U. S. A.

Mountain Adventure at Home and Abroad

1910 G. D. Abraham

Mount Everest 1921, 1922 English Alpine Club

Official Ice Hockey Guide 1922 Canada Sports Publishing Co.





|                                                              |                                               |                                            |       |                          |
|--------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------|-------|--------------------------|
| Deutsche Alpen Zeitung                                       | S. V. Deutsch                                 | Skiläufer Jahrbuch                         | 1924  | O. Hassenberger-Rlyn     |
| Die Aufnahme d. Schneelandschaft d. Winter Sports im Gebirge | 1920 C. J. Luther                             | Ski-Führer durch das Brechtes gadener-land | 1925  |                          |
| Die Ski-Schühle                                              | 1924 J. Dahinden                              | Ski Sport                                  | 1924  | Gustav Walty Pontresina  |
| Im Kampf um Tschoms=lungoma den Gipfel der Erde              | 1923 Flaig W.                                 | Ski Sports                                 | 1909  | M. Zdarsky               |
| Jahrbuch                                                     | 1912 Ski Klub-Salzburg                        | Ski und Skilauf                            | 1912  | C. J. Luther             |
| Jahrbuch der Schweiz                                         | 1924 S. S. V.                                 | Ski Wetterläufer                           | 1923  | Dr. W. Knöll             |
| Jahrbuch Ski                                                 | 1920—26                                       | Sport u. Spiel                             | 1920  | U. Salechow              |
|                                                              | (Korespondenzblatt des Schweiz Ski-Verbandes) | W. Fleischmann u. Lilienfelder od:         | ————— |                          |
| Jungborn                                                     | 1923 E. G. Lammer                             | Wegweiser durch den Lanschan               | 1913  | R. Bergemann             |
| Jahrbuch d. Winter Sports.                                   | 1926 Peege-Moissl                             | Wie lerne ich Schi-leufen ?                | 1924  | C. J. Luther             |
| Meister des Schnee Schuh's                                   | 1928 Dr. B. Dillinger                         | Winter=Landschaft=u. Sport=Photographie    |       |                          |
| Merkbuch für Bergsteiger                                     | 1925 R. Rother                                | Winter in der Schweiz                      |       | Weltreisebureau Union    |
| Merkbuch für Schiläufer                                      | 1921 Henry Hoek                               | Winter in Schlesien                        |       | Weltreisebureau Union    |
| Neue Möglichkeiten im Skilauf                                | Dr. F. Renel.                                 | AARBOK                                     |       | Foreninge til Ski        |
| Olymp. Winterspiele                                          | 1928 St. Moritz                               |                                            |       | Idraettens fremme (Oslo) |
| Pferderennen in St. Moritz                                   | 1926 Berin                                    | ReglerogBestimmlser for Anordning av rend  |       |                          |
| Satzungen des Bergvereins Tsingtan                           | D. u. de Alpenvereins                         | Foreninge til Ski                          |       |                          |
| Schule d. Schneelaufes                                       | 1913 C. J. Luther                             | Idraettens fremme (Oslo)                   |       |                          |
| Schuprunglauf in Bildern und Merkworten Schweiz              | 1921 Tschudi                                  | AARS Beretning                             | 1925  | " "                      |
| Schweizer-Sport-Kalender                                     | 1924 —————                                    | SUUSATAMINE                                | 1924  | Sojaväes                 |
| Ski-Chronik (Jahrbuch)                                       | 1913 Ski-Verbandes                            | Folkskolorna och Skididrotten              |       | Augnst Darlfords         |
|                                                              |                                               | Skidlöpning                                | 1922  | V. von Feilitzen         |
|                                                              |                                               | Skidlöpning; Fjällen                       | 1919  | G. Dyhlen                |
|                                                              |                                               | Svensk Idrott                              |       | Idrottöförening          |

Narciarstwo Polskie (Year book) 1925 Związku Narciarskiego

Reglement Internationale des Concours de Ski.

1923 Kristiania

Hilhto 1925

Suomen Hiihtis 1926

和書ノ部

アールベルグ・スキー・テクニク

新しいスキーの練習

一日で出来るスキー

お寺まゐり

オホツク、勘察加最近實測圖解説

木曾の御嶽 附、駒ヶ嶽案内

國際スキー聯盟競技規則

全日本スキー聯盟規約

全日本スキー競技規定

全日本スキー聯盟加盟團體

最新スキー術

最新スキー術

山岳(一年一號より廿五年二號まで)

山陵

最新富士登山案内

山岳旅行秘訣

山水無盡蔵

三高山岳部報告 第四、五、六號

山岳寫真帳

山岳征服

スキー術教程

同上(改訂増補)

スキー術楷梯

スキー

スキージャムペンク

スキー家に

スキーの要領

スキーの智識

スキー術早わかり

スキーミスケート

スキーを穿く人の爲に

スキーインク

スキー滑走

スキー術

スキーケハイム

スキー(年報)

スキー競技規定

同

スキー講演集

三高山岳部

小島鳥水

辻村伊助

三木高岑

北大スキー部

同

同

稲田昌植

廣田戸七郎

高橋進

高橋恒雄

白鳥恒雄

丸山晚霞

鐵道省

同

同

笹川速雄

金井勝三郎

鶴見宣信

神戸スキークラブ

早大スキー部

全日本スキー聯盟

全日本大學專門學校スキー競技聯盟

札幌放送局

スキー年鑑

一九〇一—一九二一

全日本スキー聯盟

ルックサック 二號

スポーツマンの心臓

一九二五

福島東作

フラダ

星座の親しみ

一九二六

出口林次郎

草鞋 一—四

創立十週年記念

一九〇〇

山本一清

壯快なるスキー術

一九〇〇

小樽スキー俱樂部

第二十三シーズン幹事

臺灣山岳 第一、二、三號

一九〇六

近衛直磨

高田スキー團報

一九一六

臺灣山岳會

大雪山登山法及び登山案内

一九二六

高田スキー團

圖解スキー

一九二四

小泉秀雄

鐵道旅行案内

一九二四

平尾、越前

登高行 第一年第一號ヨリ第六年マデ

一九〇六

鐵道省

冬季に於ける陸軍山地勤務

一九〇六

慶應山岳部

埃國歩兵中尉 ヘルマン・クツァント

日本アルプスに秩父巡禮

一九二九

田部重治

ヌプリ 第一—三號

一九二九

北海道山岳會

ベルグハイム

一九二八

四高旅行部

北海道地名解

一九二八

磯部

北海道鐵道沿線視察便覽圖

一九二八

北海道廳

北海道の山岳

一九二七

晴林堂

山の傳説と情話

一九二三

志村、前田

山の幸

一九二三

大朝社

雪のさゝやき

一九二六

山本徳三郎

六甲スキー俱樂部

惠迪寮

早大山岳部  
松本高校山岳部  
原人社

|       |       |
|-------|-------|
| 部長    | 大野精七  |
| 主任    | 奥井由雄  |
| 庶務    | 今井勇三郎 |
| 記 錄   | 安藤政三  |
| 會 計   | 西見正雄  |
| 複合競技  | 楠見正雄  |
| 競 走   | 宮村六郎  |
| シヤムプ  | 黒田六郎  |
| 山及小屋  | 五十嵐勝藏 |
| 器 具   | 伊藤信康  |
| 林學實科  | 川上洗   |
| 農學實科  | 三浦義明  |
| 土木專門部 | 吉田初雄  |
| 水産專門部 | 中田川   |
|       | 坂水新   |
|       | 今水新   |
|       | 廣森壽一  |

昭和六年度歳出豫算内譯

一、練習費

スキー購入費 二八〇・〇〇

パツケン及縮具 五〇・〇〇

研究用ワツクス 二〇・〇〇

薪炭代 三〇・〇〇

二、文武會テ開催費

三、遠征補助費

全日本スキー大會出場費 七〇・〇〇

全日本學生スキー競技會出場費 一〇〇・〇〇

四、合宿費

五、諸會加入負擔金

全日本スキー聯盟代表會議代表派遣費 八・〇〇

全日本學生スキー競技聯盟會議代表派遣費 八・〇〇

全日本スキー聯盟會費 二〇・〇〇

全日本學生スキー競技聯盟會費 一五・〇〇

日本山岳會費 六・〇〇

札幌スキー聯盟會費 五・〇〇

六、雜費

計 七五二・〇〇

## 編輯後記

私共のスキー部が創立されて以來今日まで既に二十年の長い年月を経て來ました。一年の大半を雪に親んで暮す私達に取つては長い様であり、又實に短い二十年でした。今日の吾北大スキー部も此の輝しい二十年の歴史の所産に他ありません。

此の誠に記念すべき機に當りまして色々の記念事業の計畫が發表され、其の一として此處に部報第一輯を公にする事になりました。

此の計畫が確立されて以來色々の困難に際會し、其の前途をあやぶまれる様な事も多々ありましたが、部長先生を初め多くの先輩諸兄の熱誠なる御援助に依り、幸に此處に私共の所期の目的を達成し得た事は、心からなる感謝の意を諸兄に捧げると同時に私共の非常な喜びとする處であります。殊に多忙の中にも係らず御執筆下さいまして、一層私共の此の事業を志す意義ならしめて下さいました諸兄に對して、満腹の感謝を捧げる次第であります。

部報を致しましては其の内容に於て、或は其の本來の意義に反する様な點も多々ありますが、先にも申しました様に記念事業の一つとしての企であります故、此の意味に於て其等の存在を認められた次第であります。

此の事業に實際に取掛つたのは九月に入つてからの事でした。校正は主として幹事諸君

の手を煩はしましたが、主として編輯の任に當つて居たもの、手落ちから多くの失態を繰返し、或は發行の時期を遅らせ、諸氏の御期待に添ひ得なかつた事は、全く私共の無經驗と相互間に統制が無かつた事の結果で、此處に改めてお詫び申し上げます。

先に發表致しました初期の計畫は其の内容に於て、又色々な點に於て大分變更を來して居りますが、費用及び體裁等の關係から止むを得なかつた爲めです。諸兄の御諒察をお願い致します。

扉の圖はスキー部のモノグラムで寫して記念の意味に於て特に入れた譯です。尙裏表紙のカットはスキー部の部員章を寫したものであります。裝釘は編輯者の考案です。

次に本文中の楠見君の「一九二九年以前のカンチエンジュンガの歴史」は都合に依り其の前半のみを採つたもので、誠に無責任極まる次第ですが來るべき何等かの機會に於て其の責を果す覺悟です。御諒察をお願い致します。

無意味小屋の使用規定が次の如く改正されましたので訂正致します。

使用料 貳拾五錢 宿泊料 五拾錢  
尙山田君及びシヤンツエの寫眞は北海タイムス社所蔵のものです。

出版係  
奥井由雄  
楠見正雄  
伊藤信康  
安藤政三  
三浦義明  
小池茂明  
齊藤一郎  
中野一郎

## 北大スキー部報

昭和六年十二月五日印刷  
昭和六年十二月十日發行

編輯人 中野一郎  
北海道帝國大學内

發行人 奥井由雄  
北海道帝國大學内

印刷所 會社北海石版活版所  
札幌市北二、西三  
電話 五六四番

發行所 札幌市北八、西五  
北海道帝國大學スキー部

頒價 一圓五十錢

積雪に

結氷に

ウインタースポーツのシーズン来る

スキー

スケートの

御用は井へ!!

札幌

井

今井吳服店

運動具部

於 北海拓殖博覽會優良產品賞 拜受

ノールエー式

スキー靴

・カタログ進呈・

練習用

金五圓以上各種

舶來革

金拾參圓以上

金拾六圓

其他

レース用

ジャンプ用

御好ミ次第

新調可仕候

スキー靴

スケート靴

卸御相談可應候

札幌市南一條西二丁目

岩井靴店

電話百二十四番

